魔法少女リリカルなのはEX！

白いサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはEX！

【Nコード】

N4790T

【作者名】

白いサンタクロース

【あらすじ】

己の欲望のために転生者は殺し合う。

そうとは知らずに転生した少年。

与えられたのは毒の力。

彼は生き残れるのか？

現在転生者募集中です

詳しい事は四十話の後書きで

プロローグ（前書き）

一応同時進行できるように頑張りますが、もう一方が優先されるので期待しないでください

プロローグ、始まります

プロローグ

く?????SID)

薄暗い洞窟のような広い場所。

ここは……何処だ？

俺はたしか病院で入院してたはず。

点滴は…無い。

それどころか服装が普通だ。

入院用の作業衣じゃない。頭に被っていた帽子も無い。

「なんだよこれ…訳わからん…」

「貴様は死んだのだよ」

？

後ろから声が………なんじゃこりゃあ!?!?!

俺の後ろにいたのは10m位のとんでもない怪物だった。

上半身はダンディーなおっさんだが下半身が異常だ。

蟹のような鋏、蠍の尻尾、甲虫のような羽、長い8本の足。

虫やら甲殻類をこちゃませにしたような姿をしている。

「あ……あわわ……」

「安心しろ。とって食うわけじゃないから」

「食われない？」

「じゃあなんなんだ？」

「お前は一体なんなんだ？ここは何処だ？俺はなんでここにいる？」

「とりあえず説明するが…俺は数ある神の一人で、ここは俺の住みか。貴様がここに居るのは貴様が死んだからだ」

「は？死んだ？俺が？」

「たしかに俺は癌だったけど……」

「そう。貴様はあのまま死んだんだ。死因は病死だ」

「……そっか…治らなかつたんだ。」

「死んだのはわかった。自分でも納得してる。でもなんであなたの住みかにいるんだ？」

「ああ、実は下級神の間で人間に能力を与え、漫画やアニメの世界に転生させる事が流行っててな。俺もやってみようと思ってな。そして貴様を選ばれたのだ」

「えっと…二次創作によくある転生ってやつか？」

「じゃあ、あんたが俺を……」

「殺してはいない。そんな事するのは下級神だけだ。俺は一応上級神だからな」

上級神？そんな格好で？

「世の中の全てのものに神が存在する。八百万って知ってるだろ？」

「知ってるけど…」

「そして俺は節足動物全ての神なのだ！」

はい？

「それって…偉いの？」

「ああ。節足動物とゆう全動物の殆どを占める生物の神だからな。一種類の神なんかとは比べものにならないほどに偉い」

「じゃあ、もつと細かく蟻とか蝶とかの神もいるのか？」

「いるとも。だがそんなやつらは下級だ。司るものが多いほど偉いんだよ」

つまりカテゴリーの広さが神の格を決めるって意味か。節足動物は地球上の動物の85%以上。目茶苦茶偉いんじゃない？

「本題に入ろう。貴様は転生するか？するのなら転生先は選べないが、俺から漫画やアニメ等のキャラの能力をくれてやろう。嫌ならそれでもかまわん。他を当たるからな」

転生か…今思えば俺の人生、病気のせいで青春もへったくれもなかったし。

もう一度人生をやり直せる。
それだけでも十分だ。

「やるよ。次こそは人並みの人生を歩みたいしな」

「そうか！で、能力なんだが…俺は節足動物の神。だからそれに関する能力を与えよう。次の内三つから好きなやつを一つ選べ」

三つの内から一つか。

無限の剣製とかが有名だけど…そういうのは剣や武器の神が与える能力だな。

「まずは仮面ライダー……」

仮面ライダー？たしかにバッタは虫、つまり節足動物だ。

仮面ライダー……良いかも！

「…龍騎の仮面ライダーシザースだ。」

蟹刑事かよ！弱すぎだろ！

「却下！絶対嫌だ！」

せめて龍騎ならオルタナティブに！あいつたしか蟋蟀だし。
あ…でもエサとか大変だな。

「落ち着け。まだ能力はあるから。で、次は…」

神は少し考えると。

「デジモンアドベンチャーのテントモンをパートナーに与えてやる
う」

パートナーか…悪くないな。

進化すれば乗って飛ぶ事もできるし。

でも現実世界だと世間体が大変だな。ずっと隔離するのもかわいそ
うだ。

デジタルワールドならともかく…

「最後の一つは？」

「そうだな…よし、EX!の千路美尋の能力だ」

リゼンブラか…変身もできるし。

転生先にもよるが、能力さえ使わなければ普通の人として生活もで
きるな。

リスクは自分の身体が普通の人間ではないだけだ。

…ボルキャンサーのエサ、テントモンの人権…そう考えると三つ目
が妥当かな。

ようは純粹な人間でない事を隠してれば良いんだ。
でも普通の人生も送りたいし…

「そういえば能力無しは？」

「それは駄目。世界によっては能力なくちゃ生き残れないだろ」

バイオハザードとかだったら必要だな。
戦いのある危険な世界でもだ。

「じゃあ【千路美尋】の能力で」

「【千路美尋】……リゼンブラ……アーキタイプ……センチピート……良いんだな？」

「ああ……。て、もしかして女に転生するの？」

そうだ、能力が女性なら転生後も女性になる可能性が高い。
たしかにそれも面白そうだが、前世の記憶があるんだ。男が良い。

「安心しろ、男にしないとやる。あと転生先の世界の主人公と同じ年齢になるように生まれるからな。ちなみにどの世界か知らん。それに生まれる場所もランダムだから、原作に関わるかはお前次第だ」

「あんまり関わりたくないなあ……」

危なそうだし。正直面倒な事になりそうだ。

「そう言うな。あと俺が与えるのはさっき言ったやつだけだ。その世界独自の能力もランダム、運が良ければとんでもないチートになる」

「とことん運任せだな……不安しか無い」

「ははは！まあ第二の人生楽しめよ！」

「まっ、次は人らしい人生を送るよ」

ん？たしかテンプレだとこの後…

「おい、俺落ちるのか？」

「Yes of course」

俺の足元に大きな穴が開く。

「てめええええええ！」

そして俺の意識は消えていった。

～SID OUT～

～神SID～

いやー転生って初めてだからな。こんなもんで良いだろう。

さて、能力をくれてやるか。
俺の送った転生者だ。それなりに勝ち残ってもらわないとな！

.....

転生者のルール教えてなかった..
やっべー、どーすっかなあ..

..よし、もう一つ能力をあげよう。

【千路美尋】の能力だから..あとは同じ作品の【周防比夜】の能力
だな。

いや..無理だ。能力は一つとゆうルールだからな..

まてよ..たしか女性のリゼンブラにはプリサーバーとゆう能力があ
ったな..これだ！

出生を操作するだけで良い。あとは俺が与える部分を一部をいじつ
てと..

はは、ぶっっちゃけオリジナルリゼンブラだなこりゃ。

よしよし。これで良いだろう。

あとは他の転生者に襲われて生きてれば説明してやれば良い。
助ける事はできないが、それで死ねばその程度の人間だった事
だ。

次に期待すれば良い。

それに文句を言ってきたても能力を強化してやったんだ。何も言えま
い。

フフフ：おっ、転生先が決まったな。

【魔法少女リリカルなのは】か。
なるほど、この世界なら転生者の大半が欲望のために暴走するだろ
う。そして殺し合うはずだ。

さて、せいぜい楽しませてくれよ。

千路命君：

プロローグ（後書き）

エクステンド！

エクスターで書こうかなと思った時期もありましたが、S・O・M
が反則すぎなので断念

シザースを主人公にしようと考えたけど、ミラーワールドに引きず
り込んでしまえば勝ちってのも反則、ミラーモンスターの存在も問
題が多すぎたため断念

第一話 高町家と百足（前書き）

独自設定やら解釈等を含みます

第一話 高町家と百足

「?????SID」

「ハア…ハア…」

暗い森の中を歩く。

立ち止まる事はできない。

私はこの子を守らなくてはならない。

本来、お腹の子供のためを思うのならこんな事はするべきではない。

しかし護衛に駆け付けてくれたリゼンブラ達とははぐれてしまった。万が一私が捕まれば、子供は確実に実験台、もしくは兵器として扱われるだろう。

そんな事はさせない。

この子は私と比夜様の…

くそ。

今の状況、助けしてくれるなら大和一哉でもかまわん。全く…使えない男だ。

ズキン！

「つく?!?!?!」

急に激しい腹痛に襲われる。

痛い…痛い！

まさか…陣痛とゆうやつか？

そんな！こんな所で？

痛みに耐えきれず倒れ込む。

駄目だ…

ここまでなのか？

意識が…

比夜…様…

〈SID OUT〉

（土郎SID）

「もうすぐだな」

妻の大きく膨らんだお腹を撫でる。

「ええ。今度は男の子かしら？それとも女の子かしら？」

「なに、あと一週間だ。楽しみにしよう」

「そうね」

妻も微笑む。

俺の名は高町土郎。そして彼女は妻の桃子だ。

桃子は現在妊娠中。

そして予定日は来週。
実に楽しみだ。

「お父さん、お母さん大変だよ！」

「あら？」

「どうしたんだ、美由希？」

我が家の長女、美由希がリビングに駆け込んできた。

走ってきたのか息が上がってる。

「どうしたんだ？そんなにあわてて」

「庭に女の人が倒れてるの！」

「なんだって？」

「お兄ちゃんが様子を見てるから早く！」

「士郎さん」

「ああ。美由希、案内してくれ」

「こつち！」

美由希の後を追いかける。

庭に一人の人物が倒れてるのが見える。
隣には長男の恭也がいた。

「恭也！」

「父さん、こつちだ！」

この人が…

年は二十代前半だろう。長い銀髪を一本の三つ編みにし、銀縁の眼鏡をかけており、まるで文学少女だ。そして非常に背が高く、おそらく180cm以上はある。さらに腹部は大きく膨らんでおり、おそらく妊婦なのだろう。

「ハア…ハア…うっ…」

非常に苦しそうだ。

まさか産気付いてるのか？

「とりあえず家に運ぶぞ。恭也はその落ちてる鞆を頼む」

「わかった」

「救急車をお願いします。家の前に妊婦が倒れてまして……」

119番に通報している。

「しつかり。今救急車を呼んでますから」

隣では桃子が彼女の面倒を見ている。

大丈夫だろうか？

「…………… 士郎さん……………」

「どうした？」

「なんだか…私も…」

なんだってえええ！?!？

「お母さん…」

「お母さんなら大丈夫だよ」

「恭也の言う通りだ。元気な赤ちゃんを産んでくれるぞ」

桃子と女性は海鳴大学病院に運ばれた。

二人とも大丈夫だろうか？

そして数時間後。

子供達は疲れたのか眠っている。

オギャー！

っ！

生まれました？

看護師が出てくる。

「高町さん、おめでとーじゅーます。女の子ですよ」

女の子…ハハ…

「そうか…桃子っ！」

分娩室に案内される。

「桃子…」

「土郎さん…女の子ですよ」

「ああ」

俺の…三人目の子供。高町家の新しい家族だ。

「よく頑張ったな」

「ええ。高町家の次女。………そういえば土郎さん。あの倒れてた人は？」

そうだ、彼女は無事なのだろうか？

「あの…妻と一緒に運びこまれた女性は？」

「少々お待ちください」

聞かれた看護師は部屋を出る。

すぐに戻ってきた。

「少し危険だったらしいのですが、無事生まれたようですよ」

「そうですか。よかったです…」

桃子も安心したようだ。

「桃子、今日はもう休むんだ。子供達も眠ってるしな」

「そうね。彼女には明日会ってみましょう」

しかし、彼女は一体何者なのだろう…
ただ者ではないのは確かだ。

いや、考えすぎだな。

明日、桃子と会いに行ってみよう。

～SID OUT～

「??? SID」

目が覚めるとベットに寝ていた。

「…ここは…何処だ？私は助かったのか？」

身体に違和感がある。

「気がつきましたか？」

「どうやら看護師のようだ。」

「…ここは…一体…」

「海鳴大学病院です。貴女、倒れてたんですよ。」

倒れてた…たしかに森の中で意識を失ったのは覚えてる。
わからない…

「先生を呼びに行きますので、待っててくださいね」

そう言うと看護師は出ていった。

病院か…っ！？

子供が…いない？

生まれたのか？

まさか…いや、落ち着け。まだ状況が把握できてない。

ふう…

身体は？

体力も回復していないのか非常に怠い。

エクステンドは？

無理に決まってる。

せめて鎖は？

ジャラ

うん、一応生成できる。

戦闘は不可能。非常にまずい状態だ。

本当にただの病院で、子供が無事な事を祈るしかないな。

……

トントン

「どうぞ」

「失礼します。気分はどうですか？」

医師らしい男性が入ってきた。

「大丈夫です。それより子供は？」

「無事です。よ。元気な男の子です」

男の子… 八八… 私の息子…

「会いに行きますか？」

「是非！」

看護師に車椅子を押され部屋に案内される。

いた。

わかる。たしかに私の子だ。

僅かな頭髪は黒く比夜様と同じだ。

よかった…

病室に戻ると簡単な説明を受けた。

どうやら人様の家の前に倒れており、救急車で運びこまれたらしい。しかも通報してくれた家の人も産気づいてたらしく、この病院に入院しているらしい。

お礼を言わなければならないな。

今後の事を決めるため、また後で来ると言って医師は出ていった。

どうやら今の所は安全らしい。だが油断はできない。
なんとかして【ARES】と連絡を取らねば。

……息子か…比夜様との…よし、次の日記はこれだ！

トントン

誰だ？

まさか敵？

鎖を用意し身構える。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは私と年の近そうな一組の男女だった。
女性は車椅子に座っている。

まさかこの人達か？

「はじめまして。私は高町士郎といます。彼女は妻の……」

「高町桃子といます」

二人が微笑む。

「もしかして貴方達が私を？」

「ええ。本当、無事で良かった」

そうか……

「ありがとうございます。おかげで私も息子も助かりました。私は
千路美尋といます」

頭を下げ礼を言う。

「いや、気にしないでください。……少しお時間いただけませんか
？」

「ええ。かまいませんよ」

私も少し話しがたいしな。

「千路さん、今の状況を聞いていますか？」

「はい。どうやら高町さんの自宅の前で倒れていたらしく……」迷惑をかけて申し訳ございません」

「いえいえ。……実は貴女は家の前ではなく庭に倒れていたのです」

何？庭？

何故そんな所に。

「馬鹿な。私は……」

「知らないのですね？」

「はい。私は森の中で倒れたはず……」

「森の中？何故そんな所で？」

しまった。普通は妊婦はそんな場所には行かない。

しかたない。

最近世界征服を再び目論むリゼンブラ達についてはニュースでも放送されてる。それを利用させてもらおう。

「実はエクスターとリゼンブラの戦いに巻き込まれてしまいました……」

「戦い？」

「はい。逃げていた所痛みで気を失ってしまい…気がついたらここ
で…」

「あの…エクスターとか、リゼンブラって何でしょう？」

は？

「…冗談ですよね？」

「冗談ではありません。全く意味がわからないのですが…」

馬鹿な。ありえない！

エクスターもリゼンブラも知らないだと？

「ここは日本ですよね？」

「そうですよ。日本の海鳴市とゆう場所です」

海鳴市。

私も全ての市町村を把握してる訳ではないが、私の倒れた場所の周囲にはそんな町は無かったはずだ。

もしかして…

急いでテレビを付けようとする。
だがカードが必要で付かない。

「あの…私ので良ければどうぞ」

「感謝します」

高町桃子からカードを借りスイッチを入れる。

テレビに写る番組、芸能人、全て見た事の無いものばかりだ。

まさか…

ふとこんな言葉が頭を過ぎる。

異世界…

「ハ…ハハ…」

「あの…大丈夫ですか？」

「大丈夫です。ようやく今の状況が理解できたので…」

なんだこれは？異世界に迷い込むなんてまるで漫画だ。

「全部…お話ししよう」

半ばやけくそになったのか自暴自棄になったのか、私は自分の身の上を話し始めた。

それだけではない。【HERA】や【ARES】等、私のいた世界についても話し出してしまった。

端から見れば馬鹿みたいな妄想だ。

滑稽だな…

「すると千路さんは百足の改造人間の二世代目で…」

「再び世界征服を企むリゼンブラから逃げてた所、異世界であるここについての間にか流れ着いたと…」

「はい。その通りです」

笑うなら笑ってくれ。

だが、これは幸運だと言えるのかもしれない。

たしかに異世界なら私達を狙う連中は手を出せない。だが、こんな場所で生きていけるのだろうか？

絶望的かもしれない。

「千路さんはこれからどうするおつもりですか？」

「さあ？皆目検討も付きませぬね」

このままだと精神病院に放り込まれるか…この世界の研究所に捕まるか。まともに生きるのは難しい。

「桃子…」

「ええ」

？

「千路さん…いえ、美尋さん。よかつたらうちに来ませんか？」

何を言ってるのだこの人達は。

「私の話しを聞いてましたか？どう見ても可笑しいでしょう？」

「私達は貴女の話しを信じますよ」

「ならば、私は普通の人間ではない。私のいた世界でもようやく世間に認められたのに」

「そんな事言わないでください。それとも…迷惑ですか？」

いや、迷惑どころか大歓迎だ。

私にとつても、息子にとつても。

……

「本当によろしいのですか？」

「勿論！」

「大歓迎ですよ」

……駄目だ……泣いてしまいそうだ。

涙は全て涸れてしまったと思っただのに……

「ありがとうございます……必ず……恩は……ウウ……返します……」

……比夜様、私は人として生きます。必ず立派な子に育ててみせます。

「泣かないでください。そうだ！子供の名前は決めましたか？」

「うちはなのはって名前にしたんですよ」

名前か……私も決めてある。

「私も決めています。命……千路命です」

第一話 高町家と百足（後書き）

主人公が誕生しました

第二話 自分の力（前書き）

少し修正しました

第二話 自分の力

（命S I D）

俺が生まれてから三年の月日が流れた。

意識がはつきりしてきたのは最近で、赤ん坊の頃の記憶は曖昧だ。まあ、それはそれで助かるんだが。

ひとまず俺の状況を確認しよう。

俺の名前は千路命。歳は三歳、性別は男だ。

家族は母のみ。まあ今居候させてもらってる一家も含めると、俺を入れて七人だけだな。

母の名前は千路美尋。そう、俺の能力の元ネタでもある千路美尋本人だ。

銀髪、三つ編み、眼鏡と知った時は驚いたね。

本編では無口でクールビューティーとゆうか、性格きつそうだったから初めは怖かったけど、母さんは厳しいが基本的には優しい良い母親だ。

そういえば何故か父（？）が周防比夜らしい。たしか周防比夜って女性だよな？

……まあ改造人間やクローンやらそんなのがいた世界だ。しかも俺が生まれたのは本編の数年後。同性で子供を作れてもおかしくは……いや、考えるのは止めよう。

あと俺が生まれた世界はまだわからない。戦いの無い世界だと良いんだが。

「みことくん、あそぼ」

「うん、あそぼ」

ああ、この娘は高町なのはちゃん。俺と母さんがお世話になってる高町家の末っ子だ。

因みに俺と同じ日、病院で生まれらしい。物凄い偶然だ。

俺の日常は主になのはちゃんと遊ぶ事かな。三歳児だしこんなもんか。

でも前世の記憶があるせいかおままごとは恥ずかしい。

そういえばなのはちゃんの名前、どっかで聞いた事あるような……
気のせいか。

お昼寝の時間だ。

なのはちゃんは……よし、寝てるな。

さて、俺の能力の確認をしてみよう。

俺の【千路美尋】の能力と出生の際に偶然得た【周防比夜】の能力だ。

二人ともエクステンド…戦闘用外骨格を纏え、毒を持ってる。ただし周防…いや、父さんは毒の性質を自在に変化できる。多分俺もできるだろう。

母さんの能力は毒と鎖の生成。エクステンドは毒が付属された蛇腹剣を装備してる。

そして父さん（笑）は誘導操作のできる毒針と鋏だ。

まずはエクステンドができるか試してみよう。

「えくすてんど！」

………

駄目か。たしかに修練や成長で身につくのが程だし、しかたないな。

じゃあ鎖は？

よし、出る！

………

ジャラ

出た！

でもキーホルダーに使うようなちやちやつだ。

うん、これもしかたない。

次は光の力場だ。オルタ・フィールド

魔法陣のようなもので、能力強化や防御、射撃制御など幅広い用途がある。

多分誘導操作の毒針もこれを利用してるのだろう。

とりあえず生存に重要な防御用のオルタを…

どうだ？

俺の右手に薄紫色のオルタが出現する。

できた！やったあ！

思わずオルタを叩く。

パリン

……………うん、これも練習が必要だな。

さて、最後に試したい能力がある。

神の視点だ。プロヴィデンス・ビュー

自分に使えば死角が無くなり、幻覚等も通用しなくなる。相手に使えば相手の解析ができ、そして周囲に使えば広域を見渡す事ができるチート能力だ。

母さんの目が悪いのもこれの副作用のようなものだ。そして俺も生れつき目が悪い。

ものは試した。使えたら便利だし。

プロヴィデンス・ビュー、発動。

……

俺の後ろにいるのはちゃんが見えます。

まじ？使えるの？パートナー無しで？

すっげー！どこまで見えるんだろ？

…この部屋全体が限界か。解析も無理だし。

なるほど大体わかった。

俺の能力をまとめると、二人分の能力全て使えるらしいが、非常に未熟だと言う事だ。

三歳だからしかたないか。

この世界についてもわからないし。

少なくとも今はたいした事はないだろう。この世界の主人公は俺と
同じ年なんだ。

危険があるなら能力を使えるようにした方が良いな。

よし、母さんに相談してみるか！

俺は部屋から出た。

〈 S I D O U T 〉

〈 美尋 S I D 〉

この家に来てから早三年。
命の事といい、高町家の皆さんには本当にお世話になってるな。

比夜様：命は元気に育っています。私はあの子を人として生きれる
よう教育します。

どうか、私達を見守ってください。

「おかーさん」

命？

「どうした命？眠れないのか？」

なのはと昼寝してたはずなんだがな…

「うっん、なんかおめめがへんなの」

「目が？」

近視が酷くなったのか？

「うん。おへやのなかがぜんぶみえるの」

全部見える？

……まさか…馬鹿な！シエアリングパートナーもいないのに！

「いったいどれくらい見えるんだ？」

「えっと…あつちからあつちまで」

リビング全体：半径4、5m程度か。
プロワイテンス・ビュー
未熟だがやはり神の視点だ。

単体で発動できるとは…

ん？

「命？」

「きもちわるい」

やはりこんな幼い子供の神経には辛いかな。

それに一人で発動させるとゆう事は私にとっても不明な点が多い。

「すぐに見るのを止めなさい。それと他に変なところはないか？」

おそらくリゼンブラとしての能力を無意識ながら使いだしたのだから。万が一エクステンドでもされたら大変な事になる。

「あと…これ」

見ると袖から数本の細い鎖が出てる。

触ってみると私より小さく弱々しいものだった。
なるほど…

「命、その鎖は出しては駄目だ。絶対にお母さん意外に見せてはいけない。約束できるか？」

「…うん」

「約束だ。他の人が見たらビックリしてしまうからな、気おつけるんだぞ」

「はい」

約束を守ってくれると良いのだが…
しかしどうするか…私は命には普通に生きてほしい。だがあの子の身体がそれを許さない。
桃子さんに少し相談してみるか。

第三話 守りたい人（前書き）

なんかお母さんの出番多いな

第三話 守りたい人

（命S I D）

あの後俺は母さんから能力の使い方を少しずつ教わってる。でも極力使つなと言われた。

母さん曰くこんな力は本来必要ないからだそうだ。

たしかに必要な方が嬉しいな。平和に生きたいし。

モブキャラとして生れたら万々歳だ。

あれから二年たち、俺となのはちゃんは五歳になった。

エクステンドは相変わらず纏えないが、鎖は母さんの使うようなか
なり頑丈な物を作れるようになり、光の力場も強くなった。
オルタナティブワールド

そんなある日事件が起きた。

高町家の主、土郎さんが仕事で大怪我したのだ。詳しい事は聞かされてないが瀕死の状態らしい。

桃子さんは翡翠屋が忙しく母さんも美由希も手伝いに行ってる。

桃子さん達は毎日疲れきって家に帰ってきてはすぐに眠ってしまってる。

店に土郎さんの看病：当然だ。
そのため家事は大体母さんがやってる。

流石にリゼンブラなだけあって体力があるな。

ちなみに恭也さんは道場にいる。

どうやら家族を守るためとかで鍛練に打ち込んでるらしい。

そんな訳で基本的には俺となのはちゃんしかいない。

馬鹿か？家に子供二人きりって、危険すぎだろ。

いや…二人きりじゃない恭也さんは家にいたわ…でもなあ……

「命、なのはお昼ご飯だ」

「いただきます」

「…いただきます」

なのはちゃんも元気がない。やっぱり寂しいのだろう。

「…「うちそつちま……」」

「なのは、食べれないのか？」

「うん……」

よく見ると半分も食べてない。

最近食も細くなり体調もあまり良くなさそうだ。

父親が大怪我し家族はバラバラ…

俺じゃ力になれないのかな？

「お母さん…なのはちゃんと遊んでくる…」

席を立つ。

俺も食欲が出ない。

「ああ。……………命」

「なに？」

「私は恭也を呼んでくる。なのはの事、頼んだ」

……………うん。俺がやるしかない。

「まかせて」

そう言ってリビングを出る。

〈SID OUT〉

（美尋SID）

「恭也、入るぞ」

道場に入る。

中では恭也が素振りをしている。

「昼食だ命となのはもう食べたぞ」

「ああ……後で食べます……」

「……少し……話したいのだが……」

「後にしてもらえませんか？」

全く……

「ならば勝手に話させてもらう。最近、なのはと話したか？」

「……いえ」

やはりな。

「学校以外はずっと道場か？」

「それがどうかしましたか？」

素振りを止めようとしな。

「ずっとこんな所に引き込もって…何を考えてる」

「俺は高町家の長男です。俺が家族を守らなくちゃいけないんだ。だから…」

「守るか…その家族を悲しませてる人間の台詞じゃないな」

素振りが止まる。

「悲しませてる？」

「ああ。命がいなかったら今頃なのは一人ぼっちだ。父は入院、母は仕事、姉はその手伝い。家にいる兄は怖い顔して剣を振るってる。最近鏡を見たか？鬼のような形相だぞ」

「黙れ」

話すのを止めない。

正直私も限界だ。

「悪いが言わせてもらおうぞ。恭也がやってるのは妹を一人ぼっちに

して家族をバラバラにしているだけだ！それで家族を守ると？笑
わせるな！」

「黙れ！部外者の貴様に何が解る！これは俺達家族の問題だ！」
私に木刀を突き付ける。

「いい加減に目を覚ませ！お前の行動は状況をより悪化させてるだ
けだ！」

「黙れええええええ！！！！」

木刀を振りかざし襲いかかってくる。

速い。だが避けられる。

怒りに身を任せた攻撃など簡単なものだ。

「他人の貴様が口出しするな！これ以上は容赦しないぞ！」

小僧が…

「ならばやってみろ！エクステンド変身！」

エクステンドし外骨格を纏う。
青紫の西洋甲冑のようなデザイン、両腕には一本つつ剣が装備され
てる。

「な…なんだ…」

「どうした？怖じけづいたか？」

「人間じゃなかったのか！」

「フン。それがどうした」

「倒す！」

再び切り掛かかってくる。

剣で防ぎ蹴り飛ばす。

「ぐっ…！」

悪いが時間をかけるつもりは無い。

両腕の剣を分裂させ蛇腹剣の形態する。

「ラアアアアアア！」

剣が鞭のように伸び二本の木刀を絡める。

そして剣を奪い上空に投げ切り刻む。

「勝負あつたな」

「くっ…！」

まだやる気なのだろう、壁に架けられた刀に視線を移して

ここまでしておくか。

エクステンドを解除する。

「なんのつもりだ！」

「これ以上戦うつもりはない」

このままだと殺し合いになってしまつからな。

「ちゃんとなのはを見てあげろ。最近ろくに食事も取らないし…昼食も半分も食べてない」

「……」

「私は一人っ子だったから解らないが…これだけは解る。あの子は今本当に辛いんだ。家族がバラバラになつて…」

「俺は…」

「自分を磨くのは悪くはない。ただ家族を悲しませてまで力を欲するるのが問題だ」

周りを省みずに力を求めては破滅するだけだ。

「すみません…」

「かまわん。さて、食事にしよう。それからゆっくりなのはと話そう」

「はい」

やれやれ。

「あの…さっきの鎧は？」

ああ…そうだった。

「今度話す。ただ、桃子さんや士郎さんも知ってる事は教えておく」

「わかりました」

さて…これで少しは良くなっただろうか？

〈SID OUT〉

〈命SID〉

なのはちゃんと一緒に本を読んでも。
何て声をかけて良いかわからない。

前世では末っ子だったからなあ…
とにかく話してみるか。

「なのはちゃん」

「なーに？」

「土郎さんは大丈夫だよ、絶対に」

「うん」

違う。俺が言いたいのはこんな事じゃない。

「……なのはちゃんは寂しい？」

「え？」

「なんか…食欲も無いみたいだし…」

「そんな事ないよ」

笑って答える。

とても痛々しい笑顔だ。

「……ごめん。僕、力になってあげなくて…」

「命君がいてくれたから私寂しくないよ!………ううん、ごめん。少し嘘ついた」

やっぱり辛いのか。

「お父さんもお母さんも、お兄ちゃんもお姉ちゃんもいなくて…家

族が無くなっちゃうんじゃないかなって思うと、凄く怖いし寂しい。でも命君がいてくれて嬉しいのは本当なの」

「なのはちゃん…」

「命君、ありがとう」

お礼を言われるなんて…

「そんな。僕は何もしていない」

「寂しい時、一緒にいてくれた。命君がいなかったら私……」

なのはちゃんが俯く。

俺は無意識になのはちゃんの頭を撫でる。

何やってんだろ。

「なのはちゃん。僕は何処にも行かないよ。これからもずっとね」

「命君…本当？」

「本当だよ」

そう言っただけで彼女の手を握る。

視線が重なる。

俺の方が背が高いからかなのはちゃんが上目遣いになる。

なんか目茶苦茶恥ずかしいな。

「えっと…外に遊びに行こうか？」

「あ…う、うん！」

俺達は手を繋いで公園へ向かう。

俺は気づかなかつた。公園での視線に。

そして知る事になる。

転生者のルールを。欲望に塗れた転生者の戦いを。

第三話 守りたい人（後書き）

一応ヒロインはなのはです

第四話 襲い掛かるZero(前書き)

敵転生者登場

第四話 襲い掛かるZero

（命S.I.D.）

あれから数週間が経過した。

あの日から恭也さんが俺達と一緒に居る時間が増えた。

どうやら母さんに説教されたらしい。

さらに土郎さんも意識を取り戻し、順調に回復している。

そして今日、ついに土郎さんの退院の日だ。

今日は翠屋でパーティーをする。

そこで僕はお使いを頼まれ出かけてる。

「この公園を通り抜けた方が早いな」

ふとそんな事を思い、人気の無い公園を歩く。

すると後ろから足音が聞こえる。

どうやら走ってるようだ。しかも俺に近づいてくる。

何故だ？

後ろを振り向く。

すると剣を持った何者かが襲い掛かってきてるじゃないか。

「死ね！」

「うお!？」

ギリギリで避ける。

地面に剣が突き刺さる。

なんだなんだなんだ!？

一体全体何なんだ？

よく見るとこいつは見覚えがある。

緑と黒のアーマー、身体を走る金色の線路。

仮面ライダーゼロノス、アルタイルフォーム。

仮面ライダー？まさか転生者か？

「お前転生者か？」

「当たり前だ」

「何故こんな事をする！身に覚えはないぞ！」

「……ハア？俺がオリ主になるために決まってるんだろ？だから、邪魔なお前を殺して存在を消すんだよ」

剣を突き付ける。

なんだよこいつ…狂ってんのか？

「正気かよ！人殺しが主人公になれる訳ないだろ！」

「……プツ…アツハハハハ！お前ルールを聞いてなかったのかよ！とんだ下級神に転生させられたんだな！」

ルール？そんな物聞いてないぞ！

「士郎が死にかけて寂しがつてる所に俺が駆け付けてフラグ立てようとしたのを邪魔しやがつて……死ね！」

再び切り掛かってくる。

なのはちゃんのことを知ってる？もしかして彼女はこの世界での主要人物だったのか？

オルタで防ぐ。

驚いたような様子で離れる。

「魔法？いや、この世界のじゃないな」

この世界には魔法があるのか…

「お前、この世界を知ってるのか？」

「原作知識無しかよ…なんでこんなやつが……マジム力つく」

ひとまず神の視点は展開しておくか…

「プロワイデンス・レビュー」
神の視点発動。

視界が変わる。ゼロノスの後ろ15mに黒づくめの人物がいる。

デネブか…

二人がかりじゃないって事はデネブが非協力的か余程自信があるからだ。

前者だと嬉しいんだが。

「死ね死ね死ね！」

目茶苦茶に剣を振り回す。

全部見えてるんだよ。

全て回避、そして鎖を形成し鞭のように振るう。

バシイ

当たるが全く効いてないようだ。

「何だよそのシヨボイ能力は？なおさらムカつくぜ！」

リゼンブラで俺の方が身体が大きいとはいえ、子供の力じゃ仮面ライダーには勝てないのか？

「なんでなのはを狙うんだ？」

「決まってるんだろ、俺のハーレムに加えるためじゃないか。本当に何も知らないんだな」

ハーレム？主要人物に女性キャラが多いのか？
しかし魔法、なのは、なんか聞いた事あるような……

「オリ主は選ばれた人間しかねない。つまり時の神に選ばれた俺にこそ相応しい！だからためえみたいなモブがなのはにフラグを立てるのは罪なんだ！わかつたらさっさと死ね！」

…なるほど。

「お前をなのはに近づけちゃいけないのがよくわかった」

「つくづくうぜえ奴だな！殺す！」

剣を分離させボウガンに組み替える。

「おらあー！」

発砲。

俺は走り回り避ける。

くそ。こんなんじゃ近づけないし、近づいても今の俺じゃ対抗できない。

殺されるしかないのか？冗談じゃない。
だけど…

「死…ぐふお！？」

突如鞭のような物が現れゼロノスを吹き飛ばす。

よく見るとくの字型の刃がいくつも着いている。

「子供の喧嘩に親が口出しするものではないが…これはどう見ても喧嘩ではないな…」

青紫の西洋甲冑のような姿。

「なんだ貴様は！」

「この子の母親だ」

〈SID OUT〉

〈美尋SID〉

命が遅いと思い迎えに行つたのだが…まさかこんな事になってるとはな。

命を襲つた人物は見た事もない格好をしている。

額のエンブレムもマフラーも見当たらない事からエクスターとは思

えない。

おそらくパスワードスーツの類いなのだろう。

しかし命と同じ年頃の子供が所持し、何故命の命を狙う？

「少年、何故息子を狙う？」

「うつせえババア！」

……私はまだ二十代なんだが…

少年が切り掛かってくる。

剣を分離させ鞭のように振るう。

「ぐは…！」

少年が倒れる。

「このや…うわあ…！」

再度振るう。

切れないな。

装甲は確実に削れているのだが…

「この、ぶっ殺…ぎゃあ…！」

しかし弱いな。どうやら装備を使い熟せてないらしい。

「さて、警察に突き出す前にその着ぐるみを脱いでもらおうか」

「この野郎…！」

呆れたな。まだやるのか？

「母さん、二時の方角から銃撃！」

っ！？

剣を連結させ盾にする。

ドンドン！

そこまで威力はなさそうだ。

「侑斗、大丈夫か？」

「遅いぞデネブ！」

仲間か。

黒頭巾に金色の鳥のような仮面をつけた黒ずくめの少年？が現れた。指からは微かに煙りが出てる。

どうやら手が銃になってるようだな。

「形成逆転だな。あの男を殺せば全部終わる。デネブ、お前は時間を稼げ！」

「わかった！」

命の殺害が優先か。
させるものか！

「シヤラアアアア！」

両腕の剣を蛇腹剣にし二人まとめて切り伏せる。

「危ない！」

「ぐは！」

デネブと呼ばれた少年は手甲で防いだが侑斗という少年は直撃する。

「ああもうデネブ、変われ！」

「了解」

侑斗の後ろにデネブが立つ。

『V e g a F o r m .』

デネブの手が肩に、そして顔が胸部装甲、身体がマントになり顔の装甲が別の物に変わる。

なんだあれは？デネブは人間ではない？まさかパワードスーツの装備だったのか？

「最初に言っておく！胸の顔は飾りだ！」

……

馬鹿か？

「ムン！」

ガキイン

っ！？

腕力が上がってる？

「どりゃあー！」

「ほう……」

しかも腕も上がってる。

だがまだ私の敵ではない。

「甘い！」

相手の剣を絡める。しかし手は離さない。
ならば。

そのまま持ち上げ投げる。

「うわあー！」

『デネブ、何やってんだ！』

剣を支えにして立ち上がる。

「この人戦い慣れている。すごく強い」

「いい加減に諦める」

段々面倒臭くなってきた。

『Alt a i l F o r m』

「誰が諦めるか！」

二人が分離し撃つてくる。

狙いも目茶苦茶だな。

地面に着弾し土煙りが上がる。
射撃は止まない。

ん？量が減った？

「うおおおお！」

侑斗が私の横を通りすぎる。

しまった！

油断した。

侑斗を追いかける。

背中から撃たれるが気にしてられない。

『Full Charge』

ベルトからカードを抜き剣に差し込む。

命を切ろうと飛び掛かる。

私は二人の間に入る。

間に合った。

剣が振り下ろされる。

左腕の剣で防…何？

まさか！くそ、ならば！

ズバア！

左腕と全身に痛みが走る。

第四話 襲い掛かるZero（後書き）

美尋の運命やいかに

第五話 転生者とは（前書き）

母さん！

第五話 転生者とは

（命S I D）

「がああああ！？」

ゼロノスが吹っ飛ぶ。

よく見ると左の鎖骨のあたりに蛇腹剣が突き刺さってる。

「侑斗！」

デネブが駆け付ける。

やったのか？

いや、やったんだ。あの傷じゃもう戦えないだろう。それに母さんの毒にも侵されてるはずだ。

助かった…

ポト

何かが落ちる音。

母さんの足元に一本の剣が落ちてる。

…いや、あれは母さんの腕だ。

母さんが崩れるように倒れ、エクステンドが解除される。

「母さん！」

母さんに駆け寄る。

酷い傷だ。

左胸から下へ一直線に切り傷がある。

「装甲には…少し自信があったのだが…まさかな…」

「母さん、しっかりして！」

左腕に鎖を巻き、少しでも止血する。

「モブが…ふざけ……やがって…」

侑斗が起き上がった。

「侑斗、傷も酷いし人も来る。今は逃げよう」

「ふざけんな！あと少しで…畜生、身体が痺れてきた！」

「ごめん！」

侑斗を担いで逃げる。

「母さん、嫌だ死なないで！」

「大丈夫だ…左腕は無くしたが身体の傷はそこまで深くない……子供で、さらにあいつを突き飛ばしたのが正解だった…」

そうは言っても…

出血も酷いしとても大丈夫には見えない。

「君、大丈夫か!？」

人が来た。

「救急車を！早く！」

「救急車?っ!?!待ってる、直ぐに呼ぶ」

携帯電話を取り出し通報をしてくれた。

母さん…死なないでくれ…

〈SID OUT〉

〈侑斗SID〉

くそっ、まだ痺れが治らねえ。
毒があつたなんて…

「侑斗、大丈夫か？」

「大丈夫な訳ねえだろ！」

「やっぱり家に帰った方が……」

「あいつらがいたら自由に行動できないだろ！」

それにはやてがいる。絶対俺と一緒に暮らそうって言うはずだ。

そういや身体の傷痕残るだろうな……いや、これは結構格好良いかも
しれない。

この傷痕を見て皆が心配してくれて……ククク。

うん、この傷に関しては許してやろう。

「あのモブババアは死んだし、転生者は雑魚。他のやつも狙ってる
だろうから無視するか」

「俺は生きてると思うけど……」

ハア？

「馬鹿じゃねえの？俺のスプレッテッドエンドが決まったんだぜ。
死んだに決まってるんだろ」

「浅かったような気がするんだよな……（ボソ）」

身体に大きな傷痕のある少年か。フッフ……俺がオリ主になるのにま

た一歩近づいたな。
今は傷を癒しながら今後の事を考えよう。

「しかも転生者じゃないのに…絶対まずいよ…」(ブツブツ)「

「何ブツブツ言ってるんだ。とにかく飯にしようぜ」

「そうだな。作ってくるよ」

デネブが出ていく。

外を見ると水平線に夕日が写ってる。

ゼロライナーの窓から見る海は良いもんだな。

〈SID OUT〉

〈命SID〉

病院の手術室の前。手術中のランプが消える。
一人の医師が出てきた。

母さんは重傷だった。

左腕を失い左乳房が真っ二つに。左肺と肋骨に裂傷、そのまま腹部まで一直線に切り傷がある。

しかし出血は多かったが、大きな血管も無事で内蔵の損傷も小さかったらしい。

助かったのだ。

本当に良かった。

急に力が抜ける。

そのまま俺は気絶してしまった。

目が覚める。

知らない…いや、知ってる天井。俺と母さんの部屋だ。

隣にはなのはちゃんが寝てる。心配してくれたのだろうか？

「…ありがとうなのはちゃん」

頭を軽く撫でる。

部屋を出て庭に寝転ぶ。
月が明るい。

何故こんな事になった？
なのはは一体何者なんだ？

「転生者のルールってなんなんだ？」

「悪い、教え忘れてたわ」

っ！？

なんだ？頭の中に声が？

「久しぶりだな。第二の人生楽しんでるか？」

神か！

「おい！ルールってなんだよ！どうして俺が狙われたんだよ！」

「落ち着け。まず声に出すな。念じるだけで会話ができる」

念じるだけ？

「こっか？」

「上出来だ。じゃあ説明するぞ。実は俺はお前に転生者のルールを

教え忘れて転生させちゃったんだ。今日はその説明に来たのだ」

「このタイミングでか？」

「ナイスな展開だろ？」

こいつ…

「冗談はさておき、まずルールその1。転生者は転生に関する事を他の転生者以外に知らせてはいけない」

転生の守秘か。

「破った場合は？」

「どの道知らせられないのだがね。破ろうとすると死ぬ程苦しい目にあうぞ」

怖いな。

「ルールその2。転生者が他の転生者に殺された場合その世界の人々の記憶や記録から消滅する」

「なんだよそれ…じゃああいつは俺の存在を抹消しようとしてたのかよ…」

「そういう事だ。ただしこれには続きがあってな、同じ神に転生された転生者はこのルールが適応しないのだ」

同じ神？

「どうしてこんなルールを？」

「知らねーよ。俺が作ったんじゃないんだから。あと二次的な事は抹消されないぞ」

「二次的な事？」

「ああ。例えばお前が殺されても母親の千路美尋の存在は残るって訳だ。あくまで消えるのは転生者だけ。イレギュラーとかはそのままなんだよ」

そのまま？

「じゃあ今俺が殺されても侑斗が母さんを傷つけた事は消えないって事か？」

「そうだ。逆にお前が殺しても怪我は元には戻らないって訳だ」

……なるほどな。

「ルールその3。転生者は自殺ができない」

自殺か…

「以外とまじなルールだな」

「転生者は神の娯楽だからな。自殺なんかされたらつまらないしな」

娯楽って…

「ルールはだいたいそんなもんだ。質問は？」

「この世界はなんなんだ？」

「そっぴいやお前原作知識無しか。教えてやる、ここは【魔法少女リリカルなのは】の世界だ」

リリカル……思い出した！なんか映画とかやってたな！

……………リリカルなのは？

「おい…まさかなのはって…」

「高町なのはが主人公の世界だ」

嘘だろ…

「じゃあ侑斗のやつが狙った理由って…」

「お前がいるとなのはの気を引く事が出来ないから。そして原作を自分の思い通りにできないからだ」

母さんの怪我の原因って…俺だったのかよ？

俺のせいで…

「まっ気にするな。あいつは転生者以外の人間を傷つけてしまった。これがバレればハーレムなんて不可能だ」

それでも気にするって。

「時の神の転生者か…勝てるかな？」

「時の神？ありえねえな。あんな上級の神が転生者を出したなんて聞いてないぞ…」

え？

「わかった！時計の神だ。あの下級神ならやりかねん」

「時計って下級なのか？」

「人間の作った道具の神だ低いに決まってるだろ」

自然の物の方が上か。

あっそうだ。

「そっぴや俺以外にはいないのか？お前が送った転生者は？」

「あの後三人転生させてな。この世界に来たのはお前以外は、ついさっき送ったやつ一人だけだ」

あと一人か。
ん？

「たしか主人公と同じ年齢で生まれるんだろ？今から送ったんじゃ年齢が合わないだろ」

「こっちに時間の概念なんて無いんだよ」

物凄く納得できるな。流石神の世界。

「どんなやつなんだ？」

正直不安だ。

「俺が送ったんだ。まともな女だよ。まあお前が変態だと思
うなら、そいつも変態だけだな」

女性か……とりあえず信じるか。

「能力は？」

「能力？そっぴゃあいつにはお前の能力の名前は教えてたな」

何勝手に教えてんだよ。

「良いぜ、教えてやる。あいつの能力は……………」

第五話 転生者とは（後書き）

もう一人の能力はもう少しお待ちください

第六話 もう一人の転生者(前書き)

今回後書きにお知らせがあります

第六話 もう一人の転生者

「?????SID」

え、いきなりですが、私は死んだようです。
だって目の前の自称節足動物の神がいるので…

「で…私を転生させてくれると…」

「おう。世界は選べないがな」

「選べないか…」

「一つ聞きたいんだけど、本当に私は寿命だったの？」

「交通事故だったからなあ。」

「本当だよ。俺達はミス死なすなんてしないし、殺すのは下級神位だ」

「殺すねえ…」

「もしかして先月に起きた秋葉原でのガス爆発事故って…」

「それ何人かの下級神がやったんだよ」

「やっぱり。」

「最悪ね」

「ハハハ。ああ、あと転生のルールを教える。転生するかどうかはこれを聞いてから決めろ」

転生者のルールか。

私はルールを聞いて驚いた。

「何それ？殺し合いを促すようなものじゃない！」

「まあな。一応言っとくが、ルールを作ったのは俺じゃないからな」

……でも原作に関わらないようにすれば生存率は上がるわね。

平和に生きましょ。

次は趣味に生きないでみようかしら。

「転生するわ。能力の選択するから教えて」

当たりが出るかしら？

「一つ目は仮面ライダー龍騎の仮面ライダーシザースだ」

…蟹？

「うわ…」

「やっぱり嫌か？」

設定上は弱小ライダーだしなあ。

「そりゃね。防御力は高いらしいけど…」

「皆言うんだよな」

皆？

「皆ってどついう事？」

「一人目の転生者から選択肢にあるんだよ」

「それって前の転生者の余りから選択しなきゃいけないの？」

「考えんの面倒なんだよ」

いい加減過ぎでしょ。

「今までの転生者はどんな能力だったの？」

「一人目はEX！の千路美尋だ」

知らないなあ…

名前からして女性の能力なのかな。

「二人目は仮面ライダーオーズのガタキリバ限定のオーズだ」

え…ちょ…

「それ大当りじゃない！」

「知るか」

羨ましいなあ。

「最後の三人目はパートナーにテントモンをくれてやったぞ」

相棒か。それもステキかも。

そう考えるとシザースもボルキャンサーがいるわね。

「私は四人目か…」

「そういう事だ。あと三人ともまともなやつだから同じ世界でエンカウントしてもまず襲われはしないだろ」

「本当？」

「安心しろ、俺はそういう奴しか転生させないからな。だからまだ四人目なんだよ」

まともな人だけを選別してるんだ。

「はあ…じゃあ二つ目は？」

「仮面ライダーカブトの仮面ライダーキックホッパーだ」

おお！これはすごい。

たしかリバーシブルでパンチホッパーにも変身できるからお得じゃない！

「ただしリバーシブル機能は削除してるからな」

「なんで!」

「二つは別の能力なんだよ。文句言つな」

テンション下がるわ〜。

「最後はスパイダーマンだ」

「東映の?」

「映画ってか原作だな」

レオパルドンは無しか。

「仮面ライダーが多いわね」

「作者の趣味だ」

はい?

「いや、気にするな」

メメタア…

「時間はある。じっくり選べ」

さて、どれにしようかな。

まずシザース。

たしかに弱いかもしれないけど、防御力だけは三つの中ではトップだ。しかもボルキヤンサーってゆう味方がいるのも嬉しい。そして変身ポーズが格好良い。でもなんかなあ…

次にキックホッパー。

クロックアップが強い。逃げにも使えるから総合的には一番強いかもしれない。

ただクロックアップの負担が心配だし、パンチホッパーへの変身もできないのは微妙ね。

最後にスパイダーマン。

これは何と言っても自分自身が強化されるのが良い。仮面ライダーはあくまでパワードスーツだし。生身が強いのは他のに無い利点だ。ただ純粋な人間じゃないのは嫌ね。

迷うなあ…

「ねえ、ランダムってできない？」

「可能だが良いのか？」

「選べないもの。どれでも文句は言わないわ」

「おし、じゃあサイコロで決めるぞ」

「ちよつと待って。私には今教えなくて」

「転生してからの楽しみって訳か」

「そういう事」

せつかく世界もランダムなんだ。この方が面白そう。

「次の人生は絶対リア充になってやる！そんで原作に関わらず平和に生きるのよ！」

やったるでー！

「そうなると良いな。じゃあな」

足元に穴が開く。

「え？嫌ああああ！」

テンプレなの？

〈SID OUT〉

（神SID）

これで四人目か。他のやつに比べると圧倒的に少ないが…ああゆうやつ程原作に巻き込まれやすいからな。

さて能力はつと…

…これか…折角だ、少しいじるか…

……………これでよし。

次に世界は？

一人目と同じ【魔法少女リリカルなのは】か。

ん？……フ…フハハハハ！生まれた家があれだとは！

やはりまともなやつを転生させた甲斐がある！

ククク……ん？三人目のやつ殺されたか…

一夏の双子の弟じゃ狙われて当然か。

だが馬鹿な奴らだな。この世界は男が介入するのが最高難易度なものにな。

さて、そろそろ命のやつにルールを教えてやるか。

二人とも頑張れよ。

第六話 もう一人の転生者（後書き）

二人目の転生者の能力はアンケートで決めたいと思います

理由なども聞せていただければ嬉しいです

皆さんお願いします

第七話 毒の決意（前書き）

アンケートにご協力ありがとうございます

もう少し続けるので、よかったらご意見お願いします

第七話 毒の決意

母さんが入院してから半年。ようやく退院できた。

高町家の皆にも心配かけてしまい申し訳なさでいっぱいだ。士郎さんの退院の直後だったからな。

そして退院した夜。

「命、背中流してくれないか？片腕だとまだ難しくてな」

「いいよ」

一緒に風呂か…

母さんの身体には大きな傷痕が残った。見るだけで痛々しい。

「……………」

母さんの背中を流す。

「命」

「なに？」

「すまないな、心配かけて」

「母さんは悪くない。悪いのは俺だ…」

あいつは俺を狙ってきたんだ。

俺がどうにかできてれば母さんが傷つく事はなかった。

「子を守るのは親の勤めだ…命は悪くない。」

そう言われても…

「それよりもあの少年はなぜ命を狙ったんだ？知り合いじゃないの
だろ？」

「なのはちゃんといるのが気に入らなかつたらしいよ」

「…すると…あの少年はお前がなのはと仲良くしてるから襲った
のか？」

頷く。

「……馬鹿な……」

本当に馬鹿みたいだ。

ハーレムの邪魔だからって理由で人を殺す。
主人公になりたいから殺す。

狂ってるとしか言えない。

そしてそんな馬鹿げた物のために母さんが傷つき、さらになのはぢやんまでその毒牙にかけようとしている。
許せる訳がない。

「母さん、俺も母さんみたいな鎧が欲しい」

「……………」

「母さんを守る力が欲しい。しかもあいつはなのはちゃんも狙ってる」

なんとしても阻止しなきゃいけない。

「皆を守りたい。…………だから教えて。母さんの鎧の事、俺の力…………鎖や目の事を！」

「……………ここでは逆上せる。寝る前に話そう…………私達の正体を……………」

そして俺は母さんから全てを聞いた。

リゼンブラとエクスター…………過去の戦い。俺の生まれたいきさつ。

前世に本で読んだ通りだ。

だが俺の誕生にはかなり驚いた。

父……いや、もう一人の母……周防比夜の遺伝子から作成された精子により産まれたのだ。

「たしかにお前の半分は作り物と言っても間違いではない。だが私が腹を痛めて産んだ私の子供である事には変わりはない。比夜様も望んだ私達二人の子供なのだ……信じてくれ。命は私の大切な息子なんだ」

母さんが俺の手を握り俯く。

わかってるよ。

ただ両親が女同士だったただけだ。

「顔上げて。母さんに対する気持ちは変わらない。俺は母さんの息子だ！」

母さんに抱き着く。

右腕だけで俺を抱きしめる。

「ありがとう……」

俺は前世では身体が悪く、母さんに迷惑ばかりかけてた。しかも先に死ぬとゆう最悪の親不孝をしたのだ。

今度こそ息子として、母さんを幸せにする。

改造人間がなんだ！

俺はまともな人生を送り、大人になって仕事に就き、誰かと結婚して……いずれは俺も親になり母さんに孫を抱かせてやるんだ！

主人公の近く？上等だ！

どんな事が起きても負けない！物語が終われば、後は平和なんだ。
なのはちゃんを守って生き残る！

ハーレム狙い？全員たたきのめす！

「命、私の特訓は厳しいぞ」

「堪えてみせる。エクステンドを纏えるようになって、皆を守る」

「頼もしいな…さあ寝よう。明日扱くぞ」

それから俺は徹底的に鍛えられた。

さらになのはちゃんと同じ私立の学校に入学するための勉強をしな
がらだ。

母さんは断ってたけど士郎さん達に推され、結局俺も受験する事にな
った。

一応前世は高校生だったからそれ程苦にはならなかった。

むしろなのはちゃんに教えながら勉強してる。

そして約一年後：俺となのはちゃんは見事合格し、私立聖祥大学付属小学校に入学する事になった。

第七話 毒の決意（後書き）

命のエクステンションももう少しです

第八話 双子の姉（前書き）

アンケートありがとうございました

第八話 双子の姉

えっと…うちが転生してから四年経ちました。

どうやらこの世界は【魔法少女リリカルなのは】の世界で、うちのいるところは地球の日本やっつてのがわかったんやけど…

口調が違う？

実はな…八神家に生まれてもうたんや。

憑依やあらへんで、はやての双子の姉や。

八神つばさ。それがうちの名前。

原作介入なんかしとう無いのに…最悪や。

絶対介入する嵌めになるし、命も狙われやすい。

泣いても仕方あらへんし、はやてはうちの妹や。

ハーレム狙いの最低野郎から守らなあかんし。

そんな訳で戦う決意をした。

次にうちの身の回りの事や。

うちらはどうやら一卵性双生児らしく、顔ははやてと瓜二つ。ただ、×印の髪留めは右に付けとるし、髪も少し長くて小さなポニーテールにしている。

せやからご近所さんにも見分けがつくようになってるんや。

はやてはやっぱり生れつき身体が悪かった。

うちは影響無かったけど、一步間違えればうちが主になっていたんやなあ…

お父さんは警察官…しかも刑事さんや。

ちよっと歳はとっとるけど、なかなかイケメンのお父さんや。

お母さんはうちらを産んだ時に亡くなってもうたらしい。

凄く残念や。

家庭環境はこんなもんかな。

次に能力や。

うちの手元には金の蟹の紋章のついた黒いケースみたいなのがある。どうやらシザースの能力らしい。

ただ、変更点がいくつがある。

まずモンスターとの契約。

本来は強制的に従わせてる物なんやけど、ここではモンスターの意思による契約なため、デッキやカードの紛失により狙われる事な無い。

それにモンスターとの会話も可能や。

ただ、これはモンスターに見捨てられれば終了なため、モンスターとの信頼関係が重要やな。

次にライダーがミラーワールドに出入り不可能になってること。

これは大幅な弱体化やな。人間はミラーワールドでは生存不可能だし、いざという時の避難場所になる。ただ、存在はしているで。

最後にデッキの構成。

設定上はアドベント、ストライクベント×2、ガードベント、ファイナルベントの五枚。

しかしこのデッキにはストライクベントが一枚になり、ガードベントが二枚に増え、ナステイベントが二枚、正体不明の黒いカードが一枚追加されてる。

ナステイベントはナイトが持つ超音波で相手を妨害するカードだ。

うちの場合は絵がボルキャンサーが泡を吐く絵なので、泡による妨害やろうな。

完全な防御特化デッキやな。

変更点はこんなもんかな。

「ツバサ、オヤツ！オヤツ！」

ガラスコップに橙色の蟹が映る。

……契約モンスターのボルキャンサーや。うちはボルボルって呼んでる。

「あんた昨日お父さんのおつまみの刺身つまみ食いたやろ。あれ、うちのせいになって怒られたんや。罰としておやつ抜きや」

「ソンナー」

食いしん坊なんやから。

そうそう、モンスターの餌は普通の食べ物でも大丈夫らしい。

強化するには生きてる生物：特に魔力を持つ生物や転生者のような力のあるのが最適らしい。

流石に人を襲わせる気は無いため、その辺はおいおい考えよ。

さて、今日ははやての検診でお父さん達は居ない。だから能力確認のために出掛ける事にした。

「行くでボルボル」

デッキを持って家を出る。

さて、うちが生き残るためにはどうすれば良いか？原作のシザーズを思い出してみる。

最弱と言われながも意外と活躍している。

まず防御力は13ライダーの中ではトップクラスやし、TV版ではナイトのファイナルベントを打ち破りあと一歩のところで追い詰め、さらにはTVSP版では王蛇の逮捕を成し遂げてる。

これは凄い。生け捕りは殺すよりも難しいからや。

何故こんな事ができたか？

まずボルキョウサーの強化。

かなりの人を襲わせとっちらしいからな。

でもこれは却下。

襲いかかってきた転生者ならまだしも、罪の無い人を殺したくないし。

そして生身の強化。

龍騎のライダー達はぶっちゃけ一般人が程や。

ジャーナリストにフリーターに病人弁護士に占い師。せやけどシザースに変身する須藤は刑事…つまり生身での戦闘力は相当高いはず。TVSP版では本来善良な刑事って設定やったから人を襲わせてないはず。須藤自身がハイスペックやから勝つ事ができたんやな。

つまり人を襲わないうちが強くなるには、うち自身が強くならなあかん。

幸いお父さんは警察官やから護身術を教えてもらう事は可能やし、物心ついた時から空手の道場に通つとる。

シザースの武器はシザースバイザーにストライクベントと手甲型の武器や。徒手空拳を鍛えて損は無い。

そして最も重要なリンカーコアの有無。

地球生まれとはいえはやての双子の姉、しかもボルボルが言うには、うちには自分が与えた以外の力…はやてと似た力があるらしい。なんでわかるのかは知らへんけど、どうやらリンカーコアは有るらしい。

まあユーノの念話が聞こえるかで決まるんやけどな。

そうこうしている間に人気の無い林に着いた。

さっ、試してみよか。

右手に手鏡を持ちデッキをかざす。すると鏡からVバツクルが出現し、うちの腰に装着された。

緊張するな……よし！

鏡を置き、右手を指の閉じたチョキみたいな形にする。そして左肩から振り回すように前に突き出し……

「変身！」

デッキをバツクルに差し込む。

いくつもの影が重なり、仮面ライダーシザースに変身する。

「おお！ほんまに仮面ライダーや！」

感動的や！

ほんじゃカードを試してみよ。

ガードベントとナスティベントは敵がおらんと効果がわからへんから無しや。

「ほんじゃまず……」

デッキからカードを引く。

使うカードが自動的に上にくるのは楽やわ。

『STRIKE VENT』

「うわ！」

何処からともなくシザースピンチが飛んできた。

「おお〜。」

大きさの割には軽い。

試しに近くの木を握ってみる。

「せい！」

メキィ

握り潰せました。

もうちょいうちやボルボルが強ければもっと楽に潰せたかもしれないな。

次のアドベントは……ボルボルを呼ぶだけやから良いか。

「解セヌ」

「まあまあ。ほな、次はでかいの行くで！シザースアタックや！」

『FINAL VENT』

うちの後ろに鏡が現れ、そこからボルボルが出てきた。

「ハッ！」

ボルボルがバレーのようにうちを打ち上げる。
そのまま高速回転しながら崖に体当たりする。

ドゴォー！

着地。転びそうになったのは内緒や。

「うわ……」

見るとうちの身長の数倍以上の大きさのクレーターができてた。

「流石文字通り切り札やな」

そんじゃ最後にこの黒いカードを試してみよ。

カードをバイザーに入れる。

『……………』

「何も起きへん……………なんなんやこのカード？」

「俺モ知ラナイ」

わけわからん。

「まあええわ。帰ろ」

能力も大体わかったし、お父さんとはやてもそろそろ帰ってくる。

そんな感じで、自分を鍛えながら家族で過ごす日々を楽しんでいた。

うちは忘れてた。はやての身の上を…そしてそれはうちにも当ては

まる事を。

うちが私立聖祥大学付属小学校への入学が決まりもうすぐで入学式になるある日。

お父さんが死んだ。

正確には麻薬の捜査中、暴力団との銃撃戦になり殉職したらしい。

仕事が忙しいのにちよくちよく遊んでくれ、はやてのために家をリフォームしてくれるような優しい人やった。

最悪や。

【八神はやては両親がいない】

この事をすっかり忘れとった。

つまりうちも両親を失うって事や。

お父さん…

「お姉ちゃん…」

「大丈夫、お姉ちゃんがおるからな」

せや、うちはお姉ちゃんなんや。いつまでも泣いてはいらねへん。

姉として妹を守らなあかん。

うちは負けられないんや。

第八話 双子の姉（後書き）

蟹は好きですが、蟹味噌はあまり好きではありません

第九話 小学校と百足と蠍(前書き)

ちんちんくんとす

第九話 小学校と百足と蠍

（命SIDE）

特訓も順調でスパイラルコインも覚え戦闘力は大分上がった。
母さんは先輩に教えてもらったらしいけど……先輩って古森羽月だよね…

ついでに未だにエクステンドができない。

母さんは自分もその歳では纏えなかったから焦るなと言ってた。でもいつまた転生者に襲撃されるかわからないし、原作もいつ始まるかわからない。早く纏えるようになればそれだけ生存率が上がるし。

そして入学式の日。

私立聖祥大学付属小学校。

小学校から大学までエスカレーター式の私立小学校。

正直俺がこんな学校に通って良いのか入学式の今でも思う。

高町家の皆さんにはお世話になりっぱなしだ。

いつか必ず恩返ししよう。

「うっ…命君とは違うクラスだ…」

さて、クラス分けでなのはちゃんと別のクラスになってしまった。

「クラス変えが有るだろうから。次は同じクラスだと良いね」

「うん。今年は少し我慢かな」

そんな感じで入学式は順調に終わった。

そして各クラスで先生の挨拶や生徒の自己紹介が有ったんだが……

なんだか淒く気になる子がいます。

「八神つばさいいます。よろしくお願いします」

俺は別に方言萌えとかそんな趣味は無い。

彼女だけ何かおかしい。

何故か妙な親近感がある。

何故だ？もしかして転生者？

だけど確信は無いし下手したらルール違反になってしまう。

結論。

今は無視しよう。

＼SIDE OUT＼

くつばさSIDEく

うちには今気になる子がいます。

千路命。

彼は非常に目立つ。

男の子でありながら腰まで伸びた黒髪を一本の三つ編みにし、細い銀縁眼鏡と女性的な顔立ちのせいで、スカートだったらまるで文学少女や。

そして何より身長。

これがやたらとでかい。新入生入場の時も頭一つ飛び抜けとったし。

うーん…何故か親近感が…

たしかうちの前に転生された人に似た名前の能力があったような…まあ転生者と決まった訳やないし。それに転生者ならうちに何かしらの行動をとる可能性が高い。

もしかしたら転生者じゃないのかもしれへんし、今は傍観しとこ。

〔SIDE OUT〕

くなのはSIDEく

命君に勉強を教えてもらい、私高町なのはも無事私立聖祥大学付属小学校に入学できたのですが、命君とは別のクラスになってしまいました。

あゝあ、残念…せつかく同じ学校に行けたのに。
でもクラス変えはあるからまだチャンスはあります。

来年こそは一緒になれますように…

「ねえ」

誰だろう？

振り向くと黒髪の男の子がいました。

「俺、猿渡健二ってんだ。君は？」

「高町なのはだよ。よろしくね猿渡君」

「健二で良いよ。なのはって呼んで良い？」

「えっと…良いけど…」

ニヤニヤしてるし、なんだか変な感じ。
仲良くしてくれるのは嬉しいけど…
あまり好きになれなさそうかな。

「一緒に帰らない？家どっち？」

あんまり気が進まないけど、断るのも失礼だし…
あ、命君もいるんだった。

「あの、幼なじみの子も一緒だけど良いかな？」

「幼なじみ？……まじかよ、邪魔がいたなんて…早く消さなきゃ
な（ボソボソ）」

どうしたんだろ。急に怖い顔をして…

「あの…どうしたの？」

「あ…いや、大丈夫だ。紹介してよ」

「じつちだよ」

本当、変な子…

教室を出て下駄箱に行くと、すでに命君はいました。

本当大きいなあ。一緒にいると兄妹に見られたりするし…
命君とは兄妹じゃなくて……って私、何考えてるんだろ／＼

「命君！待った？」

「今来たところだよ」

本当は待たせちゃったんだろ…ごめんね。

「隣の子は？」

「クラスメートの猿渡健二君だよ」

「そっか。はじめまして、俺は千路命だ」

「…おい、話しがある。ちょっと来い。なのは、少し待ってて」

そう言うと猿渡君は命君の腕を引っ張って行きました。

「え？なんだよいきなり？…まさかお前……なのはちゃん、すぐ戻るから待ってて！」

「…行っちゃった…」

「どうしたんだろ？」

〔SIDE OUT〕

〔命SIDE〕

猿渡に連れられて屋上に来た。

周りに人は……いないな。

「お前、転生者か」

「そんな事もわからない馬鹿が幼なじみなんて……ふざけんなよ」

「悪いが俺は原作知識が無くてね。なのはが主人公って事以外何も知らないんだ」

もしかしたら侑斗と同類かもしれないな。神の視点を発動させとくか。

プロサイデンス・ビュー
神の視点発動。

ついでに解析つと……生態組織が弾力性に富んでいる？しかも絶縁体だと？

なるほどルフィの能力、ゴムゴムの実か。

……って俺鎖しか攻撃手段無いじゃん！噛み付いて毒を流すのもあるけど、俺の歯が通るかどうかもわからないし……
なんて相性の悪いやつなんだよ……最悪だ。

「まあ良い、なのはを待たせてるんだ。すぐに殺す」

冗談じゃない。

とにかく説得してみるか。

「待てよ。俺は原作なんか知らないし興味も無い。お前がオリ主になるうと関係無いんだ。わざわざ争う必要無いだろ？」

「うるせえ、なのはの幼なじみって時点で俺のハーレムの邪魔なんだよ。俺の為に消えろ！」

腕を伸ばし殴ってきた。

「危なっ！」

避ける。髪を掠ったな。

しかしこいつもか……話しは通じない……やるしかないのか？
なのはちゃんをハーレムなんてゆう馬鹿なものに巻き込む訳にはいかない。

「どいつもこいつもハーレムって……いい加減にしろ！」

生きるか死ぬかなんだ。

殺し合いなんてしたくないが迷ってられない。

こいつを止める！

「ゴムゴムの銃！」

猿渡の拳が飛んできた。

鎖を何十にも重ねクッションにし受け流す。

「何っ？」

「シャア！」

腕が伸びきった所で鎖を解し鞭のように振るう。

「効かねえよ！」

当たるが効果は無い。

やはり打撃系は効かないか。

「鞭つてのはこうやるんだよ！」

回し蹴りを繰り返す。

足が伸びてる分回避は難しい。

「っ！」

薄紫色の魔法陣、防御用のオルタを展開。

直撃は避けたが、衝撃で出入口に叩きつけられる。

「いったあ……」

畜生、なんつう力だ。

すると猿渡は足を真上に伸ばしかかと落としをしてきた。

「ゴムゴムの戦斧！」

やばい！

すぐにその場から離れる。

その直後、俺のいた場所が見事に粉碎された。

「学校壊すなよ！」

「ならおとなしく殺される！」

無茶言つな！

次々と繰り出される拳を避けなが接近。

「乱れ鉄鎖・濁流！」

懐に潜りこみ大量の鎖を射出し、鉄鎖の奔流を一気に叩きつける。

だが鉄鎖は猿渡の身体に埋まり、反発によって弾かれる。

四方八方に鎖が跳ね飛ばされ、さらに鎖の重みで身体が引っ張られ体勢を崩す。

「もらった！ゴムゴムの銃乱打！」

無数の拳が迫る。

とっさにオルタで防ぐが、次第に押されオルタが破壊される。

まずい！

後ろに跳躍、衝撃を逃がし殴られるダメージを軽減する。

「ぐあ！？」

床を転がり、柵にぶつかる。

「主人公能力を持つ俺がオリ主だ。モブとして生きるやつは見逃してやろうかと思っただが、お前はなのはの幼なじみだ。運が悪かったと思うんだな」

たしかに主人公の幼なじみなんて運が悪いとしか言いようがないかもしれない。

だけど俺は後悔していない。

俺は戦うと決めたんだ。なのはちゃんを守るって決めたんだ。

ふらつきながらも立ち上がる。

「なのはを傷付けさせはしない……」

「ハア？俺が皆幸せにしてやるんだよ。俺に可愛がられるのが最高の至福なんだよ！」

こいつ……

「まずはなのはにフラグを立てて次にアリサとすずか、原作が始まればフェイト、その後ははやてだ。そして機動六課の全員を攻略する。お前なんかに邪魔されてたまるか！」

最低だ。

許せない。絶対に！

身体中に力がわく。

今ならできる気がする。

俺の本当の力を使えるかもしれない。いや…使える！

「エクステンド
変身！」

俺の身体が薄紫の光に包まれ青紫色のエクステンド武装化外骨格をまとう。

「な…なんだよそれ…」

「これが…俺の…」

後頭部から蠍の尾が伸び、側頭部からは頭髪が露出している。頭部はもう一人の母…いや、父である周防比夜の外骨格に似ている。ただ、額にある長い触角や口元にある顎は百足のようだ。

西洋甲冑と百足を足したような母さんの外骨格とは違い、俺のは大量の足が集まり板のような装甲を肩と腰に形成した日本の甲冑のよ
うなデザインだ。

さらに脇から腰にかけても無数の足があり、これが頭部の触角も相

俟って、なおさら百足らしい姿になってる。

そしてつま先には二本の刀が収納されており、展開すると鋏のようになる。

腕には母さんのような剣が装備されてるが、分離させ蛇腹剣にする
と刃一つ一つが鋸状になっていた。

毒液も滲み出ており、より凶悪な武器になってる。

日本甲冑のようで、百足が絡み付いた蠍が逆立ちしてるような風貌。
本当に奇妙な姿だ。

「勝負はこれからだ！」

第九話 小学校と百足と蠍（後書き）

命のエクステンドの描写ですが、わかりずらかったらごめんなさい

第十話 死に到る毒（前書き）

ついに命の本領発揮です

第十話 死に到る毒

（命SIDE）

俺の姿が変わり猿渡は目を点にしている。

「はん！はったりはよせ。変身したからって勝てると思ってんのか？」

思ってるぞ。

今の俺の攻撃手段はゴムゴムの実の天敵である刃物による切断だ。両腕の蛇腹剣に足の鋏、さらに尾の毒針も通用する。

「切り刻まれたくなければ降参してくれ。できれば人を殺したくない」

「マイナー能力のくせに馬鹿にしゃがって！殺したくなければ殺される！」

拳が飛んでくる。跳躍し回避。

身体能力も上昇している。

「シャラア！」

蛇腹剣を伸ばし振るう。

「うわっ?」

避けられ、床に傷がつくる。

「だあ!」

さらに連続で振るいまるで生き物のように襲い掛かる。

「ぐわ!」

直撃は避けてるようだが刃が掠り小さな傷が増えていく。

すばしっこいな。

剣を連結させ接近する。

「痛えじゃねえか!」

殴るが遅い。

母さんの鉄鎖に比べたら止まってるようだ。

足に鉄を展開し蹴る。

「シャッ!」

「危ね!」

バックステップのせいで傷は浅い。
胸に傷がつく。

「新品の制服をボロボロにしゃがって！どうしてくれるんだ！」

先程からの攻撃で全身傷だらけ。当然制服もだ。

「俺には勝てない。いい加減諦めろ」

「ざけんな！自分がオリ主になりやすいからって調子に乗りやがって！」

そんなのに興味は無いんだがな…

「オリ主なんて勝手になれば良いだろ。俺を巻き込むな」

「黙れ！」

再び殴ってくる。

だから遅いんだって。

避けながら距離を開ける。

手加減して毒を使っていなかったけど、仕方ない。使うか。

体内で毒を生成、剣と鋏、そして尾の先端の針に付属する。

周防比夜の遺伝子のおかげで、俺は毒の性質を自在に変化させる事ができる。

勿論まだ完璧では無いため、【相手の視力を無くす毒】のような器用な毒は作れない。

だが毒に関する資料は図書館で読んだため、元々持つ母さんと同じ麻痺毒以外も何種類かは生成できる。

どの毒を使うか……よし、今回はこれだ。
これで脅せば良い。

尾の先端から四本の竹串のような針を射出、俺の周りに浮かぶ。

「行け！」

空間を反射するように針が飛んでいく。
当然誘導性もある。

さらに鉄をしまい、針と一緒に接近する。

「この野郎！」

針を叩き落とそうとするが不規則な動きを見切れず空振りする。

ドス

針が肩、腕、足に刺さる。
急所は外した。

怯んだスキに蹴り飛ばす。

「うお!？」

吹き飛び床を転がる。

勝負あったな。

「ぐあ！？いてえ！てめえ……殺す！絶対殺す！」

針を引き抜き立ち上がる。

まだやるのか？

すると猿渡の足が激しく動き、身体から蒸気が噴き出す。

まさか……

「おい馬鹿止めろ！」

「ハハハ！今さら命乞いか？無駄だ！ギア……セカ………っ！？」

猿渡が倒れる。

「な……なんだこれ？……身体中が痛い……お……俺の身体があ」

身体中に紫斑ができる。

ギアはゴムの身体を利用し血流を加速、身体能力を上昇させる技だ。だがその血流により体内の毒が一気に全身に廻ったのだ。

「出血毒だ。全身の血管が破壊され生態組織もいずれ破壊される。血液も固まらないから出血も止まらない。死ぬぞ」

少し嘘だ。死ぬ程強くない。

せいぜい毛細血管が壊れ酷い貧血になる位だ。

出血毒は蛇の毒だが、俺には周防比夜の能力のおかげで生成できる。

「毒？……じゃあギアで全身に毒が？」

「そういう事だ。人を殺す気だったんだ。殺される覚悟はあっただろ？」

「嫌だ……死にたくない………助けて………」

………

猿渡の側によりしゃがむ。

「力の差はわかったろ？それに俺はお前が原作に関わるのはかまわないんだ。ただハーレムを諦めてくれればそれで良いんだ。確かに俺は原作に巻き込まれる可能性は高いけどあまり興味が無いんだ。なのはを守りたいだけなんだ。そうだ協力しよう、な？」

原作知識のある転生者が味方にいれば、なのはちゃんの危険をあらかじめ予測できるから、彼女を守るのに役立つ。

「わかった……協力する………だから……助けて」

毒が作れるって事は俺の身体にはその抗毒素が有るって事だ。

抗毒素を尾から注射する。

「ハア……ハア……」

呼吸が落ち着く。
効果は有ったようだ。

「立てるか？」

「大丈夫だ…先に行つてくれ。…いや、なのはには用事で一緒に帰れないと伝えてくれ」

「わかった」

エクステンドを解除し出口に向かう。

神の視点で辺りを確認。

人が近づいてくるな。あんだだけ派手にやったんだ。仕方ないな。

神プロサイデンス・ビューの視点に死角は無い。

当然後ろの猿渡も初めから見えてる。

……………どうしてなんだよ？

なんで後ろに両腕を伸ばしてるんだよ。

争う意味なんか無いはずなのに……………

「バズーカ！」

伸ばした腕が飛んでくる。

跳躍し回避。

「エクステンド…」

外骨格をまとい剣を振る。

伸びた剣が左腕を切断した。

「ぎゃあああ!?!」

痛みに転げ回る。

「どうして…なんでこんな事すんだよ…」

「お前が死ねば万事解決だったんだ!畜生!殺す覚悟が無いくせに邪魔すんな!」

ああ……駄目だ…

剣を飛ばし腹に刺す。

「ぐえ!?!」

そのまま引き戻し、体内で刃が連結する。

連結する事で刃の間の肉を切断し、さらに体内を傷付ける。

「がはあ!?!」

剣を引き抜き投げる。

「ま……待ってくれ!今度こそ降参だ!助けてくれ!」

……何を今さら……

「殺す」

目の前に薄紫の円錐が現れる。
その先端は猿渡を指している。

スパイラルコーン。

後ろから通り抜け先端から出る事で、爆発的な加速と力を得る攻撃
特化のオルタ・フィールドだ。

「うわああああ！ゴムゴムのお……！！！」

やけくそに なったのか腕を後ろに伸ばしながら走ってくる。

剣に毒を流す。

先端から毒液が垂れる。

「ライダースラッシュ……」

スパイラルコーンを通過。先端から勢いよく飛び出る。

そのまま高速の連続切りをくりだし背を向ける。

剣からは毒液と血が混じり滴り落ちる。

ドサドサ

肉が落ちる音が聞こえ、腐敗臭が広がる。

殺した……人を……

そうだ、これは正当防衛だ。

あいつは……死んで当然だ……

ごめん。

第二の人生を楽しく生きたかっただけなんだろう。

でも俺は犠牲になるつもりは無い。

ごめんな。

吐き気がするが、胃は空だ。

今夜は眠れなさそうだな……

後ろを振り向くと肉片となった猿渡が消えていく。

これが……

人も集まってきた。

見られる前に帰ろう。

次の日、なのはちゃんから聞いた言葉で存在の消滅が事実だと思
知らされた。

「私のクラスに何故か席が一つ余ってるんだよ。誰もいないはずな
のに席があるなんて不思議だね」

〔SIDE OUT〕

くつばさSIDEく

「お姉ちゃん、ほんまに振込まれとる……」

「凄い金額やな……二人で生活するには有り余る位や」

うちの通帳には多額のお金が振込まれとる。

そうギル・グレアムや。

家を尋ねて来た時はボルボルの餌にしてやろうかと思っただわ。

せやけど今後の生活や遺産管理はうち一人では厳しいし、何よりうちが怒つとるのは闇の書を封印しようとしとるからではなく、はやてに危害を加えようとしとったからや。

もし今の闇の書の主が見ず知らずのむさいオッサンとかやったらここまで怒つとらんやろ。

はやてだから怒つとったんや。

外道やな。

家族に危害が無ければかまわないなんて……

お金は警察の遺族への保証金とグラムのおかげで生活に困る事は無い。

さて……はやての介護に学校、それに転生者もいる。

大変やな。

そんなある日。

「はやての姉妹か……」

赤い髪をした少年がいる。

おそらく転生者やろ。

「それがどないしたんや？やるんなら容赦せんで」

「待て、俺は戦いに来たんじゃない。協力を要請しにきたんだ」

協力？

「あんた何者や？」

「俺は日村竜二。実はなのはの幼なじみにハーレム狙いの最低野郎がいてな。そいつを倒すのを協力してほしい」

なるほど。

「たしかにいずれはやてにも手え出すな。ええで、協力したる。そいつは誰なんや？」

「千路命。能力はわからないがな」

なんやて？

第十話 死に到る毒（後書き）

次回はつばさメインです

第十一話 蟹と鏡と夜天の姉（前書き）

つばさの初戦闘です

第十一話 蟹と鏡と夜天の姉

「なのはSIDE」

「へえ、ここがなのはちゃんの家なんだ」

「今日家の人は？」

「お父さんとお母さんはお仕事で、お兄ちゃんとお姉ちゃんはまだ学校だよ。あ、でも命君のお母さんはいるかも」

今日は最近友達になったアリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃん家が家に遊びに来てくれました。

学校で命君にも紹介したので皆で遊ぼうと思ったんだけど、クラスメートの子と用事があるらしく一緒ではありません。

「おかえりなさいなのは」

「ただいま、美尋さん」

リビングに美尋さんが居ます。

お仕事からしく、なにか電卓で計算していました。

「あ、二人は友達のアリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんです。この人は命君のお母さんの千路美尋さんだよ」

「「はじめまして」」

「ああ、はじめまして。……命はいないのか？」

「命君はクラスメートの子と用事があるみたいですよ」

「そうか。わかった、ありがとう」

「じゃあ私達は部屋に居ます」

そして私の部屋。

「すっごく大きい人だったね」

「あいつが電信柱みたいな理由がよくわかったわ……しかし顔そっくりだったわね」

「髪はお父さん似らしいよ」

命君、早く帰ってこないかな……

～SIDE OUT～

〈命SIDE〉

クラスメートの女の子に呼び出された。

非常に青春じみたシチュだが、呼び出した相手があつた八神つばさだ。正直少し不安だ。

学校の裏に彼女はいた。

「待たせてごめん。で…話して？」

「これに見覚えはないかな？」

八神は鞆からなにかを取り出した。

黒いケースのような物に金色の蟹のような紋章がついてる。

「シザースのデッキ？まさか…！」

「せや。うちも転生者や」

たしか神のやつはシザースの能力を持つ女性が同胞だと言ってたな…

「まさか節足動物の…」

「やっぱり同胞かい。千路って名前からもしかして…って思ったつたんやけど…」

「ならあの親近感の招待は…」

「あんたもかい。多分同胞の証なんやろうな」

やっぱり。

「て事はあいつ…嘘ついとっ たんか？」

嘘？

「どうしたんだ？」

「あんたがハーレム狙いの最低野郎って言っ とったやつがおってな。殺すの協力しろとか言われたわ。神からあんたの事聞いて良かった…」

まじかよ…

「誤解だ。第一俺は原作知識が無い」

「…なるほどな。それでうちに何もせんかったんか」

「…どういう意味だ？」

「…うちは原作キャラの双子の姉として転生したんや。知識があれば名前や話し方、さらに顔でうちが転生者ってわかるはずやし」

双子の姉か。彼女も狙われやすい立場だな。

「俺の事を話したやつ、戦うなら協力するぞ」

「ええよ。この位一人で対処できへんかったら妹を守れへん」

「そうか…頑張れよ………そうだ、あと仮面ライダーゼロノスはハ
ーレム狙いだ。以前襲われた」

「一応教えておこう。」

「そうなんか。じゃあうちからも一つ教えたる。あんた魔力持つと
るで、うちより全然弱いけど」

「魔力？たしかに魔法少女って世界だ。」

「世界独自の能力はランダムって訳だから、魔力の有無もランダムだ。」

「俺は運が良いかもしれない。」

「今度原作について少し教えたるわ。あとうちの事はつばさでええ
で」

「じゃあ俺は命で」

「よろしくな、命」

彼女は笑いながら立ち去った。

（SIDE OUT）

くつばさSIDEく

うちは今海岸にいる。

勿論日村を問い詰めるためや。

「今日会ったで…千路命に」

「な…大丈夫だったか？」

「原作知識無しやったで。しかも同じ神に転生させられた同胞や。あんたの言った事、嘘やないかい」

少しずつ海に近づく。

「あいつが嘘をついてるんだ！」

「先に自分から何の神が言ったのに？」

「く…」

そろそろ茶番もしまいや。

「ハーレム狙いはあんたやろ。いい加減見苦しいで」

「う…うるせえ！せつかくお前もはやてと一緒に可愛がってやろうと思っただのに！」

「姉妹丼考えとつたんかい！このド変態！」

デッキを海面にかざす。

水面も物を映すため、当然変身に利用できる。

Vバックルが装備される。

「仮面ライダーだと！？」

「変身！」

仮面ライダーシザースに変身する。

「……………ぶっ…まじかよ…雑魚じゃねえか…クハハハハ！」

普通は馬鹿にするやろな。

せやけど油断してくれればこつちのもんや。

「お前はヒロインになる資格は無い！オリ主とは俺みたいな能力を持つ者だ！」

赤い鱗のペンダンを掲げると身体が炎に包まれる。

すると赤い竜のような鎧を着た日村が現れた。

なるほど、リオレウスかいな。

「天翔ける火竜の戦士、日村竜二！」

……………うわぁ…痛い。

「なんか阿保らしいわ…せやけど、放ってもおけんしな」

「これがSSSの力だ！」

太刀を出現させ、さらに刃に炎を帯びさせ突撃してくる。

どうやら太刀の属性による炎を自分の魔力変換素質と思いきんどるらしい。

魔力感じへんのに……つくづく痛いたしいやっちな。

しかも遅い。

太刀を避け、バイザーで殴る。

「のわ？てめ…ヒデブー！」

さらに蹴る。

続けて殴る殴るそして蹴り飛ばす。

こいつ…弱い…

たしかに能力は上等なやつらしいけど、動きがど素人やな。

「懐がから空きやで！」

「て…てめえ！」

ライトボウガンに持ち替え撃ってくる。

あかん、避けれない。

「熱っ！」

装甲が焦げとる。

どうやら火炎弾らしいな。

「飛び道具なんて！」

厄介やな。

走り回り避ける。

あかん、近づけん。

カラカラ

「あれ？」

しめた！弾切れや！

デッキからカードを引き抜きバイザーに入れる。

『NASTY VENT』

ボルボルが現れ泡を吐く。

そして泡が日村の身体を包む。

「泡？こんなも…あら!？」

転んだ。

「なめやがって……って持てない？滑る？」

ボウガンを拾おうとするが掴めない。

なるほど潤滑性の泡で動きを封じるんか。

滑れば立てへんし、武器も持てへん。

「ここまでやな」

「まだまだ！来い、リオレウス！」

空に赤いワイバーンのような竜が現れた。

こいつ召喚能力まであったんかい。

リオレウスがブレスを吐いてきた。

『GUARD VENT』

シエルディフェンスでブレスを防ぐ。

流石やな。無傷や。

「殺せ！絶対にだ！」

両足を突き出しうちを狙う。

毒蹴りかい。

受けて立つで！

『FINAL VENT.』

シザースアタックで応戦する。

しかもただのシザースアタックやない。

魔力で強化されたやつや。

魔力が水に変換され、全身が水に包まれる。

つい最近わかった事やけど、どうやらうちには魔力変換素質・水があるらしい。

しかも特訓のおかげで、変身中はある程度の魔力運用ができるようになった。

魔力で強化されたとはいえ、あの巨体に正面からぶつかり合ってもりはない。

狙いは頭や！

リオレウスの頭と衝突。
何かかひしゃげた音と潰れた感触がする。

ドシャア！

うちは着地し、海岸にリオレウスが墜落する。

頭は無残にも潰れとる。

「な……なんだと……」

日村が死体に近づぐ。

片手剣の熱で泡を焼き脱出したようや。

「終わりや」

『ADVENT』

海面からボルボルが現れハサミで日村を捕まえる。

「離せ！ちくしょう！」

「降参して能力捨てれば命は助けたるで。二度とうちやはやてに近づかんならな」

「ふざけんな！お前ははやてと一緒に俺に）ピー（さねてねば良いんだ、この（ピー）！」

……………こいつはあかん。

「食ってええで」

「イタダキマス」

「え？あ？あ……ぎゃああ……あ……が……」

……海がリオレウスの血と日村の血で赤く染まる。

「ゴチソーサマ！」

どうやら喜んでくれたらしい。

「コレ夜食ニシテイイ？」

レウスの死体か……残しとくのもあれやし……

「好きにせい」

「ヤッター」

死体がミラーワールドに引きずり込まれる。

ほんま、こんな奴ばつかなんか？

あと何人殺せばええんや……

汚れてもつたな……

せやけどうちはお姉ちゃんや。

あんなふざけた輩にはやてを傷つけさせへん。

絶対に。

第十一話 蟹と鏡と夜天の姉（後書き）

もう少しで無印に入ります

第十二話 嵐の前の（前書き）

キンクリします

あと侑斗は最低です

大事な事なので二度言いますが、侑斗は超最低です

第十二話 嵐の前の

（命SIDE）

三年生になった。

あれから二人の転生者に襲われた。

ランサーの能力はまじで危なかったな。

相手が格好つけてべらべら喋ってるスキに首を落としたから瞬殺だったが：

型月系の能力って強力なイメージがあるから、正面からはやりたくないな。

でも能力が良いやっつって大抵油断してるし。

しかも馬鹿で助かった。

そして今年になってようやくなのはちゃんとも同じクラスになれたよ。

ついでにつばさも同じクラスだ。

さて、あれからつばさに原作についていくつか教えてもらった。

とはいえ三年生の四月から始まるという事。フェイト・テストアロツサと使い魔のアルフ。つばさが十二月に敵になる事だけだ。

つばさが言うには自分の事は知らない事にしておいて欲しいらしい。妹の命がかかっているとかが言ってたな。

そう言われると断りづらいな…

まあ彼女も必死だったし、妹の命がかかってるってのも気になる。

……乗ってやるか。

「命君似合ってるわよ。美尋さんに似てるから似合つと思つたのよ」

「うん、可愛いよ」

「……なんだか複雑な気持ちなの…」

「……………」

なぜウエイトレスの格好をさせられてるんだ？

しかも髪もお下げにされてるし…

たしかに俺は母さん似で女顔だ。だがスカートは嫌だ。

母さん、レジのボタンを連打するの止めようよ。壊れちゃうよ。

あと土郎さんと恭也さんは何故助けてくれない…

戦わなければ生き残れない……いや、戦っても生き残れなさそうだ…

〔SIDE OUT〕

くつばさSIDEく

真夜中、隣ではやてが眠ってるのを確認し、リビングに移動する。

そしてデッキから一枚のカードを引く。

カメレオンのような紋章が描かれたカード。仮面ライダーベルデのファイナルベントのカードや。

昨日襲われたんやけど、かなり苦戦した。

最終的にはファイナルベントの打ち合いに勝てたからええけど…。

ベルデのファイナルベント、デスパニツシユは相手を掴み、振り子の動きで上昇してパイルドライバーを決める技や。

そのため打ち合いには弱い。投げ技やからな。

ほんま死ぬかと思っただわ…

さて、どうやら龍騎系ライダーは同じ龍騎系ライダーを殺害する事で相手のカードを入手できるらしい。

せやからホールドベント、クリアーベント、コピーベントも持つと

る。

思いがけないパワーアップや。

三年生になり無印開始も目前。

いよいよやな…

原作組と同じクラスになってもうたけど、関わりたくないなあ…
できれば原作通りに行くとなええけど。やっぱり命にもっと教えとけば良かったかな？

いや、はやてが巻き込まれなければええ。

大丈夫…うちは仮面ライダーや。

戦うんや。

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

まさかはやてに双子の姉がいたとは…まあベルデを倒したとはいえシザースだ。ゼロノスである俺の敵じゃない。それに可愛かったからハーレムに加えとこう。邪魔すれば殺せば良いし。

さて…無印はどうするかな…

はやての家に住みつつなのはの味方として行動。

敵であるフェイトにも優しくしてフラグを立てるって予定だったんだがな…

たしかになのはの所はかなり入れ代わりが激しいだろうし、はやてのそこには姉のやつもいる。はやての家に住むのも諦めてフェイトに付こう。

なのははフェイトに負けた所を慰めてやれば良い。そして転生者は会う度に殺せば問題無い。

うん、これだ！

「侑斗…」

「なんだよまだ理解できねえのか？」

「侑斗が主人公になるためなのはわかる。でもお父さんとお母さんを殺したのはやり過ぎだ」

「しかたないだろ。俺の邪魔にしなければならないんだ。それに俺の幸せの礎になれたんだ。親として幸せだろ？」

「…うん、そうだな。侑斗は主人公なんだ…」

ふん。あの糞親、俺を探しやがって…本当邪魔なんだよ。

まあオリ主は親がないのがだいたいだ。

………そうだ！

親を殺され自分も深い傷を負った少年、桜島侑斗。

彼は偶然仮面ライダーの力を得て見事復讐を成し遂げる。
そして虚しさに途方に暮れてた所一人の少女に出会う。

………

やっべ〜！超かっけ〜！

あいつら殺して正解だったな

これぞオリ主の設定！

「未来は与えられる物じゃない。自分の手で切り開くもんだ！」

………く〜！決まりすぎだろ俺！

しかもリンカーコアもオリ主だから絶対有るはずだし。

最低でもSSは欲しいな…

外見もイケメンだし…銀髪オッドアイじゃないのが残念だけど…仕方ない。

さあ、俺のオリ主物語が始まる！タイトルは…

レジェンド・オブ・ゼロ〜転生者の軌跡〜

フヒヒヒ！さあ待ってるよ皆！俺が可愛がってやるぜ！

〜SIDE OUT〜

「誰か、助けて…」

第十二話 嵐の前の（後書き）

ランサーファンの皆さんすみません

私Fateあまり知らないんでこんな扱いになってしまいました

これから無印が始まるのですが、次回は設定まとめにします

設定とキャラ紹介（前書き）

無印直前のまとめです

設定とキャラ紹介

今回はタイトル通りです。

では命から。

せんじ みこと
千路命

年齢：無印で9歳

身長：クロノより少し高い

体重：普通

身体能力：リゼンブラだしな、目茶苦茶高いぞ

容姿：黒髪青目。銀縁眼鏡に三つ編み。ぶつちやけ千路美尋の髪を黒くしたような感じ です。そのため男の娘である

前世：病弱な高校三年生（病死）

この物語の主人公。

ただしフラグメーカーやニコポは装備していないためハーレムは無しの予定。ただし鈍感な装備。

基本的になのは優先に行動する。

ハーレム狙いは容赦しないが、原作介入には無関心。むしろなのは身代わりになってほしいと思ってる。

原作知識は本来無かったので、つばさに教えられた事以外は無い。

能力：千路美尋と周防比夜の能力

特殊な誕生経緯により能力が大幅に強化されてる。

毒は生身でも歯から注入できる。

エクステンドの武装は両腕の蛇腹剣（普通の剣としても使用可能）、両足の鋏、後頭部の尾の針（誘導性有り）。

全て毒を付属させる事ができ、切るだけでも毒状態にできる。さらに刺す事で大量の毒を注射できる。

肩の装甲を形成している足は分離してアームとして利用できる。

光の力場オルタ・フィールドも攻撃、防御、加速が使える。

スパイラルコーンは反動が大きいため、一日一発だけ。

神の視点プロサイデンス・ビュー

命一番のチート能力。

死角無し、幻術無効、対象解析、建造物内部全域であろうと目視できるほどの視覚を有する。

ネオ・エクステンドはまだできない。

魔法能力

魔力：B+（ただし成長の余地有り）

魔力光：薄紫

魔力変換素質・化学物質を所持。

命「チートだな…」

なのは「鈍感…頑張んなきゃ…」

次はもう一人の転生者、つばさちゃんです。

八神つばさ（やがみ つばさ）

年齢：無印で9歳

身長：はやてより僅かに高い

体重：身長も上やし運動しとるんや！仕方ないやろ！太つとらんで！

身体能力：一応鍛えとるで

容姿：はやての髪留めを逆に着け後ろ髪を小さいポニテにしている
（顔ははやてと同じ）

スタイル：歳相当や

前世：二十歳の女子大生（事故死）

はやての双子の姉として転生した女性。
原作通りにははやてを助けたいと思ってる。
勿論最低系には容赦しない。
原作知識有り。

能力：仮面ライダーシザースへの能力

所有カード

アドベント（ボルキャンサー、バイオグリーザー）、ストライクベント、ガードベント（二枚）、ホールドベント、クリアーベント（二枚）、コピーベント（二枚）、ナステイベント（二枚）、ファイナルベント（シザースアタック、デスパニッシュ）、???（黒いカード）を所持。

ベルデを殺害したため、ベルデのカードを所持している。今後龍騎系ライダーを殺害した場合、さらに増える。

黒いカードはまだ内緒です。

魔法能力

魔力：S -

魔力光：白に近い水色

魔力変換素質・水を所持。また自分の魔力を認識しており、変身中にはある程度魔力を使用できる。

はやて「お姉ちゃん、いつになったらボルボル紹介してくれるん？」
つばさ「えと…もうちよっとな待てて…」

転生者最後はお馴染み侑斗です。

桜島侑斗さくらじま ゆうと

年齢：無印で9歳

身長：普通

体重：普通

身体能力：オリ主だ！（普通）

容姿：電王のデネブ憑依侑斗（メッシュ無し）

前世：厨二（事故死・神に殺された）

とにかく最低野郎。

厨二病も発症してるため救いようがない。

ハーレム狙いな上、邪魔だからと両親を殺害。さらにその状況を自分を格好良くする設定として利用している。
ちなみに命と美尋は死亡してると思ってる。

命の宿敵として登場していますので、結構優遇されます（敵として）。
最期をどうしてやるか考えるだけでワクワクしますね。

能力：仮面ライダーゼロノスの能力

変身制限は無し。勿論記憶の削除もありません。

ゼロフォームにはまだなれない。

ゼロライナーは時間移動不可能。ただし次元空間移動は可能。

魔法能力

魔力：A A +

魔力光：濃い黄緑

自分の魔力に気づいていないため、魔法はまだ使えない。

侑斗「…復讐を成し遂げた俺はこれからどうすれば良いんだ……
…いやまってよ、これよりも…」

命、つばさ」「滅べ」

次は美尋母さんです。

せんじ みひろ
千路美尋

年齢：無印で30歳（21で出産）

身長：183cm

体重：身長と比例してる。普通だ

容姿：銀髪、青目、三つ編み、銀縁眼鏡のクールビューティー系の美人

スタイル：ムチムチであると自負しております

職業：翠屋経理、ウエイトレス、高町家家政婦

命の能力の元である千路美尋その人。

ただし並行世界の千路美尋である（まだEX！が完結していないため）

最近が高町夫妻と命の婿入り計画を企ててる。

シグナムにも負けず劣らずの超ナイスバディ。

隻腕生活にも慣れ、料理もできるようになった。

ちなみに高町家で美尋と命の正体を知るのは士郎、桃子、恭也のみ。

美尋「比夜様：命はすくすと育っております…どうかこれからも見守っていてください」

次はボルボルです。

ボルボル

種族：ミラーモンスター（ボルキャンサー）

身長：224cm

体重：165kg

性別：雄

つばさの契約モンスター。

食いしん坊でちよくちよくつまみ食いをしている。

日村とリオレウスを補食してるため少し強くなってる。
命そのものを食べるためかなり雑食。

ボルボル「こつぺぱんヲ要求スル！」

つばさ「まだ食うんかい！」

最後にデネブです。

デネブ

身長：侑斗より少し高い

体重：侑斗より少し重い

侑斗の能力の一部なので、基本侑斗に従順です。
ただし自我もあるため今後どうなるかは不明です。

戦闘技術は侑斗より上なので、実はベガフォームの方が断然強い。

憑依するとメッシュが追加され、髪が短くなる。（憑依前後の髪型が電王とは逆）

デネブ「侑斗をよろしく！……で良いのかなあ……？」

以上が転生者、イレギュラーキャラです。

命と美尋の容姿はEX！三巻表紙を見るのがオススメです。

次回から無印開始です。

設定とキャラ紹介（後書き）

いよいよです

第十三話 不思議な出会い、始まる戦い（前書き）

無印始まります

後書きで裏話等を書きます

第十三話 不思議な出会い、始まる戦い

「誰か、助けて…」

〈侑斗SIDE〉

フヒヒヒ…やはりオリ主の俺にはリンカーコアが有ったか！

地球生まれのやつは無いのが大半だが…オリ主である俺は違う！

どうせなのは味方になる転生者は魔力無しに決まってる。

雑魚だな。

警戒するのはアースラに付く転生者だ。

ま、オリ主な俺は負けるはずは無い。

さて、フェイトを探して攻略しなきゃな。

アルフは…一応やってみるか。結構スタイル良いし

ククク…

〈SIDE OUT〉

くつばさSIDEく

始まったなあ…命のやつ大丈夫やるか…

まあ大丈夫やる。うちは自分とはやての心配しとこ。

「お姉ちゃんおはよ」「おはようはやて」

隣で寝ていたはやてが起きた。

「ん…なんか変な夢見たわ」

「どんな？」

「ボロボロな男の子が助けを呼ぶ夢や」

ユ一ノか…当然やな。

「うちも見たでその夢」

「ほんま？私ら双子やから、何かテレパシーとか有るんかな？」

「そつやったらええな。さ、起きて朝ごはん作る」

「うん」

無印、無事に終わるとええけど…
命、頑張るんやで。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

……なんだ？

久しぶりに変な夢見たな。

寝起きが悪いな…まあ良いや。

起きて着替え、顔を洗う。

そして道場へ向かった。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「おはよう命君」

俺は毎朝恭也さんと美由希さんとトレーニングをしている。

恭也さんから剣術も教わっているが、完全に御神流に身体を慣らしちゃうと流石に母さんから教わったりゼンブラの戦闘スタイルに影響が出るため、基本的な剣術だけだけど…

そんな感じで毎朝鍛練を欠かさない。

「命君、お兄ちゃん、お姉ちゃんおはよー！朝ごはんだよ！」

なのはちゃんが入ってきた。

「おはようなのはちゃん」

「おはよう」

「ああ、なのは。おはよう」

「はい」

俺と美由希さんにタオルを投げってきた。

「ありがとう」

「ありがとう」

受け取り汗を拭く。

「じゃあ二人とも、今朝はここまで」

「はい、じゃあ続きは学校から帰ってからね」

「うん。朝ごはんにしよう」

道場から出て、制服に着替えて朝食に行く。

母さんや士郎さん、桃子さんもすでにいた。

「ふ〜、今朝も美味しいなあ」

「あ、美尋さん。バター取ってくれませんか？」

「どござ」

「ありがとうございます」

母さんが恭也さんにバターを渡す。

俺はスクランブルエッグをパンに乗せて食べるかな。

うん…美味しい。

本当桃子さんは料理が上手いなあ。

ああ…料理の上手い嫁さん欲しいなあ…

「美由希、リボンが曲がってる」

「え？本当？」

「ほら、貸してみる」

…この二人仲良いなあ…やっぱり恭也さんってシスコンなのかな？

そしていつものようになのはちゃんとバスに乗り学校に行く。

「おはようございます」

「おはようございます」

「なのはちゃん、命君！」

「二人とも、こっちこっち！」

すずかとアリサが奥の席にいた。

「すずかちゃん、アリサちゃん」

「二人ともおはよう」

「なのはちゃん、命君、おはよう」

「おはよう」

二人ともなのはの紹介でできた友人だ。

なんかクラスの男子の視線が痛い時がある。
俺が何をした？

昼休み。

今日の授業で将来の仕事について話しが出たせいか、その事について皆で話してる。

「将来かあ…」

なのはちゃんがウイナーをくわえる。

「アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まってるんだよね？」

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強した後を継がなきゃ…ってくらいだけど」

「私は…機械系が好きだから、工学系の専門職につけたらいいなあ。
って」

「そっか…二人とも凄いな…」

小学生の会話か？
あまりにも具体的すぎだろ。

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん…それも将来のビジョンの一つではあるんだけど…」

「土郎さんも桃子さんも無理に継げとは言わないだろうしな。それにまだ俺達は小学生だぞ。今は大体で良いんだよ」

「そういうあんたは？」

俺か…

「まともな仕事ならって感じかな。正直ちゃんと生活できて、家族を養えれば良いかな？位だな」

前世では将来について大して考えてなかったしな。
せつかく丈夫で健康な身体なんだ。ゆっくり考えれば良い。

「二人で翠屋継いじゃえば良いのに」

「ええ!？」

「何故そうなる」

なのはちゃんだって困ってるだろ。

「あつ…」

「はあ…相変わらずね」

「なのはちゃん、頑張ってるね」

いや…溜め息つかれても…

放課後。俺達は四人で一緒に下校してる。

「今日のすずかと命、ドッジボール凄かったね」

「うん、格好良かったよ」

「すずかも凄いよな。結構運動には自信あったのに」

まさか人外のリゼンブラと対等なんて…どこの世界にも超人じみた人っているもんだなあ。

「そんな事ないよ」

充分凄いですよすずかさん。

そして通りすぎた犬が吠えてきた。

「Be quiet!」

アリサが叫ぶ。

はしたないだろ。

そんなこんなで公園の林道に着く。

「ああ、こつちこつち。ここを通ると塾に近道なんだ」

「そうなの?」

「ちよつと道悪いけどね」

……なんか変質者が出そうだな。

まあ、普通の人間なら対処できるから大丈夫か。

アリサについて行く。

なんだ?デジャヴ?

この辺り、見た事あるような無いような…

なのはちゃんが急に立ち止まる。

「どうしたの?」

「なのは?」

「なにかあったか?」

「あ、ううん。なんでもない。「ごめんごめん」

どうしたんだ？まあ、彼女の気のせいかな。

「大丈夫？」

「うん」

「じゃあ行こうぜ」

また歩き出す。

「助けて…」

！？

なんだ？声？

俺となのはちゃんが同時に歩くのを止める。

「どうしたの二人とも？」

「何？いきなり立ち止まったりして」

二人が声をかける。

「なんか聞こえなかった？こっ、声みたいなの…」

なのはちゃんにも聞こえてた？

「ああ、何だろ」

「え？聞こえないわよ」

「私も」

どこだ？人が怪我でもしてるのか？
仕方ない…

「プロロウ・ディンクス・ビュー」
神の視点発動。

人は…いないな。ん？なんだこれ？イタチ？

「助けて…」

「っ！こっち！」

なのはちゃんがイタチ（？）に向かって走り出す。

こいつが呼んだのか？

まさか転生者？いや、だったら何故アリサとすずかには聞こえないんだ？

転生者のハーレム予定に二人もいるはずだ。

…まさか…原作キャラ？

有り得る。魔法少女のマスコットキャラ…こいつがそうか！

なのはちゃんを追いかけると、赤い宝石のような物を首から下げた小さな動物がいた。

「動物？怪我してるみたい」

「うん。ど、どうしよう？」

「どうしようって…とりあえず病院！」

「獣医だろ。この辺にあったか？」

「待って、家に電話してみる」

さすが携帯電話を取り出す。

…一応解析してみるか。

………

生態構造を変化させてる？なんだ、このエネルギーは？

まさかこれが魔法？

…どつやら原作が始まったようだな。

そしてあれはフェレットらしく、獣医にひとまず預ける事になった。
塾も終わり家に帰ったのだが…

夕食の時間。なのはちゃんがああフェレットについて話し出した。

「とゆう訳で…そのフェレットさんをしばらくうちで預かる訳には
いかないかなって…」

「ふーむ…フェレットか…」

士郎さんが腕を組み考える。

「所でなんだ？フェレットって？」

桃子さんと母さん以外がずっこける。

「イタチの仲間だよ父さん」

「フェレット…イタチ科に属する肉食性の哺乳小動物です。古くか
らヨーロッパで飼育され、主に狩猟、実験、毛皮採取、愛玩用に用
いられています。首に物をぶら下げていたのなら、誰かが飼育して
いたものが脱走したのか、迷子になったのでしょうか」

「飼い主が見つかるまでなら良いんじゃないかしら」

「良いの!？」

「ちゃんとお世話するならね」

「うん！ありがとうございます！」

うん、こうなるか…

できれば飼いたくないんだが、こりゃ近い内に一波乱あるな。

…しかたない。なんとかしてなのはちゃんを守りながら終わらせよう。

「聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？」

っ！？

もう？ちくしょう。

「聞いてください。僕の声が聞こえるあなた…お願いします。僕に少しだけ、力を貸してください。お願い…僕の所へ！」

なのはちゃんも聞こえてるはずだ。

着替えて廊下に出る。

するとなのはちゃんと遭遇した。

「なのはちゃん…！」

「命君も聞こえたの？」

「なんか気になって」

「行ってみよう!」

「うん」

夜の町を駆ける。

動物病院へと着いた。

「あれは!」

「いた!」

あのフェレットだ。

すると黒い影がフェレット目掛け突っ込んだ。

なんだあれ?

なのはちゃんがフェレットを受け取る。

「何何? 一体何?」

「夢なら覚めてほしいな!」

「来て…くれたの？」

「しゃべった!？」

「おいおい…」

しゃべる動物って…本当に魔法少女だな…

黒い影がこちらを睨む。

「ひとまず逃げるぞ!なのはちゃん、そいつをしっかり掴んどいて
!」

「え?ひゃあ!？」

なのはちゃんを抱き抱え、鎖を電柱に巻き昇る。
そして電柱から電柱へと跳びながら逃げる。

今はこいつから事情を聞くのが先だな。

第十三話 不思議な出会い、始まる戦い（後書き）

敵転生者について書きます

さるわたり けんじ
猿渡健二

能力：ルフィの能力

エクステンドの最初の敵は、始めは打撃（鎖）が効かない、刃物が通用するって敵でルフィが当て嵌まるなと思い、さらにギアが血流を加速させるものなので、毒もよく効くな…って訳こいつに決定しました

助けてやるってのに背中から攻撃しようとするのも始めから決まっております、最初の死者になりました

第十四話 魔法少女とリゼンブラ（前書き）

今更ですが

「」が台詞

「」が念話

『』がデバイス、通信等です

第十四話 魔法少女とリゼンブラ

〈命SIDE〉

だいぶ離れたな…

うん、ひとまず安心だな。

「み…命君、凄いね…」

「鍛えてるからな」

流石に人外とは言えないな。

「君達には資質がある。お願いします…僕に力を貸してください」

「資質？」

「訳わからん…」

「僕はある探し物のために、ここではない世界から来ました。…でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない…だから…迷惑だとわかっているのですが、資質を持った人に協力してもらいたくて。」

その資質…魔力を持つ人がなのはちゃんだって訳か。
って俺もあるんだって…

「御礼はします。必ずします！僕の持つてる力をあなたに使って欲しいんです！僕の力を…魔法の力を！」

「まほう？」

「ファンタジーにも程があるな…」

こうして魔法少女になったって訳か…

っ！？

あいつ、こっちに来るか！

「なのはちゃん、危ない！」

鎖でなのはちゃんとフェレットを引き寄せる。

ドゴォン！

さっきの黒い影が落ちてきた。

「御礼は、必ずしますから！」

「「御礼とかそんな場合じゃないでしょ！」」

黒い影の紅い瞳がこちらを睨む。

……どうする？エクステンドすればどうにかできるかもしれない。でもそれじゃなのはちゃんに俺と母さんの正体がばれてしまう。

なのはちゃんはまだ子供だ。流石に俺達の正体を聞けば怖がるだろ

う…

もっと早い内に話しときゃよかった！ずっと騙してた事になるし…

グオオオオオ！！

くっそう！今はなのはちゃんの無事が先決だ！

もし魔法しか通用しないとしても時間稼ぎにはなるはずだ。

「おい、俺が時間を稼ぐ！その間になのはちゃんに魔法とやらの使い方を教えるんだ！」

「命君！？危ないよ！」

「時間稼ぎつて…無茶だ！いくら君の身体能力が高くても…」

「悪いな。俺、人間じゃないんだ…エクステンド変身！」

青紫の百足と蠍を模した鎧武者の姿になる。

「命…君…？」

「バリアジャケット？違う、変身魔法でもない。魔力を一切感じないなんて…」

「頼むぜ小動物」

剣の連結を解除し、両足の鉄を展開する。

「シヤアアアアア！」

跳躍し尾から針を発射し、蛇腹剣を振るう。

針が次々と刺さり、いくつもの刃が影から生えた触手を切り落とす。

脆い。

多分こいつはなのはちゃんの初戦の相手なんだろう。

きつと弱いはずだ。

だが、切断された触手が伸び触手の破片を拾い影に繋がる。

…再生能力？

ちよ！まてよ！

なんだよこいつの身体は！

神の視点で視てみる。

げ、殆どエネルギーの塊じゃないか！

どつりで簡単に再生する訳だ。

そうだ、なのはちゃん達は？

振り回す触手を避けながら後ろのなのはちゃん達にも視野を広げる。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

何か呪文みたいなのを呟いてるな。

てかなのはちゃんが持つてるの、フェレットにぶら下がってたやつ

じゃないか。

グオオオオオオ！

やかましい！

上空へ高く跳びスパイラルコーンを展開、両足に刃が外になるよう蛇腹剣をドリルのように巻き、回転しながら突っ込む。

「飛翔斬！」

スパイラルコーンを通過した瞬間一気に速度が上がり、高速回転しながら影の胴体を貫き大穴を開ける。

「どうだ！」

いや、駄目だ。また再生している。

なのはちゃんはまだか？

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「この手に魔法を！」

「レイジングハート！セットアップ！」

その瞬間、なのはちゃんの身体が桃色の光に包まれた。

多分今頃変身シーンやってんだろっな…

攻撃を避けつつそんな事を考えてると、約三秒後には光が収まりなのはちゃんが出てきた。

……早っ！

まあ、ちんたらしてたら攻撃されそうだし、良いか。

てかなのはちゃんの格好が凄い。

胸に赤い大きなリボンを付けた学校の制服をファンタジーなかんじにしたやつだ。手には赤い球体のついた杖を持ってる。

完全に魔法少女だな…

うん、可愛い。

……じゃなくて！って危ね！

横薙ぎに振られた触手をギリギリで避ける。

チート視覚だからって、後ろの方に集中して油断した。

「早く！こっちは攻撃が殆ど通用してないんだ！」

「でも…どうすれば良いの？」

「心を澄ませて。心の中に貴女の呪文が浮かぶはずですよ」

なのはちゃんが目を閉じ、集中する。

もう少しだ。

触手を避けつつ剣を振るい、ダメージを蓄積させる。

「リリカル…マジカル…」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

『sealing mode・set up』

杖から光の羽が生える。

そしていくつもの桃色の光の帯が影を縛り上げ、さらに額から【X
XI】の文字が浮かび上がる。

『stand by ready』

「リリカルマジカル…ジュエルシード、シリアルXXI、封印！」

『sealing』

まばゆい光とともに影が消滅した。そしてその場には青い宝石が残された。

終わった…

なんだか疲れたな…

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

あの杖そんな名前だったんだ。

なのはちゃんが杖を宝石に向ける。
すると宝石が杖の先端の赤い球体に吸い込まれる。

『 r e c e i p t n u m b e r X X I . 』

そしてなのはちゃんの姿が元の服装に戻る。

……しかしまあ……あっちこっち破壊したなあ……
俺が避けたのも原因だけど。それにその電柱は俺が切っちゃったし。

「終わったの……？」

「はい。あなたたちのおかげで……ありがとう」
するとフェレットが倒れた。

「おい！大丈夫か！？」

「ちょっと、大丈夫！？ねえ！」

なのはちゃんが駆け寄る。

そしてパトカーのサイレンが聞こえだした。

こんだけ暴れたんだ。当然だな。数は……三台か。

「も、もしかしたら……ここにいたら大変アレなのでは……」

100%職務質問だな。

「逃げるぞ！」

肩の装甲を分離させ脚の形にし、なのはちゃんとフェレットを掴み
駆け出す。

そして屋根伝いに跳びながらその場から逃げる。

「ま、また〜!?!」

「静かにして。見つかるから」

ひとまず公園に逃げこむ。
まだサイレンが聞こえる。

なのはちゃんを下ろし、フェレットを預ける。
そしてエクステンドを解除する。

「ここまで来れば大丈夫だろ」

「すみません…」

どうやら気がついたらしい。

「ごめんな、乱暴に掴んじゃって」

「いえ、怪我はもう殆ど治ってますから」

身体を震わせ包帯を解く。

器用だな。

「本当だ。怪我の跡が殆ど消えてる。凄い…」

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に廻す事ができました」

「よくわからんが…まあ良いか」

「ねえ、自己紹介して良い？」

「あ、うん」

なのはちゃんがエヘンと咳ばらいする。

「私は高町なのは、小学三年生。家族や仲良しの友達なのはって呼ぶよ」

「俺は千路命。なのはちゃんとは幼なじみで同い年だ」

「え？同い年？」

…だよなあ。この身長差で同い年って思えないよな…

「信じられないだろうが事実だ」

「あ…ごめんなさい。…僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

「ユーノ君かあ…」

「よろしく、ユーノ」

するとユーノが頭を下げる。

「ごめんなさい。あなた達を…」

するとなのはちゃんがユーノを持ち上げる。

「なのはだよ」

「命だ」

「…ごめんなさい。巻き込んでしまった…」

「とにかく移動しよう。ここじゃ落ち着かない」

「そうだね、とりあえず家に行きましょう」

皆で家に帰る。

当然入口で母さんに捕まり連行されたがな。

まあユーノを利用してなんとかなったが…

すまん…

因みにユ一ノは俺の部屋で寝泊まりする事になった。
なのはちゃんは残念がってたが、男の子だからと説得してなんとか
なった。

そして皆が寝静まった頃、俺はなのはちゃんの部屋にいた。

勿論俺と母さんについて説明するためだ。
疚しい事を考えてたやつ、表へでろ。

「そうだったんだ……リゼンブラか……」

「ごめん、今まで黙ってた……」

「もっと早く話してほしかったなあ……」

「騙していてごめん。でも、俺と母さんにはここしか無いんだ」

「別に追い出そうとか、そんな事考えてないよ」

え？

「そんな…怖くないの？百足だぞ、蠍なんだぜ。普通の人間じゃないんだ」

「命君は命君、美尋さんは美尋さんだよ。私の幼なじみで、そのお母さん。私の大切な人だもん、怖くないよ!」

なのはちゃんが笑顔で答える。

ははは…

なのはちゃんが天使に見えるよ。

「…ありがとう」

「御礼を言うのは私だよ。命君のおかげで怪我也無かったんだし。ありがとう、命君」

うわあ、笑顔が眩しい。

やばい、すっげえ照れる!

「そ、そりゃなのはちゃんの為だ…当然だ」

「本当?」

「本当!」

「じゃあ…これからも私を守ってくれる?」

「勿論!絶対だ!俺は君のヒーローになる!」

「ありがとう!」

〔SIDE OUT〕

くなのはSIDE〕

命君が部屋を出ていった。

私の為かあ…

変身した命君格好良かったなあ…

私のヒーロー……

えへへ／／／

今日は色々あったなあ。

明日はユ一ノ君とちゃんと話してみよう。

命君は私の大切な幼なじみで、大好きな人。
たとえ命君がちょっと変わった人でも変わらない。

絶対に。

第十四話 魔法少女とリゼンブラ（後書き）

なんだかユーノが少し空気な気が…

第十五話 魔法少年ポイズン命（前書き）

タイトルに意味はありません

今回も後書きでモブ紹介します

第十五話 魔法少年ポイズン命

〔命SIDE〕

学校の授業中、ユーノから念話とかゆうテレパシーのような物でジュエルシードとかゆうやつの説明を聞いた。

「二十一個？あとあんなやつが十九個もあるのかよ…」

「あれ、ちよつと待つて。話を聞く限りじゃ、ジュエルシードが散らばっちゃったのって全然ユーノ君のせいじゃないんじゃない」

「だけど、あれを見つけてしまったのは僕だから…見つけて、ちゃんとあるべき場所に返さないとダメだから」

返すか。責任感じてんだな。

「何となく…何となくだけど、ユーノくんの気持ち、わかるかもしれない。真面目なんだね、ユーノくんは」

「えつと、昨夜は巻き込んだじゃつて、助けてもらって本当に申し訳なかったけど…この後、僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらいたいただけなんだ。一週間…いや、五日もあれば力が戻るから…」

「おい、待てよ。そんな危険なやつが町中にあるんだろ？昨日の状況をみる限り一人じゃ難しいだろ。手伝うよ」

「もう知り合っちゃったし、話しも聞いてちゃったし…ほっとけないよ」

「なのはちゃんは駄目」

「ええ!？」

「危険だ。それに俺にも魔力はあるんだろ?封印だってできるさ」
「そつだ、俺がやれば良いんだ。なんで今まで気がつかなかったんだろ。」

「多分命の魔力じゃ難しいよ」

はい?

「え……………ユーノ、俺の魔力ってどの位なんだ?」

「普通…かな。少なくとも僕より低いし、封印にはかなりの魔力が必要だからね。無理かもしれない」

まじかよ…

orz

「ほら!やっぱり封印は私がやるよ!」

「危ないって言ってるだろ!」

「命が守ってくれるって信じてるもん。それとも、昨夜の事は嘘なの?」

ぐ……

えと……

ええい！

「わかったよ、三人でやろう。ユーノ、なのはちゃんにできるだけ魔法を教えてくれ。ついでに俺にもだ。普通ならある程度はできるはずだからな」

「え？ちよ…待ってよ！」

「断ったら噛み付いて毒を流すからな」

「う………本当に良いの？」

「うん！」

「当然だ！」

こうして俺達はジュエルシードを集める手伝いをする事になった。

～SIDE OUT～

くつばさSIDEく

休み時間、いつも集まる四人組に話しをかける。
そう、原作組や。

「命、話しあるんやけどええか？」

「つばさ？話してなんだよ」

「まあええから」

そう言って命の手を引く。

「八神さん、命困ってるの。手、離してくれないかな？」

どす黒いオーラを纏ったなのはが笑顔で止めに入る。

うわぁ……うちが転生者じゃなくて普通の子供やったら泣いとるで。
怖い怖い。

仕方ないのでなのはに耳打ちする。

「別に高町さんの恋路の邪魔する訳やないで」

「にゃ!?!」

おやおや、真っ赤になって

「ちょっと話しをするだけや。うちは高町さんの事、応援しとるんやで」

「あ…あう…//」

よし。

「ほな、借りるでー!」

スキを付いて命を連れていく。

「で…なんの用だ?」

「昨夜、なのはと激しくやったんやろ?」

「ちょ…!俺を犯罪者にするな!」

わざと誤解しそうな言い方をしたけど、こんなに引っ掛かってくれるなんて。

面白いなあ。

「なにエロい事考えとんのや。ジュエルシードの封印やで。この助平」

「お前が紛らわしい事言うからだろ！……ったく。そうだよ、原作知ってんだろ？わかりきった事聞くなよ」

「そっか…所で、変身シーンどうやった？」

「一、三秒で終わったぞ。光で何も見えなかったし」

な……馬鹿な！

「そんな…楽しみにしとったのに…」

「……ざまあ」

うっ…

「えと……とにかく、昨日のユーノの念話が聞こえんかった転生者はかなりおるはずや。その内何人かは介入を諦めるはず。少し敵が減ったうちゆう事や」

「ニユースでやってたしな。原作知ってりや感ずくだろっな」

「逆にやけくそになったりするやつもおるからな。お互い頑張ろ」

介入できないならぶっ壊してやるとか考えとるかもしれへんな。そうなったら原作キャラに直接危害を加えるかもしれへんし。

こちらの戦いはこれからぞ。

〔SIDE OUT〕

〔命SIDE〕

学校の帰り道、急におかしな気配を感じた。
そうジュエルシードだ。

ユーノと合流し神社に到着する。

階段が長いな…

「ユーノ、俺に乗れ。なのはちゃん、ごめん」
なのはちゃんを抱き抱える。

俗に言うお姫様だっこってやつだ。

「あう／＼／つてにやああああ！?!?!?!」

「急ぐぞ！」

三、四段飛ばしで階段を駆け上がる。

上に到着すると………なんとというか………黒い犬のような生き物がいた。

目が沢山あるし牙も凄い。

普通に怖いんだが……

「原生生物を取り込んでる」

「どういう事？」

「実体がある分、手強くなってる！」

「なら楽だ。バラバラに切り刻めば良いしな」

「そんな事したら取り込まれた生物までバラバラになってしまう！」

………俺って無能？

グオアアアアア！

相手は待つてはくれないか。

「エクステンド！」

変身と同時に神の視点を発動。

とにかくレイジングハートの起動まで二人に近づけさせないようにしなければ。

ガアアアア！

噛み付いてきた。俺は開いた口を掴み抑える。

「なのはちゃん、早く！」

「なのは、レイジングハートの起動を！」

「え？起動ってなんだっけ？」

おいしいい！

「起動パスワードだよ！」

「あんな長い覚えてないよ！」

俺もだ。

こうなったら！

犬の口を膝蹴りで無理矢理閉じる。
そして尾を巻き付け投げ飛ばす。

「早く！手加減して戦うのはきついんだ！」

「えと、えと、ああもう！レイジングハート、セットアップ！」

『stand by ready・set up.』

するとなのはちゃんの手から光が溢れ、全身を包んでいく。そしてなのはちゃんも無事変身が終わった。

「パスワード無しでレイジングハートを起動させた!？」

ユーノも驚いてる。そんなに凄い事なのか。流石主人公だな。

ゴアアアアア!

後ろから犬が走ってくる。

さて、時間稼ぎは終わりだ。

足元に脚力強化のオルタ・フィールドを展開する。

「ライダーキック」

飛び掛かってきた犬に、カウンターの回し蹴りをくらわす。

数メートル吹っ飛んだが大丈夫だろう。

……多分。

「…封印お願い」

「えと…うん。レイジングハート、お願いね。」

『all right・sealing mode・set up・』

光の帯が犬を縛り上げていく。

『stand by ready・』

「リリカルマジカル：ジュエルシードシリアルXVI、封印！」

『sealing・』

犬が消え、青い宝石と一匹の子犬が残された。

この子犬を取り込んでいたのか。

『receipt number XVI・』

「これで…良いのかな？」

「うん。二人ともお疲れ様」

「命君、お疲れ様」

「なのはちゃんもお疲れ様」

さて、どうやらあそこに倒れてる人が飼い主らしいな。

「目が覚めるまで待ってようか」

「俺が見とくよ。なのはちゃんとユーノは先に帰ってて」

「いや僕達も残るよ」

「いいって。それに少し休んでいきたいし……な？」

「うん…じゃあお願いね」

「わかった。じゃあ後で」

二人が階段を降りていく。

さて、子犬と飼い主は………うん、大丈夫そうだな。
さて…

「そこに居るのは視えてんだ。出てこい」

「ばれてたか」

そう。俺達が来た直後にこの少年が現れた。
なのはちゃん達は気づいてなかっただろうが、隠れていても神の視点で俺には丸見えだ。

「お前もハーレム狙いの屑か？」

「ハーレム？俺はなのは以外には興味が無いね」

なのはだけ…か。

「お前、ユーノの念話聞こえたのか？」

「聞こえたぞ」

「な……嘘だ…こんなやつにリンカーコアが…」

どうやらこいつには無いらしいな。

ご愁傷様。

「ずるいぞ！なのはを守るのは俺だ！よくも邪魔しやがって！しかも魔力有りだと？」

「邪魔つて…それよりなのはちゃんを守るんなら協力しようぜ。俺も同じだ」

「うるせえ！貴様は邪魔だ！なのはは俺の嫁だからな！なのはをゲツトするためにも、貴様には死んでもらう！」

………なんだろ。俺の嫁発言が最高にむかつく。

なのはちゃんはお前の嫁じゃない…

「敵だというのは理解した。お前になのはちゃんはわたさない」

「死ね！行け、ピカチュウ！」

少年が紅白の手の平サイズのボールを投げると、中から黄色の鼠のような生き物が現れた。

ポケモンか。しかしピカチュウなんて懐かしいやつを…
やばい、すつげえ可愛い。

「ぶつ殺せ！10万ボルト！」

「ヂュー！」

ピカチュウが電撃を放ってくる。

ここじゃ子犬と飼い主も巻き込まれちまう。

襲い掛かる電撃を、オルタで防ぎなが近くの林へ走る。

「逃がすな！でんこうせっか！」

「チュ！」

もの凄い速さでピカチュウが近づいてくる。

いや、もう目の前だ。

「アイアンテール！」

尻尾がたたき付けられ、オルタが破壊さる。

そしてそのまま俺に命中。吹き飛ばされ、地面を転がる。

いったああ。

小さいからって甘く見てた。

「とどめだ！ボルテッカー！」

雷を纏った体当たりを繰り出してきた。

くらってたまるか！

真上に跳躍。さらにスパイラルコーンを展開し、先端をピカチュウへ向ける。

「殺せ！」

「ピカ！」

ピカチュウが方向転換し、こっちに向かってくる。

俺は両足に刃が外になるよう蛇腹剣をドリルのように巻き、回転しながら突っ込む。

「飛翔斬！」

スパイラルコーンを通過し高速回転しながらピカチュウと衝突。

そして大量の刃がピカチュウをズタズタに切り裂き、ミンチになって辺りに四散する。

周囲は粉々になった血肉がばらまかれ、スプラッター映画のような光景だ。

おお、グロいグロい。

「てめえよくもピカチュウを！こんな可愛い生き物を殺すなんて、お前に良心は無いのか！」

呆れた…

「その可愛い生き物に殺人を強制させてたお前に言われたくない」

「ぐっ…！」

さて…

両腕の蛇腹剣を少年の足元に飛ばす。

「ヒイ！？」

情けない悲鳴を上げて座り込む。

「二度と顔を見せるな。そうすれば命は助けてやる」

そう言つて頭に蛇腹剣を飛ばし、頭の天辺の髪を削ぎ落とす。

「ヒエエエエ！？！？」

失禁しながら這うように逃げていく。

多分こいつに力はもう無い。

なのはちゃんがあいつの嫁？

冗談じゃない！なのはちゃんは……って何考えてんだ俺は！
俺はロリコンじゃない！

落ち着け、千路命！

うん、大丈夫だ。

あの子犬と飼い主も気がついたみたいだし。
帰ろう。もうすぐ夕飯だ。

第十五話 魔法少年ポイズン命（後書き）

ひむら りゅうじ
日村竜二

能力：リオレウス及び、レウスシリーズ防具、武器の召喚

ちなみにつばさちゃんがキックホッパーだと

ライダーキックでレウスの頭部粉碎

日村もクロックアップライダーキックで爆砕

スパイダーマンだと

レウスに飛び乗り首を絞めて落とす

墜落するレウスの下敷きになり死亡

となる予定でした

第十六話 街の危険（前書き）

サウンドステージはカットします

CD持っていないんで…

第十六話 街の危険

（命SIDE）

眠い…

昨日は夜遅くまで出掛けてたし。

流石になのはちゃんも疲れてしまって、俺がおぶって帰ったんだがな。

いや、役得だったよ。

って何考えてんだ変態！

そんな訳で封印したジュエルシードは昨日で五つ。

あと十六個か…

「おはようユーノ」

「おはよう命。今日は出掛けるんだよね？」

「そつだよ」

そつ、今日は土郎さんがオーナー兼コーチをしている、翠屋JFCとゆうサッカークラブの試合になのはちゃんとアリサ、すずかで応援に行くのだ。

俺は試合に参加しないのかって？

サッカーはチームでやるスポーツだ。俺は翠屋JFCに入っていないし、俺が参加してもチームワークも何も無いしな。

だから俺は今日は応援させてもらう。

母さんと桃子さんが、俺にチアリーダーの格好をさせようとか言うてたな……全力で逃げなければ。

そっぴやなのはちゃんまだ寝てるのかな？
行ってみよう。

「なのはちゃん起きてるか見に行くよ」

「いってらっしゃい」

いきなり開けるのは失礼だしな。まずは…

トントン

「なのはちゃん、起きてる？」

……返事が無いな。

寝てるのか？いい加減に起きないと遅れるぞ。

「入るよ」

ドアを開ける。

寝ぼけ眼なのはちゃんがいた。

どうやら気づいていないらしいな。

しかし…

「んあ…?」

着替え中ですと!?

そう、なのはちゃんが下着姿だったのだ。

「……………命君?」

俺に気づいたらしい。

「えと…ごめん。返事が無かったから…」

「ひ……………ひゃああああ!?!?!?」

なのはちゃんが悲鳴を上げる。

いつまで覗いてるんだ俺は!?

「ごめん!わざとじゃないんだ!」

慌てて部屋から出てドアを閉める。

その後なのはちゃんには許してもらったが……………うん、最低だな俺。
ごめんよ、なのはちゃん。

ああ…変態になるのは嫌だ!

そんなこんなで試合の時間。

俺はなのはちゃん、アリサ、すずかとベンチで応援してる。

チアガール？

……結局振り切れなかったよ……

「しかしよく似合うわね……ププッ」

「命君って美尋さんに似てるし。おさげもよく似合ってるよ」

おのれええ！

助けて、なのはちゃん！

なのはちゃんをちらりと見る。

「ほら命君、早く応援して」

やっぱり、今朝の事怒ってらっしゃるのですか！？

ユーノ、その哀れそうな目で見るな！

畜生！こうならヤケだ！

………とりあえず俺の男としてのプライドがズタズタになった休日でした。

試合の内容も覚えてないし……
疲れた……

それで試合が終わったら翠屋で打ち上げだ。
外ではなのはちゃん達がユーノをいじってる。

「大変だなあユーノ」

「あはは……仕方ないよ」

さて、俺は今日は自由に過ごすか。

「じゃあ俺は買い物に行くから」

「あ、そうなんだ」

「いってらっしゃい」

「明日学校だね」

三人娘と別れ買い物に出掛ける。

今日は欲しい漫画の発売日だ。

ついでにブツ〇オフで立ち読みしようかな。

いつもなのはちゃんというから、たまに一人でいるのも楽しい。
そりゃあなのはちゃんがいた方がもっと楽しいけどね。

さて、そろそろ帰るかな。

っ！？この感じ、ジュエルシード！？

これ、近いぞ！

「うわあ！なんだあれ！」

「逃げろ！」

……なんだあの馬鹿でかかい樹は？世界樹か？

んな訳ないよな。ジュエルシードだよ畜生。

あの辺にいる人達、大丈夫か？

大丈夫な訳無いよな…

ビルとか結構崩れてるし。

よし、助けに行くか。エクステンドしてりゃ顔も見られないし。

俺は建物の影に隠れ、神の視点で周囲を確認する。

よし、誰もいないな。

エクステンド
「変身！」

青紫の外骨格を纏う。

なのはちゃん達が来るまでなんとかかしてみるか…

行くぞ！

〈SIDE OUT〉

〈つばねSIDE〉

今日は日曜日。

はやてと一緒に夕飯の買い物や。

いや〜今日は豚肉が安かったなあ。

「お姉ちゃん、夕飯何にしようか？」

「せやな…トンカツなんてどうや？せつかくええ豚肉があるんやし」

「ええな！それにしよう！」

うん、夕飯も決定や。

味噌汁の具を何にしようかと考えながら車椅子を押す。

いや〜町は平和やな。

のどかな休日、最高や。

ドガガガガガガ！！！！

なんやなんやなんや！？！？

急に騒音が聞こえ、町の真ん中から巨大な樹が生えて町を破壊していく。

つて、木い！？

せや、今日やった！

命のやつ、なのはに決意させる為とか理由つけて回収したらんかったんかい！

……つて命は原作知識無いんやった！教えるの忘れとったわ！

あ…あかん。完全にうちの責任や。

馬鹿馬鹿！

なんで忘れとったんや！

「お…お姉ちゃん、なんかやばそうやない？」

はっ！そんな事考えとる場合やない。

反省は後や。今は逃げるのが先やな。

「逃げるで！荷物しつかり持ったとき！」

車椅子を押しながら走る。

だが樹はどんどん広がっていき、被害は増すばかりや。

変身した方がええかな？いや、そんな時間も場所も無い。

「お姉ちゃん、上！」

上？

見上げると樹が建物を破壊し、その破片がこちらに向かって落ちてくる。

あかん！はやてだけでも守らな！

はやてに覆いかぶさるように抱きしめる。

……あれ？何も起きない？

「無事…なんか？」

「え？え？」

見るとこちらの横に瓦礫が落ちとる。

しかも、その瓦礫には切断したような面が見えた。

何が起きたんや…

「二人とも、大丈夫か？」

目の前に両腕から剣を生やした、虫のような青紫の鎧武者が現れた。

まさか、転生者？助けてくれたんか？

つて、はやても潰されそうやったんやから当然か…

「えと…」

「どこのどなたか存じませんが、ありがとうございます」

一応お礼は言っとかなあかな。せやけど、フラグの為とかそんな理由かもしれないし、警戒しとかなあかん。

「つばさ、俺だ。命だよ」

不意に念話が聞こえた。

命やったんか？

そっか。これがエクステンドってやつか。

「礼はいいから、さっさと逃げろ」

そう言って命は立ち去っていった。

せやけど、うちは逃げながら念話を続けとる。

「ごめん、話すの忘れとった」

「やっぱり原作通りか。良いさ、仕方ない」

「ほんまにごめん。ちゃんと全部説明しとくんやったわ」

「またこんなでかいのがあるのか？」

「無いで」

「なら良い。じゃあな」

念話が切れる。

はあ…明日また少し話そ。

～SIDE OUT～

（命SIDE）

まさかつばさがいたとはな。

多分あいつも忘れてたんだろうな。

じゃなきゃあんな場所にいないだろうし。

そしてあの車椅子の少女が妹か……

双子だから顔が同じだったな。

命がかかってる…車椅子…嘘じゃなさそうだな。

まあ良い、今はこの世界樹もどきをどうにかしないと。

「命君！」

「命、そこにいるのかい！」

来たか。

「おう、逃げ遅れた人の救助してる。早く封印してくれ」

「……うん」

ん？なんか元気ないな。

まあ、こんな現状にショックを受けてるんだろつな。

俺は瓦礫や樹を切断しながら、神の視点で巻き込まれた人を探しながら逃がしていく。

やはり俺の姿に皆驚き、中には悲鳴を上げる人もいた。

わかつちやいるんだが、やっぱり少しショックだな。

そうしてる間に桃色のビームが樹を撃ち抜いた。

まさかなのはちゃん？

最近の魔法少女って凄いな。

そして樹が消えていき、俺はなのはちゃんとユーノがいるビルの屋上へ向かった。

「いろんな人に…迷惑かけちゃったね…」

「え？」

「ちゃんと封印したんだし、ジュエルシードの事は仕方ないさ」

「そうだよ、なのははちゃんとやってくれてるよ」

「私気付いてたんだ…あの子が持ってたの…でも気のせいだと思っちゃった」

なのはちゃんが座り込む。

そうか…持つてる人を見かけたんだ…

「なのはちゃん…次は気おつけよう。俺なんか、全く気づいてなかった」

なんだかんだで、やっぱり子供だな。

気のせいだ、大丈夫…そんな気持ちがあったんだろう。

だが破壊された町並みを見ての通り、ジュエルシードは本当に危険極まらない代物だ。

俺も自分の能力や、この世界が本来アニメの世界だからと油断していた。

もうこんな事にはさせない。

なのはちゃんだけでなく…そう、この町も守るんだ。

俺達が。

第十六話 街の危険（後書き）

今回もモブ紹介です

ピカチュウ使いの少年

能力：ピカチュウ入りのモンスターボールを所持

ちょっと適當すぎました

ハーレムではなくなのは狙いの転生者です

ミンチにしたのはやり過ぎたかも…

一応生存していますが、能力を失っており、さらに魔力無しなのでリタイアです

第十七話 もう一人の魔法少女と悪党（前書き）

魔力が低くてもチートな命君

第十七話 もう一人の魔法少女と悪党

〈フェイトSIDE〉

桜島侑斗……この世界の住人で私の協力者…

正直彼は苦手だ。

いつも無意味にニヤついて気取っており、言っている事も臭い台詞ばかりだ。

アルフも猿みたいな奴って言ってた。

昨夜は私達の部屋のシャワーを勝手に使ってたし。

そして興味もないのに、肩の傷痕ついて話し出した。

話してる顔が自慢してるようで、すごく不気味だったな…

あまり関わりたくないけど、彼のおかげでジュエルシードを一つ手に入れられたし。

それにデネブの事は嫌いじゃない。

まあ、戦力にはなるから今は協力してもらおう。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

時空管理局…か。

つばさから聞いた話だと、その組織にも転生者がいる可能性が高いらしい。

特になのはちゃんと関わる原作キャラのグループはかなりレベルの高い連中らしく、必然的に原作に関わろうとする転生者はそのグループに入るとゆう訳だ。

これは危険だ。

つまり転生者もかなりの戦闘力を持つとゆう訳だからな。

時空管理局つてのは、治安維持組織やら司法組織やらがごちゃまぜになった組織らしい。
しかも魔法主義、才能主義らしく、子供も働いてるつてのだから驚きだ。

……つて事はなのはちゃんも入るのか？

どうする？将来の事とか考えれば、そういった公務員つてのはかな

り良い。でもそれだけ危険もある。
幸い俺もリンカーコアがあるから入れない訳じゃない。
でも同じ部署で働けるとも限らない…

いや、待てよ……魔法の才能が重視されるなら、なのはちゃんは凄
い出世が期待される。そして俺の魔力は普通…

そうだ！俺がなのはちゃんの部下になれば良いんだ！
それならなのはちゃんを守る事もできるしな。

うん、それで行こう！

さて、魔法といえは俺もユーノから魔法を習った。
一応デバイス無しでも使えるらしいからな。現にユーノはデバイス
無しで使ってるし。

で、覚えたのがバリア系のプロテクション、バインド系のリングバイ
ント。あと身体強化の応用で、剣や鋏、針に魔力を追加する事を覚
えた。

全方位バリアみたいなのを覚えたかったが、流石にまだ無理だった
な。

オルタはシールドと似た性能らしいし。

それと、俺には魔力変換素質とかゆづりがあるらしい。
魔力を別の物へ自動的に行える素質らしい。
ちなみなのはちゃんには無いらしい。

色々試した結果、多種多様な化学物質に変換できるらしい。

実際、ニトログリセリンに変換したらライダーキックで木が爆砕したしな。

……完全にモンスターだな。

非殺傷設定も必要らしいから、純粋な魔力運用も覚えなきゃ。

そんなこんなで、今日は月村家にお邪魔している。ちなみに恭也さんも一緒だ。

すずかのお姉さんの忍さんが恭也さんの彼女だからだ。

ちっ、リア充め！

まあ嫉妬マスクに変身するつもりは無いけどな。

しかしでかい家だな。

ブルジョアってのはこういうやつか。

そして相変わらずの猫天国。

ニャー!?!?!?

……で、いつものように俺が来た途端蜘蛛の子散らすように逃げていく。

「あんだ、相変わらず嫌われてるわね」

「なんでなんだろう…」

「ハハハ…」

「そういう体質なんだよ…ね？」

俺の正体を知るなのはちゃんと恭也さんは苦笑いを浮かべる。

「動物に嫌われるのは慣れてるさ」

多分、俺が毒持ちだからだろう。
本能的に危険を察知してるんだ。

あれ？なんでユーノは大丈夫なんだ？
もしかして……今度聞いてみるか。

それで四人でお茶を飲んでいたら、すると。

っ！？

おいおい…こんな所で？

「なのは、命！」

「すぐ近くだ」

「どうする？下手したら二人とも巻き込むぞ。プールの時みたいなのはごめんだ」

「えと…どうしよう…」

むう…

「そうだ！」

ユーノがなのはちゃんの膝から飛び下り、走り去っていった。
なるほどね。

「ユーノ君？…あ」

なのはちゃんが立ち上がる。

「ユーノどうかしたの？」

「何か見つけたのかも。ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「俺が行くよ。すぐ戻る」

庭とゆう名前の森の中を走る。

「発動した!」

「ここだと近い…結界を張らないと」

「頼む!」

周囲の色が変わる。

なんだか気味悪いな。

現実味が無いとゆうか。

そして光と共に巨大な猫が現れた。

「え?」

「あ…」

「はい?」

でかい、すんごくでかい猫だ。

「おい…なんだ、あのウルトラマンが飼ってそうな猫は?」

「…アハハ……」

「ウルトラマンってのが…よくわからないけど。た、多分…あの猫の大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじゃないかな…」

「そ、そっか…」

いくらなんでも大きすぎじゃないかな…

「だけど、このままだと危険だから元に戻さない」と

「そうだね。流石にあのサイズだと、すずかちゃんも困っちゃうし」

「だな。エクステンド！」

俺は外骨格を纏う。

襲ってくる様子は無いが、俺に気付いて暴走するかもしれないしな。

「レイジングハート！」

ヒュン

俺達の上空を金色の光弾が通過。猫に当たる。

なんだ？新手的転生者？

「魔法の光！？」

魔法？まさか！

神の視点で光が来た方向を見る。

金髪に黒いマント……

まさか、フェイト・テストロツサ？
つばさに聞いた通りの容姿だ。
うん、間違いない。彼女が敵か。

ん？

あれは……

よく見ると彼女が立つ電柱の下に緑の鎧を着た人物がいた。

……ハ…ハハ…まじかよ。

「アツハハハハハハ！！！」

「命君？」

「命？どうしたの？」

「なのはちゃん！金髪は任せた！」

「え？命君！」

そう言っつて俺は走り出す。

見つけた…ようやく…

「ゼロノスウウウ！」

「侑斗」

「あの变なのは俺に任せな。フェイトは白いのを頼む」

「好きにして」

フェイトは俺の真上を飛んでいく。

あいつは無視だ。今は…

「来たなモブ！」

ずっと待ってた。

「久しぶりだな」

「はあ？てめえみたいな下手物に知り合いなんかいねえよ」

まあ、俺の姿は違うし…良いか。

「これならわかるだろ！」

両腕の蛇腹剣を振るう。

周囲の木を切断しながら侑斗に向かう。

「ふん！」

空を飛んだ。

「その剣……まさかあの時のババア！？いや、殺したはずだし……じやああの雑魚眼鏡か！」

「あんたが他の連中に殺されてなくて、本当に嬉しいよ。それと母さんは生きてる」

最高だ。
嬉しすぎる。

「まさか……雑魚能力のくせに生きてたなんて。しかも変身するとは……」

「残念だったな。あの時は能力が未熟だったんだよ。今なら負けはしない」

「未熟……能力が成長しただと？」

「悪いが人間じゃないんでね！」

毒針を発射。五本の針が侑斗目掛け飛んでいく。

「それがどうした！」

剣形態のゼロガツシャーで薙ぎ払う。

残念、それは困だ。

跳躍し侑斗の真後ろに跳び上がる。

「え？」

「くらえ！」

蛇腹剣に魔力を込めて振るつける。

そして流した魔力を硫酸に変換する。

「ぐは！」

地面に叩き付け、身体からは僅かに煙りが立ち上る。

アーマーが少ししか溶けてない。あまり効いてないな。

なら。

足から鋏を展開し、踏み付けるように襲い掛かる。

「死ね！」

「うわ！？」

転がって避けた。

無様だな。逃げる逃げる。

「ふざけやがって！」

ゼロガツシャーをボウガン形態にする。

そしてベルトからカードを抜き差し込む。

『Full Charge』

相手になってやる！

スパイラルコーンを展開し右腕の剣に魔力を込める。

「グランドストライク！」

「ライダーシラッシュ！」

毒の斬撃波がスパイラルコーンを通過し光の矢と衝突。爆発が起き、辺りに煙りが立ち込める。

だが俺にはお前が見える。

「相殺？馬鹿な…うお！？」

伸ばした蛇腹剣をギリギリで避ける。

だが続けて伸ばした刃がゼロガツシャーを払いのける。

「あー！」

これで丸腰だ。とどめ！

侑斗の足に蛇腹剣を巻き付け、こちらに引きずる。

「うわ！？」

引きずりながら、右腕の剣に込めた魔力を液体窒素に変換する。

「ま…まさか…や、止める！誰か！助けてくれ！」

自分がどうなるのかを悟ったのだろつ。悲鳴を上げながら必死に地面をもがく。

「嫌だ！死にたくないよお！」

死ね！

俺の近くまで来た瞬間、空中に持ち上げる。

そして剣を侑斗の腹目掛け突き出す。

「クリスタル『Arc Saber』うわ！？」

剣が突き刺さる直前に、横から来た衝撃で体制を崩す。

な？誰だ？

起き上がると金髪の少女、フェイト・テストアロツサが金色の光の刃が付いた鎌を俺に向けてた。

何故ここに？

まさか…なのはちゃん！？

「フェイト、済まないな…フツ、礼を言う。だがこいつは俺一人で十分だ。すぐに片付ける」

「…片付けられそうだったくせに（ボソ）ジュエルシードの回収は終わった。ここに用は無い」

そう言うと刃が消え、黒い斧のような杖に変型した。

「待て！なのはちゃんをどうしたんだ！？」

「大丈夫、気絶させただけだから」

…そうか、原作でもなのはちゃんはここで敗北するんだ。で、今後
テストアロツサと何度も衝突すると…

「フェイト、すぐに終わる。先に行つてくれ」

「そう、好きにすれば？私は帰るから」

そう言つて飛んで行つてしまった。

「そこまで言うなら、二人で協り…あれ？帰るの！？……い、命拾
いしたな、モブ！」

侑斗も飛んでつた。

それはこっちの台詞だよ。

そうだ！なのはちゃん！

どこだ…見つけた！

なのはちゃんの元に走る。

「なのはちゃん！」

「命！何処に行ってたんだ！」

「ごめん……なのはちゃん、すっかり！」

「ん……」

気が付いた！

「なのはちゃん！」

「なのはー！」

「…命君？ユーノ君？」

「ごめん。守るって言うっておきながら……こんな事になるなんて……」

「命君…私は大丈夫だよ。皆心配するし、行く？」

なのはちゃんは立ち上がるが、ふらついてて見えて危なっかしい。

「じつとしてて」

「ふえ？」

なのはちゃんを抱き抱える。お姫様抱っこの状態だ。

「ユーノは俺に乗って」

「うん」

ユ一ノが俺の肩に乗る。

「彼女は僕と同じ世界の住人だ。でも緑の鎧は……ねえ、命はもしかして知ってるんじゃないのか？」

「……命君、あの人を見た途端凄く怖くなっちゃって……」

……怖いか。

当然だな。俺はあいつを殺す機会ができた事を喜んでた。

「金髪の少女は知らない。だが緑のやつは知ってる」

「本当かい？一体何者なんだ？」

「母さんを切ったやつだ」

「それって……もしかして美尋さんの左腕を切って大怪我させたのがあの人なの！？」

「まさか……」

「うん、俺はあいつに復讐するつもりだった。だからなのはちゃんに彼女を任せて……」

「そうだったんだ……」

「でも、なんでその人がジュエルシードを？この世界の住人が知ってるはずが無いのに」

「多分あの少女の手伝いだろうな。彼女ならジュエルシードを知っ

「とても不思議じゃない」

「うん…」

「考えても仕方ない。次は……いや、なのはちゃんが優先だ。」

「命君」

「何？」

「二人とお話できないかな？」

「話しか。」

「テスタロツサは原作キャラだ。話しが通じる可能性は高い。それに侑斗がいるって事はなのはと敵対したままじゃない可能性もあるし。」

「あいつはなのはちゃんも狙ってたしな。」

「金髪は大丈夫だと思う。でも緑は駄目だ」

「復讐…したいの？」

「命、気持ちはわからくはないけど…」

「わかってる。なのはちゃんとジュエルシードが最優先だ」

「時間はまだある。」

「命君、あの女の子は私がどうにかする」

「なのはちゃん？」

「なのは一人じゃ無理だよ！」

「でもそれじゃ私があの子とお話できないし。……命君もお話して、ね？」

話しが通じない相手なんだがな…

「私も許せないけど、復讐なんて悲しいよ。謝るように説得してみようよ」

「……うん」

ごめん、無理だ。

あいつが謝る訳が無い。

それ所か、なのはちゃんも危ない。

あいつを殺して存在を消す。

嘘ついでごめん。

あいつを許す訳にはいかないんだ。

第十七話 もう一人の魔法少女と悪党（後書き）

侑斗の最期が楽しみでしかたない

第十八話 海鳴温泉へ（前書き）

温泉回です

第十八話 海鳴温泉へ

〔命SIDE〕

どうすっかな。

テストロツサも侑斗も飛べる…なのはちゃんもだ。

俺だけ……

しかもユーノが言うには、俺には適性が低いらしい。

まじでやばいかも…

針は貧弱だし、蛇腹剣も限度がある。

跳躍して近づいても滞空できる訳じゃないし…

障害物があれば、それを足場にして戦えるんだけどな…

……………足場？

そうか！空中に足場を作れば良いんだ！

オルタや障壁を空中に展開して足場にする。

二段ジャンプとかの類いで空戦もある程度はこなせるはずだ。

もしかしたらユーノは何か知ってるかもしれないしな。

なんとかかなりそうだ！

「命君、どうしたの？さっきからボーっとしてて」

「せっかくの旅なんだから楽しまないと」

「悩み事なら相談に乗るよ」

おっといかん。

少し考えすぎたか。

「悪い、温泉の事考えてた」

「そっか、温泉楽しみだね」

今日は連休とゆう事で二泊の温泉旅行に行ってる。

メンバーは高町家に俺と母さん、月村姉妹にそのメイド、アリサ、ユーノだ。

温泉は最高だね。

日本人に生まれてよかったよ。

そうこうしてる内に到着。

さあ、早速温泉だ！

「じゃあユーノはあたしが洗ってあげる」

「え、私もやりたい！」

「あ、私も！」

アリスがユーノを捕まえ、三人で取り合いをしている。

…少し羨ましいかな。

「命助けて！女湯に連れて行かれるのは困る！」

仕方ないな。

「ユーノ嫌がつてるじゃないか。ほら」

アリスからユーノを取り上げる。

ユーノはそのまま俺の肩に乗った。

「ユーノは男の子だしな」

「キユ」

三人は…特にアリスは悔しそうに俺を見た。

「女湯に行くのは流石に嫌らしいからさ、勘弁してあげてよ」

「じゃあ…お願いね」

俺はユーノを連れて脱衣所へ向かった。

「命」

母さんに呼び止められた。

「何？」

すると母さんは俺に耳打ちした。

「神の視点で覗くんじゃないぞ」

「そんな事するか！」

たしかに可能だけどさ！俺は変態ではない紳士だ！
紳士へんたいではない！

〈SIDE OUT〉

〈なのはSIDE〉

「何が男の子だからよ！せっかく洗ってあげようと思ったのに！」

「まあまあ、ユーノ君嫌がってたし」

「残念だけど諦めよう」

すずかちゃんと一緒にアリサちゃんを宥める。

私も入りたかったなあ…

「うわあ…」

急にすずかちゃんが声を上げた。

視線の先にいたのは片手で器用に服を脱いでる美尋さんだ。

「す…」

「私、結構自信あったのに…」

「私もです…」

美尋さんはすつごくスタイルが良いの。

やっぱり命君も胸が大きい人が好きなのかなあ…

……うん、まだ九歳だし。これからこれから…

「ん？ああ、すまないな。見苦しいものを見せてしまった」

美尋さんは、私達が身体の傷痕を見て驚いてるって思ってるんだ。

「いえ！その…スタイル良いなあ…って思ってた」

忍さんが慌てて返事をする。

「…………ムチムチだと自負しているので」

美尋さんが胸を張る。

うう、大きい…

でもそれ以上に、左胸に一直線にある傷痕が目立つ。

あの緑の人がつけた傷…

どうしてあんな事をするんだろ…

そして、あの子はなんで一緒にいるんだろ…

悪い子には見えないのに…

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

温泉は最高…異論は認めない。

「温泉って良いだろ？」

「公衆浴場なら入った事あるけど…うん、なかなか良いね」

公衆浴場？フェレットの社会にそんな物があるのか？

そついや、ユーノは非常人間くさい。動物なら人と入浴するのに抵抗は無いはずだし、俺の事も怖がらない。

…まさか。いや…でも、魔法なら…

「ユーノ、お前もしかして人間？」

「そつだよ。話してなかったっけ？」

「聞いてねえよ！」

まさか本当に人間だったなんて…

「変身魔法だよ。この姿なら魔力消費も抑えられて、怪我の治りも早いし」

なるほどな。

「しかし、命拾いしたな」

「なんで？」

「なのはちゃんに話してないだろ？もしなのはちゃんの部屋で寝泊まりや、さつき風呂に連れてかれたりしてたら…俺本気で怒ってたわ」

原作だと実際そうだったんだろうな。

なんだか無性に腹が立ってきた。

だけど彼もわざとじゃないんだ。落ち着け。

「う…怖い事言わないでよ…」

「まあ、そうならなかったから良いじゃないか」

なのはちゃんにも後で話さなきゃな。

「命、また背が伸びたんじゃないか？」

恭也さんが俺を撫でる。

「そうですか？」

「俺が抜かれるのも遠くはなさそうだな」

うっん…背が高いのは嬉しいけど、あまり高すぎるのは嫌だな。

…無理かな？

さて、なのはちゃん達は先に出てたらしく、俺は皆の所へ向かった。

ん？誰だ？

なんだか揉めてるらしいな。

橙色の髪の子の知り合いみたいなの……

「なのはちゃん」

「あ、命君」

「あら？……っ！？」

急に女性が怯む。

俺、何かしたか？

「と……とにかく忠告だよ。子供はいい子にしてな。お傷がすぎるとガブツツといくわよ！」

「さて、もうひとつ風呂行ってこよう」と

そう言って風呂場へ歩いていった。

念話？誰なんだ？なんだか知ってるような……

「なのは、誰なんだ今の？」

「あの金髪の子の知り合いみたいなの……」

金髪の子……そうだ！たしかアルフとかいう使い魔がいるんだっけ。そういや、つばさが言ってたな……

あいつも原作キャラか。

「て事はこの辺にジュエルシードがあるかもしれないって訳か」

「休日がだいなしだよ」

折角の旅行なのにな。

〈SIDE OUT〉

〈アルフSIDE〉

なんだったんだあの眼鏡……魔力はたいした事ないのに、あたしの野生の本能が危険だって警告してる。いや、まだ侑斗の言ってたやつとは決まってる……
まずはフェイトに報告かな。

「あくもしもしフェイト？こちらアルフ」

「アルフ、どうしたの？」

「ちょっと見てきたよ。例の白い子」

「そう…どうだった？」

「ん〜まあ、どうって事ないね。フェイトの敵じゃないよ」

そう、あの子はたいしたことない。でも虫のような鎧のやつはわからないけど。

「なあ、その子の近くに誰かいなかったか？」

…いつの間に聞いてるんだこいつは？

「ああん？いたけど？女の子が二人に眼鏡の子が一人ね」

「その眼鏡だ！」

「もしかしてあの虫みたいなの？」

「そうだ！あの野郎…」

まし？

「あいつ…かなりヤバそうだったよ」

「そうなの？」

「魔力もしよばいけど、なんかヤバいんだ。強そうとかじゃなくて…普通の人間じゃないよ」

「侑斗もやられていたし、デネブもいてくれた方が良くないかな。お願いできないかな？」

「任せろー！」

「フツ…俺が「頑張っ^てねデネブ」おい！」

侑斗がやられるのはどうでも良いけど…フェイトに近づけさせないよう^にしないと。

困^りと時間稼ぎ位にはな^らず^にも^らい^たい^ね。

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

やっぱり人間じゃあないか…

アルフがヤバ^いっ^て言^って^んだ、確定^だな。

なんとかしてなのはと離せねえかな…

そつだ！あいつは原作知識が無い、きつとなのはに嫌われるのを恐れて話してないはずだ！

能力は魔法の一種だつて言つてゐるに決まつてゐる。

幼なじみにずっと騙されていた：二人を離すには十分だ。

良い事思い付いたぞ！

俺の家族を奪つた怪人、イマジン。その生き残りが魔法少女をたぶらかし、己の野望のために利用しようとする目論む。

そしてその野望を打ち砕く仮面ライダーゼロノス！

かっけ〜！よしよし、早速行動だ！

いたな、ちょうどトイレから出てきたところで一人だ。

「君」

「え？」

なのはが振り向く。

「そつ、君だ」

「あの…なんででしょうか？」

「君は…騙されている」

「騙されている？」

「君といた眼鏡の少年。彼は俺の家族を殺した怪人、イマジンの一人なんだ」

超イケメンな視線を送る。

「え？な…何を言ってるんですか？」

「俺は君を助けたい。そして、君の家族もだ」

俺はなのはに手を差し延べる。

「あなたは…」

「俺は…仮面ライダーだ」

「仮面…ライダー？」

仮面ライダーはテレビで放送されてるしな。
電王はなかったけど。

「目を覚ますんだ。彼は君とその家族を利用しようとしてる。俺と一緒に来るんだ」

「違う！命君はそんな人じゃないの！なんでそんな事を言うの！？」

簡単には行かないか。
でもこれでフラグは建った。

「今回は諦めよう。だが俺は必ず君を助ける」

なのはに背を向けて立ち去る。

かっけ～な俺

よし、あとはなのはが、命…だっけ？そいつに問い詰めて人間じゃないのがばれる。

イケメンな俺が魅了したんだ。すぐに俺を信じてあいつから離れて行く。

そして嘆いていた所に颯爽と現れて、あとは…

フヒヒ 今夜は優しく慰めてやるか

～SIDE OUT～

～命SIDE～

夕食の時間だ。

さて、何から食べようかな

「命君」

なのはちゃん？

「どうしたの？」

「イマジンって知ってる？」

え？なんでなのはちゃんがイマジンを知ってるんだ？

電王は放送されてないのに。

「知らないけど…どうしたの？」

「さつき変な男の子が、命君がイマジンっていう怪人だって言ったの。それで、私達を利用しようとしてるって…」

……だいたい予想ついたぞ。

侑斗だな…

「俺と母さんはリゼンブラだ。怪人ってのは間違っちゃいないけど」

「うん、そうだよ。命君は私と同じ日に生まれたんだし、美尋さんも家の庭に倒れていた。あの子の言ってたのは嘘だよ」

美由希さんにも全部話した。高町家全員に、俺と母さんの事を。

「信じてくれとしか言えないけど…」

「信じるよ、命君の事」

「ありがとう」

本当に良い子だな…

しかしあの腐れ仮面ライダー…絶対許さん。

「もしかして、さっきの男の子が…」

「多分緑のやつだ」

「仮面ライダーって言ってたよ」

「たしかにベルトとか仮面ライダーっぽい格好だな」

「あんなのが正義の味方な訳ないよ。絶対許せないの！」

なのはちゃんも怒ってるな。

「ああ、許せないな。利用してるのはあいつだ。金髪の子が心配だな」

「教えてあげなきゃ。うん、やろう命君」

「ああ」

覚悟しろ変態め。

第十八話 海鳴温泉へ（後書き）

侑斗きめええええええ

そしてうぜえ

書いた人が言うのもなんですが…

こいつ最低だ

第十九話 湯煙闘争記（前書き）

命のイメージは……クール系かな？顔がそうだし
茅原実里さんとか？

第十九話 湯煙闘争記

（命SIDE）

眠れない…

やっぱりジュエルシードも気になるし、なによりあの最低野郎だ。

悪役みたいな台詞だけど、生まれてきた事を後悔させてやる。

なのはちゃんも眠れないらしく、ユーノについて話しをしている。

「ユーノ君って人間だったんだね。だからあんなに私と一緒に部屋とかお風呂を嫌がっていたんだ」

「うん、ごめんね。話すの忘れてて」

「わざとじゃないし、怪我してたんだ。無理もないさ」

「そうだね…っ!？」

ジュエルシード!？

「命君、ユーノ君!」

おでましか。

まったく、休みがだいなしじゃないか。

「急ぐよー!」

俺達はこっそりと旅館を抜け出す。

途中で俺は変身し、なのはちゃんもレイジングハートを起動させた。

そして突如青い光が地面から立ち上る。

あそこか！

橋の上にテストアロツサとアルフ、デネブと長髪の少年がいた。

あいつが…

顔を見せてくれるなんてありがたい。

「この臭い…まさか侑斗の言ったとおりなんてね」

「言っただろ？しかし」

侑斗が悔しそうに俺達を見る。

「まさか洗脳してたとはな（棒読み）…イメージめ、これ以上の悪逆非道は許さん！」

「俺はリゼンブラだ！」

「黙れ！変身！」

『Altair Form』

侑斗がゼロノスに変身する。

だんだんこいつがわからなくなってきたぞ…

「アルフ、デネブ、あと一応侑斗。手筈どつりをお願い」

「あいよー！」

「よし！」

「俺にま「アルフ、デネブ怪我しないようにね。いざという時は侑斗を盾にすれば良いから」…ツンデレだなフェイトは」

うわぁ…

「フェイトには近づけさせないよ！」

アルフが狼の姿に変身し襲いかかってきた。

さらに続けて侑斗が切り掛かり、デネブが発砲してくる。

三人がかりか！

オルタで射撃を防ぎながら後退し、二人の攻撃を避ける。

「命！」

ユーノが俺の肩に乗り緑の障壁を展開する。

「防御は僕に任せて！」

「助かる！」

流石に三対一は厳しいからな。

「なのはちゃんごめん！すぐに終わらす！」

「命君！」

負けっぱなしになってたまるか！

〈SIDE OUT〉

〈なのはSIDE〉

命君とユーノ君が行ってしまった。

今ならこの子とお話しできる。

「なんであの男の子といるの？」

「侑斗の事？」

侑斗君ってゆうんだ。

「そう。あの子はいつたい何者なの？なんで命君を敵視するの？」

「…私は知らないし知したくもない。ただこれだけは教えてあげる。侑斗の言葉は聞き流して良いから。真に受けるだけ無駄だよ」

え？

「あ、あの…友達じゃあ…」

「友達？そんなんじゃないよ。彼が使えそうだから手伝わせてあげてるだけ」

なんだかすごく嫌そうな顔してる。この子もあまり好きじゃないのかな…

「で…どうするの？」

そつだ、この子もジュエルシードを集めてる。でも私は争いたくない。

「話し合いでなんとかならないよね？」

「私は、ロストログアの欠片を…ジュエルシードを集めないと行けない。そして貴女が同じ目的なら、私達はジュエルシードを掛けて戦う敵同士」

「だから…そう言うことを決めつけないために、話し合いは必要なんだと思う」

その為に言葉があるのに。

「話し合っただけじゃ…言葉だけじゃきつと何も変わらない。伝わらない！」

彼女は私に黒い斧のような杖を向ける。

消えた！？

違う、速いんだ！

それをしゃがんで避け、空へ飛び上がる。

「でも、だからって！」

彼女は私を追いかけてくる

「賭けて、それぞれのジュエルシードを一つずつ」

『Photon Lancer・set set』

そしてさらに高く飛び私に襲い掛かってきた。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

次々と撃たれる弾丸をユーノが防ぎ二人の攻撃も弾き返す。

すげえなユーノって。

おかげで攻撃に集中できる。

「この！」

アルフの拳が緑のシールドに弾かれ、その瞬間に尾を腕に絡めて投げ飛ばす。

そして後ろから切り掛かるゼロノスにカウンターで切り付け、胸部装甲が火花を散らす。

「ぐわああ!?!」

続けて針を撃ちこむ。

命中するが、装甲を抜けないからか効果は薄い。

「おりゃあ!」

急に横から来たアルフの飛び蹴りを後ろに避け、回し蹴りをくらわす。

こいつは原作キャラだからやり過ぎないように注意しないと。

「こい、デネブ！」

「了解！」

『V e g a F o r m .』

ベガフォームに変身した。

「むん！」

振り下ろしたゼロガツシャーがユーノのシールドにひびを入れる。

まずい、破られる。

後退しながら針を撃つが効いていない。

ベガフォームは重装甲のパワー型。

オルタ無しじゃまともにダメージを与えられないか。

「ユーノしっかり掴まってる！」

左腕の蛇腹剣を振るいながら接近。

刃は弾かれるが右腕の剣を振り下ろす。

ガキン

ゼロガツシャーに阻まれた。続けて左腕の刃を連結させ切り付けようとする。

だが押し戻され、横薙ぎに振られたゼロガツシャーが俺の胸部装甲に切り傷をつける。

強い。

変態とは大違いだ。

なのはちゃんも一人にするのは危険だし…一気に決める！

「ハッ！」

跳躍しスパイラルコーンを展開。

その瞬間、俺の身体が光の輪に捕まる。

なんだこれ！？

たしか…バインド！

「デネブ、あたしが抑える！悪いけど痛い目にあってもらうよ！」

痛い所じゃすまねえよ！

「ごめんよ！」

『Full Charge』

ゼロガツシャーをボウガン型にし俺を狙う。

「ハア！」

緑の矢が放たれた。

ここまでか？

「させるか！」

ユーノが俺の前に飛び出す。

「うおおおお！」

緑の盾に矢命中。爆煙が立ち込める。

「ユーノオオオ！」

ユーノ！畜生！

「命、大丈夫だ。なんとか防いだ」

地面にユーノがいる。

無事か！

バインドを尾で破壊し、ユーノの下に駆け付ける。

『ちっ！淫獣のくせに邪魔しやがって！』

こいつ！

つて、なのはちゃん!?

神の視点で見えた光景には、なのはちゃんの首に金色の鎌が突き付けられていた。

そしてレイジングハートからジュエルシード吐き出され、テストロツサの手に渡る。

「帰ろうアルフ、デネブ」

「さっすが私のご主人様」

『おい、あと一歩なんだぞ!とどめを…』

「侑斗、帰ろう。時間切れだ」

「ま、待って」

なのはちゃんが呼び止める。

「出来るなら…もう私達の前に現れないで…次は止められないかもしれない…」

「貴女の…貴女の名前を教えて!」

『フツ…俺「貴方」の名前は聞いてません』ツンデレパラダイスだな
きめえ。

「フェイト・テストロツサ」

「私の名前は…」

なのはちゃんが名前を告げる前に三人は林の奥へと消えていった。

追いかけても三人を相手にするのは危険だ。

ユーノも怪我してるみたいだし…

やられた…

「ごめん、取られちゃった…」

「俺もごめん。ユーノに怪我させちゃったし」

「え！？大丈夫!？」

「たいしたことないよ」

「旅館に戻ろう」

今回の件と、帰り道になのはちゃんから聞いてわかった事がある。

テストロツサは侑斗を好ましく思っていない事、侑斗よりデネブの方が強い事、アルフも厄介だし…つばさに協力してもらおうか？

いや、（無印介入はしたくない）とか言ってたしな…
しかしやられっぱなしも癪だ。

なにか手立てはないか？

第十九話 湯煙闘争記（後書き）

侑斗キモいよ

デネブ強え

第二十話 わかり合えない気持ち、敵対する心（前書き）

実は、テンプレである無限の剣製をよく知りません
むしろFateよく知りません

がってむ！

第二十話 わかり合えない気持ち、敵対する心

「なのはSIDE」

フェイトちゃん…なんであんな寂しそうな眼をしているんだろう。

侑斗君は…なんで私と命君を引き離そうとするんだろう。

わからない事ばかり。

「いいかげんにしなさいよ！」

アリサちゃんが机を叩く音で意識が戻る。

「こないだから何話しても上の空でボーっとして…！」

「ごめんねアリサちゃん」

「ごめんじゃない！そんなに私たちと話しているのが退屈なら一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！行くよすずか！」

「ア、アリサちゃん…！」

アリサちゃんが怒って教室から出て行っちゃった。

「なのはちゃん…！」

「いいよ、すずかちゃん。今は、なのはが悪かったから」

「そんな事ないと思うけど…アリサちゃんも言いすぎだよ。少し話してくるね」

「うん…ごめんね」

そう言ってすずかちゃんはアリサちゃんを追いかけて教室から出ていった。

「…怒らせちゃったなあ、ごめんねアリサちゃん」

魔法の事を話す訳にはいかないし…

「怒ってるな、アリサ」

命君が私の前の席に座る。

「うん…」

「仕方ないさ。早く終わらせれば良いだけだ」

終われば…でもその前にフェイトちゃんと…

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

足に魔力を集中させる。

そして跳躍、さらに小さな障壁を足の裏に展開する。

「11のー!」

そして障壁を踏…めずに墜落する。

「難しいなあ」

「やっぱり命にもデバイスが必要かな」

「だけどユーノは無しでもやってのけてるし、なのはちゃんも色々覚えてきてるじゃないか」

「僕は学校を卒業してるからね。なのはは…本当に天才だよ。でも命もすごいよ、この短期間でデバイス無しでもこれだけやれてるんだ」

流石主人公、天才ときたか。

「ありがとな」

「でも純粹な魔力運用がまだまだだ。もしかしたノ術式が合ってるな

いのかもしれない」

「術式？」

「僕やなのが使うミッド式以外の術式…ベルカ式が命には合ってるのかもしれない」

二人とは違う術式…流派みたいなものか。

「命は外骨格…自分の身体に魔力を付属させて魔法を使ってる。ベルカ式は、武器や徒手を用いて接触した対象に直接魔力を叩き込むのを基本としている対人戦闘に特化した魔法なんだ」

…俺に最適だな。

「でもユーノはミッド式だから…無理か」

「ごめんね。基本的な魔力運用は教えられるんだけど…」

「かまわないさ。魔力変換素質つてのも見つけられたんだし」

あれはかなりの戦力アップだ。

毒の効かない無生物に対しても有効な手段が手に入ったんだ。

さて、そろそろジュエルシード探しに出かけますか。

辺りはすっかり暗くなり夜になった。
そろそろ夕食の時間だな。

「ううん…タイムアウトかも。そろそろ帰らないと」

「あんまり遅いと心配するしね」

「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し探してくから」

「一人で平気か？」

「平気。だから晩御飯とっといてね」

そう言ってユーノは俺の肩から飛び下り、そのまま手を振って走って行った。

「じゃあ帰ろうか。あんまり遅いと、母さん達も心配するかもしれないし」

「うん」

家に向かって夜の街を走る。

「あ」

「どっしたの？」

なのはちゃんが立ち止まり携帯を取り出した。

「メール？」

「うん。アリサちゃんとすずかちゃん、お稽古が終わって帰る頃か
なって…でも来てなかった」

「そうか…」

どうすっかな…

「あっ」

「来たか」

ジュエルシードだ。
帰ろうとしたらこれか。

反応のあった場所へ走る。

「レイジングハート、お願い！」

「エクステンド！」

そして二人して変身。

すると地面から青い光が立ち上るのが見える。

「二人とも、発動したジュエルシードが見える？」

「ああ」

「すぐ近くだよ」

「あの子達が近くにいるんだ。先に封印して！」

「わかった！」

レイジングハートの形が変わり、先端から桃色の光が放たれる。

いや、なのはちゃんより一歩先に金色の光がジュエルシールドに到達する。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシールド、シリアルXIX！」

「封印！」

二本の砲撃が直撃し、ジュエルシールドは沈黙した。

「やった。なのは、早く確保を！」

「そつはさせるかい！」

橙色の狼、アルフが飛び掛かってきた。

「ユーノ防壁！」

ユーノをなのはちゃんの所に投げる。

そして緑のバリアがアルフを跳ね返す。

「ちょっと、投げないでよ！」

「悪い悪い。それよりも……」

テストロッサと侑斗……いや、ゼロノスが俺達を見下ろす。

「この前は自己紹介できなかったけど、私なのは、高町なのは。私立聖祥大学付属小学校三年生」

そしてなのはちゃんが俺を見る。

テストロッサに名乗るのは良いけど、あの変態にも名乗る事になるのは嫌かな。

「なのはか……君に似合って可愛「俺は千路命だ」おい！」

やっぱりこいつがムカつくから遮っとく。

『Scythe Form』

「っ！」

なのはちゃんがレイジングハートを構える。

ユーノもアルフと対峙してる。

『Flier Finn』

なのはちゃんが空へ飛び、テストロッサが追いかける。

俺の相手はいつもの変態か。

「悪いが今回はお前の相手をする余裕が無いからな。デネブ、頼むぜ」

「了解！」

何かあるのか？

「どういづつもりだ。この後一体何がある」

「ジュエルシードが暴走するんだ。フェイトが押さえるんだが、怪我する。オリ主の俺が代わりにね」

不気味な位まともな事言ってるな。

「格好良く解決して怪我した所フェイトに手当してもらったのさ。なのはにも俺の勇姿を見せてやらなきゃいけないし」

前言撤回。やっぱりまともじゃない。

「その欲望に忠実な所を褒めるべきか、けなすべきか……」

「主人公が活躍して何が悪い」

主人公はなのはちゃんだろ……

そうだなのはちゃんは……

いた。……まで、何故二人してジュエルシードに突っ込む？

そして二本の杖がジュエルシードと衝突する。

その瞬間、凄まじい閃光が周囲を青く染める。

これが暴走？

なんかヤバい！

「なのは！」

「フエイト！」

二人が吹き飛ばす。

「なのはちゃん！」

急いでなのはちゃんの下へ走る。

怪我とかはなさそうだ。

「大丈夫？」

「大丈夫。でも……」

ジュエルシードが怪しく脈動する。

あれどうするんだ。

危なっかしさ全開だろ。

「よし！この俺に任せ…あべし！？」

侑斗が走りジュエルシードに近づくが、侑斗の頭をテストロッサが踏み付けて先にジュエルシードを握る。

「止まれ…」

テストロッサが膝をつき、手から光が溢れる。

「止まれ…止まれ…」

手袋が破れ出血している。

「止まれ…止まれ…！」

そして光が収まる。

一人でやりやがった…

「フエイト！」

ふらつくテストロッサを人間形態のアルフが支え、俺達を睨むと彼女を抱き抱えて立ち去っていった。

「さらばだ、麗しき少女よ！次こそ君を救ってみせる！」

「さよなら！」

馬鹿とデネブもアルフを追いかけていく。

「……フェイトちゃん大丈夫かな……」

「あまり大丈夫じゃなさそうだな」

多分原作どつりの状況だ。

怪我するって言ってたし。

しかし、尚更気持ち悪くなってたなあいつ。

麗しき少女って…

なのはちゃんが可愛いのは同意できるが…

あいつが言つと鳥肌が立つ。

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

畜生、作戦失敗か。

部屋から追い出されたし、どうするか。

報告も一人で行くつてたし…恥ずかしがらなくても良いのに。いや、俺の事を心配してくれてるのかもしれないな。

(母さんに近づかないでほしいだけだよ)

なんか雑音が聞こえたような…

まあ良いや。

俺は自力で行けば良い。ゼロライナーは次元空間航行ができるしな。

フェイトがプレシアに虐待されてる所に颯爽と現れて助ける。完璧。

フヒヒヒ 早速準備に取り掛かるか。

「侑斗、座標わかる?」

「……あ」

あんな長いの覚えてる訳無いだろ!

オリ主なのに!何故だあ!?

予定変更だ!帰って来た所を慰めてやれば良い。

そうだ、俺は悔しいがチートじゃない。

主人公は困難を乗り越えるもんだ。

あいつも俺の踏み台でしかない。

よし、なのはのフラグも順調だし……そろそろはやてにも声をかけてみるか。

第二十話 わかり合えない気持ち、敵対する心（後書き）

命がフェイトをテストロッサと呼びますが、つばさから詳しい事情を聞いていないため、彼はフェイト「なのはの敵と認識しているせいで

侑斗は苗字を知らないため名前かゼロノスと呼びます
たまに変態と呼びますが

第二十一話 三人目の魔法少年（前書き）

タイトル？知らんなあ

第二十一話 三人目の魔法少年

〔命SIDE〕

なのはちゃんの机の上にひびの入った赤い宝石が置かれ点滅してる。
前回の出来事でレイジングハートが破損してしまったのだ。

「ユーノ君、レイジングハート大丈夫？」

「うん。かなり破損は大きいけど、きつと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させてるから、明日には回復してると思う」

自動修復機能が、凄いもんだな。
流石魔法とゆう名の超科学の杖。

「うん…」

なのはちゃんが悲しそうに俯く。

「なのはちゃんは大丈夫？」

「うん、レイジングハートが守ってくれたから…ごめんね、レイジングハート」

しかしあんな凄い事になるなんて…思い出すだけで身震いするな。
色々イヤかったし、下手したらあの辺り一帯が吹っ飛んでたかもしれないし……

もうあんな事になるのはごめんだな。

条件は同じ。向こうも破損して修復してるはずだ。

テストロッサの回復が遅いと良いんだけど…

いや、そんな都合良い訳ないか。

多分あつちも同く、明日には回復してるかもしれない。

次は気おつけなきゃな。

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

はやてに会うため図書館に来た。

姉のやつはこの時間なら学校のはずだ。

つまり、今なら本が取れなくて困ってるはやてを華麗に手助けする事ができる。

さて、はやては何処だ？

い、いない？

まで、落ち着け。まだ来ていないだけだ。

もう少し待ってみよう。

や…やばい。もう夕方になる。

ジュエルシードが発動するよ。

結局フェイトを慰める時間もなくなっちまったし。

今日の所は運が悪かったただけだ。

毎日来るとも限らないしな。

夕方は念願のKYをボコボコにできるチャンスだ。

フェイトを逃がして残るか？

そんでアースラでもリンディを言い負かして…

ああでもそれじゃフェイトの味方であるのが難しくなるな…

「ママー、あのお兄ちゃん変だよ」

「シッ、見ちゃダメ！」

そうだな、クロノをボコるだけにしよう。

あいつがリンディを言い負かしても、殺せば無かった事になるし。

フヒヒヒ！

楽しみだなあ！

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

あ…あかん。

春やつちゆうのに、風邪をひくなんて…

でもはやてがひかなくて良かったわ。

「お姉ちゃん、お粥作ったで」

はやてが部屋に入ってきた。

車椅子に取り付けられたプレートには茶碗が乗っかってる。

「そこに置いていて」

うちは枕元を指差す。

「大丈夫？食べれる？」

「大丈夫や。うつすとあかんし」

食事位ならできるし。

「ほな、何かあつたら呼んでな」

はやては枕元にお粥の入った茶碗を置き部屋から出ていった。

今日図書館の本の返却日やったのに…

悪い事してもうたな。

怠いなあ…頭もボーっとするし。

起き上がって茶碗の蓋を開ける。

湯気が立ち上り、中には一つの梅干しが見える。

スプーンで掬って口に運ぶ。

熱い。

でも美味しい。

梅干しのすっぱさと塩加減が最高や。

あゝええ嫁さんになるな、はやては。料理スキル高くて羨ましいわあ。

とにかく、うちは早く風邪治さなかあんな。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

夕方。

学校帰りのバスから降りると、レイジングハートを首からぶら下げたユーノが迎えに来た。

なのはちゃんがユーノからレイジングハートを受け取る。

どうやら修復が終わったようだ。

「レイジングハート、治ったんだね？よかった……」

『Condition green』

「大丈夫みたいだな」

「……また、一緒に頑張ってくれる？」

『勿論です、マスター』

「ありがとう……」

これで一安心だな。

ジュエルシードが出てもなんとかかなりそつだ。

そして三人で帰路につく。

っ！？

ジュエルシード？

タイミングが良いんだか悪いんだか。

この方角は公園か。

「急ごう！」

公園へ向かって走り出し、途中で変身する。

「封時結界、展開！」

ユーノが結界を展開する。

空気が変わり結界が展開された。

相変わらず気味悪い空だ。

オオオオオオ!

公園の真ん中にはジュエルシードを取り込んだ木が居る。
まるで絵本に出てくる木のお化けだな。

あいつらは…まだ来てないか。

好都合だ。今の内に!

すると何処からともなく金色と黄緑の魔力弾が木に向かって飛んでくる。

だが木の周りに青いバリアが張られ、魔力弾を掻き消す。

「わああ、生意気にバリアを張るのかい」

「うん…この間より強いね。それに…あの子達もいる」

「フツ……燃えてきたぜ」

テスタロツサとその使い魔、それと変態か。

化け物は地面から伸ばした根を振り回し攻撃してくる。

「ユーノ君、逃げて!」

ユーノが林の中へと飛び込む。

『Flier Fin.』

なのはちゃんは飛び上がる。

俺は蛇腹剣を奮い根を切断していく。

根が簡単に切れたから、どうやらバリアは本体だけのようだ。

『Full Charge.』

「スプレッドエンド！」

侑斗のやつもフルチャージしたゼロガツシャーで根を切り刻んでいく。

「デイベイン！」

『Buster.』

上空からなのはちゃんが砲撃を放つ。

バリアによって阻まれるが、膨大な魔力がバリアごと化け物を押し潰し、地面が陥没していく。

「貫け、轟雷！」

『Thunder Smasher.』

さらにテストロッサの砲撃が横から放たれた。

そしてついにバリアを貫き、化け物に直撃。

化け物は消えジュエルシードが現れる。

『Sealing mode set up.』

『Sealing form set up.』

「ジュエルシード、シリアルV?!」

「封印!」

ジュエルシードの封印が終わる。

なのはとテストロツサは宙に浮かんで向き合う。

「ジュエルシードには衝撃を与えないほうがいいかもね」

「うん、私のレイジングハートとフェイトちゃんのバルディッシュも、あんな事になるのは可哀想だから」

「だけど、譲れないから」

『Device form.』

彼女の杖が変形する。

「私は……フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど……」

『Device mode.』

「……私が勝って……ただの甘ったれじゃないってわかったら。お話聞

いてもらえる？」

ん？ちょっと待て、あんなジュエルシードの近くで戦って良いのか？

……あ。

「ストップ！何考えてんだ二人とも！危ないだろ！」

「何決闘の邪魔してんだ！お前もKYか？今度からお前の名前はKY二号だ！」

二号って…

「馬鹿か！？核弾頭の目の前でドンパチするようなもんだぞ！流れ弾の一つでも当たってみろ、今度は前回どころじゃすまないかもしれないぞ！」

「あ…え、えと…そうだった…」

「……」

なのはちゃん達は地面に降りてきた。

「貴様あ！絶対に許さん！」

侑斗が低空飛行でこちらに切り掛かってくる。

人の話し聞いてたのかよ！？

この馬鹿野郎！

刃を連結させ迎え撃つ。

「死ねえ！」

ゼロガツシャーが振り下ろされる。

俺は右腕の剣を振り上げるように奮う。

俺達の斬撃がぶつかり合うその瞬間、突如水色の魔法陣が展開され、そこから黒髪の少年が出てきた。

「ストップだ！ここでの戦闘行動は危険すぎる！」

少年は障壁で俺の剣を、杖でゼロガツシャーを受け止めた。

誰だ？

俺より少し低い身長。恐らく十二歳前後だろう。

「け、KY…このタイミングで…！」

少年の事を知ってる？

そうか、彼も原作キャラか。

成る程、一号ってのは彼だったのか。

「时空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

时空管理局？

つばさの言ってた組織の人間か…

第二十一話 三人目の魔法少年（後書き）

私は結構クロノ好きですよ

第二十二話 介入者、管理局（前書き）

時空管理局登場です

第二十二話 介入者、管理局

〈侑斗SIDE〉

まさかこっちに来るなんて…
だが好都合！このままKY討伐といかせてもらおう！

「何者かは知らんが、悪の怪人討伐を邪魔するとは…正義の名において成敗する！」

「待て、戦闘行動は危険だと言ってるのがわからないのか!？」

俺は飛びのきゼロガツシャーをボウガン形態に組み換える。
そしてベルトからカードを抜き差し込む。

「あの馬鹿…俺達の話しを聞けよ！」

『Full Charge』

「グランドストライク！」

二人まとめてぶちのめすぜ！

ゼロガツシャーから光の矢を放つ。
だが生意気にも二人とも避けやがった。

「KYのくせに生意気な！」

「やれやれ…君も僕をそう呼ぶのか…だがこれで確信が持てた」
クロノは飛び上がり俺に杖を向ける。

「君もそのベルトを破壊すれば大人しくなるとね」

「な…!?!」

なんでベルトの事を!?!

そうか、他のモブ転生者か。

そいつらの中に仮面ライダーの転生者がいたんだ。

オリ主の俺の足を引っ張りやがって…

「ざけんな!」

ゼロガツシャーをサーベル形態に組み換えて振り下ろす。

だが避けられ空振りし、後頭部に回し蹴りが命中する。

「おわ!?!」

ちっ!効かねえんだよ!

振り向いた瞬間、ベルトに杖が押し付けられる。

「ブレイク…!」

まずい!

だが橙色の魔力弾が降り注ぎ、クロノがシールドで防いでる内に離脱する。

「逃げるよ！時間稼ぎ手伝いな！」

「アルフ！」

たしかにKY討伐はなのは側の特権だ。まあ良い。チャンスはたっぷりとある。

「っ！？お前！」

フェイトがジュエルシールドに飛び付く。

化け物め、邪魔させるか！

「喰らえ！」

虫みたいな怪人…たしか命つつたな。そいつに魔力弾を撃つ。

「うわ！？」

魔法陣のようなもので防いだ。

時間稼ぎのためだ。防がれても構わん。

「フェイト！」

フェイトが落ちてる？

あのKYか！

よくも俺の（ここ重要）フェイトを！

落ちたフェイトをアルフが受け止める。

そして追い撃ちをかけるようにクロノが杖を向ける。

させるか！

「デネブ、ゼロライナーだ！」

『了解！』

突如空間に穴が開き、そこからゼロライナーが出現。
フェイト達の盾になり魔力弾を防ぐ。

「アルフ、フェイトを連れて乗れ！」

「もつと早く呼びなよ！」

「悪い！」

デネブを待機させといて正解だったぜ。

「え？電車？しかも線路が？なんで？」

「……………」

なのはは混乱し、淫獣は呆然としている。

フツ…時が来れば乗せてあげるぜ

アルフが乗ったのを確認し、俺も飛び乗る。

「デネブ、出せ！」

『ゼロライナー発進！』

ゼロライナーが動き出し、空中に線路を形成しながら走る。

「待て！」

クロノが撃ってくるがびくともしない。

そんなんでゼロライナーを傷付けられるかっての。

空間に穴を開け俺達は転移した。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

デネブがいらないと思ったらゼロライナーに待機させてたのか。まんまと逃げられちゃった。

ハラウンがジュエルシードを取る。

すると近くに魔法陣が展開し緑の髪をした女性が映ってる。

『クロノ、お疲れ様』

「すみません、片方は逃がしてしまいました」

『ううん、まあ大丈夫よ。でね、ちょっと話しを聞きたいから、そっち子達をアースラに案内してくれるかしら？』

「了解です、すぐに戻ります」

魔法陣が消える。

「とゆう訳だ。事情聴取のために来てもらうよ」

「わかりました」

ユーノは時空管理局とやらを知ってるのだらう、すぐに返事をした。

「行くう、ユーノも時空管理局とやらを知ってるみたいだ。名前からして司法組織の類いだらう、下手に逆らわない方が良い」

「うん」

そうして俺達は魔法で転移した。

で、付いた先はまるでSF映画で出てきそうな宇宙船とか要塞の中みたいな場所だ。

「ユーノ君、ここは？」

「時空管理局の次元空間航行艦船の中だね」

「ようするに異世界を渡る船か」

「そうだよ」

「じゃあ時空管理局って？」

「さっき命が言ったように、二人の世界の警察とかに似た組織だよ。いくつもある世界に干渉する大掛かりな組織なんだ」

「ふーん」

「いくつも…ねえ」

だいたいわかった。

急にハラオウンが立ち止まり振り向く。

「ああ、いつまでもその格好とゆうのも窮屈だろう。バリアジャケット

ツトとデバイスは解除して良いよ」

「あ、そっか。そうですね、それじゃあ…」

なのはちゃんが制服姿に戻る。

ついでに俺もエクステンドを解除する。

「君も…元の姿に戻っても良いんじゃないか」

「ああ、そういえばそうですね」

「すっかり忘れてたけど、ユーノって人間だったんだっけ」

「私も忘れてた…」

いつもフェレットの格好だったしな。

するとユーノの身体が光り出し、金髪の美少年が現れる。

……はい？

「二人にこの姿を見せるのは初めてだったね」

「へえー、ユーノ君ってこんな子だったんだ」

「全然イメージと違うんだが…」

遺跡発掘とかやってるから、こんな優男じゃなくてもっとスポーツ少年みたいなイメージがあったんだが…

「じゃあ行くところか。艦長が待っているのですね」

さっきの女性か。

そんな訳で案内されたんだが……

「艦長、来てもらいました」

なんだこれ？

盆栽がいくつも置いてあり、畳がおかれその上に茶道用具一式、そしてししおどしも置いてあり和風の雰囲気……いや外国人の古い日本のイメージをそのまま表したようだ。

すさまじいな……

そして畳の上の赤い絨毯の上で正座してる女性がいた。

艦長さんか。

「お疲れ様。どうぞどうぞ、楽にして。」

座ると羊羹と抹茶が出された。

そして自己紹介をしたのだが……

「ちょっと待て、君達は同じ年なのか？」

「よく言われます」

「昔から兄妹みたいって言われるの」

俺がでかすぎるだけなんだがな。

「馬鹿な…僕より年下なんて…」

もしもし？

「気にしないで、貴方が少し羨ましいだけだから」

羨ましいねえ…

「じゃあ事情を説明してくれるかしら？」

そして今までの事を話した。

ユーノの事故、俺達との出会いを。

「なるほど…あのロストロギア…ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「…それで、僕が回収しよう」と

「立派だわ」

「だけど…同時に無謀でもある」

ここまで言われると少し傷つくな。

無謀はないでしょ。

「あの…ロストロギアってなんなんですか？」

なのはちゃんが艦長…リンディさんに向かって質問した。

「まあ、遺失世界の遺産…といっても分からないわね」

……いわゆるロストテクノロジーの類いかな？

えっと…と少し考えてからリンディさんから少し長い説明が始まった。

「次元空間の中にはいくつもの世界があるの。それぞれに生まれて育っていく世界…：その中にごく稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれらが、自分たちの世界を滅ぼしてしまつてその後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産」

「それらを総称して、ロストロギアと呼ぶ」

リンディさんの説明からハラオウン…：ってごちゃ混ぜになるな。ク
ロノが話しをつないだ。

「使用法は不明だが、使いようによつては世界どころか次元空間さえも滅ぼすほどの力を持つこともある、危険な技術…」

「然るべき手続きをもつて、然るべき場所に保管されてなければいけない品物。あなたたちが探しているロストロギア…：ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし…：最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時に発生した振動と爆発、あれが次元震だよ」

あれか…

「たった一つのジュエルシードで、全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まって動かした時の影響は計り知れない…」

「聞いたことがあります。旧暦の462年、次元断層が起こった時のこと…」

「ああ、あれはひどいものだった」

「隣接する並行世界がいくつも崩壊した、歴史に残る悲劇」

そう言って三人が顔を伏せた。

「繰り返しちゃいけないわ」

湯呑みに角砂糖を入れる。

……なんだこの人は？
味覚が狂ってるのか？

「これより、ロストロギア…ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「「「え？」「」」

マジ？

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「えっ！？でも！」

成る程ね、これでなのはちゃんが手伝うとか言っただけで物語が進むのか。

「次元干渉が関わっているんだ。民間人の出る話じゃない」

正直俺は原作なんか知ったこっちゃない。

なのはちゃんを説得して関わらないようにすれば、なのはちゃんが危険な目にも会わないしつばさとも争わなくてすむ。

「二人とも、この人達に任せよう」

「命君？」

「この人達はプロだ。その方が確実だし、ユーノだって安心だろ？」

「それもそうだけど…」

「まあ気持ちの整「今までだって結構危ない目に会ったんだ。俺はなのはちゃんを危険に晒したくない」あの…」

「そう…だね。ユーノ君だって家に帰れるし」

おお！

いける！

「二人にも迷惑かけられないし…うん。お願いします」

よっしゃ、ユーノも乗った！

これで勝つる！

「え？あ、その…」

「じゃあ俺達帰ります」

そう言っただけで立ち上がろうとする。

「ま…待ってください！」

「」「」「はい？」「」

「艦長？」

なんだ一体？

「その…やっぱり手伝ってもらえませんか？」

なんですと？

「いや…さっき関わるなって…」

「実は人手が全然足りないのよ。でも管理局から一般人に協力を要請できないから…あなた達から協力を申し出るのを待ってたの…」

……なんじゃそりゃ。

「管理局は万年人手不足でね……図々しいとはわかっているんだけど、お願いできないかしら？」

俺達は顔を見合わず。

「やります！フェイトちゃんともお話したいですし」

「元々は僕の責任ですしね、手伝います！」

……馬鹿な。

いや、口ではああ言ってたけど二人とも本当は手伝いたかったんだな。

仕方ない、なのはちゃんが心配だし、ユーノとこのままさよならってのも寂しい。

しかもあの変態をとっちめるチャンスもあるしな。

「二人がやるなら俺もやるよ」

「本当？助かるわ」

リンディさんが嬉しそうになのはちゃんの手を握る。

「あと…貴方の力について質問したいのだけど…」

そう言って俺を見る。

「俺？」

第二十二話 介入者、管理局（後書き）

命「なんでベルトの事を知ってたの？」

クロノ「一年位前から僕をKYと呼ぶ連中に喧嘩を売られてね。その中に派手なベルトをしたやつらがいたんだ。やっぱり同類だったか」

命「で…そいつらは？」

クロノ「てこずった事もあるが返り討ちにしたよ。闇雲に力を振り回すだけの連中に負けはしないさ。おかげで良いトレーニングになったよ」

つばさ（原作より強くなつたらん？）

第二十三話 協力（前書き）

母親が180以上…

将来2mいくかな？

第二十三話 協力

「ええ、緑の子の攻撃を防いだ魔法陣：私達のと違うし、何より魔力が感知されなかった：そしてあの姿。貴方は一体何者なの？」

「それに悪の怪人と呼ばれていた事も説明して欲しい」

「「「あの人（変態）の言う事は忘れてください」「」」

「そ…そうか」

「…どうすっかな。」

本来俺はこの世界ではイレギュラーの存在だ。しかも俺の存在のせいで【EX!】の世界とも繋がっちゃってる。

帰った所で居場所もないしな。

時空管理局が他のリゼンブラやエクスター達とも関わる可能性もあるから…話しといた方が良いかな。いや、でも簡単に話すのも危険だな。

「えっと…命君は…」

「俺が話すよ」

とりあえず母さんから教わったと話した。

ついでに母さんはこの世界ではなく別世界出身だと話していた。

これなら多少は誤魔化せるな。

「そう……じゃあ貴方のお母さんは次元漂流者だったの……」

「次元漂流者って何ですか？」

「簡単に言うと、異世界に迷い込んだ迷子だよ」

なのはちゃんの質問にクロノが答える。

迷子か…

「ならば貴方とお母さんを管理局で保護します」

保護？

「大丈夫ですよ。この世界で戸籍もありますし。母さんは帰る気な
んか有りませんよ」

「そう……ならもう一つ聞かせてくれないかしら？」

「良いですよ」

「貴方とお母様は人間かしら？」

っ！？

俺もなのはちゃん、ユーノも驚く。

「図星か。彼の言ってた【悪の】というのは嘘らしいが、【怪人】
は本当らしいな」

「…詳しく話してもらえないかしら？貴方達を助けられるかもしれないわ」

助けるって……

俺がどっかのマッドサイエンティストに改造されたとも思ってるのかね…

「私達の世界でも違法に命を遊ぶ人もいるの。そういう人から救出、保護をするのも私達の仕事なの」

やっぱりか。

たしかに女性同士の子供って事で多少はいじってるけど…

「…わかりました話します」

これ以上隠してると無駄に怪しまれるな。

下手すると二人に迷惑をかけちまうし…

とりあえずリゼンブラについて簡単に説明した。

「次世代改造人間か。全く、君の母親の生まれた世界の人々は何を考えていたんだか…」

「でも母さん達の世代で、だいぶ世間とも馴染んでいたみたいですし」

実際EX！本編で社会奉仕活動とか色々やってたしな。

「事情はわかりました。やはり貴方達を管理局で保護します」

「なんでですか!？」

「俺も母さんも犯罪に繋がるような事はしていませんよ!」

「いくら貴方のお母さんの生まれた世界では一般的な事でも、貴方達のような力を持った人達を放っておく訳にはいかないの…お母さんも連れて来てもらえないかしら？」

……は？

つまり俺達が純粋な人間じゃないからこっちに来いと？

「冗談じゃない、断固拒否する!」

「そうですね!命君も美尋さんも私達の家族です、絶対に嫌です!」

「だが君達を放っておけないのは事実だ。悪いようにはしない」

「私達は保護を申し出てるだけよ。悪い事じゃないと思うんだけど子供だからってナメてるな。保護だと?俺は珍獣なんかじゃない。」

そしてそんな事は母さんも望んじやいない。

「何度言われても断ります。差別されるつもりはありませんから」

「差別だなんて…誤解よ!」

「しているじゃないですか!命達が自分達と違う人間だから保護する…仕事だとゆうのはわかりますが、横暴すぎる!」

ユーノも立ち上がり講義する。

「母さん達は世間から認められるように努力してきた。特別視して欲しい訳じゃない、同じ存在として見て欲しいだけなんです！」

そう…力があるから敬えとは言わない。
ただ、一緒にいたいだけだ。

「……………わかりました。私達はもう何も言いません」

「母さ…艦長！彼らをこのままにする訳には…」

「クロノ執務官、彼は保護の拒否をしているのよ。強引に連れてくのは誘拐になります。それに今まで問題もなかったようだし、このままで良いと思うわ」

「……………わかりました」

話しはついたな。

「ごめんなさい、こんな事になって」

「仕事だったのはわかってますから、大丈夫です」

「そう言ってもらえると助かるわ。あと協力の件なんだけど…」

「あ…お母さん達にどうやって説明しよう…」

う……………そうだ。母さんも少しは感づいてるだろうし…

「私が説明するわ。これからあなた達を預かるんだし」

リンディさんがウインクしながら答えた。

よかった。

正直、説明する自信が無いしな。

ん？まてよ……そつだ。

「あの、魔法関係の傷害事件も時空管理局の管轄内ですよね？」

「ああ。治安維持や次元犯罪者の検挙も僕らの仕事だ」

ピンゴ！

「命君！」

「うん。あの、実は……」

俺はゼロノス…侑斗について話した。

俺が襲われた事、母さんが大怪我をした事を。

「フェイトちゃんは関係ありません。多分、知らないんだと思います」

「成る程ね……わかりました。彼は殺人未遂と傷害罪が適応される

わ。彼の逮捕も視野に入れときましょう」

「「ありがとうございます！」」

よし、これで味方が増えた。

覚悟しろ変態！

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

俺達は今、フェイトの拠点であるマンションに居る。

「ダメだよ！時空管理局まで出てきたんじゃない、もつとつにもならないよ。逃げようよ……二人でどっかにさ……」

「それは……ダメだよ」

畜生！KYにやられるなんて……転生者の恥だろ！

「だって！雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導士だ！本気で捜査されたら……ここだっていつまでバレずに居られるか……あの鬼ババ、あなたの母さんだって、訳わかんないことばっか言うし！フェイトに酷いことばっかするし！」

「母さんのこと……悪く言わないで」

なんとかしてボコれないかな……

「言うよ！だってあたし……フェイトの事が心配だ！フェイトが悲しんでると、あたしの胸も千切れそうに痛いんだ……フェイトが泣いてるとあたしも目と鼻の奥がズンとして、どうしようもなくなるんだ！フェイトが泣くのも悲しむのも……あたし嫌なんだよ！」

「……私とアルフは……少しでも精神リンクしてるからね。ごめんね、アルフが痛いなら、私もう悲しまないし泣かないよ……」

それにプレシアをどうするかだな……

俺じゃあアリシア蘇生を餌にするのはできないし……

「あたしは……フェイトに笑って幸せになってほしいだけなんだ！なんで……なんでわかってくれないんだよお」

「ありがとう、アルフ。でもね……私、母さんの願いを叶えてあげたいの……母さんの為だけじゃない……きつと、自分の為……だから……」

くそ……なんでこんな中途半端なんだよ。せつかくアリシアとフェイトを姉妹でゲットするチャンスなのに。

「アルフ、後……もう少し……最後までもう少しだから……私と一緒に

「頑張ってくれる？」

あの下手物はそんな力ある訳がないし……仕方ない、諦めるか。プレシアには原作どつりに退場してもらって、フェイトを慰めてやれば良いさ。

「約束して。あの人の言いなりじゃなくて……フェイトはフェイトの為に……自分の為だけに、頑張るって。そしたら……あたしは必ずフェイトを守るから……」

「うん」

「ウオオオン！グス……俺も頑張って手伝うよ！皆でやろう！」

チーン！

「なあ侑斗……」

デネブが鼻をかみながら答える。

「おいおい……俺は最初からフェイトの味方だせ？当たり前前の事を言うなよ」

「まあ……今回は役に立ったから良しとするか……」

アルフが頭をかきながら座る。

「これからは大変になる……侑斗、ゼロライナーは？」

「問題無し！あんなんじゃないくともしねえぜ！」

流石になのはの砲撃は知らんが。

「ちゃんと働いてよ？デネブもお願いね」

「おう！」

さて……無印も半分を越えた。

アリシアは残念だが…仕方ないか。

〈SIDE OUT〉

〈リンデイSIDE〉

なのはさんと命さんのご家族への説明も終わった。

嘘つきね…いいえ、ご家族の方々も薄々気付いていたわ。
勘の良い人達……

「ハラオウンさん」

家の門をくぐり外に出た所、誰から呼び止められた。後ろを振り向くと、銀髪に眼鏡、背の高い隻腕の女性がいた。命さんのお母さん…千路美尋さん。

「命さんのお母さんですか。どうしましたか？」

すると彼女の袖口から鎖が飛び出し私の首に巻き付く。そして私を引き寄せると壁に押し付けた。

「な…何を…？」

「貴女が息子達と何をしようとしてるのか、聞いても答ええてくれないでしょ…私は息子が自分の意思で決めた事に口出しするつもりは無ありません。だが、これだけは言わせてもらいます」

彼女は私に顔を触れそうな位近づけた。

「二人にもしもの事があれば、私は貴様を許さない。地の果てまで追いかけてバラバラにしてやる」

彼女の目は本気だ。

…でも、悪意は無い。

ただの我が子を心配する母親の目……

人種は違えども、母親である事は変わらない…

私は心の何処かで二人を見くびっていたのかもしれない。でも、その考えは新ためなければならぬ。

彼女も私と同じ母親なのだ。

ならば私のやるべき事は一つ。

「私も息子がいますから、貴女の気持ちはよくわかります。大丈夫です、私に任せて下さい」

「……………」

美尋さんはゆっくりと手を離し、鎖を解いた。

「失礼しました。二人をよろしく願います」

そして頭を下げた。

「ええ、必ず……」

人様の子を預かる……

私は、その責任を負う。

必ず、無事に帰します。

第二十三話 協力（後書き）

命「侑斗（変態）、お前の罪を数えろ！」

侑斗「俺の罪……フェイトとなのはを魅了した事かな」

つばさ「……ここまでくると呆れてなんも言えへんな……」

第二十四話 特訓（前書き）

ワイルドカリスって格好良いですよね

第二十四話 特訓

くつばさSIDEく

「そういう訳で、千路君と高町さんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです」

管理局が来たんか。

無印は半分は過ぎたな…

「二人がお休みの間、ノートとプリントは…」

「はい！」

アリサが勢い良く立ち上がる。

「アリサさん、それじゃあよろしくね」

「はい！」

さて、命はどうするんやろ…

まあ、うちははやてが関わらんように注意すればええ。

……気おつけてな。

敵はゼロノスとフェイト、アルフだけやあらへん。

健闘を祈っとるで。

〈SIDE OUT〉

〈ユーノSIDE〉

僕達はアースラの会議室にいる。
事態の説明と僕達の紹介のためだ。

「というわけで…本日0時をもって本艦全クルーの任務をロストロギア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件については…特例として…本ロストロギアの発掘者でもあり…結界魔導師でもあるこちら…」

「はい、ユーノ・スクライアです」

席を立ち挨拶をする。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師方」

「た、高町なのはです」

「千路命です」

二人が立ち上がり挨拶する。

二人共学校の制服だ。

この服が二人の正装らしい。

「以上三名が臨時局員として事態に当たってください」

「……よろしくお願いします」「」

三人でお辞儀をする。

するとクロノの視線に気付いたのはがクロノに微笑んだ。
クロノは真っ赤になって顔を逸らしす。

「……ユーノ。何故か無性に腹が立つんだが」

……全く。

自分の気持ちに気付いていないのかな？

「知らない」

お似合いなのに……

本当、鈍感だよ二人共。

そして会議が終わりアースラのブリッジに来た。

「じゃ、これからジュエルシードの位置特定はこちらでするから……
位置特定が済んだら直ちに現地向かってもらいます」

「「はい!」「」

それまでは時間があるのか。

「あの…ちょっとお願いがあるんですが…」

命が恐る恐る手を上げる。

「何かしら?」

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

空中に展開した頂点が円の三角形の魔法陣の上に立つ。

「乱れ鉄鎖!」

両腕の袖口から鎖を射出、前方の的に巻き付ける。

「爆碎！」

鎖に魔力を流し、的を破壊する。

「命、どう？」

「うん、前よりずっと楽だ」

リンデイさんに頼み訓練室とベルカ式に関する資料を借りた。勿論俺は読めないからユーノに読んでもらったが。おかげで術式もわかり、ある程度は習得できた。

「魔法陣の形、違うんだね」

「そっだよ。でもよかった。乗組員にベルカ式の人がいなかったけど、教本はあったからね」

全くだ。

ベルカ式の人がいいたら色々教えてもらえたけど…まあ贅沢言っても仕方ないか。

「なんか少し似ているな。もっと違う感覚かと思ったんだけど」

「近代ベルカ式だからね」

「近代？じゃあ古代もあるの？」

たしかに…

近代があるなら古代もありそうだな。

「近代ベルカ式はミッドチルダ式をベースに、古代ベルカ式をエミユレートして再現した魔法体系なんだ」

クロノが訓練室に入ってきた。

「クロノ君！」

「訓練は捗ってるか？」

「おかげ様だね。ユーノがいてくれて助かったよ」

「僕はたいした事してないよ」

ユーノが照れ臭そうに頭をかく。

「ねえ、古代ベルカ式って何なの？」

「かつてはミッドチルダ式と次元世界を二分する勢力を誇っていた魔法さ。現在は衰退していて、使い手は非常に少ないんだがね」

「ふ〜ん」

道理で扱いが似ていたのか。
しかし古代か…ロマンを感じるね。

「クロノ、時間あるかな？ちょっと頼みがあるんだけど」

「頼み？」

「訓練がてら、模擬戦の相手をしてくれないか？」

するとクロノは意外そうな顔をした。

「どうした？やっぱ無理か？」

「いや、大丈夫だ。最近問答無用で喧嘩を売られてたからな。久しぶりに正面から勝負を挑まれて、少し驚いてた」

襲われてたって…

苦労してるんだな。

「じゃあ受けてくれるんだな？」

「僕でよければ」

よっしゃあ！

クロノは魔導師としては一流に入るらしいからな。

強い敵との戦いは良い体験になるし、なのはちゃんの参考にもなる。

訓練室の真ん中で対峙する。

すでにクロノはデバイスを起動させ、バリアジャケットを着てる。

俺も準備しますか。

エクステンド
「変身！」

青紫の外骨格を纏う。

「どちらかが魔力ダメージで戦闘不能なるか、ギブアップするかだ。二人共準備は良い？」

審判はユーノだ。

なのはちゃんは隅で見学。

「何時でも良いよ」

「俺もだ」

「じゃあ……始め！」

ユーノの掛け声と共にクロノは飛び上がる。

俺は足元に魔法陣を展開しながら追いかける。

空中に足場を作る……うん、具合は良さそうだ。

「そら！」

杖：たしかS2Uとかいう名前だったっけ？

その先端から魔力弾が発射される。

なのはちゃんのと違って直射だが非常に速い。

向かってくる魔力弾を切り裂き、足場を形成しながら飛び跳ねる。

クロノは後退しながら魔力弾を撃つ。

やっぱり飛んだ方が起動力は上か。

「1」の！」

尾の先端から魔力弾を発射する。

だがなのはちゃんみたいに誘導性がある訳でもなく、クロノのように速い訳でもない。
あくまで牽制だ。

「射撃魔法は不合格：かな」

「ならばこれはどうだ！」

今度は尾から針を撃つ。

毒は付属させてないが、魔力を追加させてある。

先程よりも速く誘導性もある。

「成る程っ！」

水色の障壁で防がれ爆発する。

狙いどおり！

爆煙を目くらましにして接近、剣の面で殴り掛かる。

「甘い！」

杖で受け流し足払い。

足場を形成する時間は無く、床に着地する。

「ブレイズカノン！」

着地した瞬間、背後から砲撃が放たれる。
落ちてる間に狙っていたのは視ていた。

横に跳び回避、再度空中に足場を作り上っていく。

「ならば、これでどうだ！」

『Stinger Sniper』

次は魔力弾が一発だけ発射された。

そして魔力弾は螺旋を画くように飛んでくる。

「なんの！」

剣の連結を解除し鞭のように振るう。

そして伸びた鎖に繋がる刃が魔力弾を……切り裂かなかった。

魔力弾は蛇腹剣を避けて飛んでくる。

「ちょ！？」

なんじゃそりゃ！？

って、驚いてる場合じゃない！

両手に三角形の障壁を展開するが、一枚、二枚と次々と貫かれる。

そして上空で渦を画きだした。

「スナイプショット！」

再度加速して飛んでくる。

まだ魔法を上手く使い熟せてないからか、防ぐのは難しい…
ならばオルタ・フィールドで！

オルタを二重に展開し防ぐ。

一枚目は貫かれたが、二枚目は無事だ。

「はあ！」

再び跳躍、攻撃強化のオルタをくぐり抜けクロノに跳び蹴りを繰り返す。

「速い…！」

かすっただけだが、バリアジャケットの肩の突起を破壊した。

さらに空中に足場を壁のように展開。

三角跳びをしながら足に魔力を集中、燐と脂に変換し両足をぶつけて着火する。

「バーニングスマッシュ！」

そのまま宙返りをしながらつま先蹴りを繰り返す。

「ちい！」

シールドで受け止められた。

「やあ！」

そして俺を押し返し、杖を槍のように突く。

障壁を展開する時間もなく、剣を交差させ防ぐ。そして杖が剣に触れ僅かに止まる。

『Break Impulse』

剣が砕けた。

痛っ……てええええ！?!?!

衝撃で吹き飛ばされる。

なんとか落ちないように足場を展開した。

ちよつと待てよ、まじで痛い。

たしかに羽を撃たれたり、母さんは鎖を引きちぎられたりして痛みを感じてる描写はあったけど…

これ想像以上だ。

体制を立て直し立ち上がる。

どうするか……

足の鉄は下手すると大怪我させちまう。

針は通用していない。

……ん？

周りに何かある？

取り囲まれてるし。

なんだか嫌な予感……

「おい……なんだこの周りに設置されてる魔力は？」

「設置したバインドが見えてるなんて……プロヴィデンス・ビューとやらは凄いな。デイレイバインド……空間内に侵入した対象を拘束する魔法だ。さて、どうする？完全に包囲したし……」

クロノの足元に魔法陣が広がり、無数の水色の魔力の剣が出現する。

「どうする？」

「無理無理無理無理！俺、詰んだろ……」

あんな数を防ぐ自身もないし、バインドに包囲されてるから避ける事もできない。

「降参だ！」

エクステンドを解除する。

「そこまで……」

ユーノが終了を知らせる。

すると周りのバインドも消えた。

「命君、大丈夫？」

降りた俺になのはちゃんとユーノが歩み寄る。

「大丈夫だよ。負けちゃったけどね」

「クロノは執務官だし、簡単にはいかないよ」

「接近戦ならどうにかなると思ってたんだけどな」

「室内等では白兵戦にもなるからな。ありとあらゆる状況に対応する必要がある」

「俺達より少ししか変わらないのにな」

「僕は十四だ！」

「「「え？」「」」

まじで？

「ク、クロノ君って、私達より五つも年上なの！？」

「悪かったな！第一、命がでかすぎるんだ！少し身長をよこせ！」

「無茶言うな！」

こうして、俺とクロノの模擬戦は幕を閉じた。

第二十四話 特訓（後書き）

ユ一ノ「クロノに勝てなかったね…」

命「魔力変換で毒や薬を使ったら、少しは勝算があったんだけどな。致死性のじゃなくても、下手に使ったら危ないし」

クロノ「何を使う気だったんだ？」

命「キシロカイン」

第二十五話 海の上、最後のジュエルシード（前書き）

さあさあ行きます

第二十五話 海の上、最後のジュエルシード

（命SIDE）

巨大な火の鳥のような鳥に緑の光の鎖が巻き付く。

「捕まえた！命！」

「動かすなよ！動くと痛いぞ（俺が）！」

足場を利用し二段ジャンプ。

十枚の攻撃強化のオルタを展開する。

「デイメンションキック！」

オルタを連続でぐり抜け、全身に力が沸き、鳥を蹴り貫く。
衝撃と共に地面に激突。

でかいクレーターができる。

「なのはちゃん！」

「うん！リリカルマジカル…ジュエルシード、シリアルV？…封印
！」

ジュエルシード、封印成功。

ふう。

『三人共お疲れ様 今ゲートを開くから、ちよーっと待っててね』
エイミーさんから連絡が入る。

「はい！」

あゝ終わった終わった。

「命君、あんなにオルタ・フィールド使って大丈夫？」

「大丈夫。スパイラルコーンの反動と消耗を抑えるためにしたから。予想通り抑えつつ高い威力を出せたしね」

「確かに威力はあまり変わらなかったね」

「でも発動するのに時間がかかるし、オルタで射線がまるわかりで命中精度がなあ…」

「さっきみたいに僕が捕らえてるか、物を壊す位しか使い道がないね」

おのれディケイド。

さてアースラに来てから十日は経つ。
俺達は新たに？と？を見つけた。

そんで今はなのはちゃんとユーノの三人で食堂でお茶している。

「そういえばオルタ・フィールドって、僕達がかくぐくつても効果はあるの？」

「あるぞ」

実際、EX！の主人公はやってたし。

「もしなのはちゃんのデイバインバスターにスパイラルコーン使ったら、凄い事になるんじゃないかね？」

「そうかな？」

「山のーっ位吹っ飛ばしそうな気が…」

「ありえる」

「ええ！？」

怖い怖い。

『エマージンシー！搜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！』

食堂…いや、アースラ内に警報が鳴り響く。

俺達はブリッジへと駆け出す。

ブリッジに着き見えた物は、モニター画面の中でテスタロッサとベガフォームのゼロノスが、海で嵐の中を戦っている姿だった。

「フェイトちゃん！」

「何とも呆れた無茶をする娘だわ……」

「無謀ですね……間違はなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を超えている」

「あの！私急いで現場に……」

「その必要は無いよ。放っておけば、あの子は自滅する。仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「そんな……フェイトちゃん……」

「気持ちはわかるけど、私たちは常に最善の選択をしないとイケないの。残酷に見えるかもしれないけど……これが現実」

子供相手にそれは無いだろ。

いや、よく考えてみればクロノも子供だ。

そういえば彼らの世界だと、就職する年齢は恐ろしく低いらしい。つまり成人扱いされる年齢も低いって事だ。

だから子供であろうと容赦しない……そういう風習ができてしまっ

たのдарろう。

侑斗はどうなっても良いけど、テストロツサはなあ……
きつとなのはちゃんはあるの中に飛び込む。
俺も彼女をほって置けない。

「行って。二人共行って」

ユーノ？

「僕がゲートを開くから、行ってあの子を！」

……じゃあ、お言葉に甘えますか。

「行くよ、なのはちゃん」

「……うん！」

なのはちゃんとゲートへ走る。

「君達は！」

「千路命」

「高町なのは」

「「指示を無視して勝手な行動をとります！」」

「結界内へ、転送！」

ユートの魔法で転送される。

次の瞬間には、俺達はとんでもない高さの空にいた。

……まてや。

落ちてる！？

「命君、私に掴まって！」

なのはちゃんの手を握る。

「レイジングハート！セーット…アープ！」

『stand by ready・set up.』

なのはちゃんの身体が桃色の光に包まれ、バリアジャケットの姿になる。

そしてフワフワと下りていく。

見えてきた。

「なのはちゃん、もう大丈夫。下ろして」

「うん。もうちょっと繋いでいたかったかも（ボソ）」

飛び下りて足場を展開。

「エクステンド！」

外骨格を纏い、足場を展開しながら下りていく。

「っ！」

『来たか！』

向こうも俺達に気が付いた。

「フェイトの……邪魔を、するなああ……！」

アルフが雷を食いちぎり襲い掛かってくる。

「違う、僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

ユーノも現れ、アルフを止める。

「ユーノ！」

『馬鹿な！何をやってるんだ君達は！』

「ごめんなさい。命令無視は後でちゃんと謝ります」

「ほっとく訳にはいかないからね！」

「まずはジュエルシードを停止させないとまずい事になる。命、僕にオルタ・フィールドを！チェーンバインドで動きを止める！」

「了解！」

ユーノの前に薄紫の魔法陣が展開される。

「行っけえ！」

緑色に光る鎖がオルタを通過する。

すると一層輝きを増し、竜巻を縛り上げる。

「フェイトちゃん！手伝って！ジュエルシードを止めよう！」

テストロッサになのはちゃんから魔力供給がされる。

『Power charge』

『Supplying complete』

「二人できっちり半分！」

どうやらテストロッサも回復したようだ。

「……あんだ！その魔法陣、あたしにも使わせな！」

アルフ？

良いぜ！

「頼むぞ！」

アルフの前にもオルタを展開。

そして同じように輝きを増したバインドが竜巻を縛る。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる、今のうちに！」

「変態仮面ライダー、お前も手伝え！」

『俺に命令「侑斗、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」「ちっ
！感謝しろよ化け物！」』

「一言余計だ！」

三人の前にオルタを展開する。

「攻撃をこれに通過させろ！威力が強化される！」

「皆で一気に封印！」

なのはちゃんがレイジングハートを向ける。

「借ります！」

『Full Charge』

ゼロノスがボウガンモードのゼロガッシャーを向ける。

「バルディッシュ！」

テストロットサもバルディッシュを構える。

「デイバインバスター！」

「サンダースマッシャー！」

「グランドストライク！」

凄まじい爆発と閃光に包まれる。

光が晴れると海から六個のジュエルシードが浮かび上がる。

色々と絶景だな。

あれがただの綺麗な宝石ならどれだけ良かったか。

「友達に…なりたんだ」

なのはちゃん…

『すまない…今はまだやるべき事があるんだ』

お前に言っていないだろ…

「……侑斗君、だっけ？」

『桜島侑斗だ、お嬢さん』

…キモ。

「なんで、命君と美尋さんを襲ったの？」

『まだ洗脳が解けてないのか。おのれイマジン！いつまで人の心を

弄べば気が済むんだ!」

「質問に答えて!」

なのはちゃんも怒ってる。

『イメージは俺の両親を殺した連中だ。そいつも殺人を楽しむ悪魔のようなやつなんだ!目を覚ましてくれ!』

よくもまあ、こんな嘘がペラペラと…

「ならばその件に関して話して貰おうか」

クロノも来た。

『……四年前、俺の家族は「二年前って言ってなかったっけ?」…あれ?』

テストロッサにも話してたか。
こいつ本当に馬鹿だな。

『ち、違う!えと…』

「桜島侑斗。君を殺人未遂及び傷害罪で逮捕する」

「侑斗…あんた!」

「アルフ、もう良いよ。ほって置いっつ」

「侑斗、おしまいだ…」

味方は無し。
八方塞がりだな。

『次元干渉！？別次元から、本艦及び戦闘区域にて魔力攻撃来ます
！あ、後六秒！』

「何！？」

え？

空が雲に被われ、紫の雷が鳴り響く。

「か、母さん…？」

母さん？

あの雷はテストロッサの母親の魔法なのか？

そしてテストロッサに向けて雷が落ちた。

「ああああああつ！？」

「フェイトちゃん！？」

続けてなのはちゃんと俺にも雷が襲い掛かる。

な！？

ちよつと待て、どうなってんだ？

母親じゃないのかよ！？

落ちていくテストアロツサルフが受け止め、飛び上がっていく。

どさくさに紛れてジュエルシードを？

「させるか！」

クロノが間に割り込む。

「邪魔を…するなあああ！」

「うわあああ！？」

「クロノ！」

突き飛ばされたが、海面で体制を立て直す。

それだけじゃない。

さっき神の視点で見えたんだが、ジュエルシードを三つ掴んでいた。

「っ！？三つしかない？」

クロノはS2Uにジュエルシードをしまう。

「くうう！」

アルフは悔しそうにクロノを睨む。

「アルフ、逃げて！俺と侑斗はもう手伝えない！」

「ちい！」

アルフは海を叩き、水しぶきに紛れて転移した。

逃げたか。

「降参です」

『デネブ？冗談じゃねえ！』

「お前は逃がさない。覚悟しろ！」

今がチャンスだ。

「ふざけんなああ！」

『Altair Form』

「うわ！？」

デネブが離れる。

「皆俺の邪魔しやがって！貴様さえいなければ！」

駄々っ子のように喚く。

「皆、手を出さないで。こいつとは俺の手で決着を付けたい」

「頑張つて命君！」

「負けないでよー！」

「ちゃんと逮捕させてくれよ」

わかってるって。

「なんでだ！何故なんだああ！？」

その瞬間、腰のカードケースから赤いカードが飛び出す。

「ん？……ククク…ハハハハ！やっぱり俺が主人公だ！」

あのカードは！

『Charge And Up.』

カードをベルトに差し込むと、ゼロノスの身体が赤銅色に変わる。

「デネブ！」

「え？うわあああ？」

ゼロノスがデネブを掴むと、ガトリングガンのような銃に変わる。

ゼロフォーム…

「貴様に生きる資格は無い！俺が主人公だからだ！」

主人公、主人公って……

「なあ、絶対主人公になれない条件が一つあるんだけど、教えてやるよ……主人公ってのはな、主人公になろうとした瞬間に失格なん

だよ。つまり……」

両足の鉄を展開。

全身の武器に神経毒を染み込ませる。

「お前、しょっぱなからアウトってわけだ！」

第二十五話 海の上、最後のジュエルシード（後書き）

次回いよいよ決着？

あと皆さんはアンチの多い海の上でのリンディ達の対応はどう思いますか？

私は命に考えさせたように、子供が普通に社会人をやっているミッドの社会も原因だと思えます

特に魔導師はその風習が強いんじゃないでしょうか？

第二十六話 天誅（前書き）

ヒャッハーです

第二十六話 天誅

〔命SIDE〕

「お前、しょっぱなからアウトってわけだ！」

「アウトだあ？俺は自分の信念を貫き、努力を続ける、それが主人公の条件だ。それを貴様が邪魔した！」

「何が信念だ、努力だ！私利私欲の為に他人を蹴落とすのに必死なだけだろ！」

邪魔だからと俺を殺そうとし、ありもしない嘘をつく。
あまつさえ関係の無い母さんにまで大怪我を負わせた…
それが主人公？笑わせるな。

「黙れ黙れ！俺の幸せな為に死ね、化け物！」

デネビツクバスターから光弾が連射される。

俺は切り払いながら足場を跳躍していく。

「お前に言われたくねえ！」

尾から針を飛ばす。

勿論魔力を付属させ、威力は強化してある。

「おらおらー！」

先程よりも大量の光弾が弾膜となり、針を撃ち落としていく。
近づけない。

一発の威力は低いが多い。
しかもエイミーさん曰く、魔力は俺より大幅に上回ってるようだ。
まあ、なのはちゃん以下らしいが。

このまま逃げ回るのも癪だな。
少し無茶だが、突貫するか！

オルタを二重に展開、一気に接近する。

「自分から死にに來るとはな」
数えきれない程の光弾が迫る。
次々と着弾し一枚目が砕ける。

もう少し……届いた！

二枚目は耐えきった。
侑斗に足の鉄を回し蹴りの要領で切り付ける。

「ちっ！」

バックステップで避けられ、デネビックバスターの銃口で殴ってくる。

俺は剣で防ぎながら尾で突く。

「うお?」

侑斗がよろける。

「でや!」

そのスキに剣の連結を解除、蛇腹剣にして振り回す。

「ぐは!?!」

『うわぁ!』

侑斗がデネビツクバスターを盾のようにするが、刃に弾かれ切り付けられる。

デネブ?

そつだ、デネビツクバスターはデネブが変化したんだ。当然ダメージを受ける。

「すまん!」

『俺の事は気にしないで、侑斗を止めてくれ!』

「余計な事を言うな!第一、お前が無能だからこんな事になったんだ!」

次は責任転嫁か。

つくづく最低な奴だ。

再び殴り掛かって来た。
オルタで受け止め鉄で蹴る。
胸部装甲に傷がつき火花が散った。

「どう考えても自業自得だろ！」

さらに蛇腹剣を連続で振るい装甲を削る。

「適当な嘘をついて…とゆうか誰も信じてなかったじゃないか！初めっから！」

「ありえねえ…俺の方がイケメンだ。フェイトも魅了したのに！」

魅了って…

「寝言は寝て言え！」

侑斗の両腕を掴む。

「どう考えても相手にされてなかっただろっ！」

そして尾を首に巻き付け投げる。

さらに攻撃用オルタを展開。

「顔はたしかにお前の方が良いだろう。けどな、中身は臭ってちやわかるんだよ…お前はろくでなしだってな！」

刃を連結させ魔力を変換する。

「はっ！」

そして炎の斬撃波をオルタに通過させて放つ。

「熱ちい!？」

侑斗の身体が炎に包まれる。

「何故だ、何故勝てない？俺は仮面ライダーだぞ？こんな怪人なんか…嘘だ！」

「馬鹿にするな！能力を過信してるだけのやつに負けるか！」

鎖を腕から伸ばし、デネビツクバスターに絡める。

「俺はなのはちゃんを守るために戦う。その為にずっと鍛えてきたんだ…負けられないんだよ！お前みたいな奴には！」

腕を思いつ切り引き、デネビツクバスターを奪い取る。

「やった！」

鎖から解放した瞬間、元のデネブに戻った。

「……っ！デネブ、よく考える！ずっと一緒に頑張ってきたじゃないか。俺の所に来い、そうすればお前だって人生を楽しめるんだぞ！」

必死にデネブを引き止めようとする。

「侑斗…自首しよう。俺はもう侑斗の惨めな姿を見たくない。止め

られなかった俺も同罪だ。一緒に罪を償おう」

「罪だあ？俺に罪は無い！多くの女性を幸せにする為に必要な事なんだ！てめえは俺の道具なんだ。黙って俺に従え！」

幸せに？

嘘だ。ただ自分が女性に囲まれたいだけだろ。

「侑…斗？………そうか…俺は……頼む、侑斗の目を覚まさせてくれ」

デネブが頭を下げる。

「難しいな…やれるだけはやるがな」

「…ありがとう」

正直狂つてるとしか言いようが無い。
目が覚めるかどうかも疑問だ。

「畜生、畜生！お前さえいなければ！」

ゼロガツシャーを取り出しサーベルモードに組む。

「俺もそう思うよ。お前さえいなければ母さんが傷つかなかった…」

「キモいんだよ、マザコン野郎！」

ゼロガツシャーで切り付けてきた。

俺は剣で防ぎ罅せり合いになる。

マザコンか…

自分の唯一の肉親を大切にして何が悪い。

「何度でも言え。俺は俺の家族を大切にしているだけだ」

「人間じゃないくせに、綺麗事を！」

綺麗事か。

上等だ！

侑斗を突き飛ばす。

「綺麗事でも構うものか！俺は家族を傷つけたお前を許さない！お前は、俺が倒す！」

「やってみろよおお！」

『Full Charge』

ベルトからカードを抜き、ゼロガツシャーに差し込んだ。

俺は跳躍し、スパイラルコーンを侑斗の真上に展開。

そして落ちるようにくぐり抜ける。

「スプレンドットエンド！」

「ダイナミックチョップ！」

凄まじい速度で落下しながら剣を振り下ろす。

そしてゼロガツシャーと衝突。

そのままゼロガツシャーを切り裂き、侑斗の顔面を一直線に切る。

「ギヤアアアアア!?」

浅い。

だがダメージは充分。

中身にも届いたから毒も入った。

「てめえ…う…げ…か、身体が痺れる?」

苦しそうに悶える。

「即効性の麻痺毒だ」

とどめだ。

跳躍し再びスパイラルコーンを展開する。

二発目はきついが、これで決める!

垂直に展開した足場を蹴りスパイラルコーンに突入。

両足に魔力を込める。

「ベノクラッシュュ!!!」

バタ足のような連続蹴りい繰り出す。

「ぐ…が…」

ひたすら蹴る。とことん蹴る。
蹴る度に装甲が溶け、蹴りが食い込む。

「終わりだ！」

とどめに魔力をベルトに叩き込む。

「あ…ぐあああああ！」

断末魔と共にベルトが爆散。
変身が解除され墜落する。

だが海に落ちる直前に水色のバインドに捕えられる。

「桜島侑斗…逮捕」

〈SIDE OUT〉

〈なのはSIDE〉

侑斗君を捕まえた後、私達はアースラでリンディさをお説教されてしまいました。

「指示や命令を守ることは個人のみならず、集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動があなた達だけでなく、周囲の人達をも危険に巻き込んだかもしれないということ。……それはわかりますね？」

「はい……」

「うっ……」

「本来なら厳罰と処すところですが……結果としていくつか得る事がありました。よって今回の事は不問と致します」

え？

思わず三人で顔を見合わず。

「ただし、二度目はありませんよ。いいですね？」

「はい……」

「すみませんでした」

「…わかりました」

「さて、問題はここからね。クロノ、事件の大元について何か心当たりは？」

すると壁に寄り掛かっていたクロノ君が歩いてきました。

「はい。エイミィ、モニターに」

「はいはい」

すると机の中心にモニターが現れて、一人の女性が映し出されました。

「あら！」

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導士、プレシア・テストロツサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら、違法研究と事故に よって放逐された魔導士です。登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトはおそらく…」

…あ。

「そつえばフェイトちゃんあの時母さんって…」

あの雷が鳴っていた時…そう言っていたのが聞こえた。

「親子…ね」

「そ、その…驚いてたというより怖がっている感じでした…」

「たしかに…しかも雷が彼女に落ちてたしな」

フェイトちゃんは、すっごく怯えているような目をしてた。

「エイミー！プレシア女史についてももう少し詳しいデータ出せる？
放逐後の足取り、家族関係、その他何でも！」

「はいはい。すぐ探します」

「とりあえず、一旦なのはさんと命さん、ユーノさんは休憩を取ってもらっていいわ。ただ、データが出次第、また呼び出すからそのつもりはしておいてね。あ、あとクロノはあの二人に取り調べを」

「「「わかりました。「」」」

「はい」

そしてしばらくたった後、また会議室に呼ばれました。

「…プレシア・テストロッサ。ミッドの歴史で二十六年前は、中央技術開発局の第三局長でしたが…：当時彼女が個人で開発していた次元航行エネルギー駆動炉【ヒュードラ】使用の際、違法な材料で実験を行い失敗…：結果的に中規模次元震を起こした事が原因で、中央を追われ地方へと異動になりました。随分揉めたみたいですが…：失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性は無かったと、辺境に異動後も、数年間は技術開発に携わっていました。しばらくの後行方不

明になって、それつきりですね」

「家族と、行方不明になるまでの行動は？」

「その辺のデータは綺麗サツパリ抹消されちゃってます。今、本局に問い合わせて調べてもらっていますので……」

「時間はどれくらい？」

「一両日中には」と

「……プレシア女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力を放出した直後では早々動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし……あなた達は、一休みしておいたほうがいいわね」

リンディさんが立ち上がる。

「あ、でも……」

「特に命さんとなのはさんは、あまり長く学校を休みつぱなしでもよくないでしょう。一時、帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ」

「……はい」

そうだった。

アリサちゃんとすずかちゃんも心配してるかもしれない。

「あの……ちょっとお願いがあるんですけど……」

命君？
どうしたんだろ…

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

そんな…こんな事になるなんて…
ふざけんなよ…

俺はオリ主のはずだ。
なんであんなやつに負けるんだ。

デネブもデネブだ。俺の能力の一部のくせに裏切りやがって。

どうすれば良いんだ…
このままじゃあいつがオリ主じゃないか。

扉が開き誰かが入ってきた。

誰だ？っ！？

「……………」

三つ編みにした黒髪、銀縁眼鏡の長身の少年。

千路命……！

こいつ、一体何の用なんだ？

「逮捕…障害罪に殺人未遂。ただじゃすまないぞ」

とにかく今はこいつを刺激しないようにしないと。

「お、俺が悪かった…反省してる」

「信じられると思っているのか？」

調子に乗りやがって…

そうだ！

「殺してくれ」

「なんだと？」

「俺を殺してくれ！こんなんじゃ生きていても意味が無い！」

そう、こいつは俺が憎いはず。

俺を殺そうとした場面をな的是に見せつけられ！

そして時の庭園で俺が協力。どさくさに紛れてあいつを殺す…

完璧だ。

「すまなかったと思ってる。許してくれとは言わない」

「俺が憎いだろ？俺だってもう生きる気力が無いんだ。頼む」

「そうか…エクステンド」

命の奴が変身して近づいてくる。

よし、今だ！

「おい！俺は反省してるんだ！こゝろ、殺さないでくれ！」

きつと俺達の事を見るはずだ。
すぐに駆け付ける。

「何を言ってる。殺して欲しいんだろ？」

「何馬鹿な事言ってるんだよ！俺が憎いからって勝手な言い掛かりはよせー！」

「はあ…良いよ、入っても」

は？

すると入口からなのは、淫獣、KY、エイミー、リンディが入ってきた。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

俺の合図で皆が入ってくる。

「残念だけど、さっきの念話は傍受させてもらったよ」

少しは反省してるかと思ったが…本当にどうしようもない奴だな。

「貴方は何をしたいのですか？命さんが貴方を殺そうとした所を見せつけて、彼の信頼を無くそうとしたのかしら？」

その通りだな。

「桜島侑斗…君には殺人罪も追加される。デネブが自供したよ」

あいつ殺人までやってたのか？

罪が適応されるって事は、転生者じゃない。

「殺人罪？こいつ、まだ何かやってたのか？」

「彼は両親を殺害した。両親がいない方が自由に動けると、自身を格好良く見せる【設定】のためだそうだ」

「設定？」

「イメージという怪人に両親を殺害され、自分は仮面ライダーとなり復讐を成し遂げた…そしてこれからの人生をどうするか悩んでいた所、一人の少女に出会う…とゆう【設定】だった？」

……厨二病かよ。

侑斗の顔は見る見る青ざめていく。

そしてなのはちゃんはあまりのくだらない理由に言葉を失い、ユノはまるで汚物を見るような軽蔑の視線を送る。

「お前、俺の事を散々化け物だの何だの言ってたけど……人間じゃないのはお前の方だ」

格好つける為に両親を殺す。

狂ってるなんてレベルじゃない。

「もう嫌だ…殺してくれ……頼む！」

「断る」

死に逃げるなんて許さない。

転生者は自殺ができない。

俺もこいつを殺さない。

だから…

「生きて苦しめ。それがお前への罰だ」

「嫌だ嫌だ嫌だ！うわあああああああ！…！」

侑斗の悲鳴が部屋中に響いた。

第二十六話 天誅（後書き）

つばさ「ええ気味やな」

侑斗「言っておくぞ、I shall returnよ。」

命「え？」

第二十七話 胸の誓い（前書き）

無印もあと少し

第二十七話 胸の奮い

（命SIDE）

「……とそんな感じの十日間だったんですよ」

「まあ、そうだったんですか」

…なんとゆうか、よくもまあペラペラと。

「リンディさん…見事な誤魔化しというか…」

「真っ赤な嘘ってやつだな」

「…凄いね」

「本当の事を言えないのですから。ご家族にご心配をかけないための気遣いって言うってください」

八八八…

さて、今日は久しぶりに学校だ。

「どうや？六個の内、いくつ取れた？」

つばさか。

「クロノが三つ取ったよ。あとゼロノスは逮捕した」

「殺さなかったん？」

「ベルトは破壊した。あいつは両親を殺すようなやつだ。皆に嫌われて生きてもらう」

「そんな事もしとったん？」

「自分の【設定】のために両親を殺したそつだ」

「設定つて……まあもう少して無印は終わりや」

「ラスボスつてプレシア・テストロッサか？」

「せや。…あんまりフェイトを敵視せんといてや。あの子も辛い思いをしてきたんや」

辛い、ね…

「もしかして、虐待されていたのか？」

「正解。あと、プレシアは捕まえた方がええ。説得もしてみ」

「なんで？」

「心のどこかで本当はフェイトを愛しとるかもしれへんからや」
「愛してる…か。」

「本当かね…」

「あくまで可能性の話しや。あ、あともう一つ。命って死者蘇生と
かできる？」

「百足& amp ;蠍人間にできると思うか？」

「……やっぱり？仕方ない、諦めるか…ほな頑張つてや」

死者蘇生で何がやりたかったんだ？

……しかしまあ、結局原作になのはちゃんと完全に関わってしまったな。

こうなつたら俺は決めた。

物語の最後までやってやる。

そしてなのはちゃんを守り抜く！

そして放課後。

今日はアリサの家にお邪魔してる。
普通に遊びに来たってのもあるが、少し気になる事がある。

アリサが額に宝石のついた大きな犬を拾ったらしい。

なのはちゃんも同じ考えのようだ。

そして家の庭。

そこにある檻の中に橙色の犬…いや、狼がいた。

「やっぱりな」

「アルフさん…」

「あんた達か…」

「その怪我、どうしたんだ？」

アルフの身体には包帯が巻かれている。

「それにフェイトちゃんは？」

するとアルフは俯き後ろを向いてしまった。

「あらら…元気なくなっちゃった…どうした？大丈夫？」

「傷が痛むのかも…」

…なんかあったなこりゃ。

テストロッサは虐待されている。

そこになにかあるな。

「そっとしておいてあげようか」

「うん…」

「あっ…」

何を思ったのかユーノがすすかの腕から飛び出し檻の前に近づいていく。

成る程。

ユーノに任せてみるか。

「ユーノ。こら、危ないぞ」

「大丈夫だよユーノ君は」

「そうそう」

「二人共、彼女からは僕が話を聞いておくから」

「任せる」

「たしかにこの犬も命を怖がってないし」

「何故そこで納得する？」

と、まあユーノとクロノがアルフから話しを聞いたんだが…

『二人共、話しは聞いたか？』

「うん…」

「恐ろしく複雑な事情だな」

つばさのやつ…何が本当は愛してるだ。

ヤンデレなのか？

俺には理解しがたいぞ。

『二人の話しと現場の状況、そして彼女の使い魔のアルフの証言と現状を見るに、嘘や矛盾は無いみたいだ』

「侑斗とデネブは？」

『残念だが、二人からは何も……プレシア・テストロッサと面識すら無いらしい』

あんなにハーレムって言うてたのに、助けりゃ好感度上がるだろ。待てよ…娘があんなだから、母親はもっと凄いなじゃ…

つまり助けたくても助けられなかったのか？

「どうなるのかな…」

『プレシア・テストロツサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでなく、逮捕の理由にお釣りが来るからね。だから、艦長の命があり次第、任務をプレシアの逮捕に変更する事になる。二人はどうする？』

…彼女をほっとけないだろ。
今更、もう辞めますは無い。

「私は…私は、フェイトちゃんを助きたい！」

「あんな話しを聞いたんだ。無視できないさ」

「アルフさんの思いと私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔は、なんだか私も悲しいの…だから助きたいの、悲しい事から！それに、友達になりたいって伝えたその返事、まだ聞いてないし」

「俺としてはプレシアとやらを一発蹴り飛ばしたい位だ」

親の風上にも置けないな。

『わかった…こちらとしても、なのはの魔力も、命の力も使わせてもらえるのはありがたい。フェイト・テストロツサについては君達に任せる…それで良いか？』

『うん……なのはと命……だったっね…頼めた義理じゃないけど……だけど、お願い。フェイトを助けて』

本当にご主人様思いだな。

『あの子、今本当に一人ぼっちなんだよ…』

「うん、大丈夫、任せて！」

「大船に乗った気でいな！」

そして、俺達はアリサとすすかの元へと戻った。

その日の夜。

珍しく母さんが一緒に寝ようと言い出した。
断る理由も無いから久しぶりに母さんと寝た。

「何か…変わったな。命は」

「そう？」

「覚悟を決めたような顔だ」

覚悟か。今までは原作からなのはちゃんを連れて逃げる事しか考えてなかった。

でもそれによって変わる事を考えもせず。

おそらく原作ではテストロッサを助けられるのだろう。
なのはちゃんが助けるんだ。
つまり俺がなのはちゃんを原作から離れさせたら、彼女はとうなる？
助けられる可能性は低い。

俺はなのはちゃんの無事を理由に逃げていただけだ。
なのはちゃんを守りたい気持ちに偽りはない。
だから、俺はもう逃げない。

戦い抜く。

全部終わらせれば良いんだ。

なのはちゃんを守りテストロッサも助ける。

「うん。色々だね……」

「そうか……命、これだけは約束してくれ。必ず無事に帰ってくる
事。なのはと一緒に。お前は私の全てなんだ……」

母さんが俺を抱きしめる。

「勿論だよ。なのはちゃんは俺が守る。俺自身もね。だから安心して
待ってて」

「…ああ」

頭を撫でられる。

大丈夫。

俺は母さんを一人にしない。
家族なんだから。

次の日の明け方。

俺はなのはちゃん、ユーノと家を出た。

明るくなつたばかりの町を走る。

「アルフさん！」

隣の塀の上を走るアルフがいた。

「行こう」

俺達は海鳴臨海公園に着いた。

「ここなら良いね。出てきて、フェイトちゃん！」

風が木々を揺らし、葉が擦れる音が静かに鳴り響く。

「来たな…テストロッサ」

『Scythe form』

灯台の上に、金色の刃の大鎌を持つ少女が立ってる。

「フェイト、もう止めよう…あんな女の言う事、もう聞いちゃ駄目だよ…こんなじゃ不幸になるばかりじゃないか。だから、フェイト！」

アルフの呼びかけにも応じず、テストロッサは首を横に振る。

「唯一の肉親…母親に逆らえない気持ち、少しわかる。俺も母さんしかないから……だけど、親の過ちを正すのも間違いじゃないだろ？」

「だけど…それでも私は、あの人の娘だから…」

この分からず屋！

「ただ捨てれば良い訳じゃないよね…逃げれば良いって訳じゃもつとない…」

なのはちゃんがバリアジャケット姿になる。

「きっかけは、きつとジュエルシード…だから賭けよう…お互いが持つてるジュエルシード全部を！」

なのはちゃんとテストロッサの周りにジュエルシードが現れた。

「それからだよ…全部だよ、それから」

レイジングハートを構える。

「私達の全ては、まだ始まってもない。だから、本当の自分を始めるために…始めよう最初で最後の本気の勝負！」

決闘か。

「命君ごめんね。これだけは私一人にやらせて」

「わかってるさ。ただ、これだけは言わせて。本当に危ない時は負けで良いから俺もやる…良いね？」

「大丈夫。負けるつもりは無いから」

「…頑張って」

「うん」

なのはちゃんの本気の勝負が始まる。

第二十七話 胸の誓い（後書き）

なんか命の立ち位置が微妙…

第二十八話 思い出は何処に（前書き）

S L B直撃とかまじ勘弁

第二十八話 思い出は何処に

〔命SIDE〕

なのはちゃんとテストロッサの戦いが始まった。

初めこの話しをなのはちゃんから聞いた時は大反対だった。

今までテストロッサに勝つ事ができなかったのに……無謀だと思っ
たね。

結局折れちゃっただけど…

『Photon Lancer』

『Divine Shooter』

二人の周囲に魔力スフィアが浮かぶ。

「ファイア！」

「シュート！」

二人が魔力弾を撃ち合うがなのはちゃんは回避し、テストロッサも回避しようとするが、誘導性が高く回避を諦めシールドで防ぐ。

「シュート！」

さらになのはちゃんが撃つ。

テスタロッサは切り払い、そのままのはちゃんに切りかかるが、シールドに防がれ魔力弾の一発がテスタロッサの背後から迫る。間一髪で防ぐがなのはちゃんを見失う。

上だ。

上からなのはちゃんが突撃してくる。

それをバルディッシュユで防ぐと魔力爆発が起きた。

「なんなんだいあの子は？」

「命やクロノと訓練をしていたのは知ってたけど……」

「とんでもない成長速度だな……」

やっぱり土郎さんの娘か……

「そっぴやデネブは大丈夫なのかい？」

「侑斗と一緒に拘束されてる。どうやらあの変態、両親を自分で殺したらしい。デネブはそれを止めようとはしたらしい」

「なっ!?!……元々信じちゃいないけど、まさか自分でやってたとはね。あいつもなんであんな奴に……」

能力の一部だからな。

だが完全に思い通りにはならないらしいけど。

っ!?!?

なのはちゃんがバインドに捕まった!?

「ライトニングバインド…まずい、フェイトは本気だ!」

まじかよ!?

「なのはちゃん、今行く! エクス「ダメ!」 え?」

なのはちゃんが叫ぶ。

「手を出さないで。全力全開の一騎打ちだから…私とフェイトちゃんの勝負だから!」

「でも、フェイトのそれは本当にまずいんだよ!」

「一体いくつのスフィアを出してんだ?」

三十八!?

「へいき!」

「だけど!」

無茶苦茶だ!

「命、なのはを信じよう。なのはの為にも」

ここで乱入するのは容易い…でもなのはちゃんは納得しない。
…仕方がない。

「わかった…!」

なのはちゃんを信じよう。

『Phalanx Shift.』

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル…」

頼む…なのはちゃん…！

「フォトンランサー・フアランクスシフト！撃ち碎け、ファイア！」

大量の魔力弾がなのはちゃんに向かって放たれ、次々と命中し爆煙が巻き上がる。

毎秒七発！？どんな弾膜だよ！？

さらにテストロツサは左腕を掲げ、残った魔力弾を集める。

なのはちゃんは？

無事だ。所々バリアジャケットが焦げてるが耐えられたみたいだ。

「いったく。撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね。今度はこっちの…」

レイジンググハートを構える。

『Divine』

……なんぞこれ？

星を軽くぶつ壊すって…

正確には星の光の破壊者？だろうけど…

もはや、これがつばさの言ってた魔王ってやつか？

そのまま砲撃は海まで到達し巨大な水柱を作る。

「ハア…ハア…」

流石に堪えたのかなのはちゃんは肩で息をしてる。

テストロツサは海へと落ちていった。

「フェイトちゃん！」

なのはちゃんが駆け付け、海に飛び込む。

そして数秒後、テストロツサを抱き抱えたなのはちゃんが出てきた。

「大丈夫みたいだな」

「ああ…」

「なのはは頑張ったよ。本当に凄い」

流石主人公かな。

俺も負けられないね。

…来たな！

空に雲が渦巻き、紫の雷が降り注ぐ。

そしてその雷はテストロッサを襲い出した。

させるか！

「エクステンド！」

変身してテストロッサに駆け寄る。

そしてオルタを展開し防ごうとする。

いや、防ぐ所が一撃で貫かれた。

やばい。

「アルフ！」

テストロッサをアルフ目掛けて投げた。

少なくとも彼女は無事だ。

「うおおおおお！？」

全身に衝撃が走る。

痛いなんてもんじゃない。

身体がバラバラにりそうだ。

「命君！」

「来るな！」

巻き込まれるぞ。

何個かのジュエルシードが飛びんでいき、消えていった。
それと同時に雷も止まる。

「クロノ！」

『ああ、尻尾を掴んだよ。今、武装局員を送った。君達もこっちに、医療スタッフも待機させてある』

じゃあ、行きますか…

〈SIDE OUT〉

〈なのはSIDE〉

私達はフェイトちゃんとアルフさんを連れてアースラに転移しまし

た。

命君もすぐに手当てをしてもらいました。

幸い、怪我はたいした事はないようです。

よかった…

そして私達は命君と合流して、ブリッジへ向かいました。

フェイトちゃんとアルフさんも一緒に。

ただ、フェイトちゃんには手錠が架けられています。

仕方がないとはいえ、なんか嫌だな…

ブリッジリンディさんが迎えてくれた。

「お疲れ様。それから…フェイトさん、はじめまして」

フェイトちゃんは俯いたまま、何も言いません。

「母親が逮捕される姿を見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女を別の部屋へ」

「はい…」

「フェイトちゃん、よかつたら私の部屋…」

フェイトちゃんを連れて行くこととしたけど、動くことしません。

『総員、玉座の間に侵入』

『プレシア・テストロツサ！時空管理局法違反、及び管理局艦船への攻撃の容疑で、貴女を逮捕します』

『武装を解除して、こちらへ』

モニターでは武装局員の皆さんが、フェイトちゃんのお母さん…プレシアさんに杖を突き付けている…

何人かは、隣の部屋へと入っていきました。

そして、その部屋の奥には…

「え！？」

「なっ！？」

大きな水槽のような物にフェイトちゃんに似た女の子が入っている…

誰なの？

私達より少し年下みただけど…

「似ている…双子みたいだ」

「あ………」

『私のアリシアに…近寄らないで！』

プレシアさんが局員さんを後ろに投げつけた。

『く……撃て!』

局員の人達が一斉に砲撃魔法を撃ち出した。

でも全然効いていない。

『うるさいわ……』

「危ない、防いで!」

リンディさんが叫ぶけど、局員の皆さんは…

酷い…

「いけない!局員たちの送還を!」

「了解です!」

エイミィさんがコンソールを叩いて局員たちをアースラに戻し始めた。

「……アリ…シア?」

「座標固定0120 503!」

「固定、転送スタンバイ!」

『もう駄目ね、時間が無いわ。たった九個のロストログアでアルハザードにたどり着けるかどうかはわからないけど…でも、もういい』

わ…終わりにする。この子をなくしてから暗鬱な時間も…この子の身代わりの人形を娘扱いするのよ」

人形？

その言葉を聞いてフェイトちゃんが体をびくつかせる。

『聞いていて？貴女のことよ…フェイト』

プレシアさんが言葉を続ける。

なんだか凄く嫌な予感がする…

『折角アリシアとの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない…私のお人形』

「…以前言ってた事故でね…プレシア・テストロッサは実の娘…アリシア・テストロッサを亡くしてるの。安全管理不慮で起きた…魔動炉の暴走事故…アリシアは、その事故に巻き込まれて…そして、彼女のその後行っていた研究は…使い魔を越えた…人造生命の生成。そして、死者蘇生の技術」

「死者蘇生？…まさか」

「フェイトという名前は、当時彼女の研究の開発コードなの…」

もしかして…そんな…

『よく調べたわね。そうよ、その通り。だけど駄目ね。ちつともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物……失ったもの代わ

りにはならないわ……アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ』

「止める……」

『我俣も言っただけど……私の言うことをとてもよく聞いてくれた。アリシアは、いつでも私に優しくかった』

「やめて……」

これ以上は……駄目……

『フェイト……貴女は私の娘じゃない。貴女はやっぱりアリシアの偽物よ。折角あげたアリシアの記憶も……貴女じゃ駄目だった』

「やめて……やめてよ！」

「ふざけんな……」

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使っただけのお人形。だからあなたはもういらぬわ。どこへなりと消えなさい！』

「お願い！もうやめて！」

『ハハハ……いいこと教えてあげるわフェイト。貴女を作り出してからずっとね、私は貴女が……大嫌いだったのよ……!!』

一番聞きたくない……その言葉が告げられてしまった……

フェイトちゃんは力なく膝を着く。

「フェイトちゃん！」

なんて言えば良いのかわからない。

なんで…

フェイトちゃんは貴女の為に頑張ってきたのに…どうして…

「た、大変大変！庭園の中で魔力反応、多数！」

「何が起こってるんだ!？」

「魔力反応、いずれもAクラスです！」

「その数六十…八十…まだ増えます！」

「…プレシア・テストロッサ！一体何をするつもり!？」

リンディさんが叫ぶ。

『私たちは、旅立つの。忘れられた都……アルハザードへ!』

九個のジュエルシードが浮かび上がる。

「まさか!」

『この力で…取り戻すのよ。私たちの……全てを!』

警報が鳴り響く。

何が起きたの？

「次元震です、中規模以上！」

「ディストーションシールドを！」

「ジュエルシード九個の発動！次元震、さらに強くなります！」

「波動係数拡大！このままだと次元断層が！」

警報とリンデイさん達の声、プレシアさんの哄笑が飛び交う。

フエイトちゃん…

どうすれば良いのかわからない。

私には、何もできないの？

「寝言は寝て言え…」

命君？

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

俺はこの女が嫌いだ。

「お前は自分の不幸から逃げてるだけだ！自分の思い通りにならない事に駄々をこねているだけなんだよ！」

『…なんですって？』

プレシアの笑い声が止まる。

「誰だつて不幸な目に会う。人はそれを乗り越えて生きていくんだ。お前はそれから逃げるだけじゃなくテストロッサ…フェイトまで巻き込んで。そんなお前が母親でいる資格なんか無い！」

『黙れ小僧！私の何がわかる！アリシアを失った私の気持ちが！！』

たしかに子供を失った気持ちはわからない。
でもこれだけはわかる。

こいつは母親失格だ。

「過去は変えられない。そんな事もわからないのか！？」

「そうだ、どんな魔法を使っても過去を取り戻すなんてできない。
目を覚ませプレシア・テストロッサ！」

クロノが説得を試みる。

『黙れ…黙れ黙れ黙れえ!!! 誰にも邪魔はさせない! 私とアリシアの幸せを!』

アリシア? お前一人の幸せだろ。

「そこ動くなよプレシア・テスタロツサ! 今からお前をぶん殴りに行くから、首を洗って待ってる! 逃んなよ!」

『逃げる? この私が? 小僧風情に? 何様のつもりかしら…!』

「何様? 俺は…」

そう、俺はただの。

「千路命…ただの怪人だ!」

第二十八話 思い出は何処に（後書き）

命「通りすがりの怪人だ…の方が良かったかな？」

つばさ「どつちでもええやろ」

第二十九話 皆の宿命（前書き）

時の庭園って良い趣味していると思います

悪の親玉のって感じが

第二十九話 皆の宿命

〔命SIDE〕

俺達は時の庭園に侵入した。

「いっぱいいるね…」

目の前には剣や盾を持ったロボットが見える。

ふむふむ…なるほどね。

「クロノ、こいつら無人兵器か」

「ああ。あれは近くに来た者を攻撃するだけの、ただの機械だ」

「そっか。なら安心だ」

そう言っただけなのはちゃんがいんがれいじんぐはーとを構える。

「ぶった切れば良いだけだもんな」

両足の鋏を展開する。

だがクロノは俺達を止める。

「この程度の相手に無駄弾は必要無いよ。命、オルタを頼む」

「了解！」

クロノの前に攻撃強化のオルタを展開する。

「はあ！」

『Stinger Sniper』

魔力弾がオルタを通過。

一層輝きを増した魔力弾が、螺旋を描きながらロボット達を薙ぎ払う。

「速い！」

凄…

そして魔力弾は空中で渦巻く。

「命、もう一度オルタを！」

「お、応！」

空中にオルタを展開、魔力弾が通過する。

魔力弾は残りのロボット達を貫き、最後の一体…他のやつらより一回り大きなやつに向かう。

ロボットは魔力を手に持った戦斧で叩き落とそうとするが、魔力弾は戦斧を砕き、ロボットを何度も貫いて爆散した。

「「うわあ…」」

「凄いな……」

「自分でやったんだろっが」

「オルタ・フィールドだよ。最後の一体は無理だと思ったんだが……
スパイラルコーンを使ったら、どうなる事やら……」

「二重であれだしな。ま、急ごうぜ」

庭園の中を走る。

所々は崩れ、そこから黒いもやが見える。

「その穴……黒い空間には気をつけて」

「ふえ？」

「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

「魔法が、ねえ……」

魔法だけなら、オルタは多分平気だな。

「飛行魔法もデリートされる。もし落ちたら、重力の底まで落下する……二度と上がってこれないぞ」

「き、気おつける……」

目の前に大きな扉が見える。

「邪魔だ！」

飛び蹴りでこじ開けた。

……団体さんいらっしやうい。

なんだよこの数……

部屋の中には大量のロボット達で埋めつくされていた。

「ここから二手に分かれよう。本来なら僕がプレシアの所に行き、残りは駆動炉の封印に行くべきだが……二人はそれじゃ不満だろ？」

「当たり前だ！あいつをぶん殴りに行くんだ！」

「私もお話したい！」

たしかにプレシアを逮捕するのはクロノの仕事だ。ただ俺はあいつに喧嘩売ったんだ。

引き下がれないね。

「そつだな……よし、僕とユーノが最上階にある駆動炉の封印に向かう。二人はプレシアを止めるんだ！」

「了解！」

「はい！」

「わかった！」

「よし、道を作る。なのはちゃん！」

「任せて！」

なのはちゃんの目の前にオルタを展開する。

「デイベイン：バスター！」

オルタを通過した砲撃が、ロボット達を飲み込んでいく。

「行くぞユーノ！」

「二人共、気おつけて！」

クロノとユーノが飛んでいった。

「さて…これを片付けるか」

「うん！」

剣を持ったロボットが走ってきた。

「シヤラアアア！」

振り下ろされた剣を避け装甲を跳び、首に剣を突き刺す。
そして溶解液を流しこんだ。

ロボットは首から煙りを上げ倒れる。

「シュート！」

なのはちゃんは飛んでいる翼の生えたロボットを撃ち落としていく。

しかし切りが無いな。

スパイラルコーンはあまり使いたくないし…

よし。

「なのはちゃん、どいて！まとめて切る！」

なのはちゃんが魔力弾を撃ちながら俺の後ろに回り込む。

右の剣の先端に三重のオルタを展開。

蛇腹剣にする事で、刃がオルタを通過する。

行くぜ！俺の必殺技！

「エクストリームスラッシュ！」

伸びた鎖に繋がれた刃を薙ぎ払い、次々とロボット達を両断する。

今のでだいぶ減ったな。

だが残ったでかい戦斧を持ったやつが、後ろから戦斧を振り下ろしてくる。

「なのはちゃん！」

「っ!？」

俺はなのはちゃんを尾で掴み跳躍。戦斧を回避する。

『Thunder rage.』

離れた瞬間、金色の雷がロボットに降り注ぐ。

「あ……」

上を見るとフェイトがバルディッシュを構えている。

『Get set.』

「サンダー…レイジ！」

金色の魔法陣から雷がロボットを貫き爆散させる。

「フェイトちゃん！」

なのはちゃんがフェイトに駆け寄る。

だが再会を喜ぶ間もなく、壁を破壊して背中に大砲を担いだかなりでかいやつが入って来た。

「でかい！」

「大型だ。バリアが強い！」

面倒臭いやつだな。

「うん。それにあの背中…」

ロボットは大砲を俺達に向けると、銃口から光が溢れ出す。

「だけど、私達なら」

「…うん！うんうん！命君！」

「任せて！」

二人の目の前にオルタを二重に展開する。

「いくよ、バルディッシュ」

『Get set』

「こつちもだよ、レイジングハート」

『Stand by ready』

大砲から砲撃が放たれた。

「サンダースマッシャー！」

「デイベインバスター！」

二人も同時に発射。オルタを通過しロボットの砲撃とぶつかる。
…いや、ぶつかる所か一方的に打ち消し、バリアも無かったように
ロボットを貫いた。

「すつげえ…」

二人が下りて来た。

「駆動炉にはアルフが向かってる。二人は母さんの所に？」

「うん。お話、聞かせて欲しいし…」

「俺は喧嘩売っちゃったけどな」

「こつち。ついて来て」

「フェイトちゃん…行こう！」

「急ぎますか」

俺達はフェイトの後を追いかけた。

途中で何体ものロボット達が襲い掛かって来たが、俺達三人の敵じやなかった。

「この瓦礫の向こう!」

「任せろ!」

オルタを展開し跳び蹴りをしながらぐり抜ける。

「ライダーキック!」

瓦礫を蹴り抜き中へと突入する。

…いた。

円柱状の水槽のような物に寄り添うプレシア・テストロッサが。

「見つけたぞプレシア!」

「その声…あの坊やね。それにフェイトと管理局の魔導師…」

プレシアはゆらりと立ち上がる。

改めてプレシアを見たが、彼女は異常に青白く瞳だけはキラついている。

「寄ってたかって邪魔をして…」

「母さん…」

なんだ?

通信映像ではよくわからなかったが、彼女が酷く驚かれて見える。

まさか…

プレシアを見た。

な…なんだこりゃ…癌？

…時間が無いってのはこういう意味か？

重病人を殴るって…

なんだか凄く戦う気が失せてきた…

「っ!？」

震動が止まった？

『プレシア・テストロツサ…終わりですよ。次元震は私が抑えています。先程駆動炉も封印が終わりました…』

「リンディさん!？」

クロノ達も終わったか。

てかリンディさん凄いな…

『忘れられし都、アルハザード…彼の地に眠る秘術は存在するかどうか曖昧な、ただの伝説です!』

「ちがうわ。アルハザードは次元の狭間に存在する!時間と空間が砕かれた時…その狭間に滑落していく輝き…道はたしかにそこにあ

る…」

『随分と分の悪い賭けだわ』

賭けなんてもんじゃないよ。

お伽話を頼りに宝探しするようなもんだろ。

『仮にその道があったとして…あなたはその道に行って何をやる？
失った時間と犯した過ちを取り戻す？』

「そう…取り戻す。私とアリシアの…過去と未来を。取り戻すのよ。
こんなはずじゃなかった…この世界の全てを！」

爆音と共に水色の砲撃が壁を壊し、クロノとユーノ、アルフが入って来た。

「世界は何時だってこんなはずじゃないことばかりだよ！昔から何時だって、誰だってそうなんだ！不幸から逃げるか戦うかは個人の自由だが、他人を巻き込む権利は誰にも無い！」

フェイトが意を決したかのようにプレシア歩み寄る。

「……………うっ！ごふっ！ごほっ！ごほっ！」

プレシアは激しく咳き込んで吐血した。

もう限界なんだ…

「っ！母さん！」

フェイトが駆け寄ろうとした。

「…何をしに来たの？消えなさい。あなたにもう用はないわ」

「……貴女に言いたいことがあつて来ました」

フェイトがプレシアを見つめて言った。

「私は、アリシア・テストロツサじゃありません。たしかに私は貴女の造った人形だったのかもしれませんが。だけど、私は…フェイト・テストロツサは、貴方に生み出されて、貴方に育ててもらった…貴方の娘です！」

「…フフフ…ハハハ…アハハハハハ！だから何？今更貴方を娘に思えと？」

「貴女が…それを望むのなら………それを望むのなら、私は貴女と共にあります。たとえ世界中の誰からも、どんな出来事からも貴女を守る」

プレシアはフェイトを睨むのを止めない。

「私が貴女の娘だからじゃない……貴女が、私の母さんだから！」

それからフェイトは更に前に出て手を差し延べる。

それからフェイトが手を差し伸べてきた。

「フェイトちゃん……」

「くだらないわ」

プレシアは冷たく言った。

「プレシアさん、どうして!?!」

「ここまでフェイトがあんたを思ってるんだぞ!何とも思わないのか!?!」

「…気付いたのよ、アリシアの代わりなんていない。代わりを用意するなんて、それこそアリシアへの侮辱…アリシアが私の娘、私の家族…私の全て…だから他の者は必要無い、くだらない…私には、アリシア以外は何もいらぬ!」

私の全て。

一瞬、プレシアの顔が、母さんと重なった気がした。

そうか…彼女は本当に大切にしていたんだ。

一人娘のアリシアを…
だからあんな狂気に走ったんだ。

娘のクローンを造り、さらにはこんな大それた事をして、アルハザードなんて場所に行こうとしていたんだ。

純粋な人だから…だからこそ壊れてしまったんだ。

「あの子の幸せの為に生きてきた!でも私は守れなかった!だから私は人の道を踏み外そうと、外道と呼ばれようとも、取り戻す…もう一度!」

プレシアが床に杖を突くとジュエルシールドが再び発動して次元震が起きた。

「まずい！」

庭園のあちこちが崩れ始めた。

「なのはちゃん、掴まって！」

「う、うん！」

なのはちゃんを担いで跳び退く。

『艦長、駄目です。庭園が崩れます！戻ってください！この規模なら、次元断層も起こりませんから…クロノ君達も急いで脱出して！』

「了解した！フェイト・テストロツサ！フェイト！」

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

なのはちゃんとアルフの呼びかけにも応じない。

「私は向かう、アルハザードへ！そして取り戻す…過去も未来も、たった一つの幸福も！」

プレシアの足元が崩れ出した。

…良いのか？このままで…

いや、駄目だ。

例え彼女が望んで無いにしても、まだフェイトに謝ってない。

こんだけ人に迷惑かけて、はいさようならって事にさせるか！

逃がしちゃしない。

このまま終わりにさせるか！

「なのはちゃん、フェイトを！」

「うん！」

なのはちゃんがフェイトに駆け寄る。

「母さん！」

プレシアが落ちていく…アリシアと共に。

「逃がすかああああ！」

俺は全力疾走し飛び込んだ。

第二十九話 皆の宿命（後書き）

つばさ「結局戦わんのかい」

命「流石にまずいだろ。重病人相手に」

第三十話 なまえでよんで（前書き）

無印終結

第三十話 なまえでよんで

（命SIDE）

俺は無我夢中で飛び出した。

「乱れ鉄鎖！」

そして腕から鎖を射出しプレシアとアリシアの入った水槽のような物を捕まえる。

「命君！」

なのはちゃんがフェイトを抱えて飛んで行く。

「何をするの！？離しなさい！」

鎖を引き戻す。

「離すか！お前は自分が感じた不幸…たった一つの幸福を失う事をフェイトにまで与えるつもりか！」

オルタを足場にする。

やっぱり魔法じゃないから使える！

そのまま次々と展開し上って行く。

「なんですって?」

「あなたはアリシアを幸せにする為に頑張ってきたんだろ? フェイトはお前を幸せにする為に頑張ってきたんだ! 同じ事だ!」

ついに虚数空間から脱出する。

「自分がされて嫌な事を、人にはしちゃいけないって教わらなかったのか? それに、まだフェイトへの謝罪の言葉を聞いてないしな」

「…だから?」

「あんたはこのまま行かせやしない。少し頭を冷やして考える。何が自分にとって最善か」

プレシアを肩に担ぎ、尾と左手でアリシアを抱える。

「命君!」

「母さん!」

なのはちゃんとフェイトが近づく。

「二人共、早く脱出しよう」

「こっちだ! 急いで!」

ユーノが手招きする。

「最善なんて……考えても無駄よ……」

ん？

「じぶつ！？」

突如プレシアが吐血し俺の外骨格を赤く染める。

「母さん！？」

「命君、早く行こう！アースラに運ぼう！」

「ああ！」

俺達は走り出し、アースラへと帰還した。

〔SIDE OUT〕

〔なのはSIDE〕

医務室のベットにプレシアさんが横たわってる。

「母さん、しっかりと！母さん！」

周りでは医療スタッフの人達が忙しそうに走り回ってる。

「ヒュー…ヒュー……フェイト、前にも言ったように…私は貴女が嫌いよ。でも…今まで、よく働いたわ……だから、最後に…褒美をあげる。管理局員…そこにいるわね？」

「はい」

クロノ君が返事をする。

「今から言う事を…しっかりと聞いておいて……今回の件は…全て私に責任が有るわ。フェイトは私が強制して働かせた…だから…良いわね？」

「わかりました。彼女はこちらで保護します」

クロノ君の言葉に安心したように目を閉じる。

「フェイト…貴女は自由よ。私に縛られず…好きに…生きなさい…」

「母さん…」

「げふっ！…げふっ！」

プレシアさんが咳込み、血でベットが真っ赤になる。

「駄目！しっかりと、嫌！」

フェイトちゃんがプレシアさんに寄り添う。
吐血がフェイトちゃんにもかかる。

「どいてください！皆さん外に！」

「フェイトちゃん、行こう」

私はフェイトちゃんを連れて部屋をでる。

「ああ…アリシア、今側に行くわ……フフフ…もう…一人にしない
…ママが一緒よ……」

部屋を出る直前に聞いた言葉が、プレシアさんの最後の声だった。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

「先程、プレシアの死亡が確認された……」

クロノが通信機ら手を離す。

「「「……」」」

変な気分だ。

あんなにフェイトを嫌ってたのに、最後には庇って…

「あの…フェイトちゃんは？」

「プレシアの証言が有るとはいえ事件の関係者だ。自由にはできない」

「おい！約束が違…痛！」

「命、じっとしてて」

もう少し優しくやってくれよ…

「今回の事件は、一歩間違えれば次元断層まで引き起こしかねない重大な事件なんだ。時空管理局としては関係者の処遇には慎重にならざるを得ない」

クロノの頭にエイミーさんが楽しそうに包帯をまく。

おい、リボンみたいになってるぞ。

「…だが、悪いようにはしない。それは絶対に約束する」

「今はクロノに任せよう。僕達じゃ力になれそうにないし」

「うん…」

「そうだな。頼むよ」

「ああ。…エイミィ、やり直し」

「ちえ」

まあ、事件は終わりかな。

なんか忘れてるような……………あ。

「なあ、あの変態とデネブは？」

「あ…すっかり忘れてた」

「僕も」

哀れ（笑）。

「桜島侑斗はこの後裁判に掛けられる。両親の殺害に魔法を使ったからね、有罪は確実。それに彼の精神状態からして、管理局への従事も保護観察も無しになりそうだ」

「従事？」

「高い資質を持ち、更正の見込みがある場合は管理局へ協力する事で罪を軽くする事ができるんだ。フェイトもそうなるだろうね」

そういや管理局って万年人手不足って言ってたな。

「だが自分を格好良く見せる為に両親を殺害したり、なのはといるとゆうだけで命を襲撃……いくら魔力資質が高くても、彼は犯罪者として一生を終えるね」

侑斗のやつ、フェイトと一緒に管理局について考えだつたんだな。そうはならなさそうだけど。

「ざまあみる。あいつのせいで、母さんは一生不自由な生活を強いられたんだ……って高い？あいつ、魔力高いのか？」

「ああ。なのはには劣るけどね」

…なんかムカつく。

「とにかく任せるよ」

「フェイトちゃんの事、お願いね」

「大丈夫だよ。プレシア・テストロッサの事もあるし、事情が事情だしね」

「あとは偉い人達にその辺りの事実を理解させるのだが、ちょっと自信はある。艦長もそうだけど、僕らの上司も理解してくれるはずだ。心配しなくて良い」

クロノとエイミーさんが微笑む。

「何も知らされず、ただ母親の願いを叶える為に一生懸命だった子を罪に問うほど、时空管理局は冷徹な集団じゃないよ」

「…クロノ君って、もしかして凄く優しい？」

「な!？」

クロノの顔が真っ赤になる。

「し、執務官として当然の発言だ!私情は別に入っていない!」

「何照れてんだよ」

「照れるクロノも面白いね」

「流石執務官殿ですな」

「……!?僕をからかうな!」

「なんだよ、身長と同じで心もちっちゃいのか？」

「なんだと!君がでかすぎるだけだろ、この電信柱!老け顔!」

「もっぺん言ってみろ!誰が老け顔だ!俺はまだ一桁だ!」

「二人共止めてよ」

そんなこんなで次元震が治まるまでの数日、俺達はアースラですごし、家に帰った。

ちなみにユーノはまだ航路が安定していないため、しばらくうちで預かる事になった。

そして俺達はまた普通の生活に戻ったのだ。

つばさに事の成り行きを話した所、大体原作通りらしい。

ただプレシアとアリシアは、虚数空間に落ちてしまるのが違うが。

「これで無印は終わりやな」

「無印か…次なのか、つばさの妹が関わるのは？」

「せや」

授業中の念話による情報交換。

「ほんまに頼むで。妹の命がかかっとるんや。うちが仮面ライダーやっつての黙っついてや」

「だけど敵か…大丈夫、唯一の肉親だろ？助けたい気持ちは理解できるぞ」

「ごめんな…」

しかしつばさが敵か…それにあの車椅子の…

あの子が敵になるのは想像しにくいが、まあ魔法でなんかあんだろ。

そついや【リリカルなのは】ってかなり長いんだつたよな。

「おい、原作はいつまで続くんだ？何期まであるんだよ」

「半年後が二期、十年後が三期、十四年後と十六年後が四期。前世では四期の途中までしかやつとらんかつたな」

…こいつ今なんて言った？

十六年後？俺達二十五じゃないか！

「それ…魔法少女なのか？」

「魔法戦記に変わつとるで」

…長い…二十五まで…

だ…だが、なのはちゃんか管理局に入れば事件解決の為に働くのは
确实だからな…

そつだ！俺はやるんだ！

流石に二十を過ぎればハーレムとかうるさいやつもいなくなる…は
ず！

やつたるで！

それから数日後。

俺となのはちゃん、ユーノは、海鳴臨海公園へ来た。

どうやらフェイト達と面会ができるらしい。

公園にはすでにフェイト、クロノ、アルフが到着しており、俺とユーノはなのはちゃんとフェイトを置いて少し離れた場所に移動した。

二人きりで話させたいからね。

「しかしあんた…百足、蠍人間だったんだね。どつりであたしの野生の勘が…」

「動物に嫌われるのは慣れてるさ」

「ここに来る途中でも、ペットの犬とかが逃げようとしてたね」

「全く…そうだ、命に二つばかりニュースがあるんだが」

二つ？

「それって良いのと悪いの？まさか悪いのもっと悪いのか？」

「前者だよ。で、どっちから聞く？」

「悪い方から…」

俺は好きなものは後にとっておくタイプだからな。

「…桜島侑斗が脱走した。デネブも一緒にね」

「な!?!」

「え!?!」

「なんだって!?!」

どうしてだ?

しかもデネブまで。

「デネブが協力したとは考えにくい。とにかくすでに指名手配されているが、気おつけてくれ」

「復讐に来るかもしれない…か。自業自得なのに。で、良いニュースは?」

「ニュースと言うより、これだ」

クロノは青く細い六角形の宝石がついたペンダントを取り出した。

「あら、デバイスじゃないか!」

「もしかして…!」

「そう、君のデバイスだ」

「やったじゃないか命！」

クロノから受け取る。

俺の…

「名前はギフト、非人格搭載型のベルカ式補助デバイスだ」

ギフト…ドイツ語で毒。

まあ毒持ちの俺には良いかもな。

それに贈り物として貰ったし、悪くない。

「桜島侑斗の件もある。君にも必要だと母さんが判断してね」

「ありがとう」

「ねえ、起動して見せてよ！」

そうだな。

「君のエクステンドと同じキーワードで起動できる。人避けの結果も張ってあるから試してみると良い」

「じゃあ遠慮無く…エクステンド変身！」

俺の身体が青紫の外骨格に包まれる。

いつもと変わらない外骨格。

だが、一つ追加されている部分がある。

左の二の腕に六角形の宝石が着いた、銀色の腕輪がある。

肩の装甲のせいで目立たないな。

「処理速度に優れ、命の変換素質の補助も担っている。前より運用効率も良い」

「俺は自分の身体が武器だからな。うん、気に入った。ありがとう。リンディさんにも伝えといて」

「ああ…っとそろそろ時間か」

「短いな」

「仕方ないよ」

クロノとアルフが立ち上がり、俺も変身を解除する。

「時間だ…もういいか？」

二人の元へ歩み寄る。

「…うん」

「フェイトちゃん！」

なのはちゃんがフェイトを呼ぶと自分の髪を結んでいたリボンをほどいて、それをフェイトに差し出した。

「思い出にできるもの…こんなものしかないんだけど」

「じゃあ、私も…」

フェイトもなのはちゃんと同じように自分のリボンをほどいてなのはちゃんに差し出す。

「ありがとう…なのは！」

「うん…フェイトちゃん！」

「きつとまた…」

「うん。きつとまた」

別れの時が来た。

フェイトたちが集まって転移魔法の魔法陣が展開する。

「クロノ、本当にありがとう。リンディさんにもよろしく」

「ああ。しっかり使いこなしてくれ」

「フェイトちゃん、クロノ君、アルフさん…」

フェイトが小さく手を振る。

俺達も応えるように手を振る。

視界が青く光ると皆はその場から消えていた。

「…帰ろっか」

「そうだな」

「そういえば使いこなすって何なの？」

「リンディさんが俺にデバイスを用意してくれたんだ」

「へえ、名前は？」

「ああ、名前は…」

そんな話しをしながら、俺達は帰路についた。

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

俺は…どうして…

何故…

膝を抱えてうずくまる。

「何をやってるんだ桜島侑斗。オリ主になるんだろ？」

誰だ？

顔を上げる。

そこには顔があり、周りから触手のように腕の生えた巨大な時計がいた。

俺を転生させた神…

「何の用だよ…俺を笑いに来たのか？なら笑えよ」

「お前を助けに来たんだ」

無駄な事を…

「助けた所で何になる。ハーレムは無理だし、あいつには勝てない…」

「お前の鍛え方が悪いんだ。魔力も上だし、スペックは負けてないんだ。ほれ、新しいベルトだ」

新しい…ベルト…

「そんで…」

神が指を鳴らすと、デネブが現れた。

「え？侑斗！？どうして？」

「お前の敗因はこいつにもある。そうだろ？」

……そうだ。

「そうだ。俺は悪くない……こいつが余計な事をするからだ！俺の能力なんだ、俺に従ってりゃ良いんだ！」

「侑斗……どうし……っ！？」

神がデネブの頭を掴む。

「な……侑……斗………ヲ主人公ニ……侑斗ヲ主人公ニ」

道具に心なんかいらぬ。

「ほらベルトとカードだ。あと改造して面白い事になってるぜ」

ベルトを受け取る。

「欲しい物は力づくで手に入れる……そう、俺はダークヒーローになるんだ」

「脱走させてやる。だがまだお前は未熟。鍛えろ。まずはそれからだ」

「…フン！変身！」

『Over Drive』

俺の新しい力。

見た目は赤銅色のベガフォーム…だがゼロフォーム以上のパワーを感じる。

「仮面ライダーゼロノス、スターダストフォーム…さあ行け！お前のオリ主人生はこれから始まるのだ！」

千路命：今は時間をくれてやる。

力こそ全て。

そうさ俺が手に入れる。

力づくに！

第三十話 なまえでよんで（後書き）

命「ギフトのイメージは突起の代わりに宝石のついたギギの腕輪だ」
侑斗「スターダストフォームには隠された力が！」

つばさ「誰も聞いとらん」

第三十一話 ラブアンドピース(前書き)

平和ですね

第三十一話 ラブアンドピース

（命SIDE）

「ん…」

深い官能的なキス。

彼女を抱きしめる腕にも、自然と力が入る。

そして彼女をベットに押し倒す。

「命君…」

「なのは…」

なのはの頬を撫でる。

「やっと…結ばれたんだね、私達」

「今まで一緒だった。そして、これからもだ」

今日、俺達は夫婦になった。

皆に祝福され…

「なのは、幸せにするよ」

「駄目。一緒に幸せにならなきゃ」

「…そうだったな。一緒だ。ずっとね…」

「うん…」

俺達は再び抱き合う。

「なのは…」

「命君…」

二人の顔が近づき、そして……

〈SIDE OUT〉

〈なのはSIDE〉

私は命君を起こしに来ただけど…

「なのは…」

命が寝言で私の名前を…

どんな夢を見てるんだろ。

もしかして…はう／＼／

「な、なのは？もしもし…」

はっ！いけないいけない。

命君を起こさなきゃ。

「命君、起きて」

命君の身体を揺らす。

「ほら命、学校でしょ」

ユーノ君も命君の顔を突っついて、起こそうとする。

「ん……あれ…？」

「おはよう、命君」

「…あ、ああ。おはよう…」

ようやく起きたの。

「命、さっきからなのは名前を呼んでたけど、どんな夢を見てたの？」

「私も気になる」

どんな夢なんだろ。

すると命君は顔を背けちゃった。

「覚えてないよ！ほら、着替えるから出てって！」

ユ一ノ君と一緒に追い出されちゃった…

私、夢の中で何かしっちゃったのかな？

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

なんつゝ夢を見たんだ…なのはちゃんとの結婚初夜の夢なんて…

駄目だ、恥ずかしくて彼女の顔をまともに見る事ができない。

はあ…

なんであんな夢を見たんだろ。

まさかサキユバスでも送られたとか？

…

煩惱退散煩惱退散煩惱退散!!!

「おい、千路」

ん？

どうやらクラスメートに呼ばれたようだ。

「ちょっと来い」

「なんでだよ」

「いいから！」

腕を引つ張られる。

なんだか前にも似たような事をされたな。

なのはちゃん達に囲まれて良い気になるな、とか言われて喧嘩売られた。

勿論俺は勝ったがな。

やれやれ…

「来たな」

そこにはクラスメートや他のクラスの連中が十数人いた。

あまり喧嘩とかしたくないんだけどな…

「千路、ちょっと話しがあんだがよ…」

「なんなんだ？」

「お前、バニングスと仲良いよな」

アリサか。

「それがどうした？」

するとその少年は俺に近づくと…

「頼む！これ、渡してくれ！」

一通の手紙を差し出した。

「俺は月村さんに！」

「僕も！」

「俺は高町だ！」

「八神に渡してくれ！」

次々と手紙を渡された。

なるほど、ラブレターを代わりに渡してくれって訳か。

俺はポストじゃねえよ。

だけど…まあ良いか。

なのはちゃん宛てつてのは気に入らんが、破り捨てるなんてのは外道のやる事だからな。

……俺今何考えてた？

「何よこれ？」

「見ての通りラブレターだ。三人宛ての」

「えつと…」

放課後、三人に預かったラブレターを渡した。
三人共複雑な表情をしている。

「なのはちゃんとアリサが三人、すずかが五人だ」

まさかすずかがトップだとは…

「命君、それは？」

「もう一通は誰の？」

もう一通？ああ、これが。

「つばさのだ。渡してくれって頼まれたし」

「一通…すずかには負けたけど、八神さんには勝ったわ」

何張り合ってたんだ。

「でも、もう帰っちゃったよ、八神さん」

「まじっ？」

本当だ、いない。

「そういえば八神さんって、いつつもすぐ帰っちゃっよね」

「命君以外と話してるのもあまり見ないし…」

「よく考えてみると、学校以外で話した事無いな」

「人を避けてるみたいで、本当変わってるわね。命、あんたなんか知らないの？」

なのはちゃん達を避けてるのは、多分原作が原因だろうな。敵になるって言うってたし。
それに妹の事もあるしな。
あいつも苦労してんだな。

「色々大変らしいぞ。家の事とか」

「ふうん…」

勝手に話すのも失礼だし。

「じゃあ、追いかけるわ。多分、遠くには行ってないし。先帰って
て」

「あ…ふうん…」

「神の視点で探すから、すぐに終わるよ。練習場所に先に行ってて」

「うん。待ってるからね」

「急ぐよ」

「じゃあな」

「じゃあね」

「また明日」

さてと、つばさは……いた。

「つばさー！」

俺が叫ぶとつばさは振り向いた。

「命か。なんや？」

「預かっているもんがあつてな」

つばさに預かっているラブレターを渡した。

「……ラブレター？」

「おう」

つばさが微妙な顔をする。

あんまり嬉しそうじゃないな。

「迷惑だったか？」

「……まあ、今は恋愛とかそんな事考えとる余裕無いし」

「妹の事が」

「せや。誕生日も近いし、今年は忙しいんや。九歳の誕生日が、魔法に関わる重大な日やし」

そう言いながら手紙を鞆に入れる。

「誕生日いつだよ」

「六月四日。あ、プレゼントとかいらんで。特になのはには話さんとしてや。妹とまだ会わせとくないし」

「まだ…か」

「下手に関係ができると、どうなるかわからんし」

「原作通りなら助けられる…か。敵になるのは嫌だが、仕方ないか」
妹を助けるのに必死なのはわかるが…今はつばさを信じるしか無い
か。

「話し戻るんやけど、命はラブレター貰った事あるんか？」

ニヤニヤしながら話し出した。

「うん…」

「無いよ」

「前世を含めても？」

「…悪いか？」

「年齢〓彼女いない歴？」

「こいつ…うぜえ…」

「前世は人生の半分以上が入院生活だったが」

「……」

「…」

「そついうお前は？」

「高二の時に一度だけ彼氏あったで」

「あつそ」

リア充め。

「そんで、付き合って二日後の下校デートでホテルに誘われたわ」

「…まじ？」

「その場で股間蹴り飛ばしたで。身体目当てなんて最低や」

想像しただけで痛え…

「笑えねえな。じゃあ用事があるから帰るわ」

「ほな、また明日」

じゃあ、なのはちゃんと魔法の練習に行くか。

……やばい、また夢の事を思い出しちゃった。

大人のなのはちゃん、美人でスタイル良かったなあ…

…はっ!?

うおおおおお!!!

煩! 悩! 退! さあああん!

第三十一話 ラブアンドピース（後書き）

つばさ「で…夢の中でどんな事をしたんや？（ニヤニヤ）」

命「う…」

なのは「けけけけ結婚ししししし初夜!?!?!?」

ユ一ノ「落ち着きなよなのは…」

第三十二話 竜と龍（前書き）

今回は長いです

第三十二話 竜と籠

くつばさSIDE

郵便ポストの中に入った手紙。
内容はうちと命の呼び出しや。

確実に転生者やな。

明日の日曜…

下手に連絡する訳にもいかんし…
うん、ボルボルにミラーワールド経由で手紙を出させたんやけど…
大丈夫やろ。

515

次の日。

「おはようさん」

「おう。おはよう」

待ち合わせ場所に命は先におった。呼び出された場所の近の公園や。

「で、呼び出されたのはあの山か」

「せや。……畏やろうな」

二人で歩く。

「周囲は警戒している。今の所は人影は無いな」

「わかるんか？」

「目は良いからな」

ふうん。

そんなこんなで着いた。

呼び出された山の中の工事跡地。

Vバックルはあらかじめ装備しておく。

誰もおらんな……

「周りに畏の類いは無いな……いや、二人の人影があるな。男女二人組だ」

「どこ？」

「あっち」

本当や。崖の上に誰かいる。
ん？なんか飛んきた？

「なんだこれ？」

うちの周りに球にナイフがくつついたような物が刺さる。
どれもうちらを外している。

なんか見た事あるような…

「わざと外したか、狙い撃ちが下手なのか…」

……っ！？

これって！

「命、これ爆弾や！」

球から細い棒が飛び出す。

「ちっ！」

命がうちを掴んで跳ぶ。

「ブラスト！」

その瞬間、一斉に球が爆発した。

「危ねえ…」

「気が付くのがあと一步遅かったら…危なかったわ」

たしかこの爆弾は…

煙りが晴れてくる。

そこから黒髪でセミロングの少女と茶髪の少年が現れた。

「なるほど。無印を乗り越えただけはあるな…」

「…フン。私達の敵である事に変わりはない」

少女の方はやる気満々。

ほんま嫌やな。

「お前ら、何の用だ？」

「知れた事…お前達二人はこの世界を壊す。余計な事をする前に消えてもらっぞ！」

「まあ、そういう訳だ。悪いな」

ある意味厄介な連中やな。

「なんなんだよこいつら」

「多分原作主義者。原作以外は認めんとかそんな連中や」

はやてに危害を加える気が無く、逆に守る側やから、余計に質が悪いわ…

「あつちの男は俺がやる。おい！俺が相手だ！」

命が少年を指差す。

「和樹、頼むぞ」

「…能力からして、はやて姉を俺が相手した方が良い気がするが…
まあ良い。了解だ久美、男同士やってるよ。こっちだ！」

二人が離れていく。

「…お前、はやての姉らしいな」

少女、久美は一枚のカードを取り出す。

「せやからなんや？原作を壊すつもりは無いで。原作通り以外には
やてを助ける手段は無いし、うちの能力じゃリインフォースを救
う事もできへんし」

自分で言ってる悲しくなっただわ…ほんまは助けたいのに…

「だがお前達二人が、はやてとなのは達を引き合わす可能性がある。
それにお前ははやての姉…運が悪かったと思え」

うち、狙われやすいからなあ…

「ヴォルケンリッターが現れてからでは殺すのが難しくなるからな。
今の内に始末させてもらおう」

交渉は不可能、か。

「ハーレム狙いとかそんなんじゃない分、やりにくいけど、仕方あら
へん………変身！」

デッキをVバツクルに差し込み、仮面ライダーシザースに変身する。

「来い！ヴォルボックス！」

カードから三本の骨の腕が伸び、久美の腹部に突き刺さる。そのまま腕が腹をひらき、その穴から奇妙な生き物が現れた。

球体の身体に四本の脚が生えた生き物。

予想通りか…

自爆竜ヴォルボックス。

カオシツクルーンかい…

「危なっかしいもんな」

「だが攻撃力は十分だ」

久美はヴォルボックスに飛び乗る。

「そうかい！」

『GUARD VENT』

シエルディフェンスを召喚する。

相手は全身爆弾の攻撃重視型。

しかもカオシツクルーンのカードではモンスターが受けたダメージは召喚者も受ける。

つまり身体を爆発させて攻撃すれば、召喚者もダメージを受けるんや。

ひたすら耐えて自滅を待つ。

それに本体を爆発させるファイナルブラストは使わんはずや。

「くらえ！」

先端がマジックハンドのようなヴォルボックスの尾が久美を掴み、身体の右側から穴がいくつか開いた棒が飛び出る。

そしてその穴から先程と同じ、ナイフのような刺が付いた球を撃つ。

シエルディフェンスで弾く。

この球を撃つ事はたいした威力は無い。

問題はこれを爆発させる事や。

「ブラスト！」

弾かれ散らばった爆弾が爆発する。

衝撃が走るが、ダメージはたいしたことない。

装甲やシエルディフェンスが少し焼けただけや。

「なんや、この程…」

え？ダメージを受けてない？

すると久美のカバンからカードが二枚飛び出て燃えた。

「デッキ…」

「そうだ。魂をカードにチャージする事で、召喚者が受けるダメージを肩代わりしてくれる。私が弱った所を狙おうとしたようだが…無駄だったな」

ドヤ顔すんなや。

せやけど、どないしょ…

これならファイナルブラスト以外は遠慮無く使ってくる。

魂を全部チャージしとるんなら、デッキを全部破壊すれば死ぬ。

デッキを狙う？

「行くぞお！」

左側からも棒が飛び出た。

そして次々と爆弾が発射される。

「ええい！」

走って避ける。

だが爆弾は久美の意思で爆発させるタイプや。残つとる分危ない。

飛行魔法が使えたら良かったんやけど…

「ちょこまかと逃げるな！ブラスト！」

「きゃあ!?!」

爆風に吹き飛ばされる。

そこにうちを押し潰そうと、ヴォルボックスが飛び掛かる。

「こんなる！」

『STRIKE VENT.』

転がって回避し、シザースピンチを召喚し殴り掛かる。

「ヴォルボックス！」

ヴォルボックスの前面から棒が飛び出し、攻撃してきた。

「うわ！」

ギリギリで回避する。

だがそのスキをうけてまたヴォルボックスが離れる。

「知ってるぞ。龍騎系のライダーは、他のライダーからカードを奪えると。どうやらお前はシュートベント等の射撃能力を持ってないらしいな」

「…残念やった…な！」

シザースピンチに魔力を込め、斬撃波を放つ。

「何!？」

ヴォルボックスは飛びのき、後退しながら爆弾を撃ってくる。

命から魔法の使い方がある程度教わつといて良かったわ…

「今のは…魔法か！やはりはやての姉だけあって、リンカーコアを持ってたか！」

「そついう事や！」

避けながら、近くの林の中に逃げる。

ここなら木が邪魔で撃てへんはずや。

「そんな所に逃げてても無駄だ」

性懲りもなく撃ってくる。

木に刺さりうちには届かへん。

「弾切れ？」

しめた！

前の方は爆弾が残つとるから、正面からは近づけへん。せやけど側面から回り込めば。

「甘い！」

ヴォルボックスが久美を離し、尾をうちの周囲の木に引つ掛かるよ
うに取り囲む。

前は爆弾、後ろと横は爆導索…

あ、あかん。囲まれてもうた。

「逃げ場は無い…とどめだ！」

どうする？耐えられるんか？

いや、待った…：せや！

『NASTY VENT.』

「ブラスト！」

爆弾が一斉に爆発する。

「ハハハハ…ハハ…：…すまない…お前は悪く無いのに…：」

だったら…

「だったら、こんな事止めんかい！」

『HOLD VENT.』

ヨーヨー型の武器、バイオウィンダーを召喚し、久美の首に巻き付ける。

「な！？今のを耐えただと！？」

「耐えたんやない。よう見ても」

「え？馬鹿な！爆導索が爆発していない！？」

爆発したのは先に発射した爆弾だけ。

せやからうちは後ろに逃げるだけで爆発から逃れる事ができたんや。

「なんで…爆発しない…」

呆然としている。

「教えたるわ。うちのデッキにはな、ナスティベントのカードがあるんや。これは高い潤滑力のある泡で妨害する能力がある…」

「まさか…それで制御棒を？」

ヴォルボックスの爆弾には全部制御棒が着いておる。

この制御棒は安全装置の役割を持っており、この棒が飛び出ない限り爆発せんのだ。

「滑って制御棒が飛び出ない…そしてこのカードは二枚あるんや」

『NASTY VENT』

ボルボルの吐いた泡が、ヴォルボックスを包む。

「しまった！」

勿論、さつきから本体から飛び出でとる棒も制御棒。

これが全部飛び出る事で、本体が爆発する事ができるようになる。

「これでヴォルボックスは湿った痲癩玉や。足も滑って立てへん」

『ADVENT.』

バイオグリーザーを召喚。伸びた舌が久美のカバンを奪う。

「か、返せ！」

「何言うとるん。これであんたの命はうちの手の上や。どないするん？」

「く……うっ……」

久美の瞳に涙が浮かぶ。

…なんか、こっちが悪人みたいやな。

「…えっと……話ししよ？せや！あんたら魔力無いのに、どうするつもりやったんや？A・Sまでならともかく、その後は難しいやろ」

「うっ……うるさい！どうにかできる！私は原作を守るんだ！」

「うちも原作を壊しとうない。妹の命がかかるとるんや。…なあ、うちらは戦う意味なんか無いって」

「……………」

彼女はさっき謝った。

カバンを投げ返す。

「お前、何を考えてる!？」

「なあ、協力せえへん?ハーレム狙いとかそんな連中はまだごまんとおる。うちはそういった連中からはやてを守りたい、命はなのを守りたい」

「やっぱり、あいつはハーレム狙いじゃないのか?」

「そう。しかも原作知識無しや。まあ、うちが少し教えただけど」

「そっいえば命は大丈夫なんかな?」

「なあ、うちらが戦わん事はできへんのかな?」

「……私は……」

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

この茶髪の少年…たしか和樹とか呼ばれてたな。

「お前…なのはの幼なじみだっけ？」

「そうだが…」

「なあ、この町から出て行くとかして、なのはから離れてくれないか？そんで原作にはもう関わらない…そうすりゃお前を殺す理由が無くなるんだ」

「この町から出て行く気な無い。戦いたくないなら、止めてくれ」

「それはできない。久美が原作を守る事を望むなら、俺は全力で助けるだけだからな」

…なんだ？あの少女とかなり仲が良いらしいが…

「久美…は何者なんだ？」

「前世から一緒にいて…一緒に死んだ恋人さ」

「は？」

前世からの恋人！？

「転生させた神も違うのに…本当、俺達は赤い糸で繋がってるのかもな」

和樹は嬉しそうに語る。

「だから、あいつが望むのなら、俺は何だってやるさ。久美と一緒に……戦う！」

和樹は黒い箱のような物を取り出し、上着を脱いだ。腰にはVバックルが装備されてる。

こいつも龍騎系の仮面ライダー！
しかも黒いデッキって事は……

「変身！」

デッキをバックルに差し込む。
するといくつもの陰が重なり、漆黒の仮面ライダーに変身した。

左手には黒い龍の頭を模した手甲が装備され、顔には赤い複眼が光る。

仮面ライダーリュウガ。

なんてこった……スペックは高いし、性能がシザースより段違い。

「お前の能力は……まあ名前から予想できるかな」

「そうかい。エキステンド変身！」

『Ready』

外骨格をまとい、同時にギフトを起動させる。

「……待て。そんなリゼンブラ知らないぞ！どう見ても剣以外は千路美尋とは違うだろ！」

「俺は千路美尋と周防比夜の息子だ」

「なるほど…だからそんな頭なのか…あれ？同性じゃ…」

「そこは考えないでくれ」

「お、おう…」

まあ突っ込みを入れない気持ちもわかるがな。

「まあ良い…覚悟しろ」

『S W O R D V E N T 』

青龍刀のような剣、ドラクセイバーを召喚し構える。

「俺はまだ死ぬ気は無い！」

俺も両腕の剣を構える。

一時の静寂。

「うおおおおお！！！！」

同時に駆け出す。

振り下ろすドラクセイバーを左腕で受け止め、右腕で切り掛かる。

「甘い…」

和樹が蹴りを繰り出す、バックステップで回避、離れながら爆薬を付属させた針を撃つ。

「そら！」

「なんの！」

『GUARD VENT』

龍の腹部を模した盾を両肩に装備、針を防ぐ。

「シヤラアア！」

だが爆煙を利用して接近、両腕の剣で切り付ける。

「うお！？てめえ！」

「なんの！」

再び切り掛かってきたドラグセイバーを、足の鉄で掴み、そこを軸にして回し蹴りを頭に叩き込む。

「オリヤアア！」

よろけたスキに尾で投げ飛ばす。

「とどめだ！」

スパイラルコーンを展開、先端を和樹に向ける。

「まだまだ！」

『FINAL VENT.』

和樹がゆっくりと浮かび上がり、その周囲を黒い龍、ドラブラッカ
ーが飛び回る。

ドラゴンライダーキック…打ち破れるか？

『Rider Slash.』

いや、打ち破る！

黒い炎をまとった蹴りが飛んでくる。
スパイラルコーンを通過し右腕の剣に魔力を込める。

「シャラアアアアアア！！！！」

「でりやあああああ！！！！」

斬撃と飛び蹴りが衝突し、そのまますれ違った。

そして同時に着地する。

「く…」

剣が砕け、衝撃で腕の装甲がひびだたけになり血が滲んでいる。

「つぶく…」

向こうも左足から血が流れている。

まだまだ！まだやれる！

「ハア！」

立ち上がった瞬間を狙い、胸を蹴る。

「うおお！？」

『Ready』

同時にスパイラルコーンを展開。さらに表面を魔力で被う。

円錐の先端が少しずつ装甲を溶かしていく。

紅くないからクリムゾンじゃないけど…

「てりやああああ！！！」

『Viola Smash』

「うわああああ！？」

跳躍し飛び込もうとした瞬間…

『FINAL VENT』

「うおお！？」

横から何かがつつきり、吹っ飛ばされた。

「命、止めや！もう戦わんでええ！」

「つばさ!？」

今のはつばさだったのか？

「和樹！」

「久美!？何なんだ一体？」

和樹の下に久美が駆け寄る。

状況が理解できない。

何故つばさに攻撃された？

左肩の板状の装甲が潰れてるし……痛い……

「大丈夫？一応手加減したんやけど……」

そう言いながらつばさは変身を解いた。

「痛いわ!つつかどうなってるんだ?お前ら戦ってたんじゃないのかよ?」

「ああ。久美、説明してくれ」

和樹も変身を解く。

俺も解除するか…

三人が元の姿に戻る。

「千路、すまなかった…」

久美が頭を下げる。

「え？」

「久美…良いのか？」

「ああ。私は自己満足の為に二人を殺そうとしてた……本当にすまなかった」

再び頭を下げる。

「い、いや。わかってくれば良いからさ、頭上げて」

彼女は申し訳なさそうに頭を上げる。

「私は原作に関わらない。だが、転生者が襲ってきたなら協力する」

「久美……俺もだ」

「ほな、同じ龍騎系ライダー同士よろしく」

「よろしく」

つばさと和樹が握手する。

「ん」

久美が手を差し出す。

「よろしくな」

「うん。よろしく」

俺も久美と握手する。

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

仲間ができた。

そう思った矢先、うちの家は何者かが訪れた。

はやてが起きないようにリビングに移動する。

「ミラーモンスターやな。だれや？」

黒い龍が鏡から出てきた。

「ドラブラッカー？どないしたん？」

「コレヲ、ソナタニ」

黒いデッキを手渡される。

ん？なんか手触りがおかしいような……っ！？

手が赤く染まる。

よく見ると血まみれや。

「ドラブラッカー、和樹は？久美は？」

「殺サレタ…【デネブ】ト呼バレタ者共ニ…」

者共…犯人は複数か。

命の言つてた脱走したゼロノスが、また海鳴に来たんか？

「仇ヲトリタイ…我ト契約ヲ」

バイオグリーザーの時とは違う。あの時はカードを奪って強制しただけ…

「ほんまにええんやな？うちは仇をとる以外にもやらなあかん事が

あるんやで」

「無論協力シヨウ。我ハ和樹ノ仇サエトレレバ良イ…ソレ以外ニハ興味ハナイ、好キニスレバヨカロウ」

「ツバサ、俺ハノツタ方ガ良イト思ウゾ」

確かに…こんだけ強力なミラーモンスターが協力してくれるなら、非常に嬉しい。

「わかった、ギブアンドテイクや。必ず仇をとらせたる。せやからうちにも協力して、一緒に戦って欲しい」

「契約成立。……感謝スル…」

仮面ライダーゼロノス、桜島侑斗…仲間を得たのかどうかは知らんけど、このまま好きにはさせへん。

明日、命にも知らせなあかな。

第三十二話 竜と龍（後書き）

つばさ「リュウガのデッキゲット」

命「お前、もう来たのか？」

侑斗「フフフ」

第三十三話 誕生日前夜（前書き）

フラグ建った？

第三十三話 誕生日前夜

くユーノSIDEく

「やっぱりこの姿だと町も違って見えるなあ」

僕は人間の姿に戻って町を散歩している。

そろそろスクライアの方にも戻らなきゃいけないので、今夜帰る予定だ。

なので最後に町を見て行こうかと、変身を解除して散歩に出掛けた。

「当分は来れないかな……」

やっぱり寂しい。

せつかく二人と友達になれたのに……

でも最後のお別れじゃないんだ。また来れば良い。

僕は一日色々な場所を見て回った。

二人と出会った場所、動物病院、公園……

二人は学校で一緒にいられなかったから、少し残念だな。

気が付けはもう夕方。

そろそろ学校から帰って来る時間だ。

帰ったら二人に帰る事を話して……急すぎたかな……

じゃあ行こっか。

僕は高町家に向かって歩き出す。

ん？

ふと歩道橋を見上げると、少し上に一人の女の子が買い物袋を持ちながら下りてきた。

髪の毛の右側に×印の髪留めをつけたポニーテールの少女。

あの制服…二人と同じ学校の子か。

「…………え？つてあ！？」

女の子が階段をふみ外し、転びそうになる。

「危ない！」

彼女を受け止めようと飛び出す。

だけど僕の体格じゃ支えきれずに倒れてしまう。

頭から背中、顔に痛みが走る。

「いった〜」

彼女が起き上がる。

外から見ると、彼女が僕を押し倒すような体制だ。

ちよつと恥ずかしいかも。

「ご、ごめんな？大丈夫？」

女の子が離れ、僕も起き上がる。

「大丈夫。たいした事ないよ」

少し身体が痛むけど、まあ良いか。

「ほんま助かったわ。ありがとう」

「別に良いよ」

痛む鼻をさする。

「鼻痛むん？」

「いや、大丈夫だよ」

慌てて手を離す。

「うちの胸がおっきかったら痛くはなかったんやろな」

胸？……まさか！

「い、ごめんなさい！」

僕はなんて事を！

「ええつて。事故やし、助けてもらったんや。怒つとらへんで」
彼女は笑いながら答える。

その笑顔に思わず見とれる。

「なんや、手怪我しとるやんか」

彼女が僕の右手を取る。

少し擦り傷ができていた。

「ほら……これでよし」

僕の手にはハンカチが巻かれた。

始終僕の顔を見ていたような……

まあ金髪だし、外国人だつて思われてるんだろつな。
実際似たようなものだしね。

なんだか……少し恥ずかしいな。

女の子にこんな事された事ないし。

「あ、あの……」

せめて名前だけでも教えてほしい。

そう思つて声をかける。

「あー！大根折れとる！卵も潰れとるし！」

彼女が立ち上がり袋の中を覗く。

「ほな、さよなら」

手を振りなが立ち去る。

「ち、ちょっと待って!」

制止しようとしたが、彼女は走り行ってしまった。

……このハンカチ、どうしよう。

彼女の笑顔は今まで感じた事のない笑顔だった。

なのはが花、エイミーさんが太陽なら、彼女は春風のような笑顔だ。

…絶対また地球に来よう。

二人にも会いたいし、彼女にハンカチを返したい。

今度会ったら、名前を聞こう。

帰り道では彼女の笑顔が頭から離れなかった。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

ユーノが帰る。

学校から帰ってきた俺達にユーノが元の世界に帰る事を話した。やっぱり部族の人達を心配させたくないらしい。

その日の夜。

俺達は家を抜け出し、公園へとやって来た。

「帰っちゃうんだ…」

「うん。やっぱり、そろそろ帰らないとまずいしね」

「皆には元の飼い主が見つかったとでも説明するよ」

「お願い」

ユーノの足元に魔法陣が展開する。

「また…来てくれるよな？」

「勿論だよ」

「約束だよ！」

魔法陣の光が強くなる。

「ユーノ君…またね」

「待ってるからな」

「うん。なのは、命、本当にジュエルシードの事ありがとう」

「別に良いのに」

「気にすんなよ」

「じゃあ…またね!」

ユーノは手を振りながら転移した。

「行っちゃったね」

「そうだな」

これから寂しくなるな。

「だけど、また会えるさ」

「うん!」

最低でも冬には来るんだろうな。
二期的な意味で。

＼SIDE OUT＼

くつばさSIDEく

あゝ、風呂最高。

只今絶賛入浴や。

勿論はやても一緒やで。

しかし…まさかユーノとエンカウトするなんて。

驚いて転んでもうたわ。

おかげさまであんな一昔前のラブコメみたいな事になるなんて…

まあええか。

しかしほんまに美少年って表現が似合つとるな。

格好ええってのより可愛え系やな。

そういえば、今夜は闇の書が起動するんや。

…いよいよやな。

あかん、緊張してきたわ…

うん、大丈夫。

双子やから顔も同じ。いきなり【貴様何者だ！】なんて展開にはならへんやろ。

あ〜でも気絶したらどないしよ…

まあ、なるようになるか。

そんな事を考えてると、後ろから伸びた手がうちの胸を揉み出した。

「うひゃあ!？」

「お姉ちゃん何ポーっとしとるん？」

「はやて!」

またかい!

「男なんか？未来のお兄ちゃんなんか？それならお姉ちゃんの未来の為に、健全なバストアップを！」

そう言いながら、さらにうちの胸を揉む。

「なんでそうなるんや！男なんかおらんで!」

ユ一ノ事を少し思い出しとっただけや。

「てか、いい加減にせんか！揉むほど胸もないやろ!」

「だからや！お姉ちゃんの未来の為！私の趣味の為に！」
手の動きがいつそう激しくなってきた。

「趣味ってなんやああ?!?!?」

姉として大切な何かを失った八歳最後の夜やった。

闇の書起動まで、あと三時間。

寝室のベッドの上。

うちははやとゲームをしながら時間を潰している。

「お姉ちゃん、まだ頭が痛いんやけど」

「自業自得や。なんならもう一遍げんこつを喰らわしたるか?」

「ごめんなさい……」

「わかればよろしい」

最終的には気持ち良くなってきた自分が恥ずかしい……

「お姉ちゃん、もうすぐやな。私らの誕生日」

「ほんまや」

時計を見ると十一時五十五分。
もうこんな時間か…

「はやて、実は今まで隠しとった事があるんや」

「隠し事？なんなん急に」

仮面ライダーの事、今後の事を考えたら話した方がええな。

「実はお姉ちゃんはな…」

突如机に置かれた本が妖しく光り出す。

「な、なんや？」

鎖の巻かれた本、闇の書はまるで生き物のように脈動しながら近づいてくる。

「お、お姉ちゃん…」

はやては恐怖に顔をひきつらせ、うちに抱きつく。

そして闇の書の鎖が壊れ、本のページが次々とめくられていく。

『封印を解除します』

闇の書が閉じ、うちの目の前に浮かぶ。

『起動』

第三十三話 誕生日前夜（後書き）

はやて「目指せお姉ちゃん inverse ハーレム！」

つばさ「絶対嫌や」

第三十四話 ヴォルケンリッター（前書き）

うゝおるけんりったー

第三十四話 ヴォルケンリッター

くつばさSIDE」

『起動』

はやての胸の辺りから白い光。おそらくリンカーコアが現れ、闇の書に吸収された。

その瞬間、闇の書が急に輝き出し、眩しさのあまり目を瞑ってしま
う。

そして、次に目を開くと四人の人影がおった。

「闇の書の起動確認しました」

桃色髪のポニーテール。

バトルマニア、シグナム

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士でございます」

金髪の女性。

うっかりシャマルウ…じゃなかったシャマルや。

「夜天の主の元に集いし雲」

犬耳と尻尾でだいなしの残念なイケメン。

忠犬ザフィーラ。

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

赤い髪の三つ編み。

エターナルロリータ、ヴィータ。

勢揃いやな。原作通りで助かったわ。

見た事無いような守護騎士やザツフィー女体化とか無くって良かった…

「ボルボル、ドラ、出て来たらあかんで。話しがややこしくなる」

「アイヨ」

「承知」

四人はひざまずいてはやての言葉を待つ。

静かだ。

…まさか。

「はやて!?!」

あかん。やっぱり気絶しとった。

「しっかりせい!起きてや!」

身体を思い切りゆらす。

「はぁ?主が二人?」

「いや、おそらく親族の方だろう。双子なら顔が同じでも不思議ではない」

「あの…主の姉妹の方ですか？」

シヤマルがうちに話しかける。

「主って、はやての事？」

「はい」

よかった。どうやら不審者扱いされる事は無さそうや。あ、不審者はあっちか。

「せや。はやての双子の姉や。はやて、起きんかい！」

はやての耳元で叫ぶ。

「あひやあああ！？」

はやてが飛び起きる。

「なななななんや！？お姉ちゃん！？え？え？」

混乱したように慌てふためく。

「はやて、落ち着き。ほら、深呼吸」

はやての肩を掴んで落ち着かせる。

「フウ〜…」

「落ち着いたか？」

「う、うん…」

はやてはヴォルケンをちらりと見る。

「お姉ちゃん…」

「大丈夫や。お姉ちゃんに任しとき」

はやてを車椅子に座らせ、四人の前に立つ。

「で、あんたらが何者かも洗いざらい喋ってもらって。着いて来い」

「は、はい…」

そろそろとうちの後を歩いてくる。

「ん？」

「む？」

急にシグナムとザフィーラが立ち止まる。

「どないしたん？」

「いえ、何か視線を感じたので…」

……ミラーモンスターの二匹か。
流石に感づいたか…まあええ。後で話すんやし。

「ええからはよ来てや。話しが進まんし」

「はい」

リビングにて。

簡単な自己紹介と闇の書について話された。

原作通りやな。

しかし眠い…よい子は寝る時間やしなあ…

「そっか〜この子が闇の書ってもんなんやね」

はやてが闇の書を手取る。

「はい」

「昔っからあったな。高そうな本って程度しか思ったらんかったけど」

「せやな。綺麗な本やから大事にとってあつたんよ」

「覚醒前と眠っている最中に…闇の書の声を聞きませんでしたか？」

「ううん…私魔法使いとちやうから漠然とやつたけど…」

漠然ね。

「分かったことがひとつある。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、きっちり面倒みなあかんゆうことや。ええやろ？お姉ちゃん」

いきなり家に置くつて、無用心すぎやろ。

だから図書館ではやてに近づいて【家が無い】とか【家族がない】とか言つて、うちに上がり込もうとする連中がおるんや。

まあ一回しか無かつたけど…

そんな事言つても進まへんけどな。

「部屋も余つとるし…まあええわ」

「ありがとう じゃあ明日みんなのお洋服買つてくるから、後でサイズ計らせてな？」

「うちも明日は学校休むわ。明日は買い物やな」

「」「」「」

四人共目が点になつとる。

まあ原作でもはやては今までの姉とは違っとつたらしいし。

「何呆けとるんや。ほら、部屋に案内するから。夜も遅いし、はよ寝たいんや」

四人を急かす。

「はい。ですが……」

シグナムが立ち上がる。

「何者だ！先程からいるのはわかってるぞ！」

レヴァンティンを抜きテレビに向かって叫ぶ。

ヴィータもグラーフアイゼンを構え、シヤマルとザフィーラはうちらを庇うように立つ。

「え？誰かおるん？」

…うちにしか見えへんけど、画面にバッチリ写っとるんや。ボルボ
ルとドラが。

ちよつどええ。話しとこか。

「大丈夫や。敵やあらへんよ」

全員の前に立ち、制止する。

「姉上？」

「お姉ちゃん？」

「これ触ってテレビ見てみい」

デッキをはやてに渡す。

デッキに触れていれば、ライダー以外の人もミラーワールドを見る事ができるからや。

「なんやこれ……は？」

はやてがテレビを見た瞬間硬直する。

テレビの中にメタリックオレンジの蟹と黒い龍がおるんやからな。

「ボルボル、ドラ、出てきい」

うちが合図を送ると、テレビの画面から二匹がはい出て来た。

ボルボルは床に正座し、ドラは全長6mはあるから、部屋の壁にそって浮かんだる。

「「「「「……………」」」」」」

まあ、当然の反応やな。

「こっちの蟹がボルボル。で、でかい龍がドラや」

「オッス」

「ドラグブロッカーデアル」

「…お姉ちゃん、もしかして話して…」

「せや。二匹の事や」

「あの…この生き物は？」

「ミラーモンスター。鏡とか物が映る物の中に生息する生き物や。そこ、突つつくの止めい」

ヴィータがボルボルの頭を突つついとる。

「鏡の中…せやからテレビから出てきたんか」

「そ。ついでにミラーモンスターの力で仮面ライダーに変身できるんやー！」

今すっごいドヤ顔しとる。

「「仮面ライダー？」」

「…お姉ちゃんが厨二病になってもうた」

「ちょ！厨二病ちゃうわ！ええか、今変身したる！」

デッキをテレビに映す。

すると画面からVバックルが出現し、うちの腰に巻き付く。

「ベルトや…」

「フッフッフ…変身！」

変身ポーズをとり、デッキをバツクルに差し込む。
そしていくつもの影が重なり、仮面ライダーシザースに変身する。

「どや!? 仮面ライダーシザースや!」

「おお〜」

「弱そう…」

「ヴィーター!」

…どうせ蟹ですよ。

「なんか色々あつて疲れたわ…」

「いい加減寝なあかな。ほら、四人共こつちや」

「はい…」

変身を解除しヴォルケンリッター達を部屋に案内する。

「はあ…すごいなあ。魔法に仮面ライダーか…」

「ごめんな、今まで黙ってて」

「もうちょっと早く話してくれてもよかったですん」

「いやあ……」

下手に話してもなあ……

「その話しは今度や。おやすみ」

「おやすみなさい」

ようやく始まったうちの原作介入。
ここからが勝負所やな。

…はやて。絶対助けたるからな。

第三十四話 ヴォルケンリッター（後書き）

つばさ「これから出番増えそうや」

はやて「私も！」

第三十五話 一時の平穩（前書き）

夏休みが無い

第三十五話 一時の平穩

くつばさSIDEく

こんにちは。

八神はやての姉の八神つばさです。

ヴォルケンリッターが現れ、家が賑やかになりました。

ちゅくか、かなりの大所帯になってもうたわ…

ボルボルとドラにも食事を用意して……バイオグリーザ？カードの中ですが何か？ドラが部屋に入りきらない？鏡から上半身しか出したらんけど？ボルボル？食事は手づかみやけど？

あゝ、賑やかやなあ……………少し静かにして…

「ほな、いってきます」

鞆を背負い靴を履く。

「いってらっしゃい」

「お気をつけて」

「姉ちゃん、帰ったらゲームしようぜ」

「宿題が終わったらな。いってきま〜す」

家を出る。

あれから数日たった。

うちは八神家の家長的立場になってしまってる。

主の姉だからとか言われ、やれ姉上だ姉ちゃんやらと妹が増えたみたいや。

まあ悪くはあらへんけど…

うちの原作もついに始まった。

なんとかして原作組をはやてやヴォルケンリッターに近づかせんようにせんと。

一応命にはうちにあまり近づかんように釘を刺しといたけど…不安やなあ…

万が一はやての事、車椅子生活や両親がいないとか話したら、なのは達は確実に行動を起こす。

あと魔力の隠蔽もやっている。

A・sが始まって、クラスに魔力を持った子がいる 保護しようバレル。なんて事になるかもしれへんしな。

とりあえず命にどれだけ原作をリークするかやな。

全部話すと協力するとか言い出しそや。協力させて犯罪に巻き込

むのも悪いし…

うん。やっぱ止めよう。

後は猫姉妹やな。

あの二人がはやてにちよつかい出して暴走させる。それだけは避けなあかん。

早く完成させるしかないんかな…

うう…ストレスで胃が痛いわ…

ほんま、チートがうらやましい。

チートなら一人で魔導師を襲わず魔法生物だけを相手にできたり、猫姉妹狩りができたり、リインフォース救済ができたり…

てか前世から武術の嗜みがあったり、料理が店出せる程とか、天使のような歌声とか、楽器の腕前も天才的とか…：そんなオタク、そうそうおるわけないやろ！

どうしてそんな人間がリリなの知つとるんや！

しかも神様に惚れられとるとか無敵過ぎやろ！

ギブミーチート！

それなら何も恐れるものは無い！

うおおおおお！都合良く目覚めろ、うちの前世からの神通力！

「お姉ちゃん、何しとるん？」

「……双子間のテレパシーの練習を」

「……………できるとええな」

……話しが脱線してもうたわ。

とにかく今のうちのカじャリインフォースを助けるのは不可能。命も当てにできん。

とりあえず猫姉妹に殺されん程度には強くならなあかな。
あの二人は何しでかすかわかったもんやないし。

…シグナム辺りに鍛えてもらおか。

ある日、シグナムが騎士甲冑の事を言い出した。

「え？騎士甲冑？」

「ええ…我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません」

「自分の魔力で作りますので、形状をイメージしてくださいれば」

「そっか…せやけど、私はみんなを戦わせたりせえへんから…」

はやては眉間に指を当てて考える。

そういえばそんな事もあったな。

「お姉ちゃん、なんか無い？」

「うちに聞かんとして。これははやてが決めなあかん事やし」

正直うちが決めてもしょうがない。

「それなら…服でええか？騎士らしい服。な？」

「ええ…構いません」

「ほんなら、早速資料探して…かつこええの考えてあげな」

そして午後。うちははやてとシャマル、ヴィータで【といざるす】というパチモン臭い玩具屋に来た。

そう、全員の騎士甲冑のデザインの資料を探すためや。

「ここは？」

「ええからええから。ここいうところこそ、それっぽいのが…」

そういえばはやては何を資料にしたんやろ。

フィギュアかな？

ふと見るとヴィータが何かをじっと見つめている。

「ヴィータちゃん、どうしたの？ヴィータちゃん？」

シヤマルが呼びかけとるが聞いていない。
それほど夢中なんやな。

「お姉ちゃん（ボン）」

「任じとき」

その後こっそりと三人から離れ、兎のぬいぐるみを買った。

そして帰り道。

「いい風ですね」

「ホンマや」

「いいお天気ですし」

「絶好のお散歩日和やな」

シヤマルがはやての車椅子を押し、うちとヴィータが続く。
ヴィータの手には紙袋が抱き抱えられてる。

「ヴィータ」

「？」

「もう袋から出してええで」

袋に手を入れ、中の物を取り出す。

ウサギのぬいぐるみ、たしかのろいっさぎやったっけ。

「うわぁ」

ヴィータが嬉しそうな声を上げる。

「はやて、ありがとう」

「買ってくれたのはお姉ちゃんやで」

「うん。姉ちゃんありがとう！」

「ええって、この位。さ、帰る」

ヴィータの手を引き、再び歩き出す。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

つばさのやつが本格的に原作に関わるから、自分を避けるようにと
言い出した。

妹がなのはちゃん達と関わらないようにする為とはいえ神経質すぎ
ないか？

いや、あいつにも考えがあるんだ。余計な事は考えないようにしよ
う。

さて、あれからさらに数日。七月に入った。

最近めつきり暑くなり、夏休みが近づいてきた。

「今年はどうしようか？」

すずかがパンフレットを広げる。

「去年は海だったよね」

なのはちゃんがその内の一つを手取る。

「そういえば旅館でのカラオケは最高だったわね。まさかあんなに音痴だったなんて」

そう言いながらアリサが横目で俺を見る。

「悪かったな。どうせ下手だよ」

どうも前世から芸術は全く駄目だ。

歌も下手だし楽器も駄目。

絵も描けないしとことん不器用だな。

今俺はなのはちゃん達三人と夏休みの計画を立てている。

しかし何故俺の部屋でやるんだ？

俺はベットに座り、隣にはなのはちゃん、床にアリサとすずかが座ってる。

男の部屋で集まるか普通？

すると誰かがドアをノックした。

「はい？」

「お茶とお菓子を持って来たぞ。開けてくれ」

母さんか。

ドアを開けると母さんが入って来た。

「予定は決まったのか？」

母さんがお茶等が置かれたお盆を置く。

「ありがとうございます」

「予定はまだなんですよ」

皆でコップを取る。

「そうか。じゃあ私は行くぞ」

「うん」

母さんが部屋から出て行く。

「相変わらず凄いわね、美尋さん」

「気迫というか、迫力が…」

「にゃはは…」

でかいからな母さん。

「なんか命君も将来すっごく大きくなりそうだね」

「今でも年上に見える位だし」

「2mいくんじゃない？」

「流石にそこまでは鑑別」

180なら高身長で丁度良いけど、2mはなあ…
あ、でももう一人の母さ…父さん？の周防比夜は小柄だったし…こ
のまま伸びないのも嫌だなあ…

そして再び夏休みの計画を立て始めた。

第三十五話 一時の平穩（後書き）

つばさ「前世からの力とか、なんかないんか？」

神「無いな」

命、侑斗「俺は？」

神「無い」

第三十六話 真相（前書き）

……侑斗がさらに屑になりました

第三十六話 真相

一ヶ月前

（和樹SIDE）

八神つばさ、千路命と戦った次の日。俺と久美は二人で下校している。

俺達は私立聖祥大学付属小学校ではなく、普通の公立の学校に通っている。

「なあ、今度さつばさの家に行ってみないか？」

「八神の？なんでだよ」

「ヴォルケンリッターに会えるかもしれないし。私達は魔力が無いから、警戒される事も無いだろ？」

「それもそうだな……」

久美は楽しそうに頷く。

「しかし…変わったな」

「何が？」

「久美がだよ」

以前は陰ながら原作を守るとか言ってたし。

「そう…だな。前の私じゃ有り得ないな」

「せつかくの人生だ。楽しもうぜ」

「フフ…なんならアリサやすずかと同じように地球での友人ポジションになるのも良いかもな」

「おいおい、原作に関わらないんじゃないのか？」

「この位ならセーフだ」

そう言っただけ久美は俺の腕に抱き着く。

「久美…」

「なんだ？」

「今度こそ、幸せになろうな」

前世では結婚する前に死んでしまったし。

「頼むぞ。あ、な、た」

むう……こう言われると恥ずかしいな。

「ん？」

「なんだ？」

急に空が変わった。

おかしい……人の気配もしない。

まさか。

「和樹」

「多分結界だな」

リンカーコア持ちの転生者か？

「ドラグブロッカー」

「問題無い」

ミラーワールドは繋がってる。

これなら戦える。

「久美、今はデッキが無いから俺に任せろ」

「うん」

俺はデッキをカーブミラーに向ける。するとVバックルが出て来て、俺の腰に装着される。

「変身！」

デッキをバックルに装着。仮面ライダーリュウガに変身する。

どこだ？どこから来る？

すると俺達を囲むように何者かが降り立った。

「こいつら…」

「デネブ？」

ゼロノスの契約イメージンのデネブが何故？
しかも十人はいる。

「やっぱり私も戦う！」

「だけど！」

「この人数を和樹とドラグブラッカーだけでどうにかできる訳ない
だろ！こい、ヴォルボックス！」

久美がヴォルボックスを召喚した。

たしかに厳しいな…
仕方ない。

「無理はするなよ」

「わかってる！」

久美が飛び乗った瞬間、デネブ達が一齐に撃ってきた。

『ADVENT.』

俺はドラグブラッカーを召喚して背中に乗り、久美はヴォルボックスで飛び上がった。

「くらえ！」

ヴォルボックスの側面から制御棒が飛び出し、そこからいくつものナイフのような棘のついた爆弾を撃つ。

デネブ達は散開して避ける。

「あんまり撃つな！」

『STRIKE VENT.』

俺は地面に降りドラグクローを召喚する。

「ドラグクローファイヤー！」

「灰トナレ！」

ドラグブラッカーの黒い火球が一体のデネブに直撃し消し飛ばす。

「つてー！」

「!?!」

ヴォルボックスが撃った爆弾がデネブに突き刺さる。

「ブラスト！」

デネブが爆散し、久美の右腕から血が吹き出る。

やっぱりデツキ無しじゃきついか…

あんまり攻撃させないようにしなければ。

「!?!」

一体が殴り掛かってくる。

俺はそれを避け、何体かいる場所に蹴り飛ばす。

まとめて潰す！

『FINAL VENT』

ドラグブラッカーが俺の周囲を飛び回り、俺は宙に浮かぶ。

そしてドラグブラッカーが黒炎をデネブ達に吐く。

しかし一体のデネブに直撃しただけで他の連中は避けた。

黒炎は硬化してデネブを拘束する。

「ハアアアアアア!?!」

ドラゴンライダーキックが命中。デネブが爆散した。

一体しか倒せなかったか！

「デネビツクバスター」

回避した二体のデネブがデネビツクバスターに変身する。

んなのありかよ!？

デネブ達は一斉に銃口を俺達に向ける。

「久美、下がれ！」

『GUARD VENT』

ドラグシールドを召喚し久美とヴォルボックスの前に立ち、一斉射撃を受け止める。

「う…ぐ…!」

「和樹い！」

この人数だと弾膜がやばい…防ぎ…きれねえ…

「うおおあああ!？」

ついにドラグシールドが砕け、次々と光弾が命中し俺の身体を貫く。

全身から力が抜け、変身が解除されて倒れる。

「和樹！」

「和樹ー！貴様らああああー！！」

逆上した久美が爆弾を乱射し、ドラグブロッカーも黒炎を吐き出す。

「ブラストオー！！！」

「「「！？！？」」」

辺り一面を吹き飛ばす程の爆発。
今ので二、三体は仕留めたな。

「ぐああああー！？」

「久美！」

久美の身体中から血が吹き出る。

あんだけ爆発させたんだ…これ以上は。

「止める久美！」

「損害50%、戦闘続行」

デネビックバスターに変身していた奴らが元の姿に戻る。

「ブツ殺してやる！爆導索！」

ヴォルボックスの尾が伸び、三体のデネブに巻き付く。

「止める！」

「ブラスト！！！」

大爆発。

それと同時に久美の身体が弾け飛ぶ。

「あ……ぐ……」

再び全身から血を流し倒れる。

馬鹿。あんなの使うなんて……

「あと……二体……ゲホッ、ゴホッ！ヴォルボックス……」

「ジャオ！」

ヴォルボックスが残りのデネブ目掛けて球を放つ。

それはどんどん大きくなり、口のついたボールになった。

「食い殺せ！」

球が口を開き、デネブに襲い掛かる。

「迎撃」

一体がデネビックバスターに変身、光弾を掃射し球を薙ぎ払う。

「そん…な…」

終わった…ドラグブロッカーだけじゃ、俺達を守りながらは戦えない…

「久美…ごめん」

「ハハ…死ぬ時は、一緒だ…」

今度は一緒になれるかと思ったんだがな…

「ドラグブロッカー！」

デッキを投げる。

「八神の所に行け！新しく契約しろ、俺はもう駄目だ！」

「シカシ！」

「急げ！」

するとデネブがドラグブロッカーに発砲する。

「グ…」

「お前は生きてくれ！八神ならきつと！」

「……！仇八必ズ！」

ドラグブロッカーは民間の窓ガラスに飛び込んだ。

これで良い…

「ファイナルブラスト、使うか？」

「駄目だ。流石に威力が強すぎて、外まで影響が出るかもしれない…」

核並の威力だしな。

「そっか……和樹…」

ヴォルボックスがカードに戻る。

「久美…」

はいずりながら手を繋ぐ。

そしてデネブが俺達を見下ろす。

「殺せ」

もう覚悟はできている。

「まだ殺さねえよ」

誰だ？

すると顔のど真ん中に一直線の傷がある少年が現れた。

「まさか、お前が…」

「そうさ。結界を張り、このコピーデネブ達を仕向けたのは俺だ」

「まだ殺さない？私達を人質にでもする気か？」

有り得る。千路や八神を殺す為に。

「人質？そんなしょぼい目的な訳ないだろ」

少年はカードを拾うと、それを破り捨てた。

「全く、こんなマイナー能力にやられ役…駄目駄目じゃん」

「お前だって二号ライダーじゃないか」

「残念。映画で主役やったんだよ」

そついやそうだったな。

「で、私達に何の用だ。殺すならさっさとやれ…」

「…俺はオリ主だ。カづくで全てを手にする外道系のな」

「痛いやつ…」

よりによってこんな奴かよ。

「その為には力をつけ、俺自身を鍛えなければならぬ。戦いも、女もな」

女？

……まさか！

「てめえ！まさか久美を！」

「っ!?!？」

「その為の練習台を探してたんだ。結構可愛いし、楽しませろよ」

「貴様！がふっ!?!？」

起き上がるうとした所、デネブに踏み付けられる。

「嫌あ！和樹！」

仰向けになった久美の両腕をもう一体のデネブが押さえ付ける。

止める…止めてくれ…

「彼女が目の前で寝取られるのってどんな気持ち？ねえ、どんな気持ち？」

こいつ…

「止める！くそ、離せ！」

必死にもがくが、先程の戦いで傷だらけの身体じゃ振りほどけない。

「んじゃ、まあ…」

少年が久美の服を引き裂く。

「嫌、嫌ああ！」

「頼む止めてくれ！俺はどうなっても良いから、久美には手を出さないでくれ！」

「いただきます」

「止めろおおおお…！！！」

〈SIDE OUT〉

〈侑斗SIDE〉

俺の足元に一人の女転生者が転がってる。
その全裸の少女は消えていった。

んゝまさかこんなに楽しいもんだとは。

嫌がつてるのを無理矢理つての最高だな。

先月食ったやつは彼氏の目の前で、なかなか面白かったな。

男はうるさかったから途中で殺しちまったけど。どうせなら最後まで見せつけてやればよかったな。

しかしなかなか難しいな。まだ俺に墜ちた女がないなんて…

フツ…だが俺はオリ主。最強の男になる事を約束されてる。

フヒヒ…いずれは原作キャラ達を俺のデネビツクバスターで虜にしてやるぜ。

さて、次はどうするか…

よし、あの八神姉にするか。

一応転生者は一対一で勝てるようにはなったが、あいつは転生者との戦闘をいくつか経験しているし、ヴォルケンリッターもいる。

デネブ達に誘拐させるか。

ついでにヴォルケンリッターが助けに入る可能性が高いから、戦力も調べよう。

いずれはやてもいただくから、その前菜に…フヒヒヒヒヒ！

俺はカードケースから変身用とは違う緑のカードを十枚取り出し、それを投げる。

するとカードからデネブが現れる。

コピーデネブ。本物と変わらない性能を持つ俺の兵隊だ。

第三十六話 真相（後書き）

命「……………」

つばさ「…………女の敵」

侑斗「ああ…………なんて俺は凄いんだ…………」

ドラ「滅」

ボル「食ワズニ殺ス！」

第三十七話 Zeroの下部達(前書き)

天気が不安定ですね

第三十七話 Zeroの下部達

（命SIDE）

「この！なんで当たらないのよ！」

目の前の少女はブラウンの馬鹿でかい鋸のような大剣を振り回す。

そんなでかいだけの武器に当たるかよ。

「お前がなつてないだけだ！」

飛び跳ねながら回避、そして蛇腹剣を振るうが、大剣の装甲が展開し盾の形をとる。

固いな。それにあの大きさ、人間相手に使うような代物じゃないぞ。

「絶対イーブルワンの錆にしてやる！チャージ……」

大剣を構え力を溜めてる。

でかいのが来るな。

「クラッシュ！」

オーラを纏った大剣が振り下ろされるが、俺は横に跳び回避。そして一気に距離を詰める。

少女はまた盾を展開した。

『Ready.』

魔力で包んだスパイラルコーンを盾に打ち込む。

「悪いがお前の身勝手な理由に殺される筋合いは無い！」

『Viola Smash.』

スパイラルコーンを蹴り抜き、どんどん穿孔する。

「きゃあああああ!？」

盾を、大剣の機関部を貫く。

そして少女を蹴り飛ばし、大剣は黒い煙りを上げながら沈むように消えた。

「神機が……ひゃああああ！」

少女が逃げ出す。

武器の所持か。これなら力を失ったも同然。もうちょっとかいを出さないだろ。

悪いな。まだ死ぬ訳にはいかないんだよ。

しかしなのはちゃんを助けるのは私の役目とか言ってるやつが二人目だ。

つまりなのはちゃんが負けるって事だよな。

怪我しないと良いんだがな…

つばさは何も教えてくれないし、話し掛けるなって言っし……あいつ、何やってんだろ。

考えてもわからないし、帰るか。

明日はフェイトへのビデオメールを撮るからな。

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

こんなもんかな。

学校帰りにスーパーに寄り、特売の牛乳を買う。

シャマルがすっかり買い忘れとったせいや。

むしゃくしゃしたのでスイカバーをかじりながら帰る。

夏はやっぱりスイカバーやな。

美味しい美味しい。

っ！？結界！？

銃声と共にくわえていたアイスが砕ける。

な、なんや？

するとうちを囲むように黒装束の人物が現れる。

デネブ？しかもこの人数…なるほど、あの二人がやられたのはこういう訳かい。

口の中に残ったアイスを吐き出し、デッキをカーブミラーに映す。

「捕獲対象発見」

「戦闘ノ意思ヲ確認」

「戦闘開始」

「侑斗ヲ主人公ニ」

まるでロボットやな。

「変身！」

デッキをバックルに挿入し、仮面ライダーシザースに変身する。

「全員集合！」

『 『 『 A D V E N T . 『 『 『

カードを三枚同時に入れる。

するとボルボル、ドラ、バイオグリーザが現れる。

「ボルボル、ヴォルケンリッターを呼ぶんや。ミラーワールドを通れば結界の外に出られる」

「ワカッター！」

カーブミラーの中に飛び込んだ。

「ドラ、バイオグリーザ、皆が来るまで頼むで」

「滅殺！」

「ギエア！」

やる気は十分。

『 S T R I K E V E N T . 『

『 G U A R D V E N T . 『

シザースピンチとシエルディフェンスを召喚する。

「行くで！」

ドラは黒炎を吐き、バイオグリーザは姿を消し、うちはデネブ達に飛び掛かる。

近くにいた一体を殴り、すぐに振り向いて後ろからの射撃を防ぐ。

「バイオグリーザ、援護射撃するやつ狙うんや！」

「ギエ！」

バイオグリーザは伸ばした舌をデネブに巻き付け投げ飛ばす。

「ドラ！」

「オオオオオオオ！」

ドラがデネブに噛み付き民家に突っ込む。

「次！」

『FINAL VENT.』

うちは逆立ちをするとバイオグリーザの舌が足に巻き付く。

そして振り子のように身体を飛ばしデネブを捕まえる。

「おんどりゃー！」

そのまま空中に身体を投げ出し、もう一体のデネブにパイルドライバーのように頭から叩き付ける。

バイオグリーザとのファイナルベント、デスパニッシュが直撃。二

体とも頭から碎け散った。

残り八体。

違う。

民家のあたりから、うちの足元にデネブの頭が飛んできた。

ドラがやったんか。

残り七体。

「！！」

三体のデネブがデネビツクバスターに変身する。そしてうちら目掛けて一斉射撃をしてきた。

うちは飛行魔法で飛び、ドラも避ける。だがバイオグリーザは一足遅れてしまい、次々と光弾に撃ち貫かれる。

「まずい！戻るんやバイオグリーザ！」

「ギ……」

バイオグリーザが窓ガラスの中に逃げ込む。

「分離。攻撃」

デネビツクバスターから元に戻り隊列を組み、七体で撃ってくる。

「乗レ！」

「ちい！」

ドラの背中に飛び乗り避ける。

そして飛び回りながら避けるが、ドラの図体がでかい上、数も多いので何発かは命中する。

「ドラ？」

「コノ程度、負傷二入ラン」

せやけど…

「ムゴオオオオ！」

突如現れたボルボルがデネブ達を突き飛ばす。

「ツバサ！」

「よっしゃー！」

『NASTY VENT』

ボルボルの吐いた泡がデネブ達を包む。

これで時間を稼げる。

「ボルボル、皆は？」

「万ガ一二備エテ、シャマルトヴィータガ家ニ、シグナムトザファイ

ーラガ外ニイル。ダケド結界ガ二重ニナツテテ、マダ入レネーンドダ」

二重？

あの変態にそんな力が？

「ぐだぐだ考えても仕方あらへん。一気に行くで！」

『S T R I K E V E N T .』

ドラグクローを召喚し構える。

「まとめてこんがりや！」

「滅！」

腕を突き出すようにドラグクローファイヤーを放つ。

黒い火球がデネブ達に迫るが、一体が他の連中の盾になった。

そしてそいつが爆散する。

それだけやない。爆発の熱風が泡を消してしもうた。

…やば！

「攻撃再開」

六体のデネブが一斉射撃を放つ。

「ツバサ！」

「サセヌ！」

ボルボルとドラがうちの盾になり攻撃を受け止める。

「グ…」

「ガア？」

「ボルボル！？ドラ！？」

二体が倒れた。

「デネビツクバスター」

三体がデネビツクバスターに変身。うちらに銃口を向ける。

ここまでか！？

はやて、ごめん…

思わず目を閉じる。

鳴り響く銃声。

しかし痛みは無い。

？

恐る恐る目を開ける。

見えたのは青い衣装を纏った犬耳と尻尾を持つ男性。

「ザフィーラ！」

来けくれたんか！

「紫電一閃！」

炎を纏った剣がデネブをデネビツクバスターごと頭から真っ二つにする。

「シグナム！」

「姉上、ご無事ですか？」

シグナムが駆け寄る。

「二人共よく頑張った。後は我等に任せろ」

ザフィーラがボルボルとドラを劣る。

「オセーヨ」

「すまない。外側の結界がやたらと強固だな。少々手こずった」

ザフィーラが狼の姿に変身する。

「さて……覚悟はできているのであろうな！」

シグナムがレヴァンティンを構える。

「！！！！」

五体のデネブが一斉に指の銃を向ける。

「させぬ！鋼の輓！」

地面からいくつもの刃が伸びる。
デネブ達は飛び上がり避けた。

「逃がさん！」

ザフィーラも飛び上がり、一体の首に噛み付く。
ゴキんと鈍い音が鳴ると、ザフィーラは鋼の輓に投げ付けた。

「レヴァンティン！」

『Schlangenform』

レヴァンティンが蛇腹剣の形になる。

「ハアアアア！」

そして伸びた切っ先が二体のデネブを貫く。

残り一体。

「ボルボル、もうひと踏ん張りや！」

「オウ！」

ファイナルベント、シザースアタックのカードをバイザーに入れる。

『FINAL VENT.』

ボルボルに投げ飛ばされ、魔力を変換した水に包まれ回転しながらデネブに迫る。

「!?!?!」

直撃したデネブが爆散する。

お、終わった。

思わず座り込む。

「ほんま助かったわ。二人共ありがとう」

「いえ。当然の事です」

シグナムが騎士甲冑を解除する。

「しかし妙な結界だった。外側は非常に強固で、優れた魔導師が張ったのはわかるが、内側はまるで素人だ」

「おそらく敵は二人以上だ」

ザフィーラが狼の姿のまま歩み寄る。

……なんか引つ掛かるなあ……

内側は間違いなくゼロノスかデネブが張ったのだろう。だが外側は？

……まさか猫姉妹？

うちが消えれば、後々の事も楽や。
考えすぎかな？

「さ、帰りましょう。主も心配しています」

シグナムが手を差し延べる。

「……えっと…腰が抜けて立てへんわ…」

「ダサ」

「うっさい！」

〔SIDE OUT〕

く???SIDEく

「逃げられたわね」

「そうね」

やっぱり守護騎士が邪魔に入ったわね。

「だけど、あの連中。クロスケの言ってた奴だよ」

「ええ。多分八神つばさに干渉したのも、彼女が可愛いからでしょうね」

「本当、最低。……上手くないものね。八神つばさに何か起これば、闇の書の蒐集を始めると思ったんだけど」

「お父様には私達が結界を張ったのは秘密よ。お父様は彼女に復讐されるのも覚悟しているわ」

「だけど、そんな事はさせない。」

「可能ならば処分しなきゃ。いや……どうせなら闇の書と一緒に……」

「姉妹仲良く……か。とにかくお父様に報告に行きましょう」

魔法陣を展開し、私達は転移した。

第三十七話 Zerroの下部達(後書き)

じばね」「……え?」

命」「……ざびくむっ?」

第三十八話 夏真っ盛り(前書き)

八月が終わる直前で…

第三十八話 夏真つ盛り

（命SIDE）

今日は近日の神社で縁日だ。

勿論いつものなのはちゃん達も一緒にな。
あと母さんが保護者としてついて来てる。

俺の眼下には浴衣美少女三人と美女がいる。

三人共女の子らしく花柄の浴衣を着ており、なのはちゃんは白地に薄紅色の花柄、アリサは赤地に赤紫の、すずかは青地に紫の花が描かれた浴衣だ。

花には詳しくないから、どんなのかはよくわからないけど…

しかし日本人で良かった。

「命、ボーっとしてないで行くぞ」

母さんが俺の頭を叩く。

しかし母さんも凄いな。

藍色の浴衣を着てるんだが、サイズも小さく上半身の一部の盛り上がりがないとも言えない。

母親相手に何言っただ俺は？

「…何処を見ている」

「別に…」

「ほづ…」

すると母さんは意地の悪い笑みを浮かべる。

「三人の浴衣姿に見とれていたらしいぞ」

「ちよ！」

なな何言っただ母さんは！

「ふーん」

「へー」

「みみみ見とれ…」

「……なんか反応薄くね？
よし。」

「三人共似合ってるぞ」

「「ありがと…ハア」」

「はづ…／＼／」

何故ため息？

「そこはなのはに見とれていただく（ボソ）。明日の特訓メニューは三倍だ」

「ええ！？」

俺は何かやらかしたか？

……そうだ、母さんを無視していたんだ！

「母さんも綺麗だよ」

「……二倍で勘弁してやろう」

照れ臭そうに自分の身体を抱く。

……やばい、腕からあふれてる。

周りの男共の視線も集中している。

「やっぱり命君って……大きくなるには牛乳とかかな？」

「揉むつても本当に効果あるのか疑問だし……」

「私お姉ちゃんに聞いてみるよ」

よく聞こえないが、母さんに圧倒されてるんだろっな。

「ねえ、君一人？」

「お姉さん背高いね。モデルとかやってんの？」

ナンパかい。俺達が見てないのか？

「邪魔だ」

すげえ、一刀両断！

「おい、無視すんな…へぶ！？」

男が母さんの肩を掴んだ瞬間、男が一回転して顔から倒れた。

「」「」「」「」

今の見えなかったぞ。

「な、なんだよ！せつかく誘ってやったのに！」

もう一人の男がビビリながらも反論する。

どんだけ上から目線なんだか…

そろそろ終わらすか。

「母さん、行こう」

「そうだな。そういう訳だから、よそを当たってくれ」

「子持ちい！？」

呆然と立ち尽くす男を無視して、俺達は歩き出した。

「あ、あのぬいぐるみ良いなあ………やってみよ！」

すずかが射的をやり出した。

どうやら一番上の段にある手の平サイズのぬいぐるみ達から、猫のぬいぐるみを見つけたらしい。

「難しそうね」

「すずかちゃん、頑張って」

「よしー！」

結果。

「……………」

「まあ、あれは難しそうだし」

「元気出して、ね？」

惨敗。残念ながら、ゲットできなかった。

あれでかいし、ぬいぐるみだから衝撃もある程度吸収されるからな。

「俺がやるよ」

「大丈夫なの？」

「任せんしゃい！おじさん、二百円」

お金を払い銃とコルクを受け取る。

「さて…」

神の視点を発動し、ぬいぐるみを見る。

両面テープで固定されてたか。

えげつないな。しかし、俺には通用しないぜ。

銃を構えてぬいぐるみを狙う。

「その綺麗な顔を吹っ飛ばしてやるぜ！」

「駄目でしょ！」

引き金を引いた瞬間、小さなオルタ・フィールドを形成してコルクをくぐらせる。

すると一気に加速し、ぬいぐるみを吹っ飛ばした。

「な……」

店のおじさんも驚いてる。

たかが両面テープごときでオルタに敵うと思ったか！

「ほじ」

すずかにぬいぐるみを渡す。

「良いの？」

「勿論」

「……ありがとう！」

笑顔で受け取ってくれた。

いやあよかつ……ヒィ！？

なんだ、今のどす黒い気配は！？

後ろを振り向くとなのはちゃんが素敵な笑顔をしている。

……怒ってる？どっして？

「すずかちゃん、ずるいなあ……」

「な、なのはちゃんにも何か取ってあげなよ。うん、ごめんね……」

「あ…ああ。なのはちゃんは何か欲しいのがあるのか？」

「私はあの熊のぬいぐるみが良いの！」

あれか。楽勝だな。

「アリサは？」

「私はいらないわ。特に欲しい物も無いし」

そうか。

とりあえず俺はさっきと同じようにオルタを使ってぬいぐるみをゲ
ットした。

「はい」

「ありがとう」

どうやら機嫌を直してくれたようだ。

「すずか……」

「ごめん、欲しかったからつい」

「我が息子ながら、愚かな……」

母さん、俺が何したって言うんだ。

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

夏休み。

学生の天国や。

あれから適当に誤魔化しつつ、ドラの仇やっちゅう事だけ話した。
なんとか納得してくれたけど…

まあおかげでシグナム達に鍛えてもらっ理由ができたから良かった。

「姉ちゃん、暇だから遊ぼっぜ」

「宿題終わってからな」

「後でで良いじゃん」

「ヴィータ、姉上の邪魔をするな」

「離せよザフィーラ！」

ザフィーラがヴィータをくわえて引きずって行く。

「もうちょい待ってや。すぐに終わるさかい」

はやてはシャマルに連れられ病院。シグナムはバイト。ザフィーラは遊び相手にならない。そりゃ暇にもなるわな。

しかしこの学校の勉強は、前世で通ってた公立に比べて非常に難しい。

たしかに前世の記憶のおかげで、そこまで苦ではないけど…

そういえば闇の書の蒐集が始まるのって秋からやったな。

どうやって介入するかな…

皆がうちに協力を要請する可能性もあるけど、多分低い。

…自分から参加するしかあらへんな。

あと他の転生者や。

蒐集に協力しながらうちに攻撃してくるかもしれへん。

リンカーコア持ちはとりあえず蒐集させてもらおか。これも協力になるし。

問題は魔力無しや。

蒐集もできへんしなあ…

まあ、その時に考えればええか。

はやてもどうするかやな。

説明する？そうすれば完成してからはやてが意識を取り戻しやすくなるかもしれへん。

まてよ…そんな事したら、はやてが…闇の書の主が自らの意志で蒐集した事になるから、原作以上にはやての立場が悪くなる。

話すの止めよう。

そして蒐集が始まってからや。

よくあるパターンだと、魔法生物のみで蒐集を始め、ヴィータが暴走してA・sに入るってのが多い。

せやけど、魔法生物だけで完成させるのは多分無理や。

もしできるのなら、人を襲う必要も無いからや。

リンカーコアが人間の方が上質なのか、闇の書の性質が原因かはわからへんけど…多分後者やな。

本来は魔導師の技術を集める代物やし。

人を襲わなあかんのは確実。

うちにできるかな？

…いや、やるんや。

覚悟はできとる。

後は命がどれだけ空気を読んでくれるかや。

……不安しかないわ。

第三十八話 夏真つ盛り（後書き）

もう少しでA・Sです

第三十九話 家族の為なら（前書き）

フォーゼは動けば…強化フォームは格好良いと信じたい

第三十九話 家族の為なら

命SIDE

夏休みも終わり、さらに時は過ぎて現在十月。

夏もずっとつばさに避けられ少し寂しい気がする。

だが、最近のつばさは特におかしい。

落ち着きが無いと言っか、何と言っか…

そんなこんなで十月ももうすぐ終わる。十二月の原作開始まで一ヶ月ちよつとだ。

…本当、大丈夫かねえ。

SIDE OUT

つばきSIDE

学校から帰って来て気付いたが、皆の様子がおかしい。

当然や。今日は十月二十七日。

はやての病気の原因がわかり、ヴォルケンリッター達が闇の書の蒐集を始めた日や。

「シグナム、何か悩み事でもあるんか？」

「いえ…何でもありません…」

当然の反応やな。

病気の原因は自分達ですなんて口が裂けても言えへんやろ。

「シャマル、今日病院でなんか言われたんか？」

「い、いえ…その…」

目が泳いどるで。

「正直に話しい。皆の様子がおかしい事位気付いとるわ」

身を乗り出しシャマルに問い詰める。

「えっと…」少々問題がありまして「シグナム？」

「問題？」

「はい。治療の効果がいまひとつで、麻痺の具合もこのままでは酷くなる可能性がある」と

可能性…か。
色々とぼかした説明やな。

「そっか…皆がおかしかったんはそういう事が」

「はい。申し訳ありません」

「ごめんなさい…」

二人が頭をさげる。

「まあ、うちを心配させとくなかったからやろ？別に怒っとらん
で」

「はい…」

あんまりしつこく聞いても何やし、この辺にしておけいっつ。
どつやらうちには話さず自分達でやる気やな。
まあ予想通りか…

「石田先生を信じるしかうちにはできへんし……さ、はやてとヴィ
ータが帰って来るし、夕飯の準備しよ」

「そうですね」

シヤマルが立ち上がり台所へ向かう。

いよいよ今夜やな…

夜、一緒に寝とるヴィータがこっそりと抜け出したのを確認し、うちもはやてを起こさないように抜け出す。

あらかじめボルボルにつけさせたので、場所はわかつとる。

うちはドラに乗り夜の町を飛ぶ。

流石に町中を走るのは時間的に危険や。確実に補導されるわ。

「アゝコチラボルボル。ナンカアイツラ移動シテルゼ」

あれ？たしかビルの屋上で集まるんやなかったっけ？

「…ツバサ、アレダ」

「あれ？」

目を凝らして町を見渡す。

よく見るとニヶ所位から煙りが揚がつとる。

「何やあれ…」

「……一番近イノハ…見エタ。少年ガ二人戦ッテイルナ」

はっはくん、転生者やな。

ヴォルケンリッターを探していた所に遭遇、そのまま戦闘になったんやな。

そんで不穏な空気を感じたヴォルケンスは場所を変えたと。

阿保らし…

「海鳴臨海公園ダ。ソコニ全員イルゾ」

…なんでやねん。

「ドラ、急ぐで」

「承知」

あの公園、なおさらイベントスポット化しとるな。

着いた。

ボルボルは……いた。

トイレの影に隠れとる。

さて、どう話し掛けるかな…

「やはり来ましたか」

不意にシグナムから念話が来た。

気付いとったんか。

地上に降りる。

三人と一匹がうちを見る。

「いつからや」

「何者かにつけられている気配がしまして。ザフィーラの嗅覚でも発見できない事からミラーモンスターではないかと」

「そして公園に着くとボルボルの臭いがありました」

なるほど…

「あの…姉ちゃん…」

ヴィータがばつの悪そうに俯く。

「だいたい予想はついとる。はやてが危ないんやろ？」

「つばさちゃん、気付いてたんですね…」

「一応な。洗いざらい吐いてもらうので」

「……わかりました」

それから原作通り、はやての麻痺の原因は闇の書にある事、闇の書を完成させればはやてを助けられる事を聞いた。

うん、今度は正直に話したな。

「申し訳ありません。私達のせいで…」

「ええよ。…で、これから蒐集を始めるんやろ？」

「勿論人殺しはしねえ！だからはやてには内緒にしてくれ！」

「……うん。そんならうちもやらせてもらおうで」

「「っ!?!」」

「姉上、正気ですか？」

「私達のやる事は犯罪ですよ！」

「正気や。せやけどな、うちは黙って指くわえて見ていられる程大人しくないんや」

「だけどー！」

「ほんならこの事、はやてに話してもええんやで」

「「「「「」」」」」

そう言つと押し黙る。

なんかずるいけど、こうでもしないと介入できへんしな。

「そしたらはやては自分が死ぬのを選ぶで。確実に」

「主の性格からして、そうなるでしょっ」

「それにうちはただのひ弱な少女やないで。シグナムもわかつとるやろ?」

デッキを取り出す。

「はい…」

訓練の相手をしてくれたんや。
うちもそれなりに実力はついてきとる。

「俺達ダツテイルンダゾ!」

「彼女ヲ見捨テルコトナドデキヌ」

「そういう訳や。妹を助けたい、姉として当然やろ」

「…わかりました」

「シグナム!？」

「拒めば主に知らされる。それに人手も欲しいからな。姉上の実力は私が保証しよう」

「決定やな」

「うっつ……わかつたよ……」

それからうちが主の代わりになったり、始めの内は誰かと一緒にいる事などを決めて蒐集を始めた。

やっぱり主になるんやな…

たしかにヴォルケンリッターは管理局に顔がばれとるし、うちは仮面ライダーに変身して口調を変えれば簡単には見つからへん。まあ命がちゃんと黙ってくれればの話しやけど。

せやけど命はなのは優先で動く。はやての身体が悪い事は知っとるけど、もしかしたら話すかもしれへん。

その時は残念やけど…うちも妹が大切なんや。

あれから二週間が過ぎた。

現れた転生者は二人。二人共魔力無しやった。

やっぱり地球生まれじゃあ当然やな…

管理世界から来るには遠いし、残念や。

ちなみにその二人の内、男はシグナムに協力すると言って断られ、勝負を挑みこてんぱんにされたらしい。

多分：貴様、魔力も無いのにできるな 協力してくれ…なんて展開を狙ったんやろうな。

第一怪しすぎやし、能力を得たって自身が弱くちゃ意味が無い。うちかて最近ようやく互角なのに…

ちなみに格好つけてコインを指で弾いてるスキにとどめを刺された

らしい。あと電撃を出してたとか……まさかね。

もう一人は女性で斬鉄剣持ちだった。

いきなり襲い掛かって来て、ユーノの玉の輿に乗るのは私だ！とか言っとったな…

まあヴィータと二人掛かりでフルボッコにしたけど。武器が能力やから、殺さず武器を壊しただけやけど。

さて、今うちはある転生者と戦つとる。

なんと魔力持ち！…しょぼいけど。

「かめはめ波！」

青白い光が迫る。

『GUARD VENT』

「ふぬっ！」

シエルディフェンスで防ぐが一撃でひびが入る。

「雑魚ライダー風情が、俺の姉になるなど許さん！」

「あんたみたいな弟いらんわ！」

「うるせえ、俺の邪魔しやがって！死ぬ！はやては俺の嫁えええ！」

どうやらはやてに本を取ってあげる役を取られたのが癪らしい。
一人で行動を始めたを狙われるとは…

「冗談やないわ！」

連射してきた気孔弾を避けつつカードを引く。

『CLEAR VENT.』

クリアーベントで姿を消す。

「なっ！？逃げるのか！」

逃げたりなんかせんわ。

辺りを見回してるうちに顔面を殴る。
そして直ぐに後ろに回り込む。

「へぶ！？この！」

少年が殴り返すが、拳は空振りする。

「後ろや！」

バイザーで切り付け蹴り飛ばす。

「ぐはあ！」

少年は地面を転げ回る。

『STRIKE VENT.』

シザースピンチを召喚し、少年の首を挟む。そして壁に叩き付けた。

「そんな…俺はリンカーコア持ちの悟空だぞ！何故勝てない！」

「あんた…ちゃんと鍛えとったんか？……いや、その調子じゃ能力にかまけてたんやな」

「嘘だ…そんなげふ！？」

地面に投げる。

「まあ原作には関わらせたるわ。蒐集させてもらうので

『FINAL VENT.』

うちの周りをドラが飛び回り、同時に身体を浮かべる。

「う、うわあああああ！かめはめ波あああ！……！」

少年は両手を突き出しかめはめ波を放つ。

「うりやあああああ！」

魔力で強化したドラグライダーキックで応戦。
かめはめ波を突き破り少年を蹴り抜く。

「が…あ…」

倒れた少年に歩み寄る。

「ハア…ハア…闇の書、蒐集。死ぬまでやってええで」
闇の書が現れた。

ぎりぎりまで蒐集し、とどめはうちが刺せばええ。

「頼む…た、助け…」

先に手を出した癖に…今更命ごいかい。

「死ね」

『Samm lungg.』

闇の書が光り出し頁が埋まり出す。

「ぎ…が…あああああ!?!?」

蒐集の苦しみと死への恐怖に泣きながら叫ぶ。

うちはバイザーの刃を喉に突き付ける。

その瞬間少年と目が合う。

助けて。死にたくない。

そんな声が聞こえ、はやての顔と被る。

「っ！闇の書、止めや！」

『……………』

闇の書が蒐集を止める。

「う…ああ…」

「命は助けたる。次は無いで」

うちはデッキをベルトから外し変身を解除し路地裏へと走る。

そして座り込んだ。

なんで？人を殺すのは初めてやない。

死にたくない。

はやてもそう思ってる。誰だってそうや。

なんで今更…

「う…げえ」

吐いてしまった。

辺りにツンとした嫌な臭いが立ち込める。

「ツバサ、無理スナナヨ」

「少し休メ。ロクニ寝テイナイダロ」

「そうはいかんよ。命だけじゃなく、命以外の転生者のせいではやフェイトの蒐集が失敗する可能性は高いんや。今のうちに稼いとかんと…」

口を拭き立ち上がる。

「それにああいう連中もまだ沢山おる。和樹を殺したのも似たような奴やし」

「ダケド…大丈夫ナノカ？顔色悪イゾ」

「戦ウノガ辛イノカ？」

「違う。疲れとるだけや」

そうでなきゃはやての顔なんか思い浮かぶ訳がない。

……死か。

気分が悪い。まだ吐き気がする。

明日は休もう。

戦いは始まっていない。

十二月からが本番や。

はやて…絶対助けたるからな。

第三十九話 家族の為なら（後書き）

命「お前：大丈夫なのか？」

つばさ「こっちは必死なんや」

第四十話 突然の始まり（前書き）

A・S開始です

今回後書きでお知らせがあります

第四十話 突然の始まり

（命SIDE）

俺となのはちゃんは毎日魔法の訓練をしている。

俺は鉄鎖を複数形成し、それぞれに流した魔力を全て別の物質に同時に変換する特訓だ。

変換速度の上昇は攻撃速度の上昇になるし、変換効率を上げれば消耗も抑えられる。

そしてなのはちゃんは魔力弾をコントロールして空き缶でお手玉。しかも百回だ。

ちなみに今日はオルタで加速し、さらにピーキーにしたものだ。

「ん〜！」

『96、97、98、99、100』

そしてついに百回。

「ラスト！」

最後に魔力弾で空き缶をごみ箱へ跳ね飛ばした。

だが空き缶はごみ箱の縁に当たり、残念ながら入らなかった。

「ああ〜…」

『よい出来ですよ、マスター』

「相変わらず凄いな。俺は針をあそこまで操れないよ」

「にははは…ありがとう」

なのはちゃんの足元の魔法陣が消える。

「はい」

「ありがとう」

なのはちゃんにコートを渡し、空き缶に鉄鎖を飛ばして掴みごみ箱に入れる。

「今日の練習は採点すると何点かな？」

『約八十点です』

「そっか」

「俺は？」

『約六十点ですね。三種以上となると途端に遅くなります』

「ぐは」

相変わらず厳しいな。

複数になると結構面倒なんだよな…

「じゃはは…」

そうして俺達は家に向かって歩き出した。

「そういえば命君って、フォームチェンジとかパワーアップ形態とか無いの？」

「多分無理かな。怪人だし」

「そういや俺ってネオ・エクステンドできるのか？」

「パートナー無しなのに…」

さて、季節は冬。十二月だ。

つばさは十二月からって言ってたけど、具体的にいつかは聞いてない。

それに最近様子もおかしいし。

まあまだ入ったばかりだ。流石にこんなに早い訳が無いか。

そういえばフェイトとのビデオメールもアリサやすすかが参加したりと賑やかになった。

近い内にまた皆に会えるんだな…

〈SIDE OUT〉

くはやてSIDEく

…取れへん。

どないしよ…シャマルかシグナムを呼ぼうかな？

そういえばヴォルケンリッターの皆が来る前にもこんな事があったなあ。

あの時の男の子、どうしてるんやろ。家が無いって言っとったから交番に連れいってあげたけど…今は施設とかにいるのかなあ？

って、そんな事考えとる場合やなかった。

んゝもうちょっとで…

だけど手を伸ばしてもとどかへん。

すると誰かがその本を取った。

「あ……」

思わず取った人へと視線を向ける。
髪の長い同じ位の歳の女の子やった。

「これで……って八神さん？」

なんでこの娘私の名前を？

「あの……どこかでお会いしましたっけ？」

「えっと……人違い……？」

にしては名前も合ってたし……もしかして。

それにコートの衿から見える中の服、スカートに見覚えもあるし。

「あの、もしかして聖祥の？」

「あ、はい……」

やっぱり。

「その人、八神つばさって名前じゃあないやろか？」

「はい、クラスメートなんです。もしかして……」

「双子の妹の八神はやていいいます」

「双子……だから似ているんだ。私月村すずか、よろしくね」

「よむじく」

今日はちょっとええ事があったなあ。

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

学校から帰ったらはやてにうちのクラスメートの娘と友達になったと聞いた。

すずかと会ったか…

いよいよやな。ほんま頼むで命…

そしてその夜。

「どうだ、ヴィータ？見つかりそうか？」

ザフィーラがヴィータに問い掛ける。

「いるような、いないような。こないだから時々出てくる、妙に巨大な魔力反応ともう一つしよぼいの。あいつらが捕まれば、一気に二十ページは行きそうなんだけどな……どうしたんだ、姉ちゃん？」

「なんでも無い。分かれて探すぞ」

なのはと命か…

原作前に遭遇しなくて、ほんまによかった。

「OK。ザフィーラ、あんたもしっかり探してよ」

「心得ている」

ザフィーラが立ち去った。

「ほなうちも。じゃっ」

うちも飛び立つ。

多分ヴィータが先に見つけるはずや。

一人で大丈夫かな？なのは一人じゃなくて命も一緒やし…
ちよっと気をつけとこ。

〈SIDE OUT〉

（命SIDE）

夜、部屋にしていると何かを感じた。

…まさか、結界？

「命君、大丈夫？」

「なのはちゃん？これって…」

「結界。誰かがこっちに近づいてくる…！」

なのはちゃんも一緒って事は…まさかつばさ？
始まったのか？

そして俺達は見通しの良いビルの屋上へと向かった。

どこだ…？

…いた。赤いゴスロリの服を来た少女がこっちに飛んでくる。

『来ます』

こっちに向けて魔力弾を打って来た。

『誘導弾です』

ちい！

なのはちゃんの前に立ちオルタで受け止める。

「1J6…」

ん？ってこっちは何？

少女は俺達の後ろに回りこんだ。

「なのはちゃん、後ろ！」

「っ！？」

なのはちゃんがシールドを展開した。

「テートリヒ・シュラーク！」

少女は彼女が持つには似つかわしくないゴツいハンマーを振るい、
なのはちゃんのシールドに叩きつけた。

「キヤー!?!」

しかしなのはちゃんは受けきれずに吹き飛ぶ。

「なのはちゃん!」

「よそ見してんじゃねえ!!」

少女はそのまま回転し、俺にハンマーを振って来た。

「ちっ!」

俺は鉄鎖を身体に巻き付けクッションにし、さらに後ろに跳びのき
衝撃を逃がす。

そして空中に足場を形成し立つ。

なのはちゃんは?

下を見るとレイジングハートを起動しバリアジャケット姿になった
なのはちゃんがいる。

よかった。

「ギフト、俺達もやるか。エクステンド変身!」

俺は青紫の鎧武者のような外骨格を纏った。

「な、なんだ?てめえ何者だ!」

「それはこっちの台詞だ！」

「そつだよ！いきなり襲い掛かれる覚えはないんだけど、どこの子？一体なんでこんなことするの？」

なのはちゃんが俺の傍まで飛んでくる。

「うるせえー！」

『Schwalbfliegen』

少女は鉄球を取り出すと、ハンマーで打ち付け飛ばして来た。

俺はそれを蛇腹剣にした剣で薙ぎ払う。

「オラア！」

振り下ろしたハンマーを散開して避け、なのはちゃんは魔力弾を遠くへと撃つ。

あれ？どこへ撃ってるんだ？

「教えてくれなきゃ分からないってば！」

ビルの影から回り込んだ魔力弾が、少女の背後から襲い掛かる。

「うわ？」

一発は避け、もう一発は赤い魔法陣の形をしたシールドで防いだ。

あの三角形の…ベルカ式か。
とりあえず背中がから空きだ！

「せい！」

俺はオルタを展開し、少女に向けて跳び蹴りをしながら通過する。
通過し加速して一気に蹴り抜く。

「うお！？」

だが避けられたか。

俺は蛇腹剣を伸ばし、ビルに突き刺す。そして剣を連結させて壁に
近づき、そのまま壁に張り付く。

「この野郎！」

少女は俺に襲い掛かる。

俺は壁から跳びのいて振り下ろされたハンマーを避け、足場を形成
する。

俺のいた場所は叩き潰されている。

『Shooting Mode』

「命君！」

後ろでなのはちゃんがレイジングハートを変型させた。

巻き込まれる前に！

俺は急いでその場から離れる。

「話しを…」

『Divine…』

レイジングハートの先端に環状の魔法陣が展開し、魔力が集中する。

「聞いてっばー！」

『Buster.』

デイバインバスターが発射され、少女に迫る。

彼女はギリギリで避けたが衝撃で帽子が吹き飛ばす。

「……………！」

すると彼女は物凄い形相でなのはちゃんを睨む。

「あ…」

完全にキレてるな…

少女は足元に魔法陣を展開する。

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

『Explosion.』

するとハンマー…グラーフなんたらの柄がスライドする。

『R a k e t e n f o r m 』

そして鎚の片方がバーニアのミサイルのような形に変型した。

「ええ〜!？」

「うわ…」

なんだよ、あの凶悪なやつは。

「ラケーテン!」

バーニアが点火し回転する。

「うおおおお!」

そしてなのはちゃんに襲い掛かった。

「っ!？」

なのはちゃんはシールドで防ぐが、いとも簡単に突き破られ、レイジングハートに衝突しひびが入る。

「させるか!」

足の鉄おオルタを展開し一気に蹴り抜いた。

「しゃらああああ!」

少女目掛けて跳び蹴りをする。

「邪魔だ！」

一回転し鋏にハンマーを叩きつける。

「ハンマー！」

「な！？」

鋏は砕け、俺はそのまま殴り飛ばされる。

「命君！」

「ちっ！」

壁になるように足場を展開、それを三角跳びのように跳ねてビルへの衝突を免れる。

「なのはちゃん！」

「っ！？」

少女は再びなのはちゃんに襲い掛かる。

『Flash Move』

なのはちゃんはなんとか避けた。

「おとなしくしてろ！」

なのはちゃんを追いかける少女を鉄鎖で捕まえる。

「な!?!」

「今だ!」

「うん!」

レイジングハートを少女に向ける。

「ちょっと痛いけど、ごめんね!」

『Divine...』

「くそ!」

レイジングハートに魔力が集中する。

とどめだ!

「バス『FINAL VENT』え?」

その瞬間、黒い炎がなのはちゃんを包んだ。

第四十話 突然の始まり（後書き）

私が書いているもう一つの方でも好評でした、Strikersで追加する転生者募集をこちらでも行います

こちらでは味方と敵の両方を募集します

キャラの条件として年齢は固定させていただきます

Strikers開始時点で19、15、9、6のいずれかです

魔力や容姿、原作知識は自由です

あとつばさのように能力に意識がある、道具型の能力である場合は能力を複数所持しているもかまいません
あまり多すぎると困りますが…

とりあえず例として二人書きます

ゲンタ・ナカジマ

年齢：15

身長：166cm

体重：57kg

容姿：スバルをもっと男らしくした感じ

能力：スバル・ナカジマの能力

追加能力：ユニコーンドリルと契約

魔力：有り（スバルと同等、青）

原作知識：劇場版のみ

性格：良くも悪くも熱血漢でシスコン

人物：タイプゼロ・サードとして生まれ、ナカジマ家ではスバルの双子の弟となっている。他の転生者の襲撃により、ナカジマ家が原作キャラである事に気付く。本人曰く【シスコンの何が悪い！】。家族との関係も良好で姉弟仲は非常に良い。ユニコーンドリルは襲撃してきた転生者と契約していたが、あまりにも下司であったため見捨ててゲンタと契約している。リボルバーナックルと同型のデバイスも所持している。

レックス・フォーレス

年齢：19

身長：175cm

体重：64kg

容姿：長い銀髪、赤と青のオッドアイ

能力：エミヤシロウの能力

追加能力：無し

魔力：有り（SS、赤）

原作知識：全部有り

性格：怠け者で自己中なオリ主（笑）

人物：厨二じみた容姿、高魔力と無限の剣製を持ち自身がオリ主と
思いこむ痛い奴。原作介入しようとするが、ミッド生まれなため当
然なのは達と接点は無くアースラ搭乗も失敗、転移して記憶喪失を
装いはやてと接触しようとするがまとともに魔法の勉強もしていない
ため失敗。戻った頃は無印が終了しており、八つ当たりとしてクロ
ノに戦いを挑むが敗北。さらにA・Sが終了した時点で命の存在を
知り、襲撃するが返り討ちに合う。そんなこんなでナンバーズハー
レムを作り管理局を崩壊させるしかないと思いきスカリエッティに接
触した阿保。

こんな感じです

こちらをコピーして使用してください

年齢：

身長：

体重：

容姿：

能力：

追加能力：

魔力：

原作知識：

性格：

人物：

ではご応募お待ちしております

第四十一話 戦い、再び（前書き）

応募ありがとうございます

敵や女性キャラも大歓迎ですので、よろしくお願いします！

第四十一話 戦い、再び

「なのはSIDE」

「バス『FINAL VENT』え？」

私達に襲い掛かってきた女の子にディバインバスターを撃とうとした瞬間、黒い炎が私に直撃した。

痛みは無い。

でも身体に纏わり付いた黒い炎が石のように固くなり、バインドみたいに私を拘束する。

レイジングハートも埋まって見えなくなっちゃった。

「なのはちゃん！」

「まさか……」

「駄目、動けない！レイジングハート？」

『危険』

え？

「だりゃあああああ……！！！」

すると誰かが私目掛けて蹴り掛かって来た。
黒い炎を纏いながら。

よ、避けられない!?

「危ない!」

命君が私を突き飛ばす。

「命君!」

「うお!?!」

命君は両腕の剣を交差させ、さらにその上にオルタを展開したけど簡単に破壊されてビルに突っ込んでいつてしまった。

「命君!?!」

そんな…私を庇って…

「おりゃああ!」

赤い女の子がハンマーを振りかぶる。

そうだ…命君の拘束が解けて。

「だあ!」

「ああ!?!」

ハンマーに吹き飛ばされ、拘束が壊れて私もビルに激突。窓ガラスが割れ中に転がり込む。

「ゲホ、ゲホ…レイジングハート、大丈夫？」

よく見ると、レイジングハートにひびが入ってる。

『問題ありません』

命君は？

奥の壁に穴が空いてる。

もしかして…

「壁の向こうですわ」

「っ!？」

そこにはオレンジ色の鎧を来た人がいた。背格好や声から、多分歳の近い女の子…

「ごめん。助かった」

赤い女の子が入って来た。

「かまいませんわ」

「へ?...あ、うん」

そして鎧の子はベルトからカードを引き、左腕の鍔がついた手甲に入れた。

『STRIKE VENT.』

するとどこからともなく大きな蟹の鍔のような武器が現れ、その子の右腕に装備された。

「さて…貴女の魔力。いただきますわ」

魔力？一体どういう事なの？

「しやらあああああ！」

壁が壊れ、命君が飛び出して来た。

「まだ動けるなんて！」

鎧の子は蹴り掛かってきた命君に鍔で応戦する。

「よそ見してんじゃ…」

振り向くと赤い女の子が突っ込んで来る。

「ねえええええ！」

『Protection.』

とっさにプロテクションを張り受け止める。

耐えられ…ない？

「ぶち抜けええええ！」

『Jawohl.』

さらに勢いが増しプロテクションは破壊され直撃。リアクターパ
ジが発動しバリアジャケットが砕け散り壁に叩き付けられる。

「う…く…」

「なのはちゃん！どけえ！」

命君が鎧の子を蹴り飛ばし私の前に立つ。

「てめえら…いい加減に…しろよ…」

命君の両腕の剣は壊れ、全身ポロポロ。

「ちゃらいくせに…邪魔すんなああ！！！」

女の子が飛び掛ってくる。

駄目…命君が…嫌だ。ユーノ君…クロノ君…フェイトちゃん…！

その瞬間、金属同士がぶつかる音が鳴り響いた。

私達の前に現れた一人の女の子が受け止めたんだ。

黒いマントに長い金髪。

まさか。

「フェイト……」

「フェイト……ちゃん？」

嘘……本物？

「ごめん！二人共、遅くなった」

横から声をかけられた。

「ユーノ、君……」

そこにはユーノ君がいた。

「はは……ギリギリだな……」

安心したのか、命君が膝をつく。

「く……！仲間か！？」

「ちっ……離れて！」

女の子がフェイトちゃんから離れる。

『Scythe Form』

「友達だ」

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

まじでやばいと思ったが…どうにかなりそうだ。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだテムエら？管理局の魔導師か？」

ゴスロリ少女がフェイトを睨む。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

「このタイミング…やっぱりか…」

つばさがたいして驚いてない。

知っていたのか…

「抵抗しなければ、弁護の機会が君達にはある。同意するなら武装を解除して」

バルディッシュを構え武装の解除を促す。

「誰が…」

「するかよ!」

二人は外に逃げた。

「ユーノ。二人をお願い」

「うん」

フェイトが二人を追いかける。

「じっとしてて」

ユーノがしゃがみ、両手の緑の光が俺となのはちゃんを包む。

身体が軽くなっていく。

回復魔法か。

「フェイトの裁判が終わって、皆で連絡しようとしたんだ。そしてら、通信は繋がらないし、局の方で調べたら広域結界が出来ているし……だから慌てて僕たちが来たんだ」

「そっかあ……ゴメンね。ありがとう」

「助かったよ」

「アレは、誰？なんで、二人を……」

「わかんない。急に襲ってきたの」

つばさのやつ…原作通りとか言ってたな。

…冗談じゃねえぞ。いきなり襲い掛かってきて…

「魔力がどうか言ってたな」

「でも、もう大丈夫。フェイトがいるし、アルフもいる」

「アルフさんも？」

「まあ、フェイトの使い魔だから当然か」

ビルの外へと神の視点を広げる。

外ではフェイトがゴスロリ少女と撃ち合い、アルフがつばさと殴り合っている。

ん？

って誰かが近づいてくる？

「フェイト、アルフ、避ける！」

「「っ!？」」

フェイトにポニーテールの背の高い女性が切り掛かり、犬耳のついた褐色肌の男性がアルフを蹴り飛ばす。

「命？」

「増援だ。二人が危ない」

立ち上がり外へと向かう。

「そんな身体で無茶だ！」

「生憎タフなんでね。なのはちゃんを頼む」

「くっ！ちよつと待って」

ユーノが手で印を結ぶ。

「妙なる響き、光となれ、癒しの円のその内に、鋼の守りを与えた
まえ」

なのはちゃんを緑色の半球状の何かが覆う。

「回復と防御の結界魔法……なのはは、ここから絶対に出ないでね」

「うん…」

なるほど。これなら一安心だな。

「急ぐぞー！」

足場を展開しながら跳び出す。

「命、落ち着いてー！」

ユーノが俺を追いかけるよつに飛び立つ。

＼SIDE OUT＼

＼つばさSIDE＼

シグナムとザフィーラも到着したか…

「シャマルは？」

「すぐそこに」

よしよし。

「ヴィータ、落とし物だ」

シグナムが帽子をヴィータに被せる。

「破損は直しておいたぞ」

「ありがとう、シグナム」

さてと...

「では、シグナム…貴女は黒い少女を。ザフィーラは使い魔を。ヴィータは…」

「じゃらあああ！」

突如飛び蹴りが向かってくる。

「ぬう!?!」

「姉ちゃん!?!」

シザースピンチで防ぐが蹴り飛ばされる。

その後ろからユーノが近づいているのが見えた。

「こいつはうちがやる。ヴィータはもう一人の金髪を！」

「」「了解!」「」

「ついて来なさい!」

「待ちやがれ!」

近くのビルの屋上まで飛ぶ。

よし…皆とも離れたし、ここなら…

「…お前、どういっつもりだよ」

命が追いついてきた。

「さっきつから言つとるやろ。【原作通りや】って」

「ざけんな！」

尾から撃たれた針を、シザースピンチで薙ぎ払う。

「いきなり襲い掛かんのかよ!？」

「こつちは殺さん程度に手加減しとるんやで。原作通りなのは達には負けてもらって、魔力もいたたく！」

「これが妹のためにやる事かよ！」

つま先から伸びた鋏のような刃物を受け流す。

「うちかて人を襲うような真似しとくないわ!せやけどこれ以外に方法が見つからんのや！」

「だったら俺にも話せよ！」

お互いの腕がぶつかり合う。

「話したらあんたはうちに協力するかもしれへん。命まで犯罪者になる必要はあらへん！」

それに万が一犯罪者として逮捕されたらスカリエツティに売られる可能性もあるし。

「あなたは黙つとればええだけや！」

命を押し飛ばす。

ダメージが残つとるのか軽い。

好都合やな。

デッキからカードを引き、バイザーに入れる。

『CLEAR VENT』

「っ!？」

するとうちの姿が消える。

卑怯やけど、後ろから…

飛行魔法で音を立てずに後ろに回り込む。

もらったで!

バイザーを振り上げる。

その瞬間、命は後ろを振り向き回し蹴りでうちを蹴り飛ばす。

な!？

「悪いが、幻術の類いは通用しないんだよ」

「…面倒臭いやつぢやな！」

立ち上がり二枚のカードをバイザーに入れる。

『『ADVENT.』』

ボルボルとバイオグリーザを召喚する。

「頼んだで！」

「オツシャア！」

「ギユオ！」

うちはビルから飛び降りる。

「待て！つて、邪魔すんな！」

命の相手は二匹に任せて、やる事やらなあかな。

『COPY VENT.』

〈SIDE OUT〉

「なのはSIDE」

皆が戦っているのに、私だけ…
私が、皆を助けなきゃ…

身体に痛みが走る。

こんなの…全然…平気…

「なのは！」

後ろから声を掛けられる。

振り向くとそこには命君がいた。

「結界から脱出する。行こう！」

そう言っって手を差し出す。

たしかに、怪我をしている私と命は脱出した方が良くかもしれない。
でも…

「皆をほっとけないよ」

「増援が来る。だから行こう、なのは」

……おかしい。
なんだか違和感がある。

そっか…

「命君…じゃあないね。誰なの？」

レイジングハートを突き付ける。

「何を言ってるんだよ。俺がわからないのか、なのは？」

『残念ですが、貴方は千路命ではありません』

「命君はね、私の事を【なのはちゃん】って呼ぶんだよ。一体誰？」

命君の偽物は驚いたように止まった。

そして大声で笑い出した。

「そうでしたわね。失念でしたわ」

すると命君の姿が変わり、鎧の子になった。

「ばれては仕方ありません。覚悟してください」

ベルトに手を伸ばす。

どうしよう…だけど、やるしか…

「こんなろおお！」

「どわ!？」

どこからともなくオレンジ色の大きな蟹(?)と、カメレオンのような何かが飛んで来た。

「なのはちゃんに何やってんだてめえ！」

今度は本物の命が現れた。

多分さっきのは投げたんだろう。

ただ、さっきよりポロポロになって尾も無くなっている。

「もう!戻りなさい！」

大きい何かは窓ガラスの中に消えていった。

「おとなしくしていれば良いのに…」

「ゼエ…ゼエ……やかましい…」

「命君？」

「大丈夫だ。しやらあああ！」

腕から鎖を伸ばして、鎧の子を捕まえる。

「ちい！」

鎖から逃れようとともがくが、命君は離さない。

『マスター』

「え？」

『Shooting Mode・Acceleration』

レイジングハートから光の羽が伸びる。

「レイジングハート……」

『スターライトブレイカーを撃ってください。彼が捕らえている今がチャンスです』

え！？

「そんなつ無理だよそんな状態じゃあ！」

『撃てます』

「あんな負担のかかる魔法レイジングハートが壊れちゃうよ！」

『私はあなたを信じています……だから、私を信じてください』

レイジングハート……よし！

「レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ」

レイジングハートを構える。

「なのはちゃん!？」

「命君、フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん。私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を」

「なのは!?!」

「なのは、大丈夫なのかい?」

「……………」

「大丈夫!スターライトブレイカーで撃ち抜くから!命君、オルタをお願い!」

「……………わかった」

私の斜め上に薄紫の魔法陣が現れる。

「レイジングハート!カウントを!」

「All right」

レイジングハートの先端をオルタに向け、魔法を収束させる。

『Count 9』

皆が邪魔されないように頑張っているんだ。絶対に撃ち抜く！

『8・7・6・5……』

「残念だったな」

「……」

『4・3・3……』

レイジングハートがおかしい。

「レイジングハート、大丈夫？」

『No problem・Count 3・2・1……』

レイジングハートを振り上げる。

「あは!?!」

その瞬間身体に変な衝撃が走り…私の胸から手が生えていた。

（SIDE OUT）

くつばさSIDEく

シヤマルはやつぱり外してもうたか……せやけどこれなのは魔力はゲットやな。

「なのはちゃん!？」

「フフフ……」

「まさか……やっぱり、見つけた!」

へ？

うちは投げ飛ばされ、ビルに叩き付けられる。

命は足場を展開しながらどこかに跳んで行った。

……まさか。

いや、でも見つけられる訳が……せやけどそれ以外考えられへん

『ADVENT』

ドラを呼び出し背中に飛び乗る。

「急いで！」

「御意」

全速力で命を追う。

「シャマル、逃げて！見つかった」

「え！？」

「この野郎！！！」

シャマルと命を結ぶように何枚もの魔法陣が並び、驚いたシャマルは旅の鏡から手を抜く。

まずい。

「させへん！」

『FINAL VENT』

デスパユツシユのカードを入れる。

うちはドラの背中から飛び出し空中で逆さまになる。そして足にバ
イオグリーザの舌が巻き付く。

「やあああああ！！！！」

「くらっ…っおーっ」

シャマルを蹴ろうとした命を捕まえる。

「おとなしく…しとれえええ!!」

「があああああ!?!」

そのまま床に叩き付ける。

命の身体を包む虫のような装甲は砕けた。

「シヤマル!?!」

「だ、大丈夫です。助かりました」

よし、急いでなのはの蒐集を…

だが桜色の砲撃が結界を貫いた。

…この!

「シヤマル、こいつを蒐集せい!あつちのでかいのは諦めるで!」

「はい!闇の書、蒐集開始」

『Sammiling』

「ぐおおおお!?!」

命のリンカーコアから魔力を吸い取られ埋まり出す、すぐに止まった。

「やっぱり、この子じゃたいして稼げない…」

「零よりましや」

「ぐ……」

命がうちを睨む。

「やっぱり邪魔しおったか。忠告しとくで。余計な事したら、あんただって殺す。それになのはだって危なくなるで」

「つ……ば……さ……」

「全員散開。いつもの場所で集合や」

倒れた命を残し、うちとシャマルは立ち去った。

第四十一話 戦い、再び（後書き）

命「そっぴや魔力も追加能力に含まれないか？」

つばさ「そっぴえばそっぴかもしれへんな」

変態（侑斗）「（応募キャラ閲覧中）う、うらやましい。俺もこれだけの能力があればオリ主になれたのに！」

つばさ「あんたは黙っと…（応募キャラを見る）負けた…」

命「…勝てる気がしねえ」

汚物（侑斗）「なんで俺の魔力がEXじゃない！おい、神！俺に時間操作能力とEXランクのリンカーコアをよこせ！」

命、つばさ「黙れ」

第四十二話 傷だらけの再会（前書き）

今気付いたのですが、PV2000000超えていました

皆さんありがとうございます！

第四十二話 傷だらけの再会

「なのはSIDE」

私達は管理局本局に来ています。
怪我の手当もしてもらいました。

「いや、君達の怪我也軽くて良かった」

「クロノ…ごめんね、心配かけて…」

「私のせいだよ……私がもっとしっかりしていれば、フエイトちゃんも……」

「なのは……」

「そう言わないで。今回の件に、君に責任は無い」
「だけど……」

「さ、命の所に行こう。目も覚ましたみたいだしね」

「うん……」

私達は命の病室へ向かった。

病室に入ると、ベットに座ってる命君とお医者さんがいた。

「ああ…ハラオウン執務官。ちょっとよろしいでしょうか？」

「はい、なんでしょう？」

「こちらへ」

クロノ君がお医者さんに連れられて出て行く。

「」「」「」

どうしよう…何を話せば良いのかわからない…

「二人共…怪我は大丈夫なのか？」

命君から話し掛けて来た。

「たいした事ないよ」

「私も。…ごめんね、私を庇って…」

最初の黒いあれ…あれで命君は怪我をして、全力を出せなくなっちゃったんだ…

「なのは…」

「…はあ。俺は大丈夫だからさ、気にしないでよ」

「でも！」

「女の子庇って怪我したんだ。名誉の勲章さ」

「命君…」

命君は笑ってる。

「俺がなのはちゃんを守りたくてやった事なんだ。後悔してないし、満足している。だからなのはちゃんが悔やむ必要は無いよ」

「…ありがとう。それとごめんなさい」

命君が守ってくれた。

その事が私は少し嬉しく思ってる。

不謹慎…だね

「それと…久しぶりだなフェイト。助かったよ」

「うっん、当然だよ。友達だし」

「本当にありがとう、フェイトちゃん」

「なのは…もう止めよう？友達なんだし、助け合うのは当たり前だよ」

「今は素直に再会できた事を喜ぶべき…か」

「そうだね。また会えて嬉しいよ、フェイトちゃん」

「俺もだ」

「私もだよなのは、命」

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

俺達はクロノに連れられ部屋に入る。
中にはユーノアルフがいた。

「あ……」

「フェイト！なのは、命！」

「ユーノ君！アルフさん！」

「ユーノ、アルフ久しぶりだな」

「二人とも久しぶり！」

「なのは、命…」

皆元氣そうだな。

フェイトがバルディッシュに歩み寄る。

「バルディッシュ…ごめんね。私の力不足で…」

「破損状況は…正直あをまり良くない。今は自動修復をかけてるけど…基礎構造の修復が済んだら、一度再起動して部品交換しないと」
「なのはちゃんもレイジングハートの前に立つ。」

「そつえばあいつらの魔法ってベルカ式だよな」

「確かにあの人…ベルカの騎士って言ってた」

フェイトの言葉にユーノが頷く。

「ベルカ式の最大の特徴は、デバイスに組み込まれているカートリッジシステム。儀式で圧縮した魔力を弾丸に込めて…瞬間的に爆発的な破壊力を得る…危険で物騒な代物だな」

「おい。ギフトにそんなのついてないぞ」

初耳だ。

てかそんなのが有るなら是非とも欲しい。

「ユーノが言っただろ、【危険】だって。だいたい命のリンカーコ

アもおかしいんだ。何が起きるかわからない」

危険か……って、は？今なんて言った？

「命君の身体、大丈夫なの！？」

「落ち着くんだなのは」

ユーノがなのはを制止する。

「どづいう事だよ」

「そこまで深刻な問題じゃない。なのは、命、二人はこの半年間魔法の練習をしていただろ？」

「勿論」

「毎日のように」

朝早く起きてやってたし。

ついでに俺は夕方から母さんと恭也さんにしごかれてるが。

「…半年前と比べて、命のリンカーコアは全く成長していないんだ」

「リンカーコアって成長するの？」

「そつだよ。知らなかった？」

なのはちゃんの質問にフェイトが答える。

「年も若いし、なのはもフェイトも半年前より確実に成長している。だが命、君だけが全く変わらないんだ」

俺だけ…リゼンブラである事が関係してるのかな？

「リゼンブラはリンカーコアの成長が悪いのかな？」

「だろうな。改造人間なんだ、不自然な部分が出てもおかしくない。ただでさえ男女の出生比率がおかしいし」

「そうなの？」

「リゼンブラの八〇九割は女性なんだ」

「なんだいそりゃ!？」

まあ驚くわな。どう考えても比率がおかしい。やっぱり遺伝子をいじったりしたせいかな？

某種ガンでも遺伝子操作のせいで出生率が世代を重ねる毎に低下していたし。

…あれ？もしかしてリゼンブラやばくね？男の数がどんどん減ってるじゃん。

「母さんも学生の頃は、クラスに二人位しか男子生徒がいなかったって言ってたし」

「とりあえず…そういう事にしておこう。フェイト、そろそろ面接の時間だ。なのはと命もちょっと良いかい？」

「「え？」」

俺達はある部屋に案内された。

「失礼します」

「クロノ、久しぶりだな」

中には青い制服着た顔の輪郭が髭で包まれてる初老の人が立っていた。

「ご無沙汰しています。この方はギル・グレアム提督。フェイトの保護監察官を担当してくださっている」

「はじめまして。ギル・グレアムだ」

「「「はじめまして……」」」

それからソファーに座り用意されていた紅茶を差し出された。

「保護監察官と言っても、まあ形だけだよ。リンディ提督から先の事件のことについても、君の人柄も聞いている。とても優しい子だとね」

「あ、ありがとうございます」

フェイトが照れくさそうに頭を下げた。

「……………ん？なのは君と命君は日本人なんだな？懐かしいな、日本の風景は」

「「え？」」

この人、日本を知ってる？

「私も、君と同じ世界の出身だよ。イギリス人だ」

「ええ！？そうなんですか！？」

「地球出身なんだ……」

イギリスねえ……行った事は無いけど。

「あの世界の人間はほとんど魔力を持たないが……稀にいるんだよ。君や私のように、高い魔力資質を持った者が」

それからグレアムが資料の載っていたボードを再度見つめる。

「はは……しかも魔法の出会い方まで私とそっくりだ。私の場合は、管理局の局員だったんだがね。もう、五十年前の話だよ」

「そうなんですか」

そして彼は端末機をテーブルに置いた。

「フェイト君達は、なのは君達と友達なんだね？」

「はい」

「約束はただひとつ……友達や、信頼している人を裏切ってはいけない。それができれば、私も君達の行動には何の制限もしないと約束しよう。できるかね？」

なんだか少し悲しそうな目で言った。

「……はい、必ず」

「うむ、いい返事だ」

それから話を終えて出て行く時、クロノがグラム提督の方を向いた。

「提督もう聞き及びかもしれませんが先程、自分たちはロストロギア……闇の書の搜索捜査担当に決定しました」

「そうか……君がか。言えた義理ではないかもしれないが無理はするなよ？」

「大丈夫です【急時にこそ冷静さが最大の友】。提督の教え通りです」

「ん……そうだったな」

「では…」

クロノが頭を下げて部屋から出て来た。

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

「はやてちゃん、つばさちゃん、お風呂の支度できましたよ」

「うん、シャマルありがとう」

「うちは後でにするわ」

「なんでや？せっかくお姉ちゃんのセクシーレベルをアップさせようと思っと思ったのに」

そう言いながらはやては手をワキワキと動かす。

「それを止めんかい。ヴィータも、一緒に入ったら」

「そつする」

「明日は朝から病院ですし…あまり夜更かしをされないよう」

「はい」

「では、よいしょっと…」

シヤマルがはやてを抱き抱える。

「シグナムはお風呂どうします？」

「私は今夜はいい。明日の朝にするよ」

「へえ、お風呂好きが珍しいな」

「偶にはそついう日もある」

「ほんならお先にな」

はやてたちは風呂へと向かって行った。

「……今日の戦闘か？」

「聡いな。その通りだ」

シグナムは服を捲り上げると、腹部に切り傷のような痣ができていた。

「お前の鎧を撃ち抜いたか…」

「澄んだ太刀筋だった…良い師に学んだのだろうな。武器の差がなければ少々苦戦していたのかもしれない」

「だが、それでもお前は負けないだろう」

「そっやな」

さて…

「二人共、ちよつとええか？」

「なんでしよっ？」

「今日襲った白い女の子なんやけど…あの子うちのクラスメートの子や」

「なっ!？」

「姉上の…ご学友でしたか…」

まあ予想通りの反応やな。

「だから話し方を変えていたのですか」

「そっゆつ事や。それに気にせんでええよ。特に親しい訳でもないし」

「そうですか…」

「それならば呼び出して襲撃…いや、それでは感づかれる」

「とにかく学校を休まない方がええな。プリントとか渡しに来て、鉢合わせるとかもあるし」

「たしかに。ですがよろしいのですか？」

「妹とクラスメート、どっちが大切や？はやてに決まっとるやろ」

「……はい」

「……」

そりゃあうちも悪いとは思っとる。

せやけど魔力が高くて仮面ライダーに変身できるだけ…

やれる事に限界がある。

今は命やすずに警戒して蒐集をせなあかな。

そんで猫姉妹にたぶらかされずに、はやてを上手く説得する方法も考えなきや…

「姉上」

「なんやザフィーラ？」

「少しお休みになられたらどうですか？」

「私も賛成です。焦るのはわかりますが、あまり無理をなさらない

方が良いかと」

……まあ、そうやな。

向こうも何日かは動けんはず。

「そうやな。明日は休むわ」

ぶっ倒れたりしたらあかんし。

〈SIDE OUT〉

く???く???

「まずいわね」

「ええ。すつごく」

先程知ったのだが、クロノの仲間である現地の魔導師の高町なのはと干路命。この二人は八神つばさのクラスメートだ。それだけじゃない。

夕方八神はやてが出会った少女：月村すずかも同じ。

「どうする？八神はやてが見つかる危険は高いわ」

「高町なのはと千路命については、八神つばさが気付いてるだろうから大丈夫だと思うわ」

ある意味生かしておいて正解だったわね。

「月村すずかが危険ね。消す？」

「馬鹿言わないで。彼女は一般人よ。それに彼女に何かあったら、それこそ鉢合わせになる可能性が高いわ」

「たしかに……」

「八神つばさの働きに期待するしか無いわ。三人を近づかせないよ
うに動くに決まってるし」

「邪魔だと思ってたけど、蒐集にも参加してここまで役に立つなんてね……」

「……そうだわ。良い事を思い付いた」

「何？」

「八神はやてが一番絶望する方法を……お父様が納得するような八神つばさの処分の仕方を……」

第四十二話 傷だらけの再会（後書き）

命「つばさに死亡フラグ建ったか？」

つばさ「……あの猫姉妹、外道化しとるわ」

侑斗「死ぬ前に俺と『FINAL VENT』へぶー!?」

つばさ「汚物は無視して…：そういえばリンカーコアどうしたんや？」

命「作者が俺の魔力は高くない設定にしたいかららしい。だから普通の人間は成長するが、リゼンブラは殆ど成長しないって事にしたらしい」

つばさ「うちはちゃんと成長するわな。まあ命は魔力以外がかなり強いし」

命「強くなりすぎないようにした結果がこれか…」

侑斗「弱っWWW主人公（笑）WWW」

命（早く消してえ…）

第四十三話 引越し(前書き)

募集はA・S終了までとさせていただきます

第四十三話 引越し

「なのはSIDE」

私と命君はリンディさんからお話があると聞いて部屋に案内されました。

フェイトちゃんやユーノ君、クロノ君、エイミーさんにアルフさん。それにアースラの皆さんもいます。

「さて、私達アースラスタッフは今回、ロストログア【闇の書】の搜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました」

「ただ肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生地の隣に臨時作戦本部を置くことになります。分割は、観測スタッフのアレックスとランディ」

「はい」

「ギャレットをリーダーとした搜索スタッフ一同」

「はい」

「司令部は私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、フェイトさん…以上三組に別れて駐屯します。因みに司令部はなのはさんと命君の保護を兼ねて、お二人のお家の直ぐ近所になります」

「えっ？」

「はい？」

嘘！？皆が海鳴に来るの！？

「「あっ……」

フェイトちゃんと顔を見合わせる。

「わー！」

夢みたい！

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

さてアースラ組が海鳴に引越し、俺となのはちゃんは手伝いに来た。とは言ってもスタッフの人達がやっていて、仕事は多くは無いんだがな。

「うわあ、すごい！凄い近所だあ〜！」

「本当！？」

「うん。ほら、あそこが私の家」

なのはちゃんとフェイトがベランダから街を眺めている。

「なあクロノ、頼みがあるんだが」

「ん？どうした？」

コップに水を注ぎ出した。

「ギフトにカートリッジ着けられないか？」

「ブフツ！？」

飲んだ水を吹き出した。

俺にかからなかったから良しとするか。

「ゲホ…君は人の話しを聞いてたのか！？」

「聞いてたぞ。俺ベルカ式なんだろ？」

「だが負担が…」

「俺改造人間だし。タフだもん。それにリゼンブラの能力があっても魔力の差はどうにかしないとイケないし。な？頼むよ」

「あゝ全く……」

頭を掻きながら唸る。

「僕から艦長に話しはしてみよう。だが断られたら素直に諦めるんだ。良いな！」

「まじ？頼むぞ、クロノ執務官！」

「都合の良いやつ……」

ギフトをクロノに投げ渡し、俺はリビングに向かう。

そこには子犬とフェレットが一匹づついた。

「…ユーノとアルフだよな？」

「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

エイミイさんも来た。

「新形態、子犬フォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でない……」

たしかに。

フェレットと同じ名前の人間がいたらなんか変だし、アルフはでかい狼の姿を見られてるしな。

すると、なのはちゃんとフェイトもリビングに入ってきた。

「アルフちっちゃい!どうしたの?」

「ユーノ君も、フェレットモード久しぶり!」

二人が駆け寄り、なのはちゃんはユーノを、フェイトはアルフを抱き抱える。

……つらやましい。

畜生。やっぱり可愛いは正義なのか?

「な、なのは。僕、人間なんだから。その……」

「あ…ごめんね。なんかつい」

そう言ってユーノを離す。

「命も落ち着いて。怖いからさ…」

「俺、落ち着イテル」

「どこが!?片言になってるし!」

「なのは、フェイト、命。友達だよ」

「救世主!」

クロノが俺達を呼びに来た。

…まあ良い。

今日はこの辺で勘弁してやる。

「はい」

「おう」

なのはちゃんとフェイトと一緒に玄関へと向かう。

「こんにちは」

「来たよ」

来ていたのはアリサとすずかだった。

そっいえばなのはちゃんが連絡したって言ってたな。

「アリサちゃん、すずかちゃん！」

「よう」

「初めまして・・・ていうのも変かな？」

「ビデオメールではもう何回も会ってるもんね」

「うん……でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

「うん！」

「私も！」

本当に会うのは違うからな。

「フエイトさん、お友達？」

俺達が話し込んでるのに気付いたのか、リンディさんも来た。

「「こんにちは！」」

「こんにちは。すずかさんにアリサさん…よね？」

「「はい……」」

「私達の事……」

「ビデオメール見せてもらったの」

「リンディさんも見たんすか」

だったら知ってても不思議じゃないな。

「よかったら、皆でお茶でもしてらっしゃい」

「あ、それじゃあうちのお店で」

「喫茶店だしな」

「あ、そうね。じゃ折角だから、私もなのはさんと命君のご家族に挨拶を…ちよっと待っててね」

そう言って奥の方へ行ってしまった。

「綺麗な人だね」

「フェイトのお母さん？」

「えと…その…今は、まだ違う…」

頬を赤らめながら答えた。

そついや養子の話しが出てるんだっけ。

…しかしクロノが兄か。

お兄ちゃんなんて呼ばれたら、真っ赤になりそうだな。

あ、そうだ。

「リンディさん、翠屋に来るなら気をつけて」

「なんでかしら？」

「母さんすつげえ不機嫌だったから。いきなりエクステンド形態で襲い掛かったりはしないとっけど…」

「そ、そうなの…もしもの時はお願いね？」

「了々解」

と、そんな感じで翠屋でティータイムになった。

途中で…えつと…誰だっけ？

名前を忘れたが、眼鏡をかけたアーススタッフの人が来てフェイトに聖祥の制服を渡した。

どうやら来週からフェイトが転入してくるようだ。これは賑やかに

なるし俺も嬉しい。

なのはちゃんなんか目茶苦茶喜んでたな。

…そういえばつばさのやつ、何考えてんだろ……

闇の書が必要な理由：やっぱり妹か。

車椅子に乗ってたから身体が悪いのはわかる。おそらく病気なんだろう。

その病気が死に至る物だからあんなに必死なんだろうな。

しかしな…

とにかくもう一度話してみよう。

なのはちゃん達全員で協力ができるかもしれないしな。

それならあいつだって人を襲う必要も無いし、原作より早く妹を助けられるかもしれないし。

〔SIDE OUT〕

くつばさSIDEく

さてさて、うちははやてと入浴中。
ヴォルケンの皆は特訓という名目で蒐集に向かっている。

「ん〜お姉ちゃんも成長しとるなあ。前より僅かながら揉みこたえが…」

「んな訳あるかい!…ちょま!?!ヒヤ!?!」

なんだか前より上手くなつとらん?

あ、あかん。うちにこんな趣味はああ!?!?

「…………お姉ちゃん」

急に胸を揉む手が止まる。

「なんや?」

「少し痩せた?」

「さあ?最近体重計つとらんし…」

女の子としては嬉しいが、うちはまだ九歳。あまり痩せすぎるのは身体に悪い。

「はやては心配せんでも大丈夫や」

「…………うん。ごめんなお姉ちゃん。ずっと迷惑かけて…」

「どないしたん急に」

「だって友達と遊びに行ったりせんで私の事ばっかで…」

「はやて…」

そっか。自分がお荷物やって思っとなんか。

「私はお姉ちゃんの邪魔にな「阿保」え？」

はやてを抱きしめる。

「邪魔なんて思ったらん。うちはお姉ちゃんやで。はやてと一緒にいたいからここにいなるんや」

「お姉ちゃん…」

「せやからはやては自分を責めんでええ」

「せやけど…」

全く…

はやての頭を撫でる。

「そんなら、病気が治ったら色々やってくれるんでええよ。今はお姉ちゃんに甘えなさい」

「…うん」

「さっ。そろそろ出よ。のぼせてまっわ」

「うん！」

はやてを連れて風呂から出る。

もう少ししゃ。この一ヶ月を乗り越えれば…

うちのせいで原作より早くエンカウントしてしまう可能性があるけど、なんとかしてやり過ぎさなあかん。明日にはフェイトが転入するはずや。

そしてなのはの蒐集を失敗してもうたし、今後も命がいるから蒐集は難しい。

次の戦闘で結界を闇の書を使わずに破壊するか、ユーノとクロノを蒐集するか…

転生者はあまり心配は無い。

昨日もそれらしい人物が出たが、ヴィータに瞬殺されたらしいし。

てか原作キャラ嘗めすぎやろ。

勝てば仲間になれるって考えが甘いんや。

むしろ勝つのが難しいのに。

それにはやてから接点を持つのも難しくなってる。

ま、うちが人を簡単に家に入れないよう教育したんやけど…

あ…猫姉妹どうしよ……

よくあるパターンだと、うちをぼろ雑巾にしてはやての目の前に晒すとか…

……だ、大丈夫や！

こっちにはボルボルとドラ、さらにバイオグリーザもいる。四対二や。

倒すのは無理でも逃げる事はできる！

……はず。

第四十三話 引越し（後書き）

命「ネオ・エクステンドはまだですか？」

つばさ「サバイブはまだですか？」

侑斗「俺のデネビックバスターに墮ちるのはとフエイトとはやてはまだですか？」

命、つばさ「ありえない」

第四十四話 戦う理由(前書き)

修正しました

第四十四話 戦う理由

（命SIDE）

「あの…フェイト・テストロッサといいます。よろしくお願いします」

教室中から拍手が聞こえる。

今日、フェイトが転入した。
なのはちゃんも嬉しそうだ。

休み時間になれば早速質問攻め。転入生の宿命だな。

「ねえ、向こうの学校ってどんな感じ？」

「えと…私、学校には…」

「すげえ急な転校だよね。なんで？」

「ああ…その…色々あって…」

「日本語上手だね。どこで覚えたの？」

「前に住んでたのってどんなところ？」

「えと…あの…」

こりゃすごいな。

絶えず質問が来るから困ってるね。

「フェイトちゃんすごい人気者」

「でもこれはちょっと大変かも…」

「アリサ、ゴ—」

「私が?...全く」

ぶつぶつと文句を言いながらもクラスメイトに囲まれてるフェイトを助けに行った。

さて...

「ごめん、ちょっとトイレに行ってくる」

「いつてらっしゃい」

よし。

教室から出た俺は、つばさに念話を飛ばす。

「来い。話がある」

「はいはい」

誰もいない廊下の奥に移動する。

「で?話して?」

「わかってんだろ…」

この前の事、闇の書の事だ。

「原作通りつちゆうとるやろ。てか、あんたのせいでかえって悪い事になつとるんや」

「悪い事？」

「なのはの魔力を取れへんかったから、原作より頁数が少なくなつてもうたわ」

「俺から取つただろ」

あれはやばかった。

うん、なのはちゃんをやらせる訳にはいかないな。

「阿保か。命程度じゃ代わりにならんよ。なのはレベルはそうそうおらん」

「…ち。だけどやらせねえぞ」

「…命がある限り無理な可能性は高いのはわかつとるわ。だから…つちも必死なんや」

なのはちゃんの代わりか…

「他の転生者はどうなんだ？」

「魔力無しが大半で、あつたとしてもしょぼいのばっかや」

本当になのはちゃんみたいなのは珍しいんだな。

「人を襲わずにはできないのか？」

「無理やな。魔法生物だけじゃ時間が無い」

「だったら「協力はお断りや」なんでだよ！」

「命から原作より早くばれる可能性もあるし、あんたまで犯罪者になる必要はあらへん」

つまり、いずれは見つかるって事か…

「命は知らない事になつとればええ。下手に話すと転生の事に触れるかもしれないし」

たしかに。

なぜ仮面ライダーだと知っていたのか聞かれるとまずい。

そう簡単に人に話す訳がないしな。

「それに今は死人が出ないよう細心の注意を払つとるけど、いざという時は何をしでかすかわからへんで。特にヴォルケンリッターの皆が」

脅しか？いや、本気だ。

死人を出す気は無いらしいが、妹が危なくなるなら人殺しもやるって事か。

「本当に訳がわからないな」

「必死なんや。皆はやてが大好きやからな」

「そうか…」

「原作通りなら死人も出ん。間違っても余計な事はせん方がええで」
そう言つてつばさは教室に戻つて行つた。

原作通りか…

俺が話せばつばさ達が暴走するかもしれない。そうならなのは
ちゃんやフェイトも怪我ではすまないかもしれない。
だけどあいつをほつといて良いのか？

むしろ理由を話せばリンディさん達も悪いようにはしないはずだ。
だけどつばさは拒んだ。こっちの事は知ってるはずなのに…

ああ〜！わからん！

廊下に座り込み頭を抱える。

原作…つばさの妹のはやて…

俺は知らない。だけどつばさは知ってる。

俺は…どうすれば…

「千路」

誰かが俺を呼ぶ。

顔を上げると小太りした少年がいた。

たしかクラスメートの切石。

あまり話した事は無いが特になんでもない、孤立してる訳でもなく、目立つ訳でもない普通の生徒だ。

「切石か。なんだ？」

「八神と上手くいってないみたいだな」

さっきの話しを聞かれた？

いや身体になんともないから大丈夫のはずだ。

「闇の書事件は、彼女にとってはかなり重要だからね」

「っ！？切石：お前まさか！」

「僕も転生者だよ。原作を知ってるね」

やっぱり。

今までロクなやつに会ってなかったせいか、思わず身構える。

「ま、待てよ！僕は魔力も無いし戦う気は無いって！」

慌てて俺を制止する。

「本当か？」

正直俺も今は戦うのはきつい。

エクステンドも魔力も回復しきっていないからだ。

「能力だって使ったら死ぬし…。魔力が無い時点で原作介入は諦めてるよ」

使ったら死ぬ？

「なんだよ、それ？」

「ジアースの所有でね。ぼくらのって漫画、知らない？アニメにもなったんだけど」

「悪いが知らないな」

「そっか。本題に戻るけど、僕で良ければ相談に乗るぞ」

……そうだな。こいつなら、だいたいつばさ達の状況もわかってるかもしれないし……。よし。

俺はさっきのつばさとの話しを簡潔に話した。

「なるほどね…」

「妹を助ける為なんだろ？だったら…」

「いや、駄目だ。今まで闇の書はとんでもない被害を出してる。正直協力するとは思えない」

「だけど死人は出ないって」

「それは今回だけだよ」

「じゃあつばさの言う通りに動かなきゃ駄目なのか？」

「多分。管理局に投降させれば主である妹のはやてごと封印って事になるかもしれないし」

妹ごと…

「しかも本当にそれを企んでるやつが管理局にいる。まあ今までの事から考えるとわからなくもないけどね」

「企んでるのって、まさか…」

「アースラ組じゃないよ。ギル・グレアムだ」

「あの人が？まじかよ…」

「僕も嫌いなキャラじゃないし、言動を見る限り、悪人じゃないってのはたしかなんだけどね。狙いは妹だから彼女には影響は無いと思うよ。まあそれでも、八神つばさからしたら最悪の敵なんだけど…」

知り合いに被害者がいるんだろうか？

…だからか？俺まで犯罪者になる必要は無いつてのは。

じゃあつばさは？それに一緒にいたヴォルなんちゃらって連中も…
きつとわかってやってるんだろうな…

「やっぱさ…彼女を信じてみてよ。僕も今の所は賛成…というか方

法が思い付かない。原作通りがベストかもしれない」

下手に刺激せずに、原作の流れにする…か。

それに封印を企んでるグレアムの事も知ってるはず。

多分原作では封印せずにすんだんだろう。

だからなのか？あんな焦ったような態度で…

「少し、信じてみる。あいつの必死さを考えたらな…。ありがとう
な」

「いいよ。所で聞きたい事があるんだけど…」

「なんだ？」

「フェイトのバリアジャケットって、本当にレオタードみたいだった？」

「…はあ？」

〈SIDE OUT〉

（ユーノSIDE）

僕は私立聖祥大学付属小学校の校門前にいる。

三人と待ち合わせしている訳じゃなく個人的な用事でだ。

そう、半年前に出会った女の子にハンカチを返すためだ。

わかっているのはなのは達と同じ学校の生徒。

方言なのか、かなり特徴的な喋り方をしている事。

多分同じ位の年だという事だけだ。

え？二人に聞いてみれば良いって？

その…恥ずかしいじゃないか。それにぶつかった事も話しづらいしね。

えっと……………いたいた！

まさか初日で見つけられるなんて。

こっそり建物の影に隠れて変身を解除する。

服装は…うん、大丈夫。

なんだか緊張するなあ。

「あ、あの！」

「？」

彼女が振り向く。

なんだろ…前に会った時より疲れた表情をしているような…

「半年前に会ったの…覚えていませんか？」

「…ああ！あの時の！」

どうやら思い出してくれたみたいだ。

「また、この町に来たので、ハンカチを返したくて」

彼女にハンカチを差し出す。

「そっか…。律儀なんやね」

そう言いながらハンカチを鞆にしまう。

「あの…お名前を聞いても良いですか？僕はユーノ・スクライアと
います」

「八神つばさや」

そう言いながら笑顔で手を差し出す。

「ど、どうも…」

慌てて握手する。

つばささんか…

なんだろ…凄くドキドキするなあ…

「ん？どないしたん？」

「い、いや！別に！」

「そつ？」

落ち着くんだ僕！

そつだ、素数を数えて落ち着くんだ。1、3、5、7、11、13、
17、19……ふつ。

「ちょっと用事があって、またこの町に滞在する事になったんです
よ」

「ふ〜ん。じゃあ、何処かでまた会うかもしれへんな」

「そうですね」

「ほな、うちはこれから夕飯の買い物せなあかんから。今度会った
時は時間があるとええな」

「あ…うん」

「じゃあね」

「さ、さよなら」

手を振りながらつばささんは立ち去る。

「…………ごめんな（ボン）」

ん？今何か言った？
いや、気のせいだな。

つばさんの姿が見えなくなる。

……ああ〜！！！！

なんであそこで何も言わなかったんだ！？

翠屋なんか呼ぶのに絶好の場所じゃないか！

お茶でもどうですか？って！

いや、待てよ…よく考えればあそこだとなのはや命が見つかる。
何言われるかわからないな。

はあ…

まあ、闇の書で忙しいから、僕だけ遊ぶ訳にはいかないし。
せめて一度位はゆっくり話したいな…

肩を落とし俯きながら帰路につく。

歩いていると地面に鉄のような影が映る。

っ！？

驚いて振り向くと、オレンジ色の蟹のような怪物が鉄を振り上げている。

「オラア！」

「くっ…！」

叩き付けられた鉄をシールドで受け止める。

お…重い！

「ウリヤ！」

続けて左の鉄を振るう。

僕はそれも防ぐが押し飛ばされる。

「こいつ…」

「コノ前八ヨクモ邪魔シテクレタナ！」

この蟹…たしか命と戦っていたやつ！

油断した。

まさか結界を張らずに仕掛けてくるなんて…

「なのは、フェイト、聞こえる？」

「ユーノ君？どうしたの？」

「この前のやつに襲われてる！今は蟹みたいなのやつしかいないけど、いつ騎士達が来るかわからない…」

「わかった。クロノにも連絡してすぐ行く」

「って、フェイトちゃん。レイジングハートとバルディッシュ、まだ直ってないよ！」

あ。

命も完全に回復していないから無理だし、なのはとフェイトも…

「そうだった…。えっと…アルフを呼ぶよ。私達も代わりにデバイスを借りられないか聞いてみる」

「お願い！」

「アン？仲間デモ呼ヲダカ？」

「友達だよ」

すぐさま結界を張る。

あくまで目印兼周囲へ被害を出さないためだ。簡単に侵入できる。

「ソウカイ。ナラバ…オイ、ドラ！」

「結局我二頼ルカ…」

近くの家の窓ガラスから黒い龍が出て来た。

な…！？

「アッチハモットイルンダカラ、仕方ネエダロ」

「フン…マア良イ。スマヌガ少年、貴様ノ魔力ヲ貰ウゾ」

「お断りだね」

皆、急いでよ。

第四十四話 戦う理由（後書き）

少し補足を

切石は二次創作等の知識が乏しく、猫姉妹がつばさに危害を加える事を予想していない

命もグラムを【闇の書を主ごと封印しようとしている局員】とは思ってない

つまり、かなり中途半端で少し誤解しています

修正点ですが、この時点でまだレイハとバルがまだ直ってないのを忘れてました

第四十五話 鏡の怪物（前書き）

今までで一番印象に残るアニメのOPはと聞かれたら、私は【ブレ
ンパワード】と答えます

第四十五話 鏡の怪物

くつばさSIDEく

予想外やった。まさかハンカチを返しに来るなんて…
せやけど、これは嬉しい誤算や。
悪いけど蒐集させてもらう。

「……うち、最低やな」

せつかく善意で来たのに…
まあ考えても仕方あらへん。

ユーノから離れて辺りを見渡す。

よし、もうおらんな。

「ボルボル、ドラ。なのはの蒐集が難しい以上、ユーノから蒐集して少しでも稼がなあかん」

手鏡からミラーワールドの二匹に話しかける。

「任せろ」

「皆がないから、捕まえるだけでええ。後で蒐集して帰せばええんやからな」

「フム…」

「アンナガキ、俺ダケデ充分ダ！」

ボルボルが走って行ってしまった。

「あ、こら！ドラ、ユーノ一人ならともかく、他に援軍が来る可能性は高い。無理なら諦めて撤退して」

「承知」

ドラもボルボルを追いかけた。

さてと…

一番理想的なのはクロノの援軍が来る前に捕まえられる事や。

…一応バイオグリーザも呼んどこうかな？

まあ、なのはとフェイトはデバイスの修理が終わつたらんはずやし、命もおそらく戦えへん。

だけど失敗した場合の事も考えなあかん。

なのはを蒐集できなかった状態で破壊の雷なんか使ったら、クリスマスに間に合わへん。

やっぱりうちを蒐集させた方がええかな…

ヴォルケンリッターの皆は断固拒否しとったけど、いざとなったら…うん。

破壊の雷を使ったら否応なしにでも蒐集しよ。

さてどうやって結界を破壊しよ…

〈SIDE OUT〉

〈ユーノSIDE〉

「フンヌ！」

振り回す鋏を飛行魔法で空中に飛ばす事で避ける。

「逃ゲンナ！」

どうやらあの蟹は飛ぶ事ができないらしい。

なら、あの黒い龍に集中できる！

「覚悟！」

龍が黒い炎を吐いてきた。

僕はそれをプロテクションで受けつつ離れる。

下手に近づくのはまずい。
捕まったら逃げられる自信は無い。

さらに龍は僕を追いかけて噛みついてきたが、それを避け後ろに回り込む。

「チエーンバイ…うわ!？」

バインドを出そうとした瞬間、何かが僕にぶつかった。

ごみ箱？

あの蟹が投げたのか？

「スキアリ!」

「っ!？」

龍が尾を叩き付け、僕は地面に激突する。

「ぐ…」

「シャアアア!」

「ガアアアア!」

二匹が同時に襲い掛かってくる。

まだまだ!

「チエーンバインド!」

「ゲ!？」

蟹をバインドで捕まえ思いつ切り振り回す。

「やああああ!?!」

「ウエエエエエ!？」

「ナ!？」

蟹を龍にぶつけ、民家に墜落させる。

やったか？

「テメエ!受け止めろヨ!」

「ナニヲ言ウカ!貴様ノ石頭ノセイデ、我ノ方ガダメージガ大キイ
ゾ!」

……い、今がチャンスだ!

「行け!」

「ムオ!?!」

「ゲ!？」

チエーンバインドで拘束。
捕獲成功つと。

「なんだか間抜けだけど…。まあ、皆が来るまでおとなしくしてもらうよ」

「オイ！才前飛ベルクセニヘマスルナ！」

「貴様こそ無様ニ捕マリオツテ！巻キ添エヲクラッタデハナイカ！」

「なんか喧嘩してるし…」

「まあこのまま仲間割れしてくれば、すぐに終わるかな。」

「…しかし煩いな。」

「君達さ。喧嘩するのは良いけど、もう少し静…ぐあ！？」

急に何者かに攻撃された。

殴られたのか、蹴られたのか…とにかく何かしらの直接攻撃をされた。

「み、見えない？まさか幻術？」

「な！？」

何か紐のような物が巻き付く。

「何だこれ？少しベトベトしてる…」

「…うわあああ！？」

そのまま投げ飛ばされ、塀に激突する。

「ぐ……な……なんだ？」

立ち上がり辺りを見渡す。

どこだ？どこにいるんだ？

…いた。

何も無い場所から浮かび上がるように緑色のカメレオンのような怪物が姿を現した。

しかも御丁寧にバインドを壊して二匹を解放している。

「ム…バイオグリーザカ」

「悪い。助カッタ」

くっ…最悪だ。

どうする？どうする！？

「ドツチガ悪イカ八後回シダ」

「ヨカロウ」

「ギユア！」

龍が空中から飛び掛かり、蟹が迫る。さらにカメレオンが姿を消した。

「やられて…たまるか！」

サークルプロテクションを展開し攻撃に備える。
続けて鉄が叩き付けられ、黒い炎が襲い、見えない衝撃が加えられる。

まだまだ。こんなんで壊れはしない！

「チツ。無駄二固イナ」

「ダガ我ラノ攻撃ニ、イツマデ耐エラレルカナ？」

「耐えてみせるさ。だって僕は…一人じゃないんだからね！」

「「「！？」」」

その瞬間、水色の魔力弾が蟹と龍に降り注ぐ。

「ゲエ！？」

「ムウ！？」

二匹が離れる。

「だあああああ！」

「ゲゲ！？」

さらにアルフの跳び蹴りが何かを蹴り飛ばす。

「フェレットもどき、無事か？」

クロノが降りて来た。

「やられちゃいないみたいだね」

アルフもだ。

「お蔭様だね。…あとツツコミは無しだよ」

「それだけ言えれば大丈夫だな。…さて、守護騎士はいないが、こいつらを捕らえれば進展はある」

「透明になる奴はあたしに任せな。臭いでまるわかりだしね」

アルフが指を鳴らしながら睨みつける。

「すまないが僕はあの蟹の相手をさせてもらっ。ユーノは龍を頼む」

「え？いや…どう考えてもあの龍の方が強いんだけど…」

クロノはAAA+だよね？

普通君が相手をするんじゃない？

「すまない。少し聞きたい事があるんだ。どうやらあいつらは会話できる程の知性は持つてるようだからな」

そう言ったクロノは何か複雑そうな顔をしていた。

……仕方ない。

「わかった。何か事情があるみたいだしね」

「助かる」

そう呟くとクロノは飛び出した。

……さて。

僕は空中に浮かぶ黒い龍をに視線を向ける。

「次は一對一だ」

「フン…ヨカロウ。クラエ！」

口元に黒い炎が溢れ、僕に向けて火炎弾が放たれた。

〈SIDE OUT〉

〈アルフSIDE〉

緑のやつかあたしの拳をよけ、姿を消した。

「だから…」

臭いを頼りに追いかける。

「無駄だっって言ってるだろ！」

「ブグエア!？」

顔面を思いつ切り殴り飛ばす。
あいつは壁に激突し姿を現す。

「ギギ……ギエア！」

あたしを威嚇するように構えた。

「この前はあの狼男に逃げられてむしゃくしゃしていたんだ」

狼の姿に変身する。

「ストレス解消だ！容赦しないよ！」

周囲にスフィアを形成し、フォトンランサーを撃つ。
緑の奴は物凄い勢いでジャンプし避けた。

へえ…なかなか良い足してんじゃない。
だけど、避けられるのは予想通りよ！

「ガアアアア！」

飛び掛かり噛み付く。

あいつは腕で防ぐが、あたしはそのまま振り回し地面に叩き付ける。

どうだ！

「グエ！」

起き上がるとあたしに向けて舌を伸ばしてきた。

汚っ！てか長っ！

飛びのき避け、地面に着地する。

「レディーを舐めるなんて…下品なやつだねえ！」

うん。こいつはフェイトに近づかせちゃいけない。

ここで倒す！

再び変身し殴り飛ばす。

「ギア！？」

「こんなろー！」

さらに懐に潜り込み腹にアッパーをかます。

そして空中に浮いた瞬間に回し蹴りをかます。

「とどめえ！！！」

「ギエ！？」

電柱に衝突し、電柱が折れる。

「ギ…ギギ…」

ふらつきながらも立ち上がる。

まだやるうってのかい。

「さて。とっ捕まえてやるかい」

「！！！！」

あたしがバインドを架けようとする、あいつは避けてカーブミラーの中に消えていった。

「な！？」

逃げた！？てか鏡の中に！？
どうなってんの！？

「てか…また逃げられた…」

負けちゃいないけど…

「ムキー！」

今のあたしはじだんだを踏むしかなかった。

〔SIDE OUT〕

〔クロノSIDE〕

「さて、君には聞きたい事がある」

「アン？」

態度の悪い蟹だな。

「君と似た鎧の人物。彼…いや、彼女が闇の書の主か？」

「正解」

やはりか…

「彼女は何者だ？」

「サアナ」

「闇の書を完成させて何をするつもりだ？」

「自分デ聞ケヨ」

「あれがどれだけ危険な代物かわかっているのか!？」

「知ラネーヨ」

こいつ…

「このままおとなしく捕まってもらえると嬉しいんだがな…」

「無理ダナ。アノガキノ魔力モイタダク。テカアイツツバサニ色目ヲ使イヤガツテタシ(ブツブツ)」

両手を大きく広げ鋏を構える。

今何か呟いたような……気のせいかな。

「そうか…」

僕もS2Uを構える。

「ステインガー!」

「キクカ!」

魔力を撃つが鋏で弾かれる。

まだまだ！

飛びながらさらに魔力弾を撃つ。

「逃ゲンナ！正々堂々戦工！」

ステインガーレイを浴びながらも猛然と走ってくる。

見た目通り固いな…

「接近されたら厄介そうだからね。敵の有利な場所で戦う馬鹿はいないよ」

S2Uの先端に魔力を集中させる。

「くらえ！」

『Blaze Cannon』

青い光が一直線に蟹に向かって突き進む。

「ムガアア！」

コンクリートを引きはがし投げ飛ばしてくる。

盾代わりにしているつもりらしいが…無駄だ！

ブレイズキャノンはコンクリートを貫き蟹に直撃する。

どうだ？

「テメー！今ノハマジデ痛カッタゾ！」

煙りの中から歩み出た蟹の甲殻は所々焦げている。

「面倒だな……」

さっさとバインドで捕らえるか。

「クツソー。飛ベルカラツテイイ気ニナツテンジャ…チツ。ワカッタヨ……」

ん？なんだ…念話か？

「悪イガコレ以上ヤツテモ、コツチガ不利ダカラナ。アバヨ！」
そう言うのと走り出した。

「待て！」

「待テト言ワレテ待ツヤツガイルカ！」

急いで追いかけるが、蟹は近くの車の窓ガラスに飛び込み消えてしまった。

「な！？馬鹿な！」

車の中を確認するが、誰もいない。
そして僕の顔が映っているだけだ。

…逃げられたか…

〔SIDE OUT〕

〔ユーノSIDE〕

「フヌ！」

火炎弾を防ぎ、それに紛れて繰り出される突進を避ける。そして距離が開いた瞬間にチェインバインドを飛ばすが、黒炎によつて焼き切られる。

「貧弱！」

さらに続けて身体をくねらせ体当たりをしてくるがシールドで防ぐ。だが勢いを殺しきれず吹き飛ばされる。

「ソノ程度デハ、我ヲ倒セヌゾ！」

「倒すつもりなんか無いさ！君を捕まえるだけで充分なんだ！」

おそらくこいつは闇の書の主の使い魔の類いだ。
事件解決に大きく前進する。

「我二ハナサネバナラヌ事ガアル。ココデ終ワリハセヌ！」

連続で火炎弾を吐く。

僕はシールドで防ぎつつ回避する。

「それが闇の書の完成か！？何故そんな事を！」

「貴様二ハ関係ノナイ事！」

特大の火炎弾が迫る。

な！？

命中し、大爆発と共に墜落する。

「うっ……」

「手間ヲトラセオツテ……ム？……ダガ……承知シタ……」

なんだ？

「運ガ良イナ。撤退セネバナラヌノデナ。サラバ！」

龍は身を翻すと近くの民家の窓ガラスに入って行った。

な……なんだったんだ？

「ユーノ！」

「大丈夫か!？」

クロノとアルフが飛んで来た。

「なんとか…。そっちは？」

「すまない…。逃げられた」

「あたしもだ。あいつ、鏡の中に入る事ができるみたいだ」

鏡：…さてよ。たしかガラスも物を映すな。

「こっちは車のガラスだ。おそらく同じ能力を持っているのだろう。そっだ。エイミイ、追跡は？」

『ごめん、完全に見失っちゃった。反応が全くないよ…』

「そうか…。仕方ない、一旦戻る。ユーノ、立てるか？」

クロノが手を差し延べる。

僕はその手を掴み立ち上がる。

「ごらんの通りさ。でも、ちょっと痛いかも」

「戻ったら手当てをしよう。行くぞ」

「あいよ」

僕はフェレットの姿に変身し、アルフの肩に乗って帰路についた。

はあ…折角彼女に会えたのに。まさかこんな事になるなんて…
でもあんなにすぐ良く現れるなんて。

……まさかね。

うん、ないない。

〈SIDE OUT〉

〈つばねSIDE〉

「ね…」

うちの目の前には正座したボルボルと、とぐろを巻いとるドラがお
る。

「喧嘩しとる間に捕まりそうになつたと…」

「コイツガシツカリシテネーカラダヨ！」

「何ダト！ドウ見テモ貴様ノ責任デハナイカ！」

またかい…

「いい加減にせんか！」

ハリセンで二匹を叩く。

「ええか。こちらは協力せなあかん。そんなつまらない事で喧嘩し
とったらあかんやろ」

「ケドヨ…」

「黙らっしやい」

ポルポルにかかと落としをかます。

「どーしたんや急に。今までこんな事なかったのに…」

ううん…張り切っとなんかな？

良く考えると、今までずつとうちがおったし…

「…ツバサ、ハシタナイ。見エテルゾ」

「え？」

見えてる？何が？

「黒カ。ガキノクセニ早」見るなあああ！！！！」へブー！？」

とりあえずドロップキックで蹴り飛ばしといた。

うん。うちは悪くない。

人の下着を覗くエロ蟹が悪いんや。

第四十五話 鏡の怪物（後書き）

侑斗「黒か。なかなかの選択じゃないか」

命「くっ……今回だけは同意するぜ」

つばさ「ヴィータ？ギガントやってええで。二人まとめて潰したれ」

第四十六話 つかの間の休息（前書き）

今回は今後の付箋等でコロコロと視点が変わります

第四十六話 つかの間の休息

〔命SIDE〕

「命…大丈夫か？」

恭也さんが倒れた俺を揺する。

「大丈夫…です」

「そうか。しかし無茶苦茶な事を言うな。神速を見切るなんて」

「神の視点なら可能かと思っただんですが」
プロワイデンス・ビュー

「まあ、次第についてきているから恐ろしいな…。見切られるのも時間の問題か」

流石チート視覚。

後は身体もついていけるようになればな…

今後はどんな奴が攻めて来るかわからないし。

鍛えといて損は無い。

それにこの前ユーノが襲われたらしい。

つばさのやつ、見境が無いな…

「そろそろ夕食か。命、キッチンが見えるか？夕食が何だか気になるんだが」

「ちょっと待っててください」

視点を広げる。

ほづほづ…

「今晚はシチューですね。もうできてますし、母さんがこっちに来てます」

「そうか。じゃあ行くとしよう」

俺が立ち上がると同時に道場に母さんが入って来る。

「夕食の時間だ。今晚はシ「シチューでしょ」…視てたのか」

「母さんが来るのもね」

「冷める前に食べよう。行く」

俺と恭也さんは母さんの後に続いた。

さて、最近すすががつばさの妹…はやたと友人になったせいか、つばさが昼食に誘われている。

正直良い気がしない。

つばさも基本的に断ってはいるが、大抵周りに押されて一緒にいる。

妹が見つかるはずじゃなくないのか？
まあ、あっちも考えてはいるんだろうが…

しっかし気まずい。

つばさも同じで、なんか口数が少ない。

つばさを信じてみるとはいえ、いざ戦いになれば手加減する訳にも
いかない。

当然負けた場合の事も考えてんだらうな？

ぶっちゃけ捕まったら俺はフォローできないぞ。

…まあ、良いか。

俺が考えても仕方ないし…

「所で切石」

「何？」

「何故俺の部屋に？」

そう、切石は俺の部屋に遊びに来たのだ。

「そりゃ、ここは高町家だろ？原作介入は諦めたけど、やっぱり興味
あるし」

「ああ、そうかい…」

まあ気持ちはわからなくはないがな。

「しっかし千路は羨ましいな」

「何が？」

「可愛い幼なじみに美人の母親。ありえんだろ。何処のラブコメの主人公だよ」

「…は？」

そういうのって、義理の妹とかいるよな。俺いないぞ。

「まさか全員にフラグを建ててハーレム形成済みか？」

「馬鹿な。ありえないし、興味も無い」

ハーレムの何が楽しいんだ？

やっぱ一人の女性と添い遂げる方が良いつて。

「ほづ…命は嫌か。良い傾向だな」

「「うわ!？」」「

か、母さん？いつの間にか？

「いつからそこにいたんだよ…」

「美人の母親の辺りからだ」

「は、はあ…」

「で？何なの？」

「おやつを持って来た。ついでに珍しく男友達を連れて来たのだから見に来たのだ」

「さいですか…」

相変わらず母さんの思考は読めん。

「さあ切石君、翠屋のシュークリームだ。遠慮なく食べなさい」

「あ、どうも…」

そう言って切石の皿には二つのシュークリームが。

「え？一個は俺のじゃないの？」

まあ、そんなこんなで俺の一時の平和は過ぎていった。

（SIDE OUT）

くつばさSIDE」

とある日曜の午後。

うちは居間でソファーに寝転がってる。

「お姉ちゃん、すっごく疲れた顔してるけど…大丈夫?」

「大丈夫や。ちょっと考え事があるだけや」

「すずかちゃんのお友達に魔導師がおるかもしれへんからって、気にしすぎとちやう?」

そう、最近はやて繋がりであの主人公組によく誘われるんや。

一応はやてにも、すずかの友達…つまり命、なのは、フェイトの事やけど…魔導師かもしれないと伝え、闇の書がお尋ね者だからヴォルケンリッターの事を話さないよう言っておいたけど…

実際はバリバリ管理局と関わってるんやけどな。

「せやけど、心配なんや」

「あんまり心配しすぎて身体に悪いで。皆も心配してるし」

「むづ…」

たしかに最近学校で主人公組と関わるようになり、神経がガリガリと削られとる。

正直、気が気やない。

それを気遣ってシヤマルに最近は蒐集を休むよう言われる始末…

はあ…
まあもうすぐデバイスの修理も終わり、第二戦目になる。
一応結界の破壊については考えもあるし。
それを実行できるか、本当に破壊できるかが問題なんやけど…

「ふぎゅ〜」

「もう…。ほらお姉ちゃん、こっち」

はやてがソファーに移り膝を叩く。

ま…まさか…

「膝枕してあげるから。そんなとこじゃ首痛いやろ？」

キター！

美少女の膝枕！生きてて良かった！

「ほな、お言葉に甘えて」

はやての膝に頭をのせる。

ああ…最高。

やっぱり膝枕は美少女にしてもらうに限る。
さらに妹という属性まで追加された膝…この至福感。
シスコン上等！

「お姉ちゃん、後で一緒にお風呂入ろ〜」

「ええで〜」

極楽極楽。

……は？

「お風呂？」

「ええって言たよな。お姉ちゃん」

お…おのれえええええ！

その後、たっぷりと胸を揉まれてもった。

因みにシグナムやシャマルで練習したのか、また上手くなっとった。

仕返ししてええよな？

〜SIDE OUT〜

く侑斗SIDEく

やあ久しぶり諸君。

オリ主の桜島侑斗だ。

最近は転生者と戦いながら実力をつけている（多分）。
もち女はお楽しみに使わせてもらってるがな

さて…今はすでにA・sに入っているが俺は介入しない事にしてい
る。

外から見たんだが、なのは側にはあの虫野郎。ヴォルケン側にはは
やての姉がいる。

俺が介入しても管理局に指名手配されてるから危険だし、数も合っ
ているしな。

しかしあの虫野郎、目障り以外の何でもないな。

どうやって消すかだな…

俺一人では厳しい。おそらくはやて姉ともつるんではず。

…やはりスカリエッティと組むか。

StrikerSならなのは達も良い具合に育ってるし、勝って管
理局も潰して六課の女を捕獲。

スバルやティアナ、キャロも頂くとしよう。

そうだ！ナンバーズも予め攻略しとかなきゃな。

俺の華麗なオリ主計画はこうだ。

まずスカと接触、協力関係になる。

協力しながらナンバーズを攻略。

勿論他に転生者が来る可能性もあるが、大抵は管理局アンチだから俺に協力するだろう。

邪魔は消せば良いしな。

そしてStrickersで完全勝利を収め原作キャラを捕獲。俺のデネビツクバスターで頂くのだ。
万が一虫野郎のせいで中古になってたら、モブ転生者共に貸してやるか。

ククク…完璧だ。

さて、まずはスカを探さなきゃな。

「デネブ！ゼロライナー発進！」

「侑斗ヲ主人公ニ」

待ってるよナンバーズ！

俺がまとめて可愛いがってやるぜ！

…あ、年長組はオバサンっぽいからいらんいかも。

（SIDE OUT）

「????? SIDE」

辺りを埋め尽くすモニターや端末機。

私は自分の研究室である物のデータを見ている。

「ドクター、お茶です」

声をかけられ振り向くと紫の長髪の女性が立っている。

「ウーノか。そうだな…少し休憩にしよう」

彼女の持ってきたティーカップを取り紅茶を口に運ぶ。

「楽しそうですね」

「ああ…最高だよ。この前見つけた【残骸】から発見したこれらは実に素晴らしい」

私はモニターに映る数々のデータに視線を戻す。

「これらを開発した人物とは仲良くやれそうなんだがな……会えなくて残念だ」

「妹達の装備に利用できそうですか？特にこのパワードスーツなんかどうでしょう？」

「いや、これは無人機として利用した方が効率が良い。戦闘機人向きではないからね」

「そうですか……」

しかし面白い。

無人機としても利用できるパワードスーツ。

改造人間。

そしてクローン培養した兵士。

他にも色々ある。

「…ドクター、これは？」

ウーノが一つの画面を指差す。

「ああ、このユニットか。是非とも試してみたいのだが、発動条件が厄介だね」

「たしかに。妹達を実験台にする訳にはいきませんね」

「頭の悪い犯罪者が協力するとか言って現れないだろうか。そいつに搭載させてみれば……」

「そこまで都合の良い事がありますかね？」

「あると良いんだがなあ……」

まあ何とかなる。

そういえば回収したデータには、この残骸の元々の名前もあった。

《エレボス》……か。

第四十六話 つかの間の休息（後書き）

多分わかる人にはわかると思います

パワードスーツやクローンや発動条件が厄介なユニットとか…

第四十七話 新しい力（前書き）

転生者募集ですが、敵、味方共に女性を募集にさせていただきます
男性枠は決定しました

第四十七話 新しい力

（命SIDE）

今日は管理局本局で検査に来た。
どうやらリンカーコアも無事に直ったみたいだ。

「命君！」

部屋から出るとなのはちゃんとフェイト、ユーノ、アルフが来た。

「大丈夫？」

「完治だ」

「こっちもだよ」

「ほら」

なのはちゃんがレイジングハートをフェイトがバルディッシュを見る。
せる。

「そうか。あ、俺のは？」

「ほら」

ユーノが渡してきた。

「おお…」

何も変わってねえ。

「本当にカートリッジを付けてくれたのか？」

「起動後の形状も変わってるみたいだよ。帰ったらなのはとフェイトも説明があるから」

「あいよ」

「うん」

「じゃあ、行く」

そうして帰路についたのだが、エイミィさんから闇の書の主と守護騎士二人を発見。結界に捕獲する事に成功したらしい。

そんでクロノが先行。俺達も増援として行く事になった。

なあ…ぶつつけ本番でやれと？

〈SIDE OUT〉

くつばとSIDE」

ヴィータ、ザフィーラと一緒に行動していた所、管理局に見付かり、結界に捕まってしまった。

いよいよか…

ここが勝負所や。

なのは蒐集に失敗したから、ここでうちが結界を破壊せなあかん。大丈夫。猫姉妹が来るまで耐えればええ。

「くつ…」

「管理局か」

「囲まれてしまいましたわね…」

うちの周りを管理局員達が囲む。

「でもチャライよこいつら。返り討ちだ」

「だけどこの人数…」

囲まれるってのがこんなにもきついなんて。あゝ面倒や。

「ん？」

突如包围していた管理局員が後退していく。
たしかこの後…

「っ！上だ！」

上空には魔法を展開し、周囲に無数の魔力刃を浮かべたクロノがおった。

「なんやこれ？」

「ぱつと見、百は超えとるやん！」

「ステインガーブレイド ・ エクスキューションシフトオ！」

クロノは無数の魔力刃を一齐放つ。

「ザフィーラ！」

「応！」

ザフィーラがうちの前に立ちシールドを展開。
無数の魔力刃が着弾し爆散する。

「ハアハア…少しは通ったか？」

爆煙が晴れると魔力刃を二、三本腕に刺さつとるザフィーラがいた。

「ザフィーラ！」

「ザフィーラ、大丈夫？」

「心配御無用。この程度でどうにかなるほど…柔じゃない!」

ザフィーラが腕に力を入れると、魔力刃は碎け散る。

わお 男らしい。

「上等!」

「次はこっちの…っ。どうやら到着したみたいね」

「ん?…っ!あいつ!」

視線の先にはなのは、フェイト、命の三人がおった。
そして一斉にセットアップする。

「レイジングハート・エクセリオン!」

「バルディッシュ・アサルト!」

「ギフト・テートリッヒ!」

「「セット!」アープ!」

「エクステンド!」

三人が光に包まれ、そして新しいデバイスを手に降り立った。

「あいつらのデバイス!あれってまさか!?!」

やっぱりか…
面倒な事になったわ。

〈SIDE OUT〉

〈シグナムSIDE〉

ドラの背に立ち、目の前の結界を見据える。

「強装型の捕獲結界…」

「三人八閉ジ込メラレタナ…」

「ドラ。ミラーワールド経由で結界内に侵入する事は？」

「我ハ可能ダガ、シグナムハ不可能ダ。身体ガ粒子化シテ消滅スル
ゾ」

「そう上手くはいかないか…」

ミラーワールドに入れれば楽に侵入できたのだがな。

『行動の選択を』

レヴァンティンの言葉に思わず笑みがこぼれる。
考えるまでもない。

「レヴァンティン、お前の主はこの程度で退く騎士だったか？」

『否』

当然の答えだ。

「そつだレヴァンティン…私達は今までも、ずっとそつしてきた！
ドラ、行くぞ！」

「承知！」

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

……なんだこりゃ。

形状が変わってるとは聞いたが…

今まで二の腕についてた腕輪が左腕の剣の付け根辺りにつき、そこから銀色の装甲が二の腕まで伸びて、元々腕輪があった所には銃のマガジンみたいなのがついてる。

これがカートリッジか…

しかし派手になったなギフト。

名前も変わって。テートリツヒって凄いとかなんな意味だったな。つまり猛毒か。

ついでになのはちゃんやフェイトは、バリアジャケットも微妙に変わってる。

取りあえず俺達はビルの屋上に降り立ち、つばさ達を見上げる。

「私たちは戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

なのはちゃんとフェイトが話し合いを求める。

だけどおとなしく話し合いに応じるとは思えないんだが…

「あのさあ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ。【和平の使者なら槍は持たない】」

赤い少女が呆れたように口を開く。

「「？」」

「話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴がいるか馬鹿って意味だよ。馬鹿鹿」

まあ、ごもつともな意見で…

「な！いきなり有無を言わず襲いかかって来た子がそれを言う！？」

「それにそれは諺ではなく、小話の落ちだ」

犬耳の男もツツコミを入れる。

「うっせえ！いんだよ細かい事は！」

「でも、話し合いに武器を持ち出すのもナンセンスですわ」

…相変わらず違和感ありまくりだな。

「穏便にすませられないか…」

そうしていると空中から爆音と共に黒い龍とポニーテールの背の高い女性が現れた。

そして女性は龍の背中から飛び下りゆらりと立ち上がる。

「っ！シグナム！？」

フェイトが身構える。

「命君、ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね。私、あの娘と一対一だから」

そう言って赤いハンマーの少女を見上げる。

「私も彼女と…」

「ああ、私も野郎にちよいと話がある」

フェイトが先程のシグナムという女性を、アルフが犬耳の男を見据える。

まあこうなるわな。

「じゃあ俺はあいつと…」

「主の方は頼んだ。僕とユーノはもう一人の守護騎士を探す。またリンカーコアを抜かれちゃかなわないからね」

「了解」

さて、行きますか。

俺はつばさの所に飛び出し、近くのビルの屋上へと移動する。

「前回のようにはいかないからな」

「一人一回しか蒐集できないのに……面倒ですわね！」

『STRIKE VENT.』

シザースピンチを召喚し飛んでくる。

早速試してみるか。

「ギフト、カートリッジロード！」

『Explosion.』

左腕のマガジンが付いているユニットから薬莖が排泄され、一気に魔力が上がるのがわかる。

「いつけええええ！」

『Rider Slash.』

右腕の剣に魔力を込め、斬撃波を放つ。
オルタを通過させ、一直線に飛んでいく。

「だりやあああ！」

つばさもシザースピンチに水を纏って応戦する。

そしてシザースピンチで薙ぎ払うが俺の方が上らしく、貫通してシザースピンチを切断する。

切断面はドロドロに溶けていた。

すっげ…いくらオルタを使ったとはいえ、俺とつばさの魔力差を打ち破るなんて…

「ちい！」

『SWORD VENT』

『GUARD VENT』

つばさはドラグセイバーとシエルディフェンスを召喚し構える。

「カートリッジでこれ程とは…」

「降参するなら今のうちだぜ？」

「誰が！」

ドラグセイバーを振り下ろすが、それを交差した剣で受け止め蹴り飛ばす。

よろけた所に蛇腹剣を振るい連続で切り付ける。

「ぐあ！？」

しかし固いな。

元々の装甲が魔力で強化されてるんだ。

「前は本調子じゃなかったし、こっちも負けられないからな。本気で行かせてもらう」

「構いませんわ。下手に手心を加えられても気色悪いですし」

「全力で戦ってくれた方がこっちも後腐れ無いし」

「負けても知らないぜ」

「やれるもんならやってみい」

上等！

「行くぞお！」

両腕の剣を連結させ、オルタを潜りながら飛び掛かる。

「くっ！」

シエルディフェンスで防ぐが、弾きつつ連続で切り付ける。
つばさはバックステップで避け離れた。

「そら！」

またもカートリッジを使い強化した毒針をつばさの頭上に撃つ。

「ん？」

「くらえ！」

そして爆発させ、針の内部で変換した麻痺毒液を雨のように散布する。

「くんのー！」

毒液をドラグセイバーから放つ斬撃波で跳ね飛ばすが、そのスキに

一気に接近する。

「でりゃー！」

「ぐー!？」

蹴り飛ばし、伸ばした蛇腹剣で捕まえ床に叩き付ける。

「!」の…」

「とどめー！」

『Ready』

スパイラルコーンを展開し、カートリッジをロードしながら跳び上がる。

そして垂直に展開した足場を蹴り通過する。

「ベノクラッシュー！」

そしてつばさに蹴り掛かる。

ん? 待てよ…

今俺がつばさを倒して捕まえて良いのか?

なんかノリでやっちゃまったけど大丈夫なのか?

一瞬だった。

油断していたのだろう。

俺は横から蹴り掛かる人物に気が付かなかった。

「ぐお!？」

真横から何者かに蹴られ、ビルのフェンスに衝突する。

だ…誰だ？

見ると仮面を付け白い服装の男が俺を見下ろしてる。

まさか、転生者？

プロヴィデンス・ビューで見た所、あれは変身魔法。

…くそ、流石に中身までは見えないか。

ユーノの変身魔法より断然強い。

「ぐ……お前、何者だ！変身魔法なんか解いて顔を見せろ！」

「フツ……。答える必要は無い」

なんかムカツク！

「…何者？」

「逃げる。このままでは全滅だぞ」

「目的は？」

「闇の書の完成…」

「……礼は言わんで」

ちっ…

「俺を無視するな！」

「遅い！」

オルタを展開し飛び込もうとするが、それよりも速く仮面の男がオルタを蹴り抜き、そのまま俺を再び蹴り飛ばす。
先程よりもオルタで強化されてる分、段違いの威力だ。

俺はビルを貫通し、さらに隣のビルの中に入った。

っ…強い。

まてよ。今の蹴りは魔力で強化された物。

…転生者じゃない？

たしかにつばさの口調からして知ってるっぽかったし…

第三勢力？影からの協力者？

訳がわかんねえ…

凹んだ胸部装甲を抑えながら立ち上がり、つばさの方へと視線を移した。

見るとつばさが魔力を集中させてる。

一体何をするつもりだ？

第四十七話 新しい力（後書き）

本来なら「テートリッヒ・ギフト」が正確なんです、名前が強化型っぽくないので逆にしました

第四十八話 脱出（前書き）

いきます

第四十八話 脱出

くクロノSIDEく

僕は残りの守護騎士を探して結界の外にいる。
ちなみに結界内はユーノに任せている。

…命のやつ、大丈夫だろうか？

本来なら僕が相手をすべきだが、エクスキューションシフトで結構
消耗してるからな…

しかし主である彼女は何を考えてるんだ？

おそらく未成年。なのは達とたいして変わらない年頃だろう。
ならば親がいるはず。

……何かがおかしい。

まさかフェイトの時のように親に強制されて？
いや、だがあの生き物の口調やなのは達の話しから、自分の意思で
行っている可能性が高い。

だとすると危険だ。完成させる前に止めなければ。
命が捕らえてくれれば良いんだがな…

そんな事を考えつつ飛び回っていると…

見つけた。

金髪の女性が見える。

おそらく中の様子を伺っているのか、結界を破壊する方法を考えてるのだろう。

幸い僕にも気付いていないようだ。

僕は背後から忍び寄り、S2Uを後頭部に突き付ける。

「搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

「っ!？」

不意を付かれた事に驚いたのか、一瞬身体を強張らせる。

「抵抗しなければ弁護の機会が貴女にはある。同意するなら武装の解除を」

捕った。

多分司令部では、母さんやエイミイがはしゃいでいるだろう。

だが次の瞬間、僕の手足が固定される。

バインド!？

まずい!

すると仮面を付けた男が現れた。

こいつが？

とにかく早く脱出しなくちゃ。

くっ…このバインド、相当複雑だな…

この仮面の男、ただ者じゃない！

「仲間か!？」

「…貴方は？」

彼女は恐る恐るその仮面の男に尋ねた。

知らないのか？仲間じゃない？

「使え」

「えっ？」

「闇の書を使って結界を破壊しろ」

「でも、あれは…!」

「使用して減った頁は、また増やせば良い」

な…!？

「貴様、何者だ!？」

「……………」

答えないか…

だが、このままでは結界が破壊されてしまう。

くそっ！

急いで止めなけれ……ぐっ！？

見ると僕の胸から女性の腕が生え、手の平には小さく水色の光があった。

リンカーコア……やられた！

「何をしている！」

「この子から蒐集して、頁を少しでも稼ぎます」

「時間が無いぞ！」

「一人蒐集する時間位あります！それとも、彼が蒐集されては都合が悪いのですか？」

な…なんだ？

男の態度が変わった？

彼女の言う通り、僕が蒐集されたら都合が悪いのか？

正直僕は特別魔力が高い訳でもないし、レアスキルも無い。

…闇の書をより強い物にしたい？
だが完成させても暴走するだけだ。

情報が少なすぎる。

「……………くっ……………急げ」

「……」

女性が闇の書を浮かべ、頁が開かれる。

『Sammlung』

「ぐ……がつ!？」

蒐集が開始された。

くそ……父さん……

〈SIDE OUT〉

〈つばさSIDE〉

仮面の男が命の展開した魔法陣を蹴り抜き、そのまま命を蹴り飛ばした。

…大丈夫なんか？

ビル貫通しとるけど。

「なるほど。効果の対象は選べない…か。先に使用してしまえば効果を得られる」

たしか、オルタ・フィールド…やったな。

通過する等触れる事で対象を強化する…やったっけ？

詳しくは教えてもらえなかったけど、そんな感じやった気がする。

「脱出しろ。外の守護騎士が闇の書を使い、結界を破壊する」

腹立つわ。

なんやこの命令口調。

てか確定済みかい。

「助けてくれたのは感謝しとるけど、何様のつもりや」

「妹を助けたいの难道？素直にこちらの好意を受け取れば良い」

「こんな胡散臭いやつのを？ナメとんのか？」

「口を慎め。貴様に利用価値があるから助けただけだ」

「なんやて？」

利用価値がある？

少なくとも邪魔とか障害として襲われんって事か？

まさか最後にボロ雑巾にしてはやてに見せ付けるんか？

……冷や汗が止まらん。

「皆！今から結界破壊の砲撃を撃つわ。上手くかわして、撤退を」
つと。もう時間かい。
べつやら

「ちょい待ち！うちが壊す。せやから闇の書を使ったらあかん！」

「え！？」

「姉ちゃん、何考えてんだよ！」

「無茶です！」

「うちに任じとき。計算上は可能なはずや」

「…わかりました」

「ちょ、シグナム！？」

「頁を減らさずに脱出できるならそちらの方が良い。私は姉上を信じる」

「ぐっ…」

「むっ…たしかに」

「………わかったわ。つばさちゃん、お願い！」

「任じとき！」

念話が終わると仮面の男に振り向く。

「ちゅう訳や。うちが結界を破壊する。あんたは邪魔が入らんよう見張るとき」

「フツ……。お手並み拝見とさせてもらおう」

ちい…余裕やな。

まあええ。今は結界の破壊を急がなあかん。

ビルの屋上に立ち左足に全魔力を集中させる。

「ボルボル、ドラ。行くで」

「オイ、本気デヤルカ？かなり強引ダシ…」

「ダガ我ラニデキル事ハコノ位ダ。行クゾ」

よし！覚悟完了！

行くで！

ファイナルベントのカードを二枚同時に入れる。

『『FINAL VENT.』』

「ボルボルウ！！」

「ムオオオオ！！！！」

シザースアタックで真上に投げ飛ばされ、ドラと一緒に上昇。どん
どん高度が上がる。

「ドラア！！！」

そしてシザースアタックの威力を維持したまま蹴りの体制に入る。

「ハアアアア！！！」

黒炎を纏いドラグライダーキックを放ち結界に突っ込む。

うちの最強の攻撃であるファイナルベントに魔力を付属させ強化す
る。

でもそれだけじゃ足りへん。

だから二重でやる。

シザースアタックは上へ投げ飛ばす技。

その上昇する力にドラグライダーキックと魔力を合わせれば…いけ
る！

「うああああああ！！！」

二重のファイナルベントに過剰ともいえる魔力強化。

身体は普通の少女だけあって、この無茶は足に激痛が走り身体に
も負担がかかるやろ。

せやけど…やらなあかん！

しだいに結界にひびが入っていき、どんどん広がっていく。

俺はまた本局の医務室にいる。

仮面の俺にやられたせいで、全身に軽い打撲。胸はちよつと酷いがな。

俺だけじゃない。

クロノも俺と同じように闇の書に魔力を奪われたらしい。幸い、結界が破壊されてからすぐにユーノが発見し処置を施したため、大事にはいたらなかった。

よかった。

しかしあの仮面の男。何者なんだ？

さつき意識を取り戻したクロノの所にも現れたらしいし。

しかし変身魔法か…

母さん位に使いこなせれば視れたんだろうな。今の俺じゃこれが限界か…

あいつは何者なんだ？

「命君、そろそろリンディさんがミーティングをするから海鳴に戻るって」

「つと。そうだった。でもクロノは大丈夫なのか？」

「多分…大丈夫なんじゃないかな？さつきエイミーさんが迎えに行つてたし」

「そっか。じゃあ行くか」

俺はなのはちゃんと一緒に歩き出した。

〔SIDE OUT〕

〔つばさSIDE〕

意識を取り戻すと、そこは家だった。

「つばさちゃん！」

「姉ちゃん！よかった…」

ベッドの隣にはシャマルとヴィータがおった。

…気絶しとつたんやなあ。

しかしはやてがおらんでよかったわ。

はやては月村家にお泊りに行つとる。

まあうちも誘われたけど、魔法の練習に行くって事で遠慮しといた。実際は蒐集なんやけど…

「ごめんな。心配かけもつ…痛ったああ!??!?」

布団を退かして立ち上がろうとするが、左足に激痛が走る。

痛い痛い痛い!

めっちゃ痛い、まじ痛い、泣きそうに痛い!

「動いちゃ駄目ですよ!折れてるんですから!」

「今は安静しなきゃ駄目だよ」

よく見ると足には包帯が巻かれ、緑の光に包まれとる。

シヤマルの治療魔法か…

「…これ、長いんか?」

「無理な治療は身体に悪いですし…」

せやけどはやてが見たら何と云うか…

「なんとかならへん?学校休むのも危ないし。あのお人よしな連中なら、確実にお見舞いに来るで」

「うーん…」

シヤマルは少し考え込む。

「なあ…闇の書使えばよくね？」

「たしかに早く治すとしたら、これしか無いわね…」

闇の書を使う？

「なんやそれ」

「闇の書の頁を使う治療魔法です。本来は私達用なんです…」

なるほど。

たしかに危険の多い蒐集活動で重傷をおう事は珍しくない。

ヴォルケンリッターに欠員が出るのは蒐集活動に支障が出るだけでなく、主の護衛も減る事になるからや。

…待てい。さっきなんて言った？

頁を使う？

「それじゃ意味が無いやろ！せっかく頁を使わんようにしたのに！」

「でも破壊の雷を使うより減りは少ないぞ」

「多少強引な手段ですけど、はやてちゃんが帰って来る前に治すなら、これしかありません」

ぐぐぐ…

仕方ないか。

結果的には頁の減少を抑えられたんやし。

「じゃあシャマル、お願い」

「はい」

シャマルの手元に闇の書が浮かぶ。

「闇の書よ、守護騎士シャマルが命じます。我らが主の姉君の傷を癒して」

まあ足の事は一安心やな。

……それより猫姉妹どないしよ。

利用価値があるっちゅうのは、蒐集に参加しとる事やろ。

あとは……やっぱボロ雑巾かなあ？

障害は排除！よりかは対策を考える時間もあるけど……

いや、なんやかんやで死亡フラグを乱立しとるから、これは生存フラグー？

……だとなええなあ。

第四十八話 脱出（後書き）

つばさ「死亡フラグは建てすぎると生存フラグになるんや！」

命「自分で言っちゃ意味なくね？」

つばさ「がってむ」

第四十九話 それぞれの思惑（前書き）

つばさを鈍感にしようかな

第四十九話 それぞれの思惑

「はやくSIDE」

今日はすずかちゃんの家にお泊りに来とる。

本当はお姉ちゃんも呼ばれとったんやけど、お姉ちゃんは魔法の練習に出かけてもって行けへんかった。

残念やったなあ。

ちよっと前からお姉ちゃんが魔法に凝ってよう練習に出かけるようになった。

なんだか皆も楽しいのか一緒になって出かける。

少し寂しいかも。

でもお姉ちゃんにも自分のやりたい事をしてほしい。

すずかちゃんが言うには、学校でもあまり人と関わらず放課後もすぐに帰ってしまうようや。

多分、私の為なんやろうなあ…

やっぱり悪い気がするわ。

「はやくちゃん？」

すずかちゃんの顔がすぐ傍に見える。

「あ、うん。大丈夫や。ちよっと考え事しとっただけや」

軽く笑いながら答える。

「もしかして、つばさちゃんの事？」

むっ。鋭い。

やっぱり同じ妹やからかな？

「うん。すずかちゃんの話しやと、お姉ちゃん学校でも私の事を気にしてて、遊んだりせえへんし。ラブレター貰ったなんて知らんかったわ……」

「流石にそれは恥ずかしかったからじゃないかな？」

「そうだとしても、私に遠慮しとるといふかなんというか……」

お姉ちゃんだってもっと遊んだり、やりたい事だってあるはず。

「自分がつばさちゃんを束縛している……って思ってるでしょ？」

「……うん」

私の為に自分を犠牲にしている。

もしそうなら、私は自分が許せへん。

「はやてちゃん……つばさちゃんのはやてちゃんの事を本当に大切に思ってるんだよ。はやてちゃんの事を話す時、つばさちゃんすごく嬉しそうだったよ」

私の事……

「はやてちゃんの事が、本当に大切なんだよ。だって、たった一人の姉妹なんだもん」

そっか…

「ありがとう、すすかちゃん。ちょっと気分が晴れたわ」

そっや。

お姉ちゃんは優しい。だから私もいつか恩返しができるようならなあかな。

私がお姉ちゃんを幸せにするんや。

どっかの馬の骨かわからん男になんか渡さんで！

私とヴォルケンリッター全員が認めない限り、絶つゝ対に渡さへん！

…あかん、暴走しとったわ。

まあ、お姉ちゃんに釣り合う男性がおるかはお楽しみにしと」。

「はやてちゃん。そろそろお風呂にしよっか？」

お風呂…！

「そっやな。時間も時間やし」

チラリとすすかちゃんを見る。

「？」

いや、自重せいはやて。

流石にすずかちゃんにはまだ早い。

せやけど……揉みたい！

……ちょっとだけならええかな？

〈SIDE OUT〉

〈つばねSIDE〉

怪我の手当も終わり、皆と一緒にリビングにおる。

「問題は仮面の男よね……」

「姉ちゃんとシャルンとこに来たんだっけ？」

「複数……少なくとも二人以上はいる可能性があるな」

でも二人いつぺんに出てくるなんて…
まあ、シヤマルは原作通りクロノに見つかってもうたし。
しかしうちの助けに入るなんて…
いや、あの時期だと捕まるのはマズいし当然かもしれへん。

「少なくとも当面の敵ではなさそうだけど…」

「だが警戒しておいた方が良い」

「最近変なやつがいなくなってきたと思ったらこれかよ…」

やっぱりA・sもだいぶ進み、転生者達も介入を諦めてきたのか最近
は転生者が現れなくなつた。

まあA・sから介入するならばやてかヴォルケンリッターと関わり
を持つしかないし。

流石にこのタイミングで介入するのはそうそういないやろ。

つて、A・s終わつてからが大変や。

空白期が長い分、介入したり原作キャラと関わる時間は沢山あるし…

まあ今は目の前の事をどうにかしなきゃあかん。

「それに管理局の連中もますます本腰を入れてくるだろうな」

「せやな、けどあまり時間も無いし、急がなあかん」

そうは言っただけど、やっぱり一番の問題はグレアムと猫姉妹や。

とにかくヴォルケンリッターが蒐集されて消されるのは、あの場で猫姉妹を倒して防がなあかん。
一応皆にも聞いたんやけど、ヴォルケンリッターの蒐集は最後の手段らしい。

当然や。

蒐集しても問題が無いなら、原作でも自分達を真っ先に蒐集しとるはず。

そんでうちなりに計画を建ててみた。

計画はこうや。

まずクリスマスイヴまでは原作通りにやる。

イヴの日は問答無用で戦わずにまずは話しを聞く事にしよう。
戦ってたら猫姉妹に不意打ちされやすそうやし。

完成だけでは助けられへんのを知っとるって言ったって不自然や。
だから向こうの話しを聞きながらザフィーラを呼びつつ警戒。
後は猫姉妹を全員で撃退。

タイミングが良ければクロノも介入するからなお楽になるかも。

あとは向こうの言う通り、闇の書の完成だけでははやてを助けるのは不可能なのを受け入れて主人公組と協力しつつ最後にははやてを説得し、防御プログラムを切り離して原作通りフルボッコ。

うん。そんなもんやな。

はやてを下手に刺激しなければ、原作より意識を戻しやすそうやいな。

とにかく猫姉妹を倒さなあかん。

うちがボロ雑巾…最悪、殺されるかもしれへんし。

…いや、殺される可能性の方が高い。

ギル・グレアムは実際悪い人やない。

封印が終わったら、うちに全部話すだろう。

そうしたらうちじゃなくても当然怒る。場合によっては殺すかもしれへん。

猫姉妹にとってはグレアムの死は自分達の消滅やし、グレアムは二人にとっても大切な人。

なんとしても阻止するはずや。

…あかん、防御プログラムよりこっちがラスボスやな。

どさくさに紛れて殺されるなんてごめんや。

弱気になったらあかん。

せや、返り討ちにしたる！

覚悟しい猫め！

こっちは人数で勝つとるんや！

数の暴力をなめんな！

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

マンションに戻った俺達はエイミーさんからデバイスについて簡単に説明してもらった。

どうやらレイジングハートとバルディッシュは、カートリッジ以外にも強化形態が追加されたらしい。

ギフト？そんなもんねえよ。

べ、別に羨ましくないからな！

ごめんなさい。羨ましいです。

それはとりあえず置いて、今度はあの守護騎士達について話し出した。

「問題は、彼らの目的よね」

「ええ、どうも腑に落ちません。彼らは…主の指示だけでなく、自分たちの意思でも完成を目指しているようにも見えますし」

「それっておかしいのか？」

「そうだよ。闇の書も、要はジュエルシードみたいにつごい力の欲しい人が集めるものなんでしょ？主のためにあの子たちが頑張るのもおかしくないと思うんだけど…」

俺の意見に賛同するようにアルフが話しを続けた。

主の為に働く。ごく普通だと思うんだが。

するとクロノとリンディさんは少し顔を見合わせた。

「第一、闇の書はジュエルシードのように制御ができるようなものじゃないんだ」

「完成前も完成後も破壊にしか使えない…少なくとも、それ以外に使われたという記録は、これまで一度もなかったわ」

「あ、そっか…」

…なんじゃそりゃ。

かなりヤバイ代物じゃん。

「それからもうひとつ。あの騎士たち…闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でもなければ使い魔でもない」

その言葉にフェイトが反応する。

「闇の書に合わせて魔法技術で造られた疑似人格。闇の書の主の命令にただ従う…それだけの存在のはずなんだ」

疑似人格…

ようするに魔法製ロボットみたいなやつか？

なんだかなんでもありだな…

「あの、使い魔でも人間でもない疑似生命と言っていると私みた…痛っ」

なんだかフェイトが余計な事を言いそうだったので、鼻に鉄鎖を飛ばした。

「こら。そんな事言うな」

「命…」

まったく…

「あなたは生まれ方が少し違うだけで、ちゃんと命を受けて生み出された、まぎれもない人間よ」

「検査の結果でも、確かにそう出ている。滅多なことを言うもんじやない」

「ごめんなさい…」

リンディとクロノの言葉にフェイトがシュンとする。

「しかし以外だったな。命も何かしら反応するかと思ったんだが」

クロノが苦笑いしながら俺の方を向く。

「まあな。両親が女性だって事以外は、普通だし。普通に母さんの腹から生まれて、普通に年をとって…。リゼンブラは身体能力やアキタイプの特性以外はあんまり人間と変わらないし」

うじうじしたって変わらないしな。

「そつだよ。命君は…あれ？」

「命？私の聞き間違いだと思っただけど、今…」

「両親が女性って言わなかったか？」

全員が俺を見る。

……あら？

「言わなかったっけ？」

「……………聞いてないよ！」「……………」

見事にハモったな。

あとユーノ、耳元で騒ぐな。うるさい。肩から落とすぞ。

「え？美尋さんって…あれ？」

「女性同士の子供？馬鹿な…」

「えっと……アルフ、どういう事？」

「私にもさっぱり」

うわ。爆弾投下しちまったか？

「とりあえず、説明しようか？」

「今すぐ」

「説明してほしいの！」

なのはちゃん、顔が近い。

「えっと……周防比夜っていう俺の父さん、みたいな人なんだけど、その人の遺伝子を残すって話になって……それで母さんが立候補したんだ」

「それでも非常識でしょ……」

「改造人間とかクローンとか色々あったんだし……そんなくらいで来たんじゃない？」

「でもなんで美尋さんは立候補したんだろ？」

「母さんにとって大切な人だったみたい」

「親友だったんだ……」

…同性愛じみた感情があったのは黙っておこう。
母さんの立場が危ういし。

てか…俺が一人で神の視点が使えるのって、その時になんかされた
からか？

そうなるとネオ・エクステンドは？

なんか無理っぽいな…

「命君の事はそのへんにしといて、本題に戻ろっ」

「そうね。エイミー、モニターをお願い」

「了解です」

エイミーさんがモニターを操作するとヴォルケンリッター四人組と
つばさが映し出された。

「守護騎士達は闇の書に内蔵されたプログラムが人の形を取ったも
の、この4人は闇の書と共に転生を繰り返して様々な主の下を渡り
歩いている」

「意思疎通の対話能力は過去の事件でも確認されてるんだけどね。
感情を見せたって例は今までに無いの」

「でも、あの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりして
たし」

「シグナムからも、はっきり人格を感じました。成すべき事がある
って、仲間と、主の為だって」

「主の為、か…」

つばさ…じゃなくて、妹のはやてらしいがな。

「そして彼女が…」

画面がシザーズに変身したつばさを映す。

「彼女の目的も不明だ。おそらく君達とたいして変わらない年頃だろっ」

「そうね。この子が本当に闇の書の主かどうかも疑わしいわ」

親に隠れてこんな事するのは難しいからな。

「だけどさ、こいつが主だって言ってるんだ。今はそれで考えるしかないんじゃないか？」

「…それもそうなんだけど。フェイトさんみたいな可能性もあるわ」

「彼女が強制されているのか。それとも自分の意思でか。はたまた本当に主なのか…考えたらきりがない」

うっ…正直、黙ってるのが辛い。

つばさも闇の書がヤバイって知ってるはずなんだがな…

「まあ、それについては捜査に当たってる局員からの情報を待ちましようか」

「転移頻度から見ても、主がこの辺りにいるのはほぼ確定ですし…」

案外、主が先に見つかるかもしれません」

「同じ位の年頃だし…。もしかして同じ学校の子だったりして」

その通りですよなのはちゃん。

「それにしても、闇の書についてももう少し詳しいデータが欲しいな」

するとクロノは俺の肩に止まるユーノに目をつける。

「ユーノ、早速明日から。頼みたいことがある」

「え？いいけど…」

…何をやらせるんだか。

第四十九話 それぞれの思惑（後書き）

つばさ「結局揉んだんか？」

はやて「ノーコメントや」

第五十話 三度目の正直（前書き）

やっぱり一度くらいはぶっ飛ばします

第五十話 三度目の正直

（命SIDE）

あの後ユーノはクロノに連れられ、無限書庫とかいう場所に闇の書について調べに行った。

おかげでただでさえ少ない男がいなくなり、少し肩身が狭い。

そこで、現在ハラオウン邸。

エイミーさんが買い物袋を提げて帰って来た。

「艦長、もう本局に出掛けちゃった？」

台所で買って来た品物を俺に渡しながらフェイトに尋ねた。

「うん。アースラの武装追加が済んだから、試験航行だって、アレツクス達と」

「武装ってーと……アルカンシエルかぁ。あんな物騒な物、最後まで使わずに済めば良いんだけど……」

そんなに危ないもんなのか？アルカンシエルって。

アースラみたいな戦艦に付ける位だから、相当な代物だろうな。

「クロノ君もいなくて……エイミーさんが指揮代行だそうですね」

「責任重大」

アルフ、お前も肉食ってないで少し手伝え。

「はは…それもまた物騒な。ま、非常事態なんて…早々起こるわけが…」

おい馬鹿、それはフラグだ。

エイミーさんがカボチャを手に取る。

その瞬間、部屋中にアラートが鳴り響き、目の前には『Emergency』と赤い文字が表示された。

カボチャが床に転がり落ちる。

「起きたな」

「起きたね」

「エイミー…」

「運が悪いねえ」

「うつつ…」

微妙に涙目だったが、いつまでもボサつとしていられないので、急いでモニター室に行き、エイミーさんがモニターを操作するとモニター画面には女剣士のシグナムと、犬耳の男のザフィーラの姿があった。

「文化レベルゼロ。人間の住んでない、砂漠の世界だね…」

映像から二人は話してるようだが、音声が無いめ内容はわからない。

「結界を張れる局員の集合まで、最速で四十五分…ああ…まずいなあ…」

エイミーさんはモニターを操作しながらあれこれと頭を悩ませてるようだった。

「…エイミー、私が行くよ」

「私もだ」

「…うん、お願い。なのはちゃんと命君はボックス、ここで待機して」

「はい」

「了解」

決まりだな。

そしてフェイトとアルフが転移し、それぞれが戦闘を開始すると、またアラートが鳴り響いた。

「な…もう一ヶ所？」

エイミーさんがモニターを操作すると、モニター画面にまた別の世界でドラッグブラッカーの背にまたがったヴィータの姿が映される。そして、彼女の手には闇の書が握られていた。

「本命はこっち！？」

つばさはいないか。
ただど一人でどうにかできる相手じゃない。

「エイミーさん。俺達が行く」

「近くに主の子がいるかもしれないし。私達が！」

「うん。お願い！」

〈SIDE OUT〉

〈ヴィータSIDE〉

ドラの背中に乗るのは初めてだ。

正直乗り心地はあんまし良くねえけど。

シグナムの言う通り立った方が良かったかも。

そうしているとシャマルから思念通話が来た。

「シグナム達が？」

どうやらあの管理局の連中に見つかったらしい。

「うん、砂漠で交戦してるの、テストロッサちゃんとその守護獣の子と」

「…長引くとまずいな、助けに行くか…」

「ヴィータ！」

ドラが急に移動を止める。

前を見ると白い魔導師、高町なんとかと、魔法陣の上に立つ虫みてえなやつがいた。

「ヴィータちゃん？ドラ君？」

「くそ、こっちにも来た」

やるしかねえか。

「高町なんとか！」

高町なんとかと虫野郎がズッコケる。

「ありゃ…なのはだつてば！なの、は！」

「人の名前くらい覚えるよ…」

言いくいんだから仕方ねえだろ。

「ヴィータちゃん、やっぱり、お話聞かせてもらっわけにはいかない？もしかしたらだけど、手伝えることとか…あるかもしれないよ」
その笑顔が一瞬はやてと被る。

くっ…余計な事は考えちゃ駄目だ。

「うるせえ！管理局の人間の言うことなんざ信用できるか！」

「私、管理局の人じゃないもの、民間協力者」

「ついでに俺もな」

「似タヨウナモノデハナイカ」

さて、どうすっかな…

闇の書の蒐集は、魔導師一人につき一回。つまり、高町なんかはとにかく、この虫野郎を倒しても頁にはなんねえんだよな。

一対一にしても簡単にはいかねえし、カートリッジの無駄遣いも避けたい…

「ヴィータ。ココハ引クゾ」

「あたしら二人でやれない事は無いだろ？」

「ダガ時間ガカカル。増援ガ来テ、マタ結界ニ捕マツタラマズイ」

たしかに…。負ける事は無いだろうけど、結界を張られたらマズイ。本当の狙いはシグナムで、こいつらは困って可能性もある。

せっかくデカイ獲物だけど、仕方ねえ。

「ぶっ倒すのはまた今度だ！ 吼えろ、グラーフアイゼン！」

『Eisen geheul』

辺りに爆音と閃光があふれる。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

なんだ今のは？

まるでスタングレネードだな。

視界が戻った時にはかなり遠くまで行ってしまった。

やば。あの距離じゃあ追いかけてる間に転移されるな。

「命君、スパイラルコーンをお願い！」

そうやってなのはちゃんはレイジングハートを構える。

なるほど。狙撃すんのか。

なのはちゃんなら攻撃も届く。

「外さないでよ」

なのはちゃんの前に薄紫色の円錐が現れた。

『Buster mode・Drive ignition』

「行くよ、久しぶりの長距離砲撃！」

『Load Cartridge』

向こうのヴィータも驚いている。

流石にこの距離で攻撃してくるのは予想外なんだろう。

『Divine buster・Extension』

「デイベイイイン：バスターアアアアアア！！！」

なのはちゃんの放った砲撃はスパイラルコーンを通過し、圧倒的な破壊力を得て直進する。

「え？」

その威力になのはちゃんも思考が停止する。

そしてディバインバスターは、体長数メートルはあるドラグブラスカーもろとも飲み込み、空を桜色に染め上げる。

「……………」

うわぁ…

『直撃ですね』

「あきらかにオーバーキルだろ…」

スターライトブレイカーと同等かそれ以上だぞ。やりすぎなんてレベルじゃないな。

「私が言うのもなんだけど、大丈夫かな？」

『通常のオルタ・フィールドで十分でしたね。もし、この威力で殺傷設定なら骨も残らなかったかと』

「ええ!?!」

「うわ…」

さっさと恐ろしい事言っなよ。

「ただど下に落ちるのは見えなかったから、耐えたのか?」
プロヴィデンス・ビュー発動。

…おいおい。またお前かよ。

煙が晴れそこにいたのは、ヴィータとドラグブラッカーを庇うように立ち塞がる仮面の男だった。

だが流石にさっきのデイバインバスターは防ぎきれなかったのか、仮面にヒビが入り、満身創痍で気合いて立ってるようだ。

しかも完全に守りきれなかったらしく、ヴィータ達もボロボロだし。

「まさか……これ程とは……」

「ヴィータ！シツカリシロ！」

「ぐ……。なんだよ……。今の……。化け物か？」

どうしてだろ……。仮面の男がちっともかわいそうと思わない。前回やられたからか？

「本当にやりすぎちゃったかも……」

「とりあえず捕まえようぜ」

「えっと……まあ……そ……っ!？」

「なっ!？」

いつの間にか俺達にバインドが掛けられていた。

まさか!？あの野郎!

「ハア……ハア……長くは持たん。……すぐに……転移しろ……」

「うるせー。言われなくてもわかってる」

俺が尾でバインドを破壊している間に、あいつらは転移してしまっ
た。

「逃げられたか」

「グイータちゃん、大丈夫かな？」

「まあ大丈夫だろ」

しかし馬鹿みたいな破壊力だったな。

「とりあえず戻るか」

「そうだね」

とりあえず今回は仮面野郎をぶちのめせたからよしとするか。
そっぴやフェイトとアルフは大丈夫だろうか？

第五十話 三度目の正直（後書き）

つばさ「猫さまあ」

命「スターライトブレイカーに使ったら……恐ろしいな」

第五十一話 浸蝕（前書き）

そろそろ後半です

第五十一話 浸蝕

〔命SIDE〕

現在アースラの会議室。

何故俺達がそこにいるかというところ…

「フェイトさんはリンカーコアに酷いダメージを受けてるけど、命に別状はないそうよ」

「俺やクロノの時と同じように、闇の書にやられたんだ…」

そう。フェイトがやられたのだ。

しかももう一人の仮面野郎まで現れて。

正直、俺もなのはちゃんも動揺が隠せない。

「アースラの稼働中でよかった。命の時以上に救援が早かったから、幸いすぐにアースラに搬送され手当されたため、クロノと同じく大事にはいたらなかったらしい。」

「皆が出動してしばらくして、駐屯所の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって、それで指揮や連絡が取れなくて…ごめんね、あたしの責任だ」

てかハッキングされたんだ。

「んなこたないよ。エイミーがすぐシステムを復旧させたからア―

スラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だつてちゃんと残せた」
フエイトのリンカーコアを取り出す仮面野郎となのはちゃんのディ
バインバスターでボロボロになったやつ映像が映し出しされる。
ちなみに今の映像を出したのはグラム提督の使い魔のリーゼロッ
テとかいうやつだ。
あとリーゼアリアっていう双子の姉妹がいるが、今は用事でいない。
ついでに二人はクロノの師匠なんだと。

つて事は強いのか？

「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っているものと同
じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんて
いるものなのかしら」

リンディさんの疑問はもつともだ。つて事は…

「なあ、管理局員ならできるんじゃないか？」

「たしかに可能だけどありえないわ」

「なんでです？」

「勿論、局員は全員潔白とは言えないけど、闇の書を完成させても
なんの得にもならないのよ」

「そついや制御ができないんだっけ」

「そついう事だ」

ならなおさらわからんな。

「それに君の方から聞いた話も、状況や関係がよく分からないな」

クロノの言葉にアルフが頷く。

「あたしが駆けつけた時にはもう仮面の男は居なかった。けどあいつが…シグナムがフェイトを抱きかかえて、言い訳は出来ないが、すまないと伝えてくれた」

少し考えたような顔して、リンディさんが立ち上がった。

「アレックス！アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

「では予定より少し早いです。司令部をアースラに戻します。各員は所定の位置に」

「」「はい」「」

「それとなのはさんと命君はお家に戻らないとね」

「あ、はい…でも…」

「あの…」

ぶっちゃけフェイトが心配なのだ。

なのはちゃんも凄く気になるらしいし。

「フェイトさんの事なら大丈夫…私達でちゃんと見ておくから」

「……はい」

「わかりました…」

まあ俺達は医者ではないし、やれる事なんかないか…
非常に歯痒が仕方ない。
ここはリンデイさん達に任せるか。

〈SIDE OUT〉

〈SIDE SHED〉

どうやら昨日はフェイトの蒐集を無事に終えたらしい。
これで闇の書の頁の大きな変動はクリアや。
ちなみになのはの蒐集も失敗らしいし。

てかヴィータから聞いた話しやと、猫のやつはなのはの砲撃を防ぎ
きれへんかったらしい。

理由はわからへんが、ざまあ。

「助けてもらったってことでいいのよね…？」

「少なくとも奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

「完成した闇の書を利用してしようとしているかもしれんな…」

完成させてはやてごと封印。

よくもまあこんな事を思いつくもんやな。

「ありえねえ！だって完成した闇の書を奪ったってマスター以外に
は使えないじゃん！」

「使えないなら意味はあらへんな」

「完成した時点で主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果がある
はずもないしな」

「うん…まあ、家の周りには嚴重のセキュリティを張ってるし。
万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶことはないと思うけど…」

「念のためだ、シャマルはなるべく主の傍を離れんほうがいいな」

「うん」

「それと姉上も蒐集は私達に任せて、シャマルと主の傍にいてください」

「……わかったわ。そっちには飛べるドラを手伝わせる」

「ドウセ俺八飛べネーヨ……」

テレビから愚痴が聞こえた気がするけど、気のせいやる。

「ねえ、やっぱり闇の書を完成させてさ……はやてが本当のマスターになってさ……それではやては幸せになれるんだよね？」

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私たちが、それを誰より知ってるはずでしょ？」

「そうなんだよ……そうなんだけどさ……あたしは何か、何か大事なことを忘れてる気がするんだ」

悪意ある改変の事やな。

完成させても暴走するだけ……

ほんま何考えとるんや？

厨二病にでもなったんか？

馬鹿なの？ありえへんやる。

だが上から聞こえた物音にハッとする。

まさか…！

「寝室の方や！」

急いで部屋に駆け込む。

「はやて！？」

「しっかり！」

中に入るとはやてが苦しそくに胸を抑えとる。

やっぱり！

「病院！救急車！」

「ああ！」

「動かしたらあかん！そっとしておいた方がええ！」

「う、うん」

時間は、刻々と迫ってきてとる。

はやての人生の分岐点が近い。

うちと命の存在がある限り、絶対原作通りに行くとは限らんけど、やれる事をやらなあかん。

「うん、大丈夫みたいね。よかった」

「はい、ありがとうございます」

病院に着きどうにか落ち着きを取り戻したようだ。

「はあ…ほっとしました」

「だから、ちよう眩暈がして胸と手えが攣っただけ言っただやん。もう…みんな大事にするんやから」

「本気で心配したんだよ」

「でも、頭打ってたようですし…」

「何かあつては大変ですから」

「はやて、よかった」

はやてがヴィータを撫でる。

「まあ、来たついでに検査とかもしたいから少しゆっくりしていい

てね？」

「はあい」

はやてがあんまり気乗りじゃないみたいだ。

「さて、シャマルさん、シグナムさん…ちょっと」

「はい」

「ん？」

シグナムとシャマルが石田先生と病室から出ていき、しばらくすると二人が病室に入ってきた。

そしてはやての入院が告げられた。

「入院？」

「ええ…そうなんです」

「……」

はやてとヴィータが不安そうな顔をした。

普通入院って聞いたら不安になわな。

「でも検査とか、念のためとかですから心配ないですよ。ね？」

「はい」

シグナムが花瓶を飾る。

「進んどるんか？」

「…はい」

ちい…

「家の方はうちがおるから。今はゆっくり休み」

「じゃあ お言葉に甘えて、私は三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ。あ、お姉ちゃん。すずかちゃんの事、お願いな？」

「わかつとるって」

「では戻って着替えと本を持ってきます。ご希望がありましたら」

「うん。何でもええよ」

「んじゃあはやて、また来るからな」

「あ、うちはもう少しおるわ」

「では荷物を取りに行きます」

三人が病室から出ていく。

「……お姉ちゃん」

「なんや？」

ベットに座るとはやてが抱き着いてきた。
その身体はわずかに震えとる。

「辛いんやな？」

「……………うん」

はやての頭を撫でながら抱きしめる。

「大丈夫。うちはここにおるよ」

「お姉ちゃん…お姉ちゃん！」

身体の痛みを誤魔化すようにうちに縋り付く。

ごめんな、はやて。

でももう少ししゃ。あと少しで…

第五十一話 浸蝕（後書き）

つばさ「むが〜！〜！！」

命「落ち着けよ…」

第五十二話 終焉への足音（前書き）

今回短いです

第五十二話 終焉への足音

（命SIDE）

どうやらつばさの妹のはやてが入院したらしい。

しかしつばさのやつ、そんな事とを言っただ大丈夫なのか？

絶対なのはちゃん達は見舞いに行くぞ。病室でバツタリなんて洒落にならん。

だけどその辺りもわかってるはずだし、隠すのも不自然だ。多分そろそろばれる時期なんだろう。

だとしたら決戦は近いはず。

つばさは今まで必死にやってきた。助けられると良いな。

そっぴやグラム提督ってなんなんだろ。

闇の書を封印したいんだから、そろそろ本格的に登場すんのか？もしかしてあの人の協力ではやてを助けられたのだろうか？

まあ考えても仕方ない。余計な事したら何が起きるかわからんし。

そして放課後、俺達全員ははやてのお見舞いに来た。

「はやて、入るで？」

「お姉ちゃん？ええよ」

皆で病室に入る。

「」「」「」「こんにちは」「」「」

「おじゃまします」

「こんにちは！いらっしやい！」

「おじゃまします。はやてちゃん大丈夫？」

「うん。平気や…あ、皆座って」

「コートはこつちや」

そんな感じで俺達のお見舞いが始まった。

「へえ…君が命君？」

「そうだけど…」

自己紹介をしていたら、急に俺の方をジロジロと見出した。

「…ええか。お姉ちゃんは簡単には渡さへんで。わかっとなるんか？」

……はあ？

「はやてちゃん、だから違っつて…」

…なるほど。
俺とつばさの関係を誤解してんのか。

「安心しろ。つばさにそういった感情は無いから」

「なんやて！？お姉ちゃんに魅力が無いっちゆうんかい！ちょっと表に出んかい電信柱！」

面倒くせeeeeee。

じゃあどう答えると？

「おい、どうにかしろ。お前の妹だろ」

ギャーギャー喚くはやてを無視してつばさに助けを求める。

「大丈夫や。斜め四十五度から叩けば直るで」

「壊れたテレビか？」

「冗談はさておき。はやて落ち着き。はやとちりしすぎや」

そう言いながらはやてを抱きしめる。

「ムム…。まあ、お姉ちゃんのおっぱいに免じて、今日の所はこれ位で勘弁したるわ」

「しら」

なのはちゃん達が苦笑いしているが、そんなのをお構い無しにつばさに抱き着く。

よくわからんやつだ。

そんなこんなで守護騎士達とも遭遇せず、俺達のお見舞いは終わった。

くSIDE OUTく

くつばさSIDEく

皆が帰ってもうちは病室に残った。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「大丈夫や」

うちは疲れてはやての膝に寝転がってる。

魔法関係を隠しながら会うのは、やっぱり心臓に悪い。
しかもあと少しなのだから余計にや。

「ほんま神経質になりすぎとちゃう?」

「警戒しといて損は無いと思うで」

というより現在進行形で敵対してるし。
命とフェイトは蒐集までしてもうたし。

「まあ皆にも気をつけるよう言っとくわ。何が起きるかわからへん
し」

「ん〜。なんか嫌やなあ。隠し事してるのって」

ごめんな。バリバリ隠れて蒐集しとります。
完成も近いです。

しかしなんやかんやであと数日なんやな。
ここさえ乗り越えればだいぶ落ち着く。

空白期やStrikersから介入しようとして他の転生者達が襲
い掛かってくるだろうが…まあ、なんとかなるやろ。
それに敵ばかりやないはずや。そういつた連中も探さなあかな。
スカリエッティに付こうとする転生者も少なくないはずやし。
てか命のやつは気をつけさせた方がええんとちゃうか? 改造人間ら
しいし…

その辺はA・sが終わってからやな。
そう…あと少し。あと少しなんや。
覚悟しい猫姉妹。あんたらの思い通りにはいかへん。
原作とは違い、暴れさせはせんぞ。

〈SIDE OUT〉

〈命SIDE〉

ユーノから無限書庫でわかった闇の書についての事を聞いた。
所有者の侵食に外部から操作不可能？どんな呪いの魔導書だよ。
てかこんなんどうやって解決したんだ？
完成させてもさせなくても助けられるかどうか怪しい。

本当に原作では助けられたのか？

いや、前に攻めて来た転生者の中に【はやては渡さん】って言うてた奴がいたから、助けられたのだろう。

駄目ならつばさも原作通りなんて言ったりはしない。

闇の書を破壊するのかどうかもわかんし。

そして話しが変わるが、来たる十二月二十四日。そう、クリスマス・イヴだ。

その日にはやてにサプライズパーティーをやるって事になった。

ちなみにつばさにも内緒にしている。

まああつちが原作を知ってるから、こっちの行動はだいたいわかってるだろうし。

発案者がすずかとアリサだから、原作でもやってた可能性がある。

だから大丈夫だろう。

〈SIDE OUT〉

くつばさSIDEく

十二月二十四日。クリスマス・イブ。

今日は全員ではやてのお見舞いや。

闇の書の頁もあと五十頁。

いよいよやな。

今日、もうじき命達が来る。

うちには話したらへんかったけど、確実にサプライズ・パーティーをするはずや。

「はやて…ごめんね。あまり会いにいけなくて」

「ううん、元気やったか？」

はやてはヴィータの頭を撫でる。

「めっちゃめっちゃ元気！」

ヴィータは嬉しそうにはやてに言った。

不意にドアがノックされる。

「どつぞ」

「「「「こんにちは！」「」「」

「おじゃまします」

来た！

いつもの五人。

すずか、アリサに続き、なのは、フェイト、命が入って来た。

「「「っ！？」「」

「…あっ！」

「…はっ！」

「げっ！」

思わず立ち止まる三人。

ついにその時が来た。

闇の書事件、最期の夜。

はやての命運…そして闇の書の闇との決戦が始まる。

第五十二話 終焉への足音（後書き）

つばさ「妹を助けるため、ただひたすら戦った」

命「妹を助けて。彼女の言葉を信じ続けた」

つばさ「自分の知る物語の結末へと向かう為、そしてより良い方向へと進む為に……せやけど、それを壊したのは他でも無い、うちの存在だった」

命「次回、魔法少女リリカルなのはEX！、第五十三話 絶望へ」

つばさ「言っな…言っな言っなあああ！…！」

第五十三話 絶望へ（前書き）

闇の書完成

第五十三話 絶望へ

くつばさSIDEく

部屋に入った瞬間、時間が止まったような…とにかく空気が凍りついた。

「あ、すみません…お邪魔でした？」

「あ、いえ…」

「いらっしやいみなさん」

シグナムとシャルマルが軽く挨拶する。

「なんだ、よかった…。えっと、こちらの方々は？」

「外国の親戚や。ところで、皆今日はどないしたん？今日来るなんて聞いとらへんで」

とりあえずうちが皆に説明する。

ぶっちゃけ、聞かされてなくて助かったわ。

聞いてたら皆にも話さなあかんし。そんな事してうちらだけで猫姉妹を相手にするのは危険や。

すると、すずかとアリサが笑顔で頷く。

「「セーの！」」

二人人手に架けたコートを退かすと、手にはプレゼントらしき箱があった。

「「サプライズプレゼント！」」

「今日はイブだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「ほんま？ありがとうございます！」

はやてが箱を受け取る。

「皆で選んできたんだよ」

「後で開けてみてね」

「うん」

はやても嬉しそうや。

「ああ、みんな…コートを預かるわ」

シヤマルが皆の傍に歩み寄ってコートを預かり、クローゼットの中にかける。

「念話が使えない…通信妨害を？」

「シヤマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら造作もない」

シグナムはフェイトのコートを受け取りながら答える。

「どの道、このまま帰す訳が無いんだろ？」

「勿論や。逃がさへんからな」

「……ちっ」

舌打ちしながら命もコートをシャルマルに渡す。

「………」

そしてヴィータはなのはをじっと睨んどった。

「えっと…そんなに、睨まないで？」

「睨んでねーです。こっぴつ目つきなんです」

「ヴィータ、嘘はあかん。なんや悪い子はこっぴつやで」

はやてがヴィータの鼻をつまんで上下左右に動かす。

二人ともヴィータの様子に呆然としとった。

「…お見舞い…してもいいですか？」

「………ああ………」

～SIDE OUT～

～命SIDE～

とあるビルの上。

俺達はつばさ達と対峙している。

「はやくちゃんが…闇の書の主…」

「さて…このままさよならって訳にもいかへん」

つばさがコートから金属片を撒き散らす。

どれも磨いてあるのか、少し光っている。

ミラーモンスターの出入口か。

そして手鏡にデッキをかざし、Vバックルを装着する。

「変身！」

そして仮面ライダーシザースに変身した。

「つばさちゃん…」

「…っ！」

「やっぱりこうなるか。変身！」
エクステンド

俺も変身する。

「悲願はあと少しで叶う…」

「もし邪魔をするなら…はやてちゃんの友達でも…」

向こうも容赦無しってか？

しかしつばさのやつ、さっきから落ち着きがない。
まるで辺りを警戒しているような…

「待って！ダメなの！闇の書が完成したらはやてちゃんが！」

「はあ！」

なのはちゃん呼びかけを無視し、ヴィータが襲い掛かる。

「ヴィータ、止めい！」

「っ！？」

つばさがそれを制止した。

ん？何故止めた？

「姉ちゃん？なんで止めんだよ！」

「姉上、彼女達をこのままにしておく訳には…」

「…ちょっと気になる事があるんや。なのは、今なんて言った？」

「闇の書を完成させたら、はやてちゃんは暴走して…」

「この辺一帯をぶっ壊して死ぬ」

そう、今までの主達と同じように…

「馬鹿な！」

「はやてちゃんは闇の書に侵食されているの。だから助けるには闇の書を完成させないと！」

「てめえら適当な事言ってるじゃねえ！」

守護騎士達は一斉にデバイスを向ける。

やっぱ聞いちゃくれねえか。

「…ほんまなんか？」

「つばさちゃん？」

「信じるのかよ！？」

「ちょっとおかしいと思っと思ったんや。シグナム、今までの主は一人や二人やないんやろ？」

「…はい」

シグナムが静かに頷く。

「闇の書が完成したら主は強大な力を得る。せやから少なくとも他殺はありえへん。寿命だとしても数十年はかかる。…時間が合わへん」

「闇の書は、悪意ある改変を受けて壊れてしまっている。だから！」

「このままじゃはやては助からないんだ」

「いい加減にしろ！だったら我々も気付くはずだ！」

「逆やシグナム。ほんまに改変されとるなら、その影響はヴォルケンリッターも受ける」

「…まさか……」

「じゃあ、あたし達がやってた事って……」

「全く無意味だったの？」

騎士達全員が呆然としている。

「とにかく落ち着いて話しを……っ！」

「え？」

「な？」

突如俺達全員にバインドが架けられる。

まさか！

「やっぱり来た。バイオグリーザ！」

「ギユア！」

つばさの掛け声でバイオグリーザが姿を現し、見えない何かに飛び掛かった。

そしてそこから仮面の男が現れた。

「こいつ！」

「まさか本当に姉上の言う通りとは……」

「せやろ？ボルボル、ドラ！」

続けて散らばった金属片から、ボルキャンサーとドラグブラッカーが現れた。

どうやら仮面の男と戦うようだ。なら！

神の視点を発動しバインドを視る。

動いてるものはまだ狙えないが、止まってるのなら！

それに物質の分子構造の脆い所を狙えるなら、魔力もできるはず。

「そこだ！」

尾の先端から飛び出た針を押し付け、そのままバインドを引き裂く。

そして脱出した俺は連結を解除した剣を仮面の男目掛け振るった。

「ちい！」

仮面の男はシールドで弾き、俺達から離れる。

「とりあえずお前らもとつちめなきやいけないんでな。つばさ達も
てめえと敵対するなら協力するまでだ」

「…フツ。一つ忘れていないか？私は一人ではないぞ」

…あっ！

「キャツ!?!」

「全員動くな！」

「なのはちゃん！」

「なのは！」

突如現れたもう一人の仮面の男が、手刀をなのはちゃんの首筋に突き付ける。

人質！

ミラーモンスター達も動きを止める。

「なっ……」

「……スキあり」

仮面の男はカードを三枚取り出し、それを使って俺とミラーモンスターにバインドを架けた。
今度はご丁寧にも尾も固定されてる。

「畜生！なんなんだよお前ら！」

「この人数だとバインドも通信妨害も長くは持たない。早く頼む。」

「ああ」

無視かよ！

そう言うと仮面の男の手に闇の書が現れた。

「そんな、いつのまに！」

仮面の男が、闇の書を発動させる。

「うっ……あああああああ！！」

「あ、あ……ああ……あ……あああああ！」

「ぐっ……う……ああ……がああああああ！」

すると、守護騎士たちのリンカーコアが体の外に出てきた。

まさか……

「あんたら……止めい！」

つばさも必死にもがき脱出しようとする。

「最後のページは、不要となった守護者自ら差し出す。これまでも、幾たびかそうだったはずだ。」

『Sammeln』

闇の書のページがめくれていき、そこに文字が浮かびあがると同時にシグナムとシャルルのリンカーコアが蒐集されていく。

「ぐっあああああ！」

「ああああああ！」

そしてンカーコアが萎縮すると同時に身体が希薄なものになって行き、最後には足元から消滅していった。

「き、消えた？」

「シグナム！シャルル！くそ！何なんだよてめえら！」

仮面の男はヴィータに狙いを定めた。

「ぐっ…ああああ！」

「プログラム風情が知る必要はない」

そしてヴィータも蒐集され始めた。

「だああああ！」

突如、上空からザフィーラが突っ込んできた。しかし、ザフィーラの拳も仮面の男のシールドに防がれる。

「そうか…もう一匹いたな」

「ぐう…く…く…がはああああ!？」

「ザフィーラ！」

「ぐ…うおおお！」

ザフィーラは蒐集されながらも、力を振り絞り仮面の男に殴り掛かるが、その拳は届かなかった。

（SIDE OUT）

くつばさSIDEく

結局原作通りになってしまった。

どこでどう間違えた？

あの時、バイオグリーザにうちのバインドを壊させれば良かったんか？

…どないしょ。

もう一つのクリスタルゲージには、ミラーモンスター達が拘束されている。

「四重のバインドにクリスタルゲージだ。抜け出すまで数分はかかる」

二人のそばには、まだ消えていないヴィータとザフィーラが倒れていた。

「闇の書の主の…目覚めの時だ」

「いや…因縁の終焉の時だ」

そして片方がうちの姿に変身する。

え？

「つばさちゃんに…変身した？」

「一体、なんの為に？」

…まさか、うちにやらせるつもりなんか？

仮面の男達は転移魔法を発動させ、はやてを連れて来た。

「えっ！ここは？…お姉ちゃん？」

そして倒れるヴィータとザフィーラを見つける。

「ヴィータ？ザフィーラ？お姉ちゃん、何が起きとるんや？」

「……………」

うちの偽者は視線をシグナムとシャマルの服に移す。

「え…シグナム？シャマル？お姉ちゃん、何がどうなっとるん！」

「ピーピーうっさいわ。たかが人間もどきが消えたくらいで」

「お姉…ちゃん？」

「ずっと我慢しとった。でももう終わりや。こんな化け物と暮らすのも、出来損ないとも」

待てや。何言うとるん？

「……………」

「ほんまうつとうしかつた。ずっと自由を奪われ、あなたの世話を続ける人生に」

「え？」

「なんや？私があんたの為にやっと思ったんか？世間体の為に決まっとるやろ。あんたの世話をせな周りから何言われるかわからへんからな！」

そう叫ぶと同時に二人は完全に蒐集され消滅する。

「この！止める！」

うちはひたすらもがく。

こいつら、なんちゅう事を！

「ヴィータ！ザフィーラ！…ああ！？」

そしてはやての髪を強引に引っ張り、自分に近づける。

「せやけどそれもおしまい。あの化け物は闇の書を完成させてあんたを助けるつもりらしいけど……そんな事はさせへん。これは私が貰う」

はやてを投げ捨てる。

「お姉ちゃん…嘘やろ?」

「これがあれば何だって出来る。今までの人生を取り戻してもお釣りが来るくらいや」

止めて…お願い…

「せやけどあんたがおる限りこれはうちの物にはならへん。せやけどうちが殺したら色々と面倒やから…」

止めて…それ以上は…

「言つな…言つな言つなあああ!…!」

脱出しようと思える。

あんたらはやてに何の恨みがある。どれだけはやてを傷付ければ気がすむんや。

「さつさとそこから飛び下りて死ねや。死に損ないのお邪魔虫」

「!…!」

最悪や。

家族を奪うだけでは飽き足らず、裏切られ拒絶される。

どんな神経していたらこんなえげつない事を思い付くんや…

するともう一人の仮面の男がうちの前に現れる。

第五十三話 絶望へ（後書き）

はやて「皆消えてまえ」

第五十四話 夜の足音（前書き）

一応スーパークロノタイムもあります

第五十四話 夜の足音

〔命SIDE〕

なんとか脱出した時にはすでにはやての姿が別人に変貌していた。長い銀髪、紅い瞳、黒い四枚の翼を生やした女性に。

それにつばさもぐったりとうなだれ、俺が捕まえなければ墜落してた。

「一体：幾度こんな悲しみを繰り返せばいい？」

彼女は涙を流しながら呟く。

「…はやてちゃん」

「…はやて」

「我は闇の書：我が力の全ては…」

彼女は俺を…いや、俺が担いでるつばさを睨みつける。

なんか嫌な予感。

「…主の願いをそのままに…愛おしき守護者達を傷つけ、貴女を裏切った者を…今、破壊します」

周囲に結界が展開され、闇の書が手を上に伸ばすと、そこから薄紫

の魔力刃が伸びた。

「紫水の刃よ、偽りの者を断ち切れ」

『R i d e r S l a s h .』

刃を振るうと俺のとは比べものにならない程巨大な毒の斬撃波が飛んできた。

俺「何かよ!？」

すぐさま跳びのき、近くの建物に伸ばした剣を突き刺し、そのまま身体を引き寄せて張り付いた。

「命君!」

「大丈夫?」

なのはちゃんとフェイトが飛んで来た。

「無事だ、つばさもな。しかし…」

見ると先程の斬撃波が直撃したビルが斜めに両断され、切り口がドロドロに溶けていた。

「なんだよ、俺とは大違いじゃないか…」

今のは俺が蒐集されたからだろう。
ただどあんな出鱈目な代物になるなんて…

「命、オルタ・フィールドの弱点とか無い？」

「いや、あれは魔法は関係無い。だからあいつが使つとは思えない」
あれもただ単に魔力が桁違いなだけ。

「少し安心。…つばさちゃん、大丈夫？」

「…なんで…どないして…」

話しができる状態じゃない…

「…スレイプニール、羽ばたいて」

『Sleipnir』

闇の書は飛び上がり俺達を見下ろす。

「オイ！ツバサ、シツカリシロ！」

「マダ救ウ手立テハアルハズダ！」

ドラグブラッカーとそいつにまたがつてるボルキャンサーが来た。

こいつらもようやく脱出したか。

「つばさを頼む」

「オウ」

ボルキャンサーにつばさを預け、新たに形成した足場に立つ。

「とりあえず俺達でどうにかしよう」

「うん」

「行くう」

今はそれしか無いからな。

「彼女を渡せ。邪魔をするならば…命は無い」

さっき俺ごとぶった切ろうとしたくせに、よく言っぜ。

「断る！」

「さっきのつばさちゃんは偽者なの！」

「全部誤解！だからこんな事は止めて！」

「……例えそうだとしても、私は主の願いを叶えるのみ」

聞く耳もたずか…

「だったら…力づくで止める！」

〈SIDE OUT〉

く????SIDEく

遠く離れた場所で私達はその様子を観察している。

「暴走開始の瞬間までは持ってほしいな。それに彼女もここで消えてもらわなければ…」

「暴走に巻き込まれるか、どさくさに紛れて一緒に封印するか…。
一番良いのは今この場で死んでくれる事だけだ」

あの娘さえ消えれば父様は助かる。

彼女に罪は無いが、父様を傷つける可能性がある以上、生かしてはおけない。

「なっ!?!?」

「くっ!?!?」

突如私達にバインドが架けられ、一人の少年が現れる。

「ストラグルバインド…相手を拘束しつつ強化魔法を無効化する…あまり使い所のない魔法、けどこういう時には役に立つ…」

クロノ!? どうしてここに…

「ぐわ!…クッ…」

そしてクロノがデバイスを地面に突き立てる。

マズい!

「変身魔法を強制的に解除するからね」

「ぐああああ!」

変身魔法が解除された…

「クロノ!このっ!」

「こんな魔法、教えてなかったんだがな…」

「一人でも精進しろと教えたのは君達だろう…アリア、ロツテ」

〈SIDE OUT〉

くクロノSIDEく

僕は本局で、捕らえた仮面の男…いや、アリアとロツテを連れ提督の元へ来た。

「見つけたんですね。闇の書の、永久封印の方法を」

「…両親に死なれ、身体を悪くしていたあの子を見て、心は痛んだが、運命だとも思った。悲しむ人は少なく、彼女の姉だけだ」

「あの子達の父の友人を語って、生活の援助をしていたのも、提督ですね？」

八神姉妹から提督に宛てられた手紙と写真をテーブルの上に置く。写真には八神姉妹と守護者たちが写っている。

「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった。施設へ行けば、離れ離れになる可能性が高い。姉妹二人、側にいさせ

ようと……偽善だな」

自嘲しながら提督は言う。

偽善……か……

「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間が氷結世界に閉じ込める……そんなところですね」

「そう。それならば、闇の書の転生機能は働かない」

「これまでの闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わらない」

「クロノ、今からでも遅くない。私達を解放して。凍結がかけられるのは、暴走が始まる瞬間の数分だけなんだ」

そしてそれまでの時間稼ぎに四人を。

「その時点ではまだ、闇の書の主は永久凍結をされるような犯罪者じゃない……違法だ。それに彼女の姉、八神つばさの命を奪って良い理由にならない。自らの手で肉親の殺めるなんて、させてはならない」

「なんだと?」

提督が目を見開き、アリアとロツテを見る。

どういう事だ? 提督の様子からして、彼女に危害を加えるつもりは無いのか?

だとしたら、あの時二人が言っていた事は…

「二人共、どういう事だ…？」

「そ、その…」

「私達にはなんとも…」

提督が机を叩き二人が強張る。

「優先して安全な場所に匿うよう言ったはずだ！」

「あの…結界を張られて…」

「完成してから結界を張るまで時間はあつただろう！お前達の実力ならば簡単だ！」

なるほど。どついう事かわかつたぞ。

「……で、でも！お父様はあの娘に全部話すつもりだったんでしょ？」

「そんな事したら、何しでかすかわからないよ！」

「そんな事は承知の上だ！……くっ」

頭を抱え座り込んだ。

「……復讐される事を望むのは、罪の意識から逃げるのと同じです」

「……」

「それともう一つ。提督のプランには問題があります。まず、凍結の解除は、そう難しくないはずです。どこに隠そうと、どんなに守ろうと、何時かは誰かが手にして使おうとする……怒りや悲しみ、欲望や切望、そんな願いが導いてしまふ。封じられた力へと」

闇の書の改変も、そういった負の心が原因だ。

そして僕は立ち上がり出口に向かう。

「現場が心配なので、すみません。一端失礼します」

「クロノ」

「はい」

「アリア、デュランダルを彼に」

「父様！」

「そんな！」

「黙れ」

「っ！」「」

提督が一睨みすると二人共口を塞ぎ、アリアは青色の宝石を湛えた銀色のカードを僕に渡した。

これがデュランダル…待機状態のデバイスか。

「どう使うかは君に任せる。氷結の杖デュランダルだ。それと、私が言えた義理では無いが、彼女を…助けてくれ」

提督の切り札…

「助けて出してみせます。【彼女達】を」

もう、悲劇は御免だ。

〈SIDE OUT〉

〈美尋SIDE〉

おかしい。

私は今異常な空間にいる。

見た事のある街がある。

中年夫婦が営む古い肉屋、セール中の服屋、最近できたばかりのコンビニ。

私の知る海鳴市だ。

だが一つだけ違う点がある。

人が全くいないのだ。

まるで人間だけが街からすっぽりと消えたように…

今夜はワインでも飲もうと桃子さんから頼まれ買い物に行ったらこ
れだ。

私は無意識に時空を越える能力でもあるのか？

「異世界の次は異空間か…。日記のネタが増えるのは嬉しいが、帰
れないのは困るな」

とりあえず辺りを探るか。

何か元の場所に戻る手段を見つけねば。

そして歩き出してすぐ、二人組の人影を見つけた。

「おい！ちよつと、そこの人！」

声を上げて走り出す。

「え？…って美尋さん!？」

「どうしてこんな所に…」

それは意外な人物だった。

命となのはの友人。アリサ・バニングスと月村すずかの二人だ。

「アリサ、すずか？」

「美尋さんも、もしかして…」

「ああ…：…いつの間にかここにいた。全く状況が把握できてない」

「やっぱり…」

この子達もか。

だが私以外にもこの空間に迷い込んだ人がいるなら、他にもいるかもしれない。

「二人共、私から離れるな。他にも人がいないか探しながら戻る方法を探す」

「はい」

「わかりました」

二人を連れて歩き出す。

しかし神の視点が使えないのは不便だ。

無いものねだりをしても仕方ない。

とにかく二人を無事に帰さなければならぬ。

何が起きるかもわからないから、いざという時はエクステンションもやむを得ないな。

そうだった事にならなければ良いが…

第五十四話 夜の足音（後書き）

命「立て！立つんだつばさ！」

つばさ「返事が無い。ただの屍のようや」

第五十五話 宿命（前書き）

A・Sは、多分あと三、四話くらいかも

第五十五話 宿命

（命SIDE）

「シャラアアア！」

「ハアアア！」

フェイトと同時に切り掛かる。
だがシールドに阻まれ通じない。

「二人ともどいて！」

なのはちゃんの声で跳びのく。
そして俺は先程展開した足場に伸ばした剣をからめぶら下がる。

『Divine buster, extension.』

それと同時に闇の書目掛け砲撃が放たれた。

「盾」

『Panzer schild.』

だがまたしても防がれる。

固いな。

だけど下手にスパイラルコーンとか使って失敗してもなあ…

「刃もて、血に染めよ」

『Blutiger dolch』

「穿て、ブラッディダガー」

血のように赤い無数の刃が迫る。

「うお!?!」

とっさに足場を消して落下し回避。
すぐさま新しい足場を形成する。

なのはちゃん達も防ぎきつたようだ。

「……時間をかける訳にはいかない」

『Photon lancer, genocide shift』

彼女の周囲に金色の魔力スフィアが浮かぶ。

フォトンランサー? フェイトの魔法…

「フェイトちゃん、あれって…」

「ファランクスシフトの応用型だよ。闇の書が私の魔法を自分に合った形に改変したんだ」

『おそらく広域拡散攻撃です』

「って事は…まとめてぶっ飛ばす気かよ!？」

拡散って事は、近づいて回避か離れて被弾を減らすかだな。

「溶ける…」

そしてスフィアが毒々しい色に変色していく。

「「「……………」」」

俺の変換素質を使ったんだ。

えっと、つまり…

「広域攻撃なんだよね…」

「…うん。それにあれ、溶解液の類いだよね…」

「…溶けるって言ってたしな」

俺達はお互いに顔を見合わし、もう一度彼女を見る。

スフィアの数がどんどん増えていってる。

「か、回避距離を…」

「離れたらなおさら避けられないよ!…」

「近づいたら集中攻撃を受けるぞ」

……「りゃあかん。

「」「……逃げよう！」「」

俺はなのはちゃんを掴み、速度強化のオルタを踏んで全力で走る。
フェイトも俺のすぐ隣で飛んでいる。

「とにかく距離を稼いで被弾数を減らそう！」

「「もつとも！お前らも逃げ！」

「オウ！ツテ俺達ジャツバサヲ守レルカワカンネエ！」

「バリア等ノ防御手段ガナイ。スマヌガツバサヲ頼ム」

「うん。つばさ、しっかり！」

「……はやて……「ごめんな……」

フェイトがつばさを受け取るが、相変わらずつばさはブツブツと……

ああもうお前までふさぎ込んでどうすんだよ！

お前が頼りなのに……

そして二匹はミラーワールドに避難した。

あいつらはこれで大丈夫か。

こっちもそろそろ……

『サー、左方向300ヤード、一般市民がいます』

は？一般市民？

「ちよつと待て。俺が確認する」

神の視点を発動し、バルディッシュの示した方向をみる。

「プロワイデンス・ビュー」

………は？

「命君？」

「どうしたの？」

「母さんにアリサとすずかだった…」

「「ええ！？」」

何故に？

てかこのままだとまずい！

「とにかく行こう。時間も無い」

「うん！」

「こつちだ！」

二人を連れて母さん達の所に走る。

〈SIDE OUT〉

〈美尋SIDE〉

あれから誰とも会わず、ただひたすら歩いていた。

「二人とも、大丈夫か？」

「はい」

「大丈夫です」

しかし何一つ情報が手に入らない。
空は相変わらずおかししいし、街も静まり返っている。

「美尋さん。あれ…」

「ん？」

すずかが指した方向に人影が見える。

しめた！

「おい！その人！」

二人を連れて駆け出す。

だんだん近づいていきそして…

「なのは…？」

「フェイト…ちゃん？」

そこにいたのは、機械のような杖を持ち学校の制服をファンシーにしたような格好をしたなのはと、マントに黒く金色の光りの刃をした鎌を持ちオレンジ色の鎧の…身長からして子供であろう人物を担いだフェイト・テストロッサ。

そして…

「命…」

左腕が銀色の装甲に包まれエクステンド形態に変身した息子がいた。

「母さん、ここは危ないからとりあえず……」

「まずい、来る！」

「フェイトちゃん！」

「うん！つばさをお願いします」

フェイトが頷くと鎧の子をなのはに預け、彼女の鎌の柄がスライドし、一瞬リボルバーのようなものが露出する。

「そこでじつとして！」

「あ、ああ……二人ともこっちに」

とりあえず二人を抱き寄せる。

『Defencer Plus』

私達の周りに金色のバリアのようなものが張られ、フェイトは目の前を魔法陣のようなものを盾のように構える。

「レイジングハート！」

なのはは鎧の子を守るように前に立ち、さらに杖から薬莢が排泄される。

『Wide area protection』

なのはの前に桜色のバリアが張られた。

「母さん、事情は後で説明するから！」

命も何枚もの防御用オルタを展開する。

一度にあれ程の!?

やはり三世代目だからか？

私が比夜様の為に古森先輩から必死に教わったスパイラルコーンも
いとも簡単に習得してしまったし…

しかし、何だ？何が起きている？

訳のわからない空間にアリサ、すずかと迷い込んだと思ったら、そ
こには外骨格を纏った命とコスプレのような格好をしたなのはとフ
エイト。

そして二人が使う異能…

『来ます』

なのはの持つ杖から女性の声が出た瞬間、光りの雨が降り注いだ。
辺りのコンクリートに穴が開き、私達を被うバリアーにも衝撃が走
る。

「「キヤアアア!?!」」

「グッ…」

二人は私にしがみつく。

私には彼女達を抱きしめるしかできなかった。

情けない。

本来私が守らなければならない九歳の子供に守られるなんて…

やがて衝撃が収まる。

周囲は穴が開きグチャグチャになり、一面に鼻にツンとくるような臭いが立ち込める。

あの光りの雨が溶かしたのか？

「もう、大丈夫」

「すぐ安全な場所に運んでもらうから、もう少し、じっとしててね！」

「あの、なのはちゃん、フェイトちゃん？」

「ねえ、ちよつと！」

そして私達の足元が光ったと思ったら…

「「「……………」」」

本来の街にいた。

店にはクリスマスの飾り付けがされ、大勢の人々がすれ違つ。

「フ…フフフ…」

「み、美尋さん？」

「なんか…怖いですよ？」

落ち着いたのか頭が冴えてきた。

わかってきたぞ。

この春先にあつた二人の外出。

それからビデオメールをするようになったフェイト・テストロッサ。

そしてあの女が関わってるはず…

「リンディ・ハラウン！後日たっぷりと尋問させてもらおう！命、
なのはお前達もだ、覚悟しろおお！！！」

「ヒイ！？」「」

少しだけ周囲の視線が恥ずかしかった。

〈SIDE OUT〉

くつばさSIDEく

どうやら落ち着いたらしい。

原作通りアリサとすずかもおったし…

「見られ、ちゃったね」

「うん…」

「まあ仕方ないさ。とりあえずあいつだ」

「ねえ、つばさちゃんも外に転送した方が良かったんじゃない…」

「駄目だ。彼女はきっと私達をここに閉じ込めてつばさを追っ」

「…ったく」

命が座り込んだうちの肩を掴む。

「お前いつまでうなだれてんだよ!」

「命君…」

「妹を助けるんじゃないやなかつたのかよ！止めるよ！」

うるさい。

あんたに何がわかるんや。

うちがいたせいではやては…

「見捨てるのか？」

「…違う」

「見捨ててるじゃないか！諦めるなよ！お前は今まで何の為に戦ってたんだ？妹を助ける為だろ！」

「…っ！」

そしてうちを離す。

「行こう。俺達だけでもやるぞ」

「でも…」

「つばさの事はあいつらに任せれば良い」

どうやらミラーワールドに避難していたボルボルとドラが戻って来たらしい。

「行くぞ！」

「ちよ、命！」

「つばさちゃん、私は諦めないよ。絶対に」

走り出した命をフェイトとなのはが追いかける。

諦めるか…

「ツバサ。俺ガ言ウノモアレダケドサ…」

ボルボルがうちの前にしゃがみ鉄を差し延べる。

「諦メタラソコデ試合終了ダゼ？」

……はは…蟹に言われてまうなんて。

せやけど！

ボルボルの鉄を掴み立ち上がる。

「このまま終わらへん！せや、まだ時間はある！」

「オオ！」

「ウム！」

自分から目覚める希望が無いならうちが起こす！

「寝坊助をたたき起こしに行くで！ついでに本物と偽物の区別のつ

かへん阿保んだらにお仕置きや！」

「オツシャ！」

「戦イハコレカラダ！」

「ほな、行…へ？」

突如デッキから一枚のカードが飛び出す。そう、あの黒いカードや。それを取ると絵柄が浮かび上がる。黄金に輝く不死鳥の右足。そしてそのカードの名前が書かれていた。

SURVIVE - 激流 -

ハハハ……まじ？

「ツバサ！スグ使エ！パワーアップ、パワーアップ！」

「我ニモ効果ハアルノカ？」

「無いダロ。主契約ハ俺ナンダシ」

外野が騒がしいけど無視や。

ナイスな展開ってほんまにあるんやな。

今のうちなら負ける気がせんわ！

「よっしやー！」

シザースバイザーを突き出すと水の渦に包まれ一つの剣になった。

銃を中心に長さの違う少し曲がった刃が缺のようにつき、まるでシザースピンチのの間に銃がくっついたようや。そして鏢の部分にはシザースの紋章…いや、ちょっと違うな、右の缺の方が大きい蟹の紋章がついとる。

これ何かに似てるような…ああ、ラフトクランズのオルゴンソードにシザースのデザインを足したようや。

「ほな、シザースサバイブの…誕生や！」

短い方の刃を根元から引き出すとカードの差し込み口が現れる。そこにカードを入れて再び刃を押し込む。

『SURVIVE』

うちの身体を水の渦が包み込んだ。

第五十五話 宿命（後書き）

つばさ「サバイブ、キタ〜！って変身せんの！？まさかまだ決ま
つとらへんとか…」

命「安心しろ。デザインもデッキも完成しているってさ」

つばさ「よっしゃー！待つとれはやて！今お姉ちゃんが尻百叩き
行くでええええ！」

命「……テンションがおかしくなってる」

第五十六話 SURVIVE・(前書き)

ファイアーステイツも良いデザイン

フォーゼの宇宙服っぽい少し着膨れたような格好が消防士と合わせ
ってバランスが良いかと

てか消防士の服もかなり重厚なんだよね

重装甲最高

第五十六話 SURVIVE .

〔命SIDE〕

俺達は再び闇の書…その管理人格と戦っている。しかもさっき戦闘を停止させるとか言われたし。クロノめ、無茶な事言いやがって。だけど反対はしない。説得するのは賛成だ。

「もう止めるんだ！」

「闇の書さん！お願い、つばさちゃんは…！」

「お前も、その名で私を呼ぶのだな」

突如地面から触手が生え、俺達を捕らえる。

「それでもいい。私は、主の願いを叶えるだけだ」

「願いを叶えるだけ？！そんな願いを叶えて、それではやてちゃん、本当に喜ぶの？」

「お前は何も考えずに、主の願いを叶える為の道具でいていいのかよ…」

「…我は魔導書。ただの、道具だ」

「だけど、言葉を使えるでしょ？心があるでしょ？そうでなきや、

おかしいよ。ほんとに心が無いなら……泣いたりなんか、しないよ!」

「この涙は、主の涙……私は道具だ。悲しみなど、無い!」

俺達の呼び掛けに真っ向から否定する。

「バリアジャケット、パージ!」

『S o n i c f o r m . 』

フェイトのマントが弾け、触手を吹き飛ばす。

俺となのはちゃんも解放され、着地する。

「悲しみなど、無い? そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって、誰が、信じるもんか!」

「貴女にも心があるんだよ! 悲しいって言うっていいんだよ! 貴女のマスターは、はやてちゃんは、きつとそれに答えてくれる、優しい子だよ!」

「だから、はやてを解放して。武装を解いて! お願い!」

だが彼女は一向に聞き入れない。

そして突然地面が割れ、何本もの火柱が聳え立つ。

何なんだ? 一体全体何が起きてる?

「……早いな。もう崩壊が始まったか。お前達に時間をかけすぎたか……」

そして俺達が来た方向、つばさがいるであろう方向を見詰める。

「私もすぐ意識を失くす。そうなればすぐに暴走が始まる。意識のある内に、主の望みを叶えたい」

彼女意思が持つ闇の書の本が開かれた。

『Blutend Doilch』

その瞬間、俺達の周りに大量の、紅い短剣が現れる。

やばい！

なのはちゃんを引き寄せ、鎖を繭のようにまとう。

「闇に沈め……」

短剣が襲い掛かり、何重にも重ねた鉄鎖に衝撃が走り、爆音が鳴り響く。

「命君、大丈夫？」

「問題無いよ」

攻撃が止むと鉄鎖を解除し、フェイトの無事を確認する。

よかった。どうやら避けられたようだ。

「この、駄々っ子……」

『Sonic drive』

「言う事を……」

『Ignition』

「聞けえええ!!!」

フェイトがまるで弾丸のように突っ込む。

「お前も、我が内で眠るといい」

激突する瞬間、魔方陣が展開されフェイトの攻撃を受け止めた。

なんだ？嫌な予感がする。

「フェイト、離れる！」

「!!!!」

間に合わない!?

『SWORD VENT』

その瞬間、ブーメランのように回転する大小二つの斬撃波が二人の間に割り込み、フェイトが離れる。

そして斬撃波は弧を描きながら戻り、再び彼女に迫る。

「……」

『Rider Slash』

右手に魔力刃を展開し、斬撃波を放つ。

しかし完全に相殺するには至らず、小さい方が消えたただけだ。

「おのれ…！」

シールドで防ぐが爆発。辺りに水が飛び散る。

今の…まさか。

「ごめん。ちょっと遅れたわ」

声がした方に振り向く。

「つばさ…ちゃん？」

そこにいたのは、シザースに似た何かだ。

左手のバイザーは無くなり、右手に刃で銃を挟んだような剣を持ち、デッキはメタリックオレンジに変色している。

肩にあった脚のようなパーツは腿に移り、肩からは右の方が長い爪のようなものが生えている。

そして額や手甲、アーマーの縁に金の装飾のようなものが追加されている。

まさか…

「後はうちが引き受けたで。妹を叩き起こさなあかん」

「やっぱり、つばさ……なんだよな？」

デッキからカードを引き、剣を管理人格に突き付ける。

「せやで。…もう諦めへん。絶対に！」

〈SIDE OUT〉

〈うはなSIDE〉

「探す手間が省けたな…」

ゆっくりと手をうちに向ける。

「うっさいわ。はやて！本物と偽物の区別がつかへんなんで、お姉ちゃんシヨックやで！」

剣、シザースバイザーツヴァイの柄の下部を引くと、鏝にある紋章が縦に開き、そこにカードを入れ柄を戻す。

『SHOOT VENT』

銃の部分が引き金を引くと、銃口から大量の泡が発射される。
放たれた大量の泡は瞬く間に彼女を取り囲みだした。

「成る程…」

『Panzerhinderis』

自身の周囲に障壁を展開する。

そして障壁に泡が触れた途端、一斉に爆発する。

シュートベント、バブルブラスター。

さっきのソードベント、スピッチリッパーと違い、一発あたりの威力は低いが困めばとんでもない威力を発揮する。

「…くっ」

管理人格が爆煙の中から飛び出てきた。

少しは通ったみたいやな。

「お前だけは…！」

右手を突き出すと同時な魔力が集まる。

砲撃！

すぐさまカードを引きバイザーに入れる。

『GUARD VENT』

『Blaze Cannon』

砲撃が放たれるより先に、左手に身の丈はありそうな蟹の甲殻を模した大きな盾が現れ、砲撃を防ぐ。よく見ると表面に水の膜ができている。

ガードベント、シエルイージス。

無傷や。流石サバイブ。

「はやて！うちがいつ邪魔って言った！うちはそんな事一度も思った事はないで！」

「黙れ！」

『Blutiger Dolch』

次々と放たれる紅い短剣を防ぎながら突っ込む。

「うちははやてと一緒にいれて嬉しい。車椅子を押して図書館に行くのも楽しい」

次第にひびが入り出した。

量が多い！

シエルイージスを管理人格目掛けて投げ離脱する。しかし届く前に砕け散ってしまった。

「闇に、沈め…！」

「黙れ！お前の存在は、主を苦しめる！」

「なんやて！？」

「主はずっと恐れていた。お前の足枷になる事を……そして同時に信頼していた。自分を見捨てない、愛してくれと……」

うちを地面目掛け押し飛ばす。

空中で姿勢を直し着地する。

「だからこそ、こんな事になってしまった！お前さえ存在しなければ！」

『Stinger Blade Execution Shift .
』

大量の魔力刃が浮かび上がりうちに狙いを定める。

厄介なやつを……！

「消え去れ！」

環状の魔法陣から一斉に放たれる。

まず！？

たしかもう一枚あったはず……って間に合わん？

「ツバサ！」

「ボル!？」

ボルがうちに覆いかぶさり代わりに受ける。

「イツ……テエ」

「大丈夫!？」

「貫ケチャイネエヨ。俺八良イカラ!」

頷き飛び上がる。

そう……うちがいなければ、はやては原作通り自分の意思で立ち上がった。

うちのせい。

否定はしない。ほんまなんやから。せやからこそ……

「だから!」

横に薙ぎ払うがバックステップで避けられる。

「なおさらや!うちが伝えなあかん。誤解されたまま、お互いの本心を知らぬまま、終わってたまるかい!」

「…っ!」

両手でバイザーを持ち突く。

シールドに阻まれるがひたすら押す。

「はやての所に連れてけや！直に話す。本音を言い合わへん！何も変わらへん！」

「なんだと？」

「それでも駄目やったら…煮るなり焼くなりすぎるにせい！」

「……良いだろう」

『Absorption』

「主が永遠の眠りにつく前に…救いがあるのなら…」

目の前に闇の書が浮かび、頁が開かれる。

「…一つ違つて」

「？」

「永遠の眠りなんかさせへん」

そしてうちの身体は光り出し…その場から消えた。

第五十六話 SURVIVE・(後書き)

つばさ「シザースサバイブのデッキ公開や」

命「詳しい事はA・s後の追加設定で書くぞ」

ADVENT、一枚

GUARD VENT、二枚

SHOOT VENT、二枚

SWORD VENT、二枚

SHOOT VENT、一枚

FINAL VENT、一枚

つばさ「以上九枚や」

命「多っ！…あれ？シュートメント二種類あんのか？」

つばさ「ムフフ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4790t/>

魔法少女リリカルなのはEX！

2011年11月13日20時33分発行